かやうに思し立ち參らせ給ふにも、憎からぬ事にて、はかなき事なども、左大臣殿用意し聞え給へり。さて參り給ひて、倉部屋の女御とぞ聞えける。三位は、今めかしき御覺えの者にものし給はざりける。年頃、惟仲の辨ぞ通ひければ、それぞこの女御の御事も、萬に急ぎける。かう女御達參り給へれど、今まで宮も出で 坐(おはしま)さぬ事を、女院は、いみじう思召し歎かせたまへり。中宮のたゞにも 坐(おはしま)さぬを、さりともと賴もしう思召すを、何にかは 坐(おはしま)さむと、世の人、覺束なけにぞ申し思ふべかめる。いさや、それも今の事なれば、誠にさや 坐(おはしま)しはてざらむとも知りがたし。内大臣殿こそは、萬に祈りさわぎ給ふめれ。怪しうむづかしき事の、世に出で來たるのみこそ、いといとほしと思し歎かるれ。

○倉部屋　清涼殿の近くにあつた局の名
○それぞこの女御云云　惟仲も尊子入内の事に色々支度せり
○宮も出で　皇子も生まれ。
○何にかは云々　生まるゝ御子も皇子皇女何れなるか多分皇女であらうと世人は不安に思つた。
○いさや云々　いやそれも未だ初の事故或は單に病ひで、御懷妊でないかも知れないの意。
○怪しうむづかしき事　花山院や大元帥法の事。
○いとほし　伊周にとりて氣の毒なり。

浦々のわかれ

かくて、祭はてぬれば、世の中にいひさゞめきつる事ども、あるべきさまに人々いひ定めて、おそろしうむづかし。内大臣殿も、中納言殿も思しなげく。殿には御門をさして、御物忌しきりなり。宮の御前も、たゞに 坐(おはしま)さねば、大かた御心地さへ惱ましう苦しう思さるれば、臥しがちにて過(すぐ)させ給ふ。かかる事ども、おのづから漏り聞ゆれば、「あな淺ましや、さやうの夢をも見ば、我いかにせむ、いかで唯今日明日身をうしなふわざもがな。」と思し歎けど、いかゞはせさせ給はむ。この殿原、「さてもいかなるべきにかあらむ。さりとて、只今身をなげ、出家入道せむも、いと誠におどろ〳〵しからむ事は、遁るべきにもあらず、唯佛神ぞともかくもせさせ給ふべき。」とて、數珠(ず)をはなたず、つゆ物もきこしめさで歎きあかし思ひ暮させ給ふ。内には、陣に陸奥國(むつのくに)の前守維敍、左衞門尉維時、肥前前司賴光、周防前司賴親などいふ人々、皆これ滿仲貞盛が子孫なり。おの〳〵兵士(つはもの)ども、數しらず多くさぶらふ。春宮(とうぐう)の帶刀(たちはき)や、瀧口(たきぐち)やなどいふものども、夜晝侍ひて、關を固めなどして、いとうたてあり。世には大あなぐりといひつくるもいとゆゝし。年頃天變などして、兵亂など占ひましつるは、この事にこそありけれと、萬の殿ばら宮ばら、さるべき用

○世の中に云々　伊周隆家の罪顯はれて相當の刑に處すべき樣。
○殿　伊周。
○御物忌しきりなり　物忌續く樣に愼む
○宮の御前　定子。
○さやうの夢　伊周隆家の罪される事。
○この殿原　伊周、隆家。
○おどろ〳〵しからむ事　花山院を射奉れる大罪。
○陣　六衞府の伺候する詰所。
○滿仲　源經基の子
○貞盛　平國香の子
○うたて　仰山。
○大あなぐり　大搜索。
○ましし　申し。

○ともせば　稍ともすれば。
○北の方　貴子。
○さは　さらば。
○曹司　部室住。
○こぼめきのゝしり　毀ち騒ぎ。
○さな　さなせそ。
○かぎり　殘らず。
○鬼のやうなるもの　檢非違使の下部。
○おほぢ　大路。
○あやしの者　下部
○はざま　透間。
○近うも遠うも云々　近流、遠流勅命のままに從はむ。
○おほろけの鳥云々　尋常ならざる鳥獸でなければ。
○なき御かけ　道隆の御墓。

意せさせ給ふ。物の數にもあらぬ里人さへ、萬に、ともせば、山に入らむとまうけをし、ゆゝしき頃の有樣なり。北の方の御せうとの明順、道順の辨などいふ人々、「あな心う、さばかうにこそ世はありけれ、いかゞせさせ給はむずる。」など、まし騒げど、つゆかひあるべき事にもあらず。殿の内に年頃曹司して侍ひつる人々、とありともかかりとも、君のなくならせ給はむまゝにこそはと思はで、萬を毀ちはらひ、こぼめきのゝしりて、もて出で運び騒ぐを見るに、いみじう心細し。されど、さなと制し給ふべきにもあらず。萬の人の見思ふらむ事を恥かしういみじう思さるゝ程に、世の中にある檢非違使のかぎり、この殿の四方に、うちかため、えもいはぬ鬼のやうなるものうちぐして、太刀ほことりつゝ、立ちこみたるけしき、道おほぢの四五町許りの程はゆききもせず。いとけ怖ろしき殿の内の氣色有樣ども、いはむ方なく騒がしければ、寢殿のうちに坐しある人々多かれど、人おはするけはひもせず、哀れに悲しきに、かかるあやしの者ども、殿の内にうち廻りつゝ、こゝかしこを見騒ぐけはひ、えもいはずゆゝしげなるに、物のはざまより見出して、ある限りの人々、胸ふたがり心地いといみじ。殿、今は遁れ難き事にこそあめれ、いかでこの宮を出でて木幡に參りて、近うも遠うも、遣はさむ方にまかるわざせむとおぼし宣はするに、この者共たちこみたれば、おぼろけの鳥けだものならずば、出で給はむ事かたし。「夜中なりともなき御かけにも、今一度參りてこそは、今はのわかれにも御覽ぜられめ。」と、

○御みぢ　明順、道順。
○さはるべき氣色ならず　妨げられる下部の樣子でない。
○さる方に　相應に
○南おもて　正殿。
○御門の御母后　詮子。
○筑紫の帥　太宰の樣帥。
○さし　閉し。
○なぞて　さる事あらむを補ふ。
○さるべき事にもあらず　敕命に背くは宜しからず。
○故殿　道隆の靈よ
○そこらの人　檢非違使等を指す。

いひ續け宣はするまゝに、えもいはず大きに、水晶の玉ばかりの涙つゞきこぼるゝ、見奉る人いかゞは安からむ。母北の方、宮の御前、御をぢの人々、例の涙にもあらぬ涙出でて、この怖ろしげなるものどもの、宮の内に入り亂れたれば、檢非違使どもいみじう制すれど、それにもさはるべき氣色ならず。

かかる程に、かく亂りがはしきものの中どもをかきわけ、さる方にうるはしくさうぞきたるもの、南おもてに、只參りにまゐる。こは何しにかと思ふ程に、宣命といふもの讀むなりけり。聞けば、太上天皇をころし奉らむとしたる罪一つ、御門の御母后を呪はせ奉りたる罪一つ、おほやけより外の人、いまだ行はざる太元の法を、私に隱して行はせたる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣はす、又中納言をば、出雲權守になして、流し遣はすといふ事を讀みのゝしるに、宮の内の上下、聲をとよみ泣きたる程の有樣、この文よむ人もあわてにたり。檢非違使どもも涙を拭ひつゝ、哀れに悲しうゆゝしう思ふ。そのわたり近き人々、皆聞きて、門をばさしたれど、この御聲にひかれて、涙とゞめ難し。さて、「今は出でさせ給へ、日暮れぬ〳〵。」と責めのゝしり申せど、すべてともかくもいらへする人なし。内にも、かくいらへする人なき由を奏せさすれば、などて、さるべき事にもあらず、只よく〳〵せめよとのみ、宣旨頻りに下るに、かくてその日も暮れぬれば、内大臣殿、故殿、今宵さそひてゐて出でさせ給へと、思し念ぜさせ給ふ御しるしにや、そこら

○ぬすまれ　竊に。
○まゐづる　まゐる
○かの山近　裏のある山近。
○くれ〳〵と　思案に暮れて。
○釘ぬき　柱を立て並べ横にヌキを通した柵の類。
○この頃の事　道隆の薨逝。
○その折から云々　其の當時疫病で人々が澤山死なれたから
○怠ると思ひ給ふる　過らありと思ふ。
○さるべき身の罪　前世の因緣。
○御面伏　不面目。
○ゆゝしき身をばさるものにて　我が身は勿論なれども。

の人、さ許りいひのゝしりつれど、夜中許りに、いみじう寢入りたれば、御をぢの明順ばかりと、御供に人二三人許りして、ぬすまれ出でさせ給ふ。御心のうちに大願をたてさせ給ふ。そのしるしにや、事なく出でさせ給ひぬ。木幡に參り給へるに、月あかけれど、此所はいみじうこぐらければ、その程ぞかしと思しはかりおはしまるづるに、かの山近にてはおりさせ給ひて、くれ〳〵と分け入らせ給ふに、木の間よりもり出でたる月をしるべにて、卒堵婆釘ぬきなど、いと多かる中に、これは去年のこの頃の事ぞかし。されば少し白う見ゆれど、その折から人々あまたものし給ひしかば、いづれにかと、萬たづね參りよらせ給へり。そこにて萬を言ひつゞけ、伏しまろび泣かせ給ふけはひに驚きて、山の中の鳥獸も聲をあはせて泣きのゝしる。物の哀れをしる、哀れに悲しういみじきに、坐しし折、人よりけにめでたき有樣にと、思しおきてさせ給ひしかど、自らの宿世果報のゆゝしく侍りければ、今はかくて都離れて、知らぬ世界にまかり流されて、又かやうになき御かげにも、御覽ぜらるゝ樣も侍らじ。自ら怠ると思ひ給ふる事侍らねど、さるべき身の罪にて、かう淺ましきめを見侍れば、いかで何地も罷らで、今宵のうちに身を失ふわざをしてしがなと、なき御かげにも御面伏と、後代の名を流し侍る、いと悲しきことなり。助けさせ給へ。中納言も同じく流しつかはせど、同じ方だに侍らず、方々に罷り別るゝ悲しきこと、又ゆゝしき身をばさるものにて、宮の御前の、月頃たゞにも坐さぬに、かかるいみじきことにより、つゆ御湯をだに聞召さで、涙に沉みて坐すを、いみじうゆゝしう忝く侍り。坐す陣の前は、笠をだにぬぎてこそ渡りはべれ。かくえもいはぬ者どもの、坐すも、もしたま〳〵平らかに坐さば、御產のをり、いかにせさせ給はむずらむ。かひなき身だに行末も知らず罷りなりぬれば、猶かの御身離れさせ給はず、平らかにと守り奉らせ給ひて、又かけまくも畏き公の御心地にも、又女院の御夢などにも、この事咎なかるべき樣に思はせ奉らせ給へ。」など、泣く〳〵申させ給ふ儘に、涙におぼれ給ふ。聞く人さへなき所なれば、明順聲も惜しまず泣きたり。

やがてそれより押しかへし、北野に參り給ふ程の道、いと遙かに、辰巳のかたより戌亥の方ざまに赴かせ給ふ。參りつかせ給へれば、鳥啼きぬ。そこにて、又泣く〳〵、いみじき事どもを申し續けさせ給ふに、この天神に御誓ひたて、ざえおはする人にて、申し給ふ事限りなし。宮人もや驚くと、急ぎ出でさせ給ふ程に、むけにあけぬ。いかにせむと、彼所にいらせ給はむ程も騷がし。猶このわたりに、とかく暮させたまひて、夕つ方と思す程も、彼所の御有樣ども、哀れにうしろめたく思せど、猶暫しやすらはむと思して、右近の馬場のわたりに滯らせ給ふ程に、宮には、昨日暮れにしことだにあり、今日とく〳〵と、宣旨頻りなり。さても中納言はあるけはひ侍り、帥はすべて候はぬよしを奏せさすれば、

○坐す　中宮のおはします。
○はべれ　侍りしに
○引きかなぐり　手荒く引きのく。
○かの御身　中宮の御身。
○この事咎なかるべき樣　今度の事件には自分に罪なき事を
○北野　山城國北野神社。
○辰巳、戌亥　東南、西北。
○宮人もや驚く　社人が目ざめんか。
○むけにあけぬ　全く夜が明けた。
○彼所　我が家。
○右近の馬場　一條京極の末北野の近所
○あるけはひ侍り　在宅の樣子である。

○宮　中宮。
○塗籠　納戸の類。
○くみれのかみ　組入れ天井の上。
○すぢなし　せん方なし。
○我にもあらぬ樣　現心なき樣。
○指貫　指貫の袴。
○しえたる氣色　手柄顔。
○あされ　尋ねよ。
○酉の時　午後六時
○ぐ　物の具。
○あかぎぬ　赤衣。五位の朝服で撿非違使の佐の著用なれど こゝは下部の著用。

「淺ましきことなり、宮をさるべく隱し奉りて、塗籠をあけて、くみれのかみなどをも見よ。」とある、宣旨頻りにそふ。「御塗籠あけ侍らむ、宮さり坐せ。」と、撿非違使申せば、今はすぢなしとて、さるべく几帳など立てて、淺はかなるさまにて坐させて、撿非違使どものみにもあらず、えもいはぬ人して、この塗籠をわりのゝしる音も、淺ましうゆゝしく心憂し。さは世の中は、かくあるわざにこそありけれと、目もぐれ心も惑ひて、涙だに出でこず。中納言殿も、我にもあらぬ樣にて、薄鈍の御直衣指貫著給ひて、淺ましくて居給へれば、人々畏まりて、近うもえ參りよらぬに、この怪しのものども入り亂れて、しえたる氣色どもぞ淺ましういみじき。さて、あけたれども、夢におはせぬ由を奏せさす。出家したるにか、さるにても、只今は都の内を離るべきにあらず、よく〳〵あされ〳〵と、宣旨しきりけり。撿非違使ども、かつは泣く〳〵いみじう思ひながら、宣旨のまゝにするに、おはさねば、いと淺ましき事にて、すぢなしとて、そのあたりさらず。夜晝守るべきよしの宣旨頻りにあり。かくて今日も暮れぬ。いと淺ましき事なり。いかゞさるやうあらむ。撿非違使ども事あやまちたらば、皆科あるべきよし聞くにも、その夜一夜、いもねじと思ひ騷ぐ程に、酉の時許りに、あやしの網代車の、こゝらの人にもおぢぬさまなるが、二三人許り供にて、この宮をさしてたゞ來に來るに、怪しくなりて、この撿非違使どものぐの、あかぎぬなど著たるものどもの、たゞよりによりて、「なにの車ぞ、只今かかる所に

○あらずや　近寄る勿れ。
○おりて　下馬して
○光源氏　源氏物語の主人公。
○なよゝか　たよなよ。
○三つ　三枚。
○あたらものを　惜しきものを。
○卯の時　午前六時
○時なり侍りぬ　行く時刻になつた。
○人なれば　いかでかに續く。

來るは。」とて、幃にさとつけば、「あらずや、殿の木幡に參らせ給へりしが、今歸らせ給ふなり。」といふを聞きて、このものども皆去りぬ。御車、御門のもとにて舁きおろして、内大臣殿おりさせ給ひぬ。撿非違使ども、皆おりて土に竝み居たり。見奉れば、御年は只今二十二三許りにて、御かたちとゝのほり、太り清げにて、色あひ誠に白くめでたし。かの光源氏もかくやありけむと見奉る。薄鈍の御ぞのなよゝかなる三つばかり、同じ色の御單の御衣、指貫同じ樣なり。御身の才も容貌も、この世の上達部には餘り給へりと、人聞ゆるぞかし。あたらものを、哀れに悲しきわざかなと見奉るに、涙も止めがたうて、皆泣きぬ。乘りながらも入らせ給はで、宮の坐せば、我獨は猶畏まり給へるもいと悲し。さて坐しぬれば、「帥木幡に參らせたりけるが、只今なむ歸りて候。」と奏せさすれば、むけに夜にいりぬれば、今宵はよく守りて、明日卯の時にとある宣旨あり。されば夜一夜いもねで立ち明したり。宮の御まへ、帥殿、母北の方、一つに手を取り交して惑はせ給ふ。

はかなく夜も明けぬれば、今日こそは限りと誰もゝ〳〵思すに、立ち退かむとも思さず、御聲も惜しませ給はず。「いかに〳〵時なり侍りぬ。」と責めのゝしるに、宮の御まへ、母北の方、つととらへて更にゆるし奉らせ給はず。かかるよしを奏せさすれば、几帳ごしに、宮の御前を引放ち奉れと宣旨しきれど、撿非違使どもも人なれば、坐す屋には、えもいはぬ者どものぼり立ちて、塗籠をわりのゝしるだにいみじきを、又いかでか、宮の御手を

○身のいたづら云々　我等の職分が徒らになつては不都合なり。
○かしこく構へて　うまくだまして。
○ごき　合器。椀の類で食物を盛る器。
○ゑ袋　餌袋。食物を入れる袋やうの物
○筵張の車　車箱を筵で張つた粗末な牛車。
○忝く　妹なれど中宮なれば斯くいふ。
○山崎　山城國。
○未申　西南。
○長恨歌の物語　玄宗皇帝と楊貴妃との事を敍せる白樂天の詩。
○少々の物見　普通の見物。
○よろしき事　一通りの事。

ひき放つ事はあらむと、いと怖ろしう思ひまはして、「身のいたづらにまかりなりて後は、いと便なかるべし。疾く〳〵。」とせめ申せば、すぢなくて出させ給ふに、松君、いみじう慕ひ聞えさせ給へば、かしこく構へて、ゑて隱し奉りて、御車に、柑子橘ごきひとつばかりを、御ゑ袋に入れて、筵張の車に乘り給ふ。宮の坐すを、いと忝く思せど、宮の御前、母北の方も續き立ち給へれば、近く御車寄せて乘らせ給ふに、母北の方、やがて御腰を抱きて、續きて乘らせ給へば、「母北の方、帥の袖をつと捕へて乘らむと侍り。」と奏せさすれば、いと便なき事なり、引き放ちてとあれど、離れ給ふべきかた見えず。唯、「山崎までいかむ〳〵。」と、たゞ乘りに乘り給へば、いかゞはせむ、筋なくて御車引き出しつ。かくいふは、長德二年四月二十四日なりけり。帥殿は筑紫の方なれば、未申の方に坐す。中納言殿は出雲の方なれば、丹波の方の道よりとて、戌亥ざまにおはする。御車ども引き出づるまゝに、宮は御鋏して、御手づから尼になり給ひぬ。内には、「この人々まかりぬ。宮は尼にならせ給ひぬ。」と奏すれば、哀れ宮は、たゞにも坐さざらむものを、かく物思はせ奉る事と思し續けて、涙こぼれさせ給へば忍びさせ給ふ。昔の長恨歌の物語なども、かやうなる事にやと、悲しう思さるゝ事限りなし。この殿ばらのおはするを、世の人々の見るさま、少々の物見にはまさりたり。見る人涙を流したり。哀れに悲しなどは、よろしき事なりけり。中納言殿は京出ではて給ひて、丹波ざかひにて御馬に乘らせ給ひぬ。御車は返し遣はすとて、年頃仕はせ給ひける牛飼童に、「この牛は、我が形見に見よ。」とてたゞば、童伏しまろびて泣く樣、誠にいみじ。御車は都に來、御身は知らぬ山路に入らせ給ふ程ぞいみじき。大江山といふ所にて、中納言、宮に御文書かせ給ふ。「こゝまでは、平らかにまうで來て侍る。かひなき身なりとも、今一度參りて御覽ぜられて、やみ侍りなむと思ひ給ふるになむ、いみじう悲しう侍る、御有樣床しきなり。」と、哀れに書きつけ給ひて、

○たゞは　偏へは。
○大江山　鬼城嶽と呼び、丹波國にあり
○憂きことの歌　憂き事を覺えるといふ大江山と知りつゝも我は此の山奥深く踏み入る事かなの意。
○かくさへならせ　尼にまでならせ。
○その具の者ども　撿非違使に伴ひし下部等。
○長谷の僧都　覚修
○こゝになむ　關戸の院まで來れり。
○心地つくろひやめて　病氣を治して。
○あげ奉れ　都に上せよ。

憂きことをおほえの山と知りながらいとゞ深くもいる我が身かな

となむ思ひ給へられ侍る。」など書き給へり。宮には、哀れに悲しう、萬を思し惑はせ給ひて物も覺えさせ給はず。たゞならぬ御有樣にて、かくさへならせ給ひぬる事と、返す〳〵内にも、女院にも、いみじく聞召し思す。帥殿は、その日のうちに、山崎關戸の院といふ所にぞ留まらせたまへる。この御供には、さるべき撿非違使ども四人ぞ仕うまつりたりける。その具の者どもの、御車に附きて參るぞ哀れにゆゝしき。中納言の御供には、左衞門尉延安といふ人は、長谷の僧都のはらからの撿非違使なり。それぞ仕うまつりたりける。淺ましき事盡きもせず。關戸の院にて、帥殿は、御心地あしうなりにければ、御供の撿非違使ども、「かう〳〵、帥はみだり心地あしとて、ためらひさぶらふ。母北の方も、やがてつととらへて、またこゝになむ。」と奏せさすれば、「とく〳〵、その心地つくろひやめて、速かに下すべき由、ならびに、母北の方速かにあげ奉れ。」と宣旨あるに、中納言、宮の御

○大殿　道長。
○院　花山院。
○嬉しきともおろかに　嬉しいなどとはいふまでもなく。
○かたみに　互に。
○うへ　貴子。
○さくりもよゝなり　さくりあげて聲を立て泣く。
○物思ふの歌　後拾遺集雜旅部。くらしとあかるしとの對照
○物の覺ゆるにや云云　我が心の歌よむ迄たしかなるを心憐く思ふ意。
○しら浪の歌　柿本人麿、後拾遺集雜部。裏と裏と縫へは衣に重なれど同じうらなる明石浦と須磨浦との涙は立てど衣には重ならず。

有樣も思しやり、かの母北の方をも思しやらせ給ふに、いみじうて、女院も、内も、遙かなる御有樣を、いと心苦しう思召して、大殿にも、この事宣しかるべくなど、院にせちに申させ給ひて、帥殿は播磨に、中納言殿は但馬に留まり給ふべき宣旨下りぬ。「この事を、宮はつかに聞かせ給ひて、いみじう嬉しきとも、おろかに思召さるゝも、哀れにいみじき御事どもなりかし。關戸の院にて、播磨に留まり給ふべきになりぬれば、いみじう嬉しう思されて、「さば早う都へ歸らせ給ひね。こよなう近き程に罷り留まりぬれば、いと嬉しう侍り、又あやまちたる事侍らねば、さりとも召し還さるゝやうも侍りなむ。」など泣く〳〵聞え慰めさせ給ひて、あげ奉らせ給ふ。我は播磨へおはす。かたみに遠ざからせ給へば、いみじう悲しうなども世の常なり。さて歸らせ給ひて、うへは、宮の御有樣の變らせ給へるに、又いとゞしき御涙、さくりもよゝなり。帥殿は、播磨におはすとて、こゝは明石となむ申すといふを聞召して、

物思ふこゝろのやみしくらければあかしの浦もかひなかりけり

いでや、物の覺ゆるにやと、我が御心にも、憎く思さるべし。中納言殿、こと方へおはすらむを、などか同じ方にだにあらましかば、何事もよからましと、あやにくなる世を心憂く思されて、

しら浪はたてどころもにかさならず明石もすまもおのがうら〳〵

○かへ　作りかへ。
○さもこそその歌　餘りに悲しき旅と思へばこれがあの都の外に旅寢する事だらう
○公家の御定　朝廷の流人に對する規定
○愛敬　かはゆらしさ。
○あるべきやうにしつらひ　住所を然るべく造り。
○よそ〳〵の人　流人以外の人々。
○御腹も高く　御腹も大きく。
○あらぬこと　益なき事。
○そのまゝに　歸洛したりに。
○清昭阿闍梨　高階成忠の子。
○さりとも云々　伊周等流人たるも後に赦免たらんと思ふ。

といふ古歌を、かへさせ給へるなるべし。

かた〳〵に別るゝ身にも似たるかな明石もすまもおのがうら〳〵

とぞ思されける。中納言殿は、旅のやどりの露けく思されければ、

さもこそは都のほかに旅寢せめうたてつゆけき草まくらかな

かくて、但馬におはし著きぬれば、國の守、公家の御定より外に、さし進みて仕うまつる事多かり。中納言殿は、心の愛敬つき給へれば、誰もいみじうぞ仕うまつりける。おはし著きぬれば、延安都へ還り參るに、いとゞ心細げなる御有樣の心苦しさに、わが子を供に率ていきたりける友助といふを留めて、御心に隨へといひ置きて、我はのぼりにけり。播磨にも、あるべきやうにしつらひする奉り置きて、御供の撿非違使ども還り參りぬ。いと遙かなりつる程の御供に、よそ〳〵の人も、哀れ嬉しう思ふめり。松君の戀ひ聞え給ふぞいみじう哀れなりける。宮には、つきもせぬ事をおほし歎くに、御腹も高くなりもていきて、唯あらぬことのみ思し知らるゝにも悲しうなむ。播磨よりも但馬よりも、打續き御使しきりて參る。母北の方は、そのまゝに御心地惡しうて、物もまゐらで、年頃の御念誦も懈怠して、哀れに口をしき御有樣を、御はらからの清昭阿闍梨など明暮聞ゆれど、今は思しなほるべきやうも見えず。沉み入りておはすれば、いかにと心細きを、宮の御前にも、御方々にも思しなげく。二位新發意は、たゆみなき御祈りのしるし、さりとも〳〵と思ふ

○いづこにも　伊周縁者の何處の者も。
○御齋　僧と同じく食を齋し身を慎む。
○世とともの御事　一生の大事。
○ねごと　寐言。
○このぬしたち　北の方の兄弟明順、道順。
○いかゞはあるべからむ　如何ともすべき樣なし。
○頼もしく思す人　貴子。
○心細く　中宮は。
○こそあらめ　格別の事さにあらず。
○よるの鶴の歌詞　花集雜部。都を身や籠にかけ、夜の鶴は子をおもふ切情に喩ふ。
○あらず　悪からず
○やさし　恥かし。
○いみじう　定子を

べし。いづこにも、その儘に、皆御齋にて、明暮佛神を念じ奉り給ふ。こゝかしこに通ふ御文のうちの言の葉ども、いづれも哀れに悲しきに、この北の方は沉み入りたまひて、いと頼もしげなくなりまさらせ給ふ。たゞ世とともの御事には、殿に對面して死なむ〳〵とぞ、ねごとにもし給ふ。帥殿をかく聞え給ふなるべし。「世はかなければ、かく思しつゝ、ともかくもおはせむは、いみじき事。」など、このぬしたちの聞ゆるに、「さりとていかゞはあるべからむ。」とて、九月十日の程になりぬれば、宮の御事も、やう〳〵近くなりぬるに、頼もしく思す人の、かくしづみ入り給へるに、いとゞ心細く思さるゝ事盡きせずなむ。この御心地の有樣、忘り給はむ事ありがたげなるに、たゞ朝夕は、あな戀しとより外の事を宣はばこそあらめ。これを聞き給ふまゝに、但馬にも播磨にも、いみじう思し起す。母の北の方うち泣き給ひて、

よるの鶴みやこのうちにこめられて子をこひつゝもなきあかすかな

いかにと人々聞ゆれば、あらずといひ紛らはし給へり。播磨には、このうへの戀しと思したらむに、いかで見え奉るべからむ。親の御事をいみじとて、又身のいたづらになりはてなむ事と思し亂る。但馬には、いみじき親の御事ありとも、いかでか又聞きにくき事はしいでむ。人の思はむ所のやさしからむと思し絶えたり。淑景舍は東宮より常に御消息絶えず。うちには、いみじう思せど、世の中に思しつゝみて、唯右近の内侍して、忍びて御文

○こゝ　中宮の御所
○ふりがたう　昔にかはらず。
○この御中　淑景舍
○この宮　定子。
○うへ　一條院。
○荻吹く風云々　そよそよ昔する荻の葉風にも配所を思ひなずらふ。
○こゝ事なし　病氣見舞のみなり。
○事の聞えあらば　對面の事漏れたらば
○不用　不都合。
○これにまさるやうは　是れ以上の重刑には處せらるまじ。
○限り　大事。
○さるべきなめり　前世の宿緣なり。
○夜を晝にて　晝夜兼行で。

などはありける。帥の宮のうへは、今は淺ましき御心地なれば、こゝにのみおはすと猶ふりがたう、この御中には東宮のみぞとひ聞えたまへる。女院には、この宮の、もし男宮うみ奉り給へらば哀れにもあべいかなと、行末遙かなるべき御有樣を思し續けさせ給ふも、うへを、限りなく思ひ聞えさせ給ふ、御ゆかりにこそはと、ことわり知られ給ふ。いみじう哀れにのみ、常に歎き聞えさせ給ふ。

はかなく秋にもなりぬれば、世の中いとゞ哀れに、荻吹く風の音も、遠き程のけはひのそよめきに、思しよそへられけり。播磨よりも日々に人參り通ふ。北の方の御心地いやまさりなれば、こと事なし。帥殿今一度見奉りて、死なむ〳〵といふことを、寢ても覺めても宣へば、宮の御前も、いみじう心苦しき事に思召し、この御はらからのぬしたちも、いかなるべきことにかと思ひまはせど、猶いと怖ろし。北の方は、せちに泣き戀ひ奉りたまふ。見聞き給へる人々も、安からず思ひ聞えたり。播磨には、かくと聞き給ひて、いかにすべき事にかあらむ、事の聞えあらば、我が身こそは、いよ〳〵不用のものになりはてて都を見で止みなめなど、萬に思し續けて、たゞとにもかくにも、御涙のみぞひまなきや。さばれ、この身は、又いかゞはならむとする。これにまさるやうはと思しなりて、親の限りにおはせむを、見奉りたりとて、公家もいとゞ罪せさせ給ひ、神佛もにくみ給はば、猶さるべきなめりとこそは思はめと思したちて、夜を晝にて、京へ上り給ふ。さて宮の内に

は、事の聞えあるべければ、かの西の京に、西院といふ處に、いみじく忍びて、夜中におはしたれば、上も宮も、いと忍びて、そこに坐し逢ひたり。かの西院も、殿の坐しし折、この北の方のかやうの處を、わざと尋ね顧みさせ給ひしかば、そのをりの御心ばへどもに思ひて、洩らすまじき所を思しよりたりけり。母北の方も、宮の御前も、御方々も、殿も見奉りかはさせ給ひて、又今更の御對面の喜びも涙も、いとおどろ〳〵しいみじ。うへは、かしこく御車に乘せ奉りて、おましながらぞかきおろし奉りける。いと不覺なりける御心地なりけれど、萬さわがしう、なく〳〵聞え給ひて「今は心安く死もし侍るべきかな。」と、歡び聞え給ふも、いへばおろかに哀れに悲しとも世の常なりや。かくて一二日おぼろげならず忍びさせ給ふに、いかなる物のつけにか、公私、帥殿上り給へといふ事出できて、宮をもまほらせ給ふっさるべく疑はしき所をも、うかゞはせ給ふに、すべてつゆけしきなければ、夜を晝になして、公の御使下りて、おはしおはせず、たしかにとて見せに遣はしたれば、げにおはせざりけり。さるべく疑はしき所々を尋ねさせ給ふに、唯西院になむこもりておはするといふ事聞えたれば、おほやけごとに、皆さき〴〵かかる事ある事なれど、またかく私に上りたるためしなし。これたゞの事にはあらじ、公をいかにし奉らむとする事を構へたるぞなど、いみじきことを推し量らせ給ふも、ゆゝしう恐ろしうて、すべて都の近きがする事なりとて、又々もかくぞあるらむとて、このたびは、まことに

○西の京　右京。
○上も宮も　貴子、定子。
○殿　道隆。
○この北の方　貴子
○顧み　世話し。
○御心ばへども　に思義の柔さを。
○おましながら　臥し給へるさゝ。
○不覺なりける御心地　慥でない御精神
○宮をもまほらせ　中宮御所を守らせ。
○おはしおはせず　伊周の在不在。
○かかる事　大臣配流。

の筑紫へとて撿非違使ども送り奉るべき宣旨下りぬ。うち圍みて、とく〳〵と、聊か遁れ給ふべくもあらず、そゝのかし聞ゆ。又さらなる御氣色どもいへばおろかにゆゝし。この度の御供には、母北の方の御はらからの、津の守爲基といひし人のめにて、宣旨とてありしぞ、御車に乘りて、やがて參る。母北の方あきれて、やがて物も覺え給はず。帥殿は、何かは、これはことわりの事なれば、さべきにこそはと思召して、出でさせ給ふに、松君は、我も〳〵と泣き叫びのゝしり給ふ。實に哀れに悲しういみじ。かしこくこしらへ留め奉りて、御車引き出づる程も哀れに悲し。淺ましく心憂く夢の樣なる事にもあるかなと、盡きもせず思ほしなげかる。宮の御前の御心地にも播磨とかやは、こよなく近しと聞きつれば、賴もしかりつるものを、とありともかかりとも、母北の方は、おはすべき御有樣にもあらざめり。とかくの事の折にいかに哀れに悲しう心細う、誰かは、やともいはむとすらむと、盡きもせず思さる。さてもこの御事は、越後守平親信といふ人の子、いとあまたありける中に、右馬助孝義といひて、歌うたひ、折ふしの陪從などに召さるゝありけり。それが申し出でたりける事なりけれは、公の御爲に、後安き事申し出でたりとて、加階賜はせたりければ、歡びいひに、父が許にいきたりければ、親信の朝臣「いづこに、誰が許とて、こゝには來つるぞ、おほけなくつれなくもあるかな。かやうの事、我等が程の人の子などのいひ出づべき事にあらず。かかる事はえびす、まちめなどこそいへ。淺ましう心

○そゝのかし　誘ひ勸め。
○又さらなる御氣色　今更の哀れな樣子
○爲基　齊光の子。
○何かは　あらむを補ふ。
○やともいはむ　やは驚きの嘆詞。やといって驚き悲しむ者あらんの意。
○この御事　伊周上洛の事。
○陪從　加茂石清水等の祭の時の東遊の音樂方及び歌人の稱
○いづこに云々　汝は何處に在りて斯く告し誰の家と思つて此處に來たるか。
○おほけなく　身分不相應であり。
○えびす　猛惡な者
○まちめ　町女。物を賣る卑しき女。

○人の御胸を焼きこがし　伊周一家の人を痛く思ひ煩はせ
○はしたなく　手厳しく。
○あまえて　恥かしく思って。
○ことわり　筑紫配流は當然。
○かの御身云々　流人の身として上洛せるは憎むべきならず
○もとの　最初居た
○かしこく云々　よくも上洛しなかつた
○魂はおはする君　氣丈な君。
○こりずまに　しやうこりもなく。
○秋霧の歌　萬代集秋部。
○雲の浪の歌　續古今集雜部。

憂き事をいひ出でて、人の御胸を焼きこがし、歎かせさせ奉る善き事なりや。」とて、いとはしたなく言ひ詈りければ、あまえて逃げにけり。世の人、この殿の御有樣を、あるは悪しうし給へれば、ことわりといふ人もあり。又少し物の心知りたる心ばへある人は「かの御身にて坐したる、憎からず。母の死ぬべきが、我を見て死なむ〳〵と、ねてもさめてもいはむを、身はいたづらになるとも、など思すにこそはあらめ、哀れなる事なりや。かのもとの播磨も、今は過ぎ給ひぬらむかし。中納言こそ、かしこくおはせずなりにけれ、猶魂はおはする君ぞかし。」などぞ聞えける。母北の方、哀れに悲しき事を思しいりつゝ、今は限りになり給ひにたり。哀れに悲しとも、世の常なる御有樣どもなり。年頃の御念誦、いたづらになりぬべき事を、清昭阿闍梨、口惜しきことに思ひ聞ゆ。二位の新發意は、たゞ夜晝御祈りどもを、死ぬ許りしるて、猶こりずまに、さるべき法どもをなむ行ひける。東宮より淑景舍に哀れにいかに〳〵とある御消息絶えず。いみじう口惜しう、ほこりかにおはせしものを、いかに物思すらむと、床しう思ひ聞えさせ給ふ。春宮より、いかなる御消息かありけむ。淑景舍より聞えさせ給ふ。

秋霧のたえま〳〵を見わたせば旅にたゞよふ人ぞ悲しき

遙かなる御有樣を思しやらせ給ひて、中宮、

雲の浪けぶりの浪と立ちへだてあひ見むことのはるかなるかな

○はぢがはし　恥かしい樣。
○思ひかけぬ方云々　意外なる當國にお越しなされた事かな
○さしまし　附け加へ。
○驚きながら　御下降の事を驚きつゝ。
○わが殿　兼家。

○まうけ　支度。
○わたす　驛から驛へと送る。

とひとりごち給ひけり。やう〳〵筑紫ぢかにおはしたれば、國々の驛々、使のまうけどもいと眞心に、泣く〳〵といふばかりに仕うまつりわたす。今は筑紫に坐し著きたるに、その折の大貳は、有國朝臣なり。かくと聞きて、御まうけいみじう仕うまつる。「あはれ故殿の御心の、有國を、罪もなく怠る事もなかりしに、淺ましく無官にしなさせ給へりしこそ、世に心憂くいみじと思ひしかど、有國が恥は、はぢがはしにもあらざりけり。哀れに忝く、思ひかけぬ方にもこえ坐したるかな。公の御掟よりは、さしまして仕う奉らむとする。」などいひ續け、萬に仕うまつるを、人傳に聞かせ給ふもいと恥かしう、なべて世の中さへ憂く思さる。御消息、我が子の良成して申させたり。「思ひかけぬ方に坐したるに、京の事もおぼつかなく、驚きながら參り侍ふべきに、九國の守にて侍ふ身なれば、さすがに、思ひの儘にえ罷りありかぬになむ、今まで候はぬ。何事も唯仰せ事になむ隨ひ仕うまつるべき。世の中に命長く候ひけるは、わが殿の御末に仕うまつるべきとなむ思ひ給ふる。」とて、樣々のものども、櫃どもに、數知らず參らせたれど、これにつけても、すゞろはしく思されて、聞き過させ給ふ。その儘に、唯御齋にて過させ給ふ。

かくいふ程に、神無月の二十日あまりの程に、京には、北の方うせ給ひぬ。哀れに悲しう思し惑はせ給ふ。二位の命長さ、哀れにみえたり。されど、それはむけに老いはてて、たはやすくも動かねば、唯明順、道順、信順などいふ人々、萬に仕うまつれり。後の御事

○二位の命長さ　七十二の成忠は長命の爲貴子に後れて。

○例の樣　火葬。
○櫻本　山城國神樂岡の東。
○さるべき屋　靈屋
○御ぞなど染め　喪服を著る。
○御服　喪服。
○そのをりの歌　玉葉集雜部。都を出た時喪服を著るべきものを今思へば彼の時の生別が死別。
○うへの御事　貴子の病氣。
○淺ましうてやませ　治らで失せ。
○女御子　脩子。
○こまかに　懇に。
○思し續けさせ　女院が御產を心配され
○御湯殿　御湯をあふする役。
○事の限り　御湯殿の儀は定まれる儀式

ども、例の樣にはあらで、櫻本といふ所にて、さるべき屋造りてをさめ奉りける、哀れに悲しともおろかなり。但馬には、夜を晝にて人參りたれば、泣く〳〵御ぞなど染めさせ給ふ。筑紫にも人參りにしかど、いかでかは、とみに參り著くべきにもあらず。後々の御事ども、皆さべうせさせ給ふ。筑紫の道は、今十餘日といふにぞ參り著きたりける。哀れさればよ、能くこそ見え奉りにけれと、今ぞ思されける。御服など奉るとて、

そのをりに著てましものを藤衣やがてそれこそ別れなりけれ

とぞひとりごち給ひける。かくて、うへの御事は、淺ましうてやませ給ひぬ。宮の御產の事も思し歎かれけり。十二月二十日の程に、わざとも、惱ませ給はで、女御子うまれ給へり。同じうは男に坐さましかば、いかに賴もしう嬉しからましと思すものから、又推し返しいと嬉し。煩はしき世の中をとぞ思召されける。內には、けざやかに奏せさせ給はねど、自から女院に聞召しければ、同じう聞召しつ。いと〳〵あはれに、いかにせさせ給ふらむと思し聞えさせ給ふ。女院よりも樣々に、こまかに推し量り訪らひ聞えさせ給へり。わざと思し續けさせ給ふともなかりつれど、佛神の御たすけにやと見えさせ給ふ。御湯殿には、內よりの仰せ事にて、右近の內侍ぞまゐりたる。いとつゝましう怖ろしき世なれども、うへの仰せ事の畏さに參りたるなりけり。事の限りあれば、何事もあべいさまは失せねど、故殿などの、御世の花々とありしに、かやうの御有樣ならましかば、いか許りかは

○御衣の色云々　御產の時は白色の衣を著る例なれど中宮は喪中故黑服を著る。
○物あえ云々　喪服にあやかり給はず。
○いかゞ云々　普通と異なり嚴しくさる
○かやうの事　皇子誕生。
○いかゞはせむの御心　已むを得ぬ御心
○何をうとし云々　中宮は君を何で疎々しく思はれて他人がましく祿等賜へるか
○あなづらはし　遠慮なし。
○上　主上。
○啓し　中宮に申し上げ。
○若宮　脩子。
○たいめ　對面。初謁。

めでたからまし。それを思し出させ給ふにも、ゆゝしう思さる。御衣の色よりはじめて、誰もうたてある御姿どもに、若宮は物あえせさせ給はず、白う美くしう坐せば、右近の內侍哀れこれを疾く內に御覽ぜさせ奉らせばやと聞えさす。七日が程の御事どもいかゞ、なべてなるべき御事共かは。但馬には聞き給ひて、哀れに嬉しき事かな、げに男に坐さぬもいとよし。さらぬだに、かかる世の中に、いにしへもかやうの事によりてこそ、多く怖ろしき事は出で來れなど、いかゞはせむの御心にや、女に坐すも、心安き事に思しける。誰かこまやかに仕う奉るらむと、哀れに思ひやり聞え給ふ。筑紫には、うへの御事を哀れに悲しう思ひやり聞え給ふ。宮の御事をも明暮心にかけ思しけるに、かく無事に坐すよしを聞えに、人參りたり。かくて、右近の內侍、七日程過ぎて內に參れば、樣々いみじうこまかなる事どもをせさせ給へれば、「何をうとしとか、かくは煩はしき事どもをせさせ給へるならむ。唯右近をば、むつまじくあなづらはしき方にてと、上の思召してせさせ給へるかひなく、いかでか、かくおどろ〳〵しき御事どもをば、問はせ給はむにも、奏すべき方候はずなむ。」など啓して、返す〴〵かしこまりて、やがて內へまゐりてければ、上忍びやかに召して、日頃の御有樣、こまやかに問はせ給ふに、萬さし增しつゝいみじう哀れに奏すれば、御涙もうかばせたまひて、げにさぞあらむかしと思召し續けさせたまふ。若宮の御美しさなど奏すれば、「かれを見ばやな、皇子たちは御たいめとて、五つや七つな

○内にちご云々　皇后女御は里で御産する故禁中に兒童の居る事はなし。
○宣耀殿の宮　禧子の若宮致明親王。
○たゞにもあちず云云　妊子御懐妊の由
○いみじう様々云々　祿を賜ひし事。
○ついたち云々　正月朔日に藏かんとて中宮の許に納めた。
○奏りなどせさせ給ふ　中宮の奏内される時も。
○朝拜　朝賀。
○春やむかし　古今集戀部在原業平「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして。」
○二條　中宮御所。
○この御子　脩子。
○思したゆたふ　思ひためらふ。

どにてぞ昔はありける。また内にちごなど入る事なかりけり。されど今の世は、さもあらざめり。春宮の宣耀殿の宮などは、つと抱きてこそありき給ふなれ。又たゞにもあらずものし給ふとか、羨ましく思ふ事もあれど、あひ見むことのいつとなきこそ。」など、哀れに語らはせ給ふ。「いみじう様々萬せさせ給へるこそ、いと辱くかしこく候へ。えもいはぬ裝束して給はせたれど、ついたちにとてなむをさめて候。」など奏すれば、「心ばへのおとなおとなしう哀れなる方は、誰かまさらむ。又人を數多見ぬにやらむ。」など、いみじう御志ある様に仰せらる。それにつけても、尼にならせ給へることを、口惜しう、參りなどせさせ給はむにも、世の人の口煩はしく思さるゝ程ぞ、人知れぬ御なげきなりける。

かくて年もかはりぬれば、ついたちは朝拜などして、萬めでたく過ぎもてゆくに、花の都はめでたきに、かの旅の御有様ども、春やむかしのとのみ思されつゝ、哀れに年さへ隔たりぬるを、萬いとおぼつかなく、あまたの霞立ち隔てたる心地せさせ給ふ。かの二條の北南と造り續けさせ給ひしは、殿坐いしをり、かたへは燒けにしかば、今一つに皆住ませ給ひしを、この帥殿御下りの後、程もなくやけにしかば、この御子なども生れ給ふべかりしかば、平中納言惟仲が知る所ありけり、それにぞ、女院など仰せられて住ませ給ひける。内には、若宮の御美しさを、いかに〳〵と、女院も聞えさせ給へば、つゝましき世の有様なれば、思したゆたふべし。殿などや、いかゞ思召さむとおぼすらむ、ことわりにこそ。宮の、そのまゝに例の御有様に坐さぬにより、あからさまに參らせ給はむこともいかにと、つゝましう思しめすなるべし。常の御言ぐさのやうに、床しう思ひ聞えさせ給ふ御有様を、女院は、いと心苦しき御事に思しめせど、さすがに若宮の御前の限り、參らせ給ふべきにはあらずかし。若宮の御乳母には、北野の三位とてものし給ひし人の御女なども參りけり。それも九條殿の御子といはれ給ひし人なり。又辨の乳母や、少輔の命婦といふ人、様々さぶらふ。はかなく夏にもなりぬれば、若宮の御有様、いと美しう坐す。旅の御消息も、日ごとにといふ許りなり。哀れにおぼつかなうのみ思しみだる。二位、この若宮見奉りにとて、夜の程參れり。宮の御前、哀れに御覽じて、さくりもよゝと泣かせ給ふ。宮のいみじう美しう坐すを、二位、ゑみまけうつくしみ奉り給ふ。「哀れに、うへの御かはりには、御前をこそは頼みまして候まゝに、明暮もえ見奉らぬことをなむ。さても内には、この宮をいと床しきものに思ひ聞えさせ給へば、入らせ給ふべしなどこそは世には申すめるを、いかゞは思し定めさせ給ふらむ。老の身は、さべき人も、物をなむ聞かせ侍らざりける。」と申し給へば、「こゝにも母の御かはりには、いかでとこそ思ひ聞えさせ侍れど、その事となく物騒がしき中に、この宮の御あつかひに、はかなく明け暮れてこそ。内よりも、この宮を、今までおぼつかなくてあらせ奉る事など、まめやかに宣はすめり。女院も、その御氣色に從はせ給ふにやあらむ、猶率て入り奉れとこそは宣はすめれど、い

○殿　道長。
○床しう　若宮を見たく。
○北野の三位　九條師輔の十男遠度。
○ゑみまけ　思ひ設けて笑み。
○うへ　貴子。
○御前　定子。
○え見奉らぬ云々　必ず見え奉らんの意
○この宮　脩。
○老の身は云々　私如き老人には然るべき人も何事をも相談して呉れない。
○こゝにも　自分も
○いかでと　どうか汝をと。
○御あつかひ　御産
○その御氣色　帝が姫を見たい御様子。

○思ひやすらはれ　躊躇され。
○思ひ物する　思ひやる。
○書なく侍るをなむ　赦免の沙汰がない故。
○おち落つ　取落す
○宮の御前　定子。
○御内參　皇女内參
○そゝぎたてまつる　急ぎ支度す。
○めしものすれど　徵收すれど。
○ものすがやかに云云　速かに上納する人。
○宮坐すたび　今度は姫宮の入内。
○などてか　ためらべるを補ふ。
○御前　前驅。

さや、萬つゝましうのみ覺えてこそ、いかにせましと思ひやすらはれ侍れ。萬よりも、かの旅の人々を、いかに〳〵と思ひ物するこそ、いみじう哀れに心憂けれ。さりとも、いとかくて止むべうは、いかでかとのみこそは、内にもいみじう心苦しき事に宣はすなれ。」などと宣はすれば、「たび〳〵、夢に、召し還さるべき樣に見たまふるに、かく今まで音なく侍るをなむ、猶さるべく思したちて、内に參らせたまへ。御祈りをいみじう仕う奉りて、寢て侍りし夢にこそ、男宮は生れ給はむと思ふ夢見て侍りしかば、この事によりて、猶疾く參らせ給へと、そゝのかし啓せさせむと思う給へられてなむ、多くは參り侍りつるなり。御文にては、おち落つるやうもやと思う給ひてなむ。」などそゝのかし泣きみ笑ひみ、夜ひと夜御物語ありて、曉には歸り給ひぬ。

宮の御前の御内參りの事、そゝのかし啓しつるにぞ思し立たせ給へる。明順、道順、萬にそゝぎたてまつる。國々の御封などめしものすれど、ものすがやかに辨へ申す人もなければ、さるべき御莊などぞ、きぬなど奉らせむなど、案内申す人ありければ、衣めして萬に急がせ給ふ。宮坐すたびなれば、萬御けはひことなり。御輿などは、古代にあるべき事なれば、御車にてとぞ思召したる。いとゞ愼ましく宮思召したれど、などてか、猶諸共にと聞えさせ給へば、かの二位のそゝのかし聞えし事もあれば、さばとて、諸共に參らせ給ふ。人の口やすかるまじう思へり。かくて内に參らせ給ふ夜は、大殿、さるべき御前參るべき由仰せらるれば、皆參りたり。殿の御心有樣の、いみじうあり難く坐す事限りなし。かくて參らせ給へれば、女院、いつしかと若宮を抱き奉らせ給へば、いと美しう坐す。うちゑみて、哀れに見奉らせ給ふ。いとをかしげに肥えさせ給へり。御物語何となくもの花やかに申させ給へば、まづしるものに思さるべし。宮、萬につゝましき事を思召すに、院と御對面ありて、盡きせぬ御物語を申させ給ふ程に、うへ渡らせ給ひて、若宮見奉らせ給ふ。えもいはず美しう坐して、たゞ笑ひに笑ひ物語りせさせ給ふ。うへの御前、今まで見ざりけるよと思召すに、まづ御涙もうかばせ給ふべし。まして男に坐さましかばとぞ、人知れず思召されける。さて宮に御對面あるに、御几帳引寄せて、いと氣遠くもてなし聞えたまへる程もことわりなれど、御殿油を遠く取りなして、隔てなき樣にて、泣きみ笑ひみ聞えさせ給ふに、いにしへに猶立ちかへる御心地の出でくれば、宮いと〳〵けしからぬ事なりなど、萬に申させ給へど、それをも聞召しいれぬ樣に、亂れさせ給ふほども、傍いたけなり。萬に語らひ聞え給ひて、曉に出でさせ給ひけれど、「猶暫し宮見つくまで、今四五日は。」と申させ給ひて、職の御曹司に、曉に渡らせ給ひて、そこに暫し坐すべくしつらはせ給ふ。上も、萬に思召し憚らせ給ふ事多く坐せど、ひたみちに、たゞ哀れに戀しう思ひ聞えさせ給ひつる程なれば、人の誹らむも知らぬ樣にもてなし聞えさせたまふも、このかたは、すぢなきことにこそあめれ。宮の御前は、世の傍痛さをさへ、

○まづしるもの　古今集雜部讀人不知、「世の中のうきも辛きも告げなくにまづ知るものは涙なりけり。」
○うへの御前云々　一條帝は何で若宮を今まで見なかつたか
○氣遠くもてなし　中宮が帝を疎んじ。
○いにしへに云々　古今集戀部黃之「古になほ立ちかへる心かな戀しき事に物忘れせで」。
○見つく　見馴る。
○職の御曹司　中宮職の御局。
○ひたみちに　只管
○このかた　戀しといふ事。

○程遠し　職の御曹司は清涼殿から遠し
○後夜　十二時から二時迄。
○御志昔より云々　御寵愛昔に越え給ふ
○例せさせ給ふ事　月經。
○いさゝかなる事　人内の事。
○弘徽殿、承香殿　義子、元子。
○御志の有樣云々　御寵愛は女御より中宮の方勝れり。
○日まぜ　隔日。
○さりげなき傳へ人　それとなき取次人
○いまだそのかみ云云　まだ早くから六條右大臣重信の女に通はなかつたから。

物欺きに添へて思召すべし。女房だち、昔おぼえて哀れに思へり。さて日頃坐して、猶いと程遠しとて、近き殿に渡し奉りて、のぼらせ給ふことはなくて、われ坐して、夜中ばかりまで坐して、後夜にぞ歸らせ給ひける。御志昔よりもこよなけなり。この頃侍ひ給ふ女御達の御おぼえ、いかなるにかと見えさせ給ふ。疾く出でさせ給ふべかりけるを、猶暫し〳〵と宣はせける程に、二月ばかり坐す。御心地惡しう思されて、例せさせ給ふこともなければ、いかなるにかと胸潰れて思さるべし。うへ、かくと聞かせ給ふにも、まづ哀れなる契りを思し知らせ給ふ。返す〴〵も、かくてあるべかりける御有樣を、かくいさゝかなる事どもを、世人も聞き憎く申し、我が御心地にも、萬に夢の世とのみ思したどらるべし。但馬には、かかる事どもを聞き給ひて、唯佛神をのみ祈り居給へり。二位はいとゞしき御祈り安からむやは。宮はかくて御心地苦しう思さるれば、切に聞えさせ給ひて出でさせ給ひぬ。

その程、弘徽殿、承香殿など參りこみ給ふ。されど、御志の有樣こよなけなり。内よりは、萬に樣々のおほつかなさを御文隙なし。大かたにては、日まぜなどの御使あり。右近の内侍ぞ、さりげなき傳へ人にて侍ひける。二位かやうの御事どもを聞きて、いとゞ嬉しう、夢のしるしあるべきと思ひて、いとゞしき御祈りたゆまず。筑紫にも、かかることを聞き給ひて、よろづにさりともと頼もしく思さるべし。但馬の中納言殿は、いまだそのか

○いきの松原　拾遺集雜部藤原後生女、「今日まではいきの松原いきたれど我が身のうきに歎きてぞふる。」
○遙かなる御有樣　伊周配流の遠流。
○院　東三條女院。
○父おとゞ　顯光。
○御手車　輦車。
○簾のみはらみたるか　弘徽殿の女御の御懷妊なく其の女房達の簾を押し出したのを斯く嘲る。
○したり顏　得意顏
○右の大臣　顯光。
○この殿　顯光。
○御位も北の方も云云　顯光は道兼の官を奪ひて右大臣となり道兼の妻を妻とす

み、六條殿は絶え給ひにしかば、伊豫の守兼資のぬしのむすめを、いみじうおぼいたりしを、いつしかとのみ哀れに戀しう思さるべし。帥殿は、松君を遙かに思しおこせつゝ、いきの松原とのみ思しよそへられけり。哀れなる御なからひどもなり。月日も過ぎもていきて宮の御腹も高くならせ給へば、哀れに心細く思されけり。遙かなる御有樣どもをわりなき事に申させ給ひしかば、うちにも、いと心苦しきことに思召して、常に院にも語らひ申させ給ふ。はかなく冬にもなりぬるに、承香殿たゞにもあらぬ御氣色なれば、父おとゞ、いみじう嬉しき事に思し惑ふ。うへも、いみじう嬉しう思さるべし。院も、いづれの御方にも、たゞ男御子をだに產み奉り給へらばと、思召すほどに、三月ばかりにて奏して出でさせたまふ。そのたびの儀式は、いと〳〵心ことなり。女御も、御手車にて、女房かちより歩み連れて仕う奉る。弘徽殿の細殿の前を渡らせたまふほど、細殿の御簾を押し出しつつ女房こぼれ出でて見れば、この女御の御供の童女、いたうなれたるが、火のいとあかきに、この弘徽殿の細殿を見て、「簾のみはらみたるか。」などいひていくを、弘徽殿の女房、「あなねたし、何しに見つらむ。」などいひけり。淺ましうしたり顏にねたけなり。とまれかうまれ、かくて出で給ふ御有樣、いと羨ましう見えたり。さてまかで給ひて、右の大臣、萬に御祈りし給ふ。粟田殿の北の方、この殿の北の方にておはす。御位も、北の方も、はかなくなり變らせ給へるも、いと哀れなり。堀河殿をぞいとよく造りたてて、今は渡りて

○少將　重家。
○若宮　脩子。
○僧都の君　隆圓。
○御氣色　御產の樣子。
○男御子　敦康親王
○望めど望まれず　云々　人の幸福は自然的なりの意。
○例の　例の如く。
○思し惱りて　道長に遠慮して。
○すぐさせ　捨て置かせ。
○さらぬ事　御產以外の事。

すませ給ひける。女御の御一つ腹の御兄ども、少將にて、人にほめられておはす。

はかなく月日も過ぎぬ。長德四年になりぬ。若宮、三つになり給ひぬ。いかにいと〻美しう思ひやり聞えさせ給ふも、いと〳〵戀しうまめやかに、思し出づる折々多かるべし。中宮には三月許りにぞ、御子うまれ給ふべき程なれば、御つゝしみを萬に思せど、殊に御封など、すが〳〵しう辨へ申す人なし。內藏づかさより、例の樣々の御具なども運び、女院などよりも、萬思しはかり聞えさせ給へば、それにてぞ、何事も急がせ給ふ。僧都の君も、萬に賴もしう仕うまつり給ひ、いかに〳〵と思し渡る程に、御氣色あり。さゞとのしり騷ぐに、哀れに賴もしき方なし。唯この但馬の守ぞ、萬たのもしう仕うまつる。二位もかくと聞き奉りて、居ながら額を突き祈り申す。いみじき御願のしるしにや、いと平らかに、御男子うまれたまひぬ。男御子にさへ坐せば、いと〻ゆゝしきまで思されながら、女院に御消息あれば、うへに奏せさせ給ひて、御劍もてまゐる、いと嬉しき事に、誰も誰も思召さる。世の中は、かくこそありけれ、望めど望まれず、遁るれど遁れずといふは、げに人の幸にこそと、聞き憎きまで世にのゝしり申す。御湯殿に、右近の內侍例の參る。こたみは、內より御產養あべけれど、猶思し惱りて、すぐさせ給ふに、內の御心をくませ給へるにや、大殿、七夜の御事仕うまつらせ給ふ。內には、院にも、嬉しき事に思召したり。院より、絹綾、大かたさらぬ事ども、いとこまかに聞えさせ給へり。七日の夜は、今宮見奉りに、藤三位をはじめさるべき命婦、藏人たちまゐる。その程の御用意あるべし。二位は、夢を正しく見なして、「かしらだに堅く坐さば、一天下の君にこそ坐すめれ、能く〳〵心ことに傳き奉らせ給へ。」と、常に啓せさす。又の日、但馬にも、筑紫にも、皆御使奉られしかば、但馬には、いと疾う聞き給ひて、哀れに嬉しき事を思すべし。いつしか筑紫に聞かせ奉らばやと思し歎く。宮の女房、よくこそ外ざまにおもむかずなりにけれ。若宮の御世にあひぬる事と、世にいみじうめでたく思ふべし。御湯殿の鳴弦、讀書の博士など、皆大殿にぞおきて參らせ給へる。大殿、「同じきものを、いと淸らかにもせさせ給へるかな。すぢはたゆまじき事にこそあめれとのみぞ、九條殿の御族より外の事はありなむやと思ふものから、その御中にも、猶この一すぢは、心ことなりかし。」などぞ宣はせける。

○今宮　敦康親王。
○かしらだに云々　健やかに生立つたならば。
○御湯殿の鳴弦　皇子沐浴の際魔除の爲弓弦を放ち鳴らす儀
○讀書の博士　沐浴の時紀傳明經の博士等庭で一人宛讀む。
○同じきものを　我と同じ系統なるに。
○すぢは云々　藤原氏の系統は皇統上絕ゆまじき事ならん。
○九條殿云々　師輔一流以外には皇子を生む事はあらじと思ふものの其の中でも兼家一流は特別皇統に緣が深い。
○我が佛　大切に思ふ人敦康親王。
○この御事のしるし　皇子誕生の功。
○まねび　其の儘告げ。

かくいふ程に、筑紫に聞き給ひて、淺ましう嬉しうて、ものにぞあたらせたまふ。我が佛の御德に、われらも召されぬべかめりと、いみじく嬉しく思召されて、この御事の後よりは、たゞ行末のあらまし事のみ思し續けられて、御心の中には、いと賴もしく思さるべし。かかる程に、今宮の御事のいたはしければ、いとやんごとなく思さるゝ儘に、いかで今は、この御事のしるしに、旅の人をとのみ思召して、常に女院と、上の御前と語らひ聞えさせ給ひて、殿にも、かやうにまねび聞えさせ給へば、「實に御子の御しるし侍らむこそ

○赤き瘡　麻疹。
○知らず　知らぬ中に。
○御とく　御蔭。
○上らせ　隆家が。
○兼資　隆家の舅。
○大殿　道長。
○源中將　成信。
○この殿　隆家。
○てゝは、　兼資夫妻。
○兵部卿の宮　致平親王。
○法師　永圓。
○今一所　成信。
○殿のうへ　道長の室なる雅信の子倫子
○それ　成信。
○かかる事　配流。
○忍び　忍び通ひ。
○大殿の上の御こと　はらから　倫子の異母妹。

はよからめ、今はめしに遣はさせ給へかし。」など奏し給へば、上いみじう嬉しう思召しながら、「さば、さるべき樣に、ともかくも。」と、のどやかに仰せらる。四月にぞ、今は召し返す由の宣旨下りける。それに、今年例のもがさにはあらで、いと赤き瘡の細かなる出できて、老いたる若き、上下わかずこれをやみのゝしりて、やがていたづらになるたぐひもあるべし。これを、公私、今の物歎きにして、しづ心なし。されど、この召し返しの宣旨下りぬれば、宮の御前、世に嬉しき事に思さるべし。夜を晝になして、公の御使をも知らず、まづ宮の御使共參る。これにつけても、若宮の御とくと、世の人めでのゝしる。京には、賀茂の祭、何くれの事ども過ぎて、つごもりになりぬ。筑紫には、御使も宣旨も未だ參らぬに、但馬にはいと近ければ、御迎ひに、さるべき人々數も知らず參りこみたり。それも、いでや面目ある事にもあらねど、いと〳〵嬉しく思さる。さて上らせ給ふ。五月三四日の程にぞ、京に著き給へる。兼資朝臣の家に、中納言上り給へれど、大殿の源中將のおはすとて、この殿のおはしたるを、てゝはゝ、更に善からぬ事に思ひて、いみじう忍びてぞおはしける。大殿の源中將と聞ゆるは、村上の御門の三の宮、兵部卿の宮、それ入道して、石藏におはしけるが、男子二人おはするなる。一所は法師にて、三井寺におはす。今一所は、殿のうへの御子にしたて參らせ給ふなりけり。それ、この兼資が壻にておはしけり。されば、この中納言には、今一人のむすめに、親にもしられで通ひ給ひけるが、か

○思ひきやの歌　萬代集雜部。
○女君　兼資の女君
○うきねの歌　別れた時は涙をのみ袂にかけたが今日は反對に逢うて嬉しい。浮根と憂き哭、かけ、引きは菖蒲草の緣語
○姫宮若宮　脩子と敦康親王。
○とく　早く歸らせ
○宮のうへ　道隆の三女、敦道の舊室。
○四の御方　道隆の四女、一條院御匣殿
○今宮　敦康親王。
○あつかひ　隆家を懇にもてなし。
○宮　中宮の御殿。
○ふかく云々　物も覺えず危篤。
○うみが月　臨月。
○太秦　山城國にある廣隆寺。

かる事さへ出で來て、いとゞうたてげに、親どもさへいひければ、今に忍びたまふなりけり。この源中將の母は、大殿の上の御ことはらからの御子なりければ、御甥にて、御子にし奉らせ給ふなりけり。五月五日、中納言殿のたまひける、

思ひきや別れしほどのそのころよ都のけふにあはむものとは

とありければ、女君、

うきねのみ袂にかけしあやめ草ひきたがへたる今日そうれしき

中納言殿、宮に參り給へれば、まづ御喜びの涙どもせき留め難し。哀れにて悲しきに、姫宮若宮、樣々にぞ美しう坐す。見奉り給ふにつけても、夢の現になりたる心地せさせ給ふ事限りなし。いつしか、筑紫の殿の御事を、とくと思さる。御迎へに、明順朝臣など、人々參りにけり。淑景舍、宮のうへなど集まらせ給へり。四の御方は、今宮の御後見、とりわき聞えさせ給へれば、あつかひ聞えさせ給ふ。中納言殿、夜許りこそ、女君の許へおはすれ、たゞ宮にのみおはす。二位も、この頃赤瘡にて、いとふかくにて、ほと〳〵しく聞ゆれば、哀れに思さる。今は帥殿見奉りて、死なむとぞ願ひ聞ゆれと、いかゞはと見えたり。かかる程に、殘りなく病みのゝしるに、かの承香殿の御女、うみが月も過ぎさせ給ひて御修法、藥師經の不斷經などよませさせ給ふ。萬にせさせ給へど、思し餘りて、六月許りに、太秦に參りて、七日も過ぎぬれば、

○別當　法務統御者
○罪は後に云々　寺を汚す罪は産後に謝せんと別當其の儘にす。
○物も覺えぬ　意外の。
○世づかぬ事　普通でない事。
○あるやうあらむ　御産あらん。
○しひれ　縮小し。
○むゆに　非常に細く。
○七日やむ　ひどく驚き又は呆れ等すること七日も病臥す。
○内わたり　參内。
○兒などの云々　生兒の死ぬる事は普通
○いかゞはせむには　已むを得ぬ場合には。

又延べて、萬に祈らせ給へばにや、御けしきありて、苦しうせさせ給へば、殿しづ心なく思し騒ぎて、まづ内に、右近の内侍の許に、御消息遣はしなどせさせ給へば、御前に奏しなどして、いかに〳〵など御使あり。女院よりも、いかに〳〵と、おほつかなくなど聞えさ給ふに、「この御寺の中にては、いと不便なる事にてこそあらめ、さりとて里に出でさせ給はむも、いとうしろめたきこと。」など、この寺の別當なども申し思ふ程に、たゞ事成りぬべき御氣色なれば、さばれ、罪は後に申し思はむと思して、任せ奉り給ふ程に、御身より唯物も覺えぬ水のみさゝと出づれば、いとあやしう世づかぬ事に人々見奉り思へど、さりとも、あるやうあらむとのみ騒がせ給ふに、水つきもせず出で來て、御腹たゞしひれにしひれて、例の人の腹よりも、むゆにならせ給ひぬ。こゝらの月頃の、血のけはひだに出でこで、水の限りにて、かく御腹のへりぬれば、寺の僧ども淺ましういひ思ふ。父おとどは、七日やむといふらむ樣に、淺ましういみじきに、かいひざなどいふ事をせさせ給ひて、空を仰ぎて、夢覺めたらむ心地して居させ給へり。萬よりも、女御の御心地、淺ましう恥かしう、かの弘徽殿の細殿の事など思し出でられ、今は内わたりといふ事、思しかくべくもあらず。内より御使頻りに參るに、奏し遣らせ給はむ方なし。兒などのともかくも坐すは、例の事なり。これはいと殊の外といふもおろかなり。御寺の僧どもも、かかることは、恥かしき事なりけり。されど佛の御德に、平らかに坐すにこそはとぞ、いかゞ

○たゞなるには　妊娠せざるよりも。
○歌にさへ　此の事を歌にして詠んだ。
○かの出でさせ云々　元子退出の夜の有樣。
○めいぼく　面目。
○急ぎたたせ　上落をせきたたれ。
○心もとなく　待遠しく。
○病みさかりて　病ひが衰へて。
○かちより　陸路で
○致仕の大納言殿　官職を退ける重光。
○うへ　伊周室。
○殿のうち　重光の邸。
○松君　道雅。

はせむには聞えける。内には、聞召して、ともかくも物も仰せられでこそあらめ。右近が物騒がしういひて、かく物狂ほしうはからひて、あるまじきわざにこそありけれ、たゞなるには、こよなく劣りてもあるかなとぞ、いとほしう思召されける。院にも、いと聞き苦しうぞ思召しける。世の中には、歌にさへぞ聞えける。かの簾のみといひし童女は、それに恥ぢて、やがて參らずなりにけり。外よりも、弘徽殿こそ、いみじうをこがましげに人人聞えけれ。かの出でさせ給ひし夜の御有樣は、さ許りめいぼくありし事やはありし。猶世の中こそ哀れなるものはありけれと、何事につけても定めなくこそ。かの筑紫には、赤瘡彼處にもいみじげれば、帥殿急ぎたたせ給へども、大貳の「この頃過して上らせ給へ、道の程いと怖ろしう侍り。御おくりに參らむ下人なども、いと不便に侍らむ。」など申しければ、げにと思召して、心もとなく思しながら、立ちとまらせ給ひて、世の人少し病みさかりて上らせ給ふ。この程に、二位、この瘡にてうせにけり。いみじう哀れなる事どもなり。かくて上らせ給ふも、唯若宮の御しるしと、哀れに嬉しう思しつゝ上らせ給ふ。かちよりなれば、今はおはし著かせ給ひぬらむとのみ、いつしかと待ち聞えさせ給ふ。十一月に上り著かせ給ふ。かの致仕の大納言殿に、おはし著かせ給へる。うへを始め奉りて、殿のうちの人々、喜びの涙ゆゝし。殿の有樣など、昔にもあらず、哀れに荒れはてにけり。うへも、何事も聞えさせ給はず、唯涙におぼほれて見奉り給ふ。松君のいと大きになり給

○目をすり　涙を浮べ。
○淺茅生の歌　後拾遺集雜部。松の木高くなれるを松君の生成せるに喩へる意を含む。
○來しかたの歌　配所近くに在るいきの松原の名にそひて生き長らへ今舊都を見るが悲しい。
○そのかみの歌　配流當時には斯く無事の歸洛は全く思はず一同死ぬ許り歎いた
○女君　伊周の室。
○宮達　儕子、敦康。
○一の宮　儕子。
○いま〳〵しう　貴子の御服中なれば忌忌しく。

へるを搔き撫でて、殿いみじう泣かせ給へば、松君も、いかに思すにか、目をすり給ふ。いと嬉しと思したるも、哀れにことわりなり。殿、

淺茅生とあれにけれどもふるさとの松は木高くなりにけるかな

又殿、

來しかたのいきの松原いきてきてふるきみやこを見るぞかなしき

と宣へば、うへ、

そのかみのいきの松ばらいきてきてみながらあらぬ心地せしかな

と申し給ふ。まづ宮へ參らむとて急ぎ出でさせ給ふにも、女君涙こぼれさせ給ふ。宮の御前、單の御衣の袖も、絞るばかりにて坐す。何事ものどかになむなど申させ給ふ。宮達樣々にいみじく美しく坐すを、一の宮を、まづいだき奉らまほしげに思せど、いま〳〵しうのみ物の覺え侍りとて、聞えさせ給ふ程も、猶いと世は定めがたし。平らかに、誰も御命を保たせ給ふのみこそ、世にめでたき事なりけれとのみぞ見えさせ給ふ。故上の御事を、返す〴〵聞えさせ給ひつゝ、誰もいみじう泣かせ給ふ。萬に、ひとつ涙のといふやうにのみ見えさせ給ふも、哀れに盡きせずぞ見えさせ給ふ。その頃よき日して、故北の方の御墓をがみに、帥殿、中納言殿、諸共に櫻本に參らせ給ふ。哀れに悲しう思されて、坐しかばと思さるゝにも、御涙におぼほれ給ふ。折しも雪いみじうふるに、中納言、

○故上　貴子。
○ひとつ涙　後撰集雜部讀人不知「嬉しきもうきも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり。」
○露はかりの歌　雪を花に貴子を櫻に櫻の木陰を櫻本に喩ふ
○櫻もとの涙　櫻本の雪の淡雪を花と見てこれを折るには袖の濡るゝ如く貴子を悲しむ涙止め難い。

露ばかりにほひとゞめてちりにける櫻がもとを見るぞかなしき

帥殿、

櫻もとふるあはゆきを花と見てをるにも袖ぞぬれまさりける

萬哀れに聞えおきて、なく〳〵歸らせ給ふ。いかで今は其所に、御堂建てさせむとぞ思しおきてける。

浦々のわかれ

○姫君　彰子。
○初雪の物語　無名草子にもあれど傳はらず。
○やんごとなき所々　屏風繪の面白い所
○ぬしがらなむ　作者の品位によって。
○むらさきの歌　公任、拾遺集雜春部。紫の雲は祥雲。
○ひな鶴の歌　雛鶴は彰子、松が枝は帝
○やんごとなき　やむごとなからぬの意
○なり出立ち　裝ひ
○なりいで　おしたし。

かゞやく藤壺

大殿の姫君、十二にならせ給へば、年のうちに御裳著ありて、やがて内に參らせ給はむと急がせ給ふ。よろづしつくさせ給へり。女房の有樣ども、かの初雪の物語の、女御殿に參りこみし人々よりも、これはめでたし。御几帳御屏風よりはじめ、なべてならぬ樣にせさせ給ひて、さるべき人々、やんごとなき所々に歌よませ給ふ。「和歌はぬしがらなむ、をかしさは勝る。」といふらむやうに、大殿やがてよませ給ふ。又花山院よませ給ふ。又四條の公任の宰相など詠み給へり。藤さきたる所に、

むらさきの雲とぞ見ゆる藤のはないかなる宿のしるしなるらむ

又人の家に、ちひさき鶴ども多くかきたる所を、花山院、

ひな鶴をやしなひたてて松がえのかげにすませむことをしぞ思ふ

とぞある。多かれど、片端をとて書かずなりぬ。かくて參らせ給ふ事、長保元年十一月一日の事なり。女房四十人、童六人、下仕六人なり。いみじく選り調へさせ給へるに、やんごとなきをば更にもいはず、四位五位のむすめといへど、殊に交らひ惡く、なり出立ち清げならぬをば、あへて仕うまつらせ給ふべきにもあらず、物きらゝかに、なりいでよきを

○いわけ　幼き。
○めでたき折節　朝廷の儀式。
○内々にも云々　家に在りても如何にして寒さを凌ぎ得たか
○情なきまで　興ざめるまで。
○いにしへ云々　今人は古人の思ふ樣に女御后の厚著を見苦しとは思はざらん。
○うへむけにねび　一條帝は頗る年たけ
○大臣公卿　大臣は公、公卿は卿に當る。
○故關白殿　道隆。
○細殿　中宮の細殿

選らせ給へり。さべき童などは、女院よりなど奉らせ給へり。これはやがてこのたびの童の名ども、内人、院人、宮人、殿人などやうに、つけ集めさせ給へり。姫君の御有樣、さらなる事なれど、御髪たけに五六寸ばかり餘らせ給へり。御かたち、聞えさせむ方なくをかしげに坐す。まだいとをさなかるべき程に、聊かいわけたる所なく、いへばおろかにめでたく坐す。見奉り仕う奉る人々も、餘り若く坐すを、いかに物のはえなくやなど思ひ聞えさせしかど、淺ましきまでおとなびさせ給へり。萬珍らかなるまでにて參らせ給ふ。昔の人の有樣を、今聞き合はするには、いとぞ物狂ほしう、その折の人の、きぬすくなに綿薄くて、めでたき折節にも出で交らひ、内々にもいかであり經たらむと覺えたり。この頃の人は、うたて情なきまで著重ねても、猶こそは風などもおこるめれ。されば、いにしへの人の、女御后の御方々など思ふ樣に、かたはしにあらずやと見えたり。かくて參らせ給へるに、うへむけにねび、物の心知らせ給へば、いとゞ物のはえもあり。また恥かしうも坐す。中宮の參らせ給へりし程などは、上もいと若く坐ししを、これはさらなる事ながら、御心おきて御氣色など、すべて末の世の御門にはあまらせ給へりとまでぞ、世の人やんごとなき君に坐すと、時の大臣公卿も聞えさせける。故關白殿の御有樣は、いと物花やかに、今めかしうあいぎやうづきて氣近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿を、常に床しうあらまほしけにぞ思ひたりし。弘徽殿、承香殿、倉部屋など參

○出で坐さで　産み給はで。
○この御方　彰子。
○藤壺　飛香舎。
○光のどか　光薄し
○せう〳〵の人　普通の人。
○螺鈿　青貝を物の面に嵌め飾とする物
○織物の唐衣　模様を織り出した唐衣。
○はかなう奉りたる　一寸著たる。
○かをり　衣にたきこんだ香の匂。
○陣の吉上　六衛府の下役。
○女官刀自　下臈女房。
○この御方　彰子。
○世に忝く云々　誠に恥かしく恐縮し。
○三條の大后の宮　昌子、冷泉帝の皇后
○かの宮　大后御所

りこませ給ひたり。されど、さるべき宮達も出で坐さで、中宮のみこそは、かく御子だちあまた坐すめれ。この御方、藤壺に坐すに、御しつらひも、玉も少し磨きたるは、光のどかなるやうにもあり。これは照り輝きて、女房も、せう〳〵の人は、御前の方に參り仕うまつるべきやうにもあり。いといみじう淺ましう、さまことなるまでしつらはせ給へり。御几帳御屏風のよそひまで、皆苺繪螺鈿をせさせ給へり。女房は、同じき大海の摺衆、織物の唐衣など、昔より今に同じやうなれど、これはいかにしたるとまでぞ見えたる。女御のはかなう奉りたる御衣の、色かをりなどぞ、世にめでたき例にしつべき。御とのゐしきりなり。よき日して、御乳母より始め、命婦、藏人、陣の吉上、衞士、仕丁まで贈物を賜はすれば、年老いたる女官、刀自などにいたるまで、世にいひ知らぬまで御祈りを申し奉る。御乳母達さへ、絹、綾、織物の裝束ども、數多く重ねさせ給ひて、衣箱に包ませ給ひて、樣々の物ども添へさせ給へり。この御方に召仕はせ給はぬ人をば、世に忝くかしこまりをなし、世にすゞろはしくいひ思へり。たま〳〵召仕はせ給ふをば、世にめでたく羨ましう思ひて、さいはひ人とぞつけたる。只今内わたり、花々とめでたくいみじきに、三條の大后の宮は、このついたちの日失せさせ給ひにしかば、それを、かの宮には哀れに悲しきものに思ふべし。世の定めなきのみぞ、萬に思ひ知られける。うへ、藤壺に渡らせ給へれば、御しつらひ有樣はさもこそあらめ。女御の御有樣もてなし、哀れにめで

○ここ御方々　定子元子義子等。
○御めうつり　多くの后女御を見給ふが
○そらだきもの　何處よりともなく匂ふ香。
○かゝへず　かゝふは香等を含有する意
○明けたてば　夜が明ければ。
○御厨子　物を載せ置く棚の類。
○弘高　巨勢金岡の曾孫で繪所の長者。
○歌繪　一說に歌を書くべき爲の畫。
○かたなり　發育不完全。
○大みき　大御酒。
○打解けぬ御有樣、女御の有樣をいふ。
○これうちむきて　こちらを向いて。

たく思し見奉らせ給ふ。姫君を、かやうにおほし奉らばやと思召さるべし。こと御方々皆ねびとゝのほらせ給ひ、およすけさせ給へれば、只今この御方をば、わが御姫宮を、傅きする奉らせ給へらむやうにぞ、御覽ぜられける。年頃の御めうつりたとしへなく、哀れにらうたく見奉らせ給ふべし。打橋渡らせ給ふよりして、この御方のにほひは、只今あるそらだきものならねば、若しは何くれの香のかにこそあなれ、などもかゝへず、何ともなくしみ薫り、わたらせたまひての御移香は、こと御方々にも似ず思されけり。はかなき御櫛の箱、硯の箱の中よりして、をかしく珍らかなるものどもの有樣に、御覽じつかせ給ひて、明けたてば、まづ渡らせ給ひて、御厨子など御覽ずるに、いづれか、御目とゞまらぬもののあらむ。弘高が歌繪かきたる雙紙に、行成の君歌かきたるなど、いみじうをかしう御覽ぜらる。「あまり物きようじする程に、むげにまつりごと知らぬ癡物にこそなりぬべかめれ。」など仰せられつゝぞ、歸らせ給ひける。晝間などに御殿籠りては、「餘り稚き御有樣なれば、參りよれば、翁と覺えて、われ恥かしうぞ。」など宣はする程も、只今ぞ二十許りに坐すめる。同じ御門と申しながらも、いかにぞや、かたなりに、飽かぬ所も坐すものを、このうへは、いみじう御かたちよりはじめ、淸らに淺ましきまでぞ坐す。大みきなどは、少し聞召しけり。御笛をえもいはず吹きすまさせ給へれば、侍ふ人々も、めでたう見奉る。打解けぬ御有樣なれば、「これうちむきて見給へ。」と申させ給へば、女御殿、「笛

○まじらひ　奉公。
○なにはの事　何事
○この御前　彰子。
○宮々　脩子、敦康
○一の宮　敦康親王
○一天下のともし火　帝位に卽くべき方
○今はさ　今は思ふ事なしと。
○殿の御前、女院　道長、東二條。
○上著　唐衣裳の下に著るうちき。
○みながら綾　總綾
○花をらぬ人なく、美裝せざる人なく。
○土御門殿　道長邸

をば聲をこそ聞け、見るやうやはある。」とて聞かせたまはねば、「さればこそ、これや稚き人、七十の翁のいふ事を、かく宣ふよな、あな恥かしや。」と戯れ聞えさせ給ふ程も、侍ふ人々、「あなめでたや、この世のめでたきことには、只今の我等がまじらひをこそせめ。」とぞいひ思ひける。なにはの事もならはせ給ふ事なき御有樣に坐す。はかなく年もかへりぬれば、今年は后に立たせ給ふべしといふ事、世には申せば、この御前の御事なるべし。中宮は、宮々の御事を思しあつかひなどして、參らせ給ふべき事、只今見えさせ給はず。内には、今宮を今まで見奉らせ給はぬ事を、安からぬ御歎きに思召したり。帥殿は、そのまゝに一千日の御齋にて、法師恥かしき御行にてすごさせ給ふ。今は一の宮かくて坐すを、一天下のともし火と頼み思さるべし。實にことわりに見えさせ給ふ。一の宮の御祈りを、さもいはず思し惑ふべし。中宮は、明暮我參らずとも、宮かくて坐せば、さりともの今はと、心のどかに思召すべし。女院にも、藤壺の御方を、もとより殿の御前、女院にまかせ奉ると申しそめさせ給ひしかば、いとやんごとなく嬉しきものに思ひ聞えさせ給ふ。中宮をば、心苦しく、いとほしきものにぞ思ひ聞えさせ給ひける。この頃藤壺の御方、八重紅梅を織りたる上著は、みながら綾なり。殿上人などは、花をらぬ人なく、今めかしう思ひたり。たたむ月には、藤壺まかでさせ給ふべしとて、土御門殿いみじう拂ひ、いとゞ修理加へ磨かせ給ふ。

○あるやう　仔細。立后の事。
○中宮參らせ云々　中宮に參内するやう
○宮見奉らせ　敦康を御覽になる。
○おろかなるべきやうなし　おろかに思召さるゝ筈なし。
○そゝぎたちて　そはそはと急ぎ立ちて
○御迎へにかぞへたて　參迎の人數に數へあゆ。
○わが御心の云々　我が心の何で愚かであつたか、甚だ意外な道長の立派な心よ
○よもとここそ　まさか斯く迄にはあらじ
○女一の宮　脩子。

かくて二月になりぬれば、ついたち頃に出でさせ給ふ。うへ、いとあかずさうぐしき御氣色なれど、あるやうあるべしとぞ世の人申すめる。さて出でさせ給ひぬ。御送りの上達部殿上人、樣々の祿どもありて歸り給ふ。かかる程に、内わたりつれぐに思されて、このひまに、いかで一の宮見奉らむと思召せど、萬つゝましうて、え宣はせぬに、殿「この頃こそ、一の御子見奉らせ給はめ。」と奏せさせ給へば、いとく嬉しう思召されて、院にも聞えさせ給へば、中宮參らせ給ふべきよし度々あれど、つゝましうのみ思召すに、まめやかに院も聞えさせ給へば、宮おほし立たせ給ふ。帥殿なども、などてか、宮見奉らせ給はむに、いとゞ御志こそまさらせ給はざらめ、おろかなるべきやうなしなど定めさせ給ひて、そゝぎたちて、二月晦日に參らせ給ふ。御輿などもことぐしければ、一宮の參らせ給ふ御迎へにとて、大殿の唐の御車をぞ率て參れる。それに宮も姫宮もやがて奉れり。さるべき人々、皆御迎へにかぞへたてて參らせ給ふ。殿の御心ざま、淺ましきまであり難く坐すを、世にめでたき事に申すべし。帥殿も「わが御心のいかなればにか、いと思はずなりける殿の御心かな。女御參り給ひて後は、よもとこそ思ひ聞えつるに、一の宮の御迎への有樣などぞ、誠にあり難かりける、御心なりける。我等はしも、えかくはあらじかし。」とぞ内々には聞え給ひける。さて參らせ給へれば、姫宮美しき程にならせ給へるに、又今宮の、えもいはずきらゝかに坐すに、御門御目拭はせ給ふべし。女一の宮も四つ五

○よき夜　對面によき夜。
○御兒おひ　御をさなだち。
○日頃坐せば　幾日も中宮が宮中に坐せば。
○見奉らせ　父帝が
○御子の悲しさ　御子の愛情。
○宮　定子。
○常なるまじき御事　普通とかはれる御事。
○のみ　物語り給へはを補ふ。
○哀れうたてゆゝしく　帝の詞、嘸一人忌々しき事かな。
○皇后宮　定子。
○大饗　立后節會。
○御月の御事　月經
○それを　懷妊を。

つ許りに坐せば、物などいとよう宣はす。女院も、よき夜とて、今宮見奉らせ給ふに、うへの御兒おひにぞ、いとよう似奉らせ給へる。哀れに美しう見奉らせ給ふ。なほありがたうやんごとなく、捨てがたきものに思ひ聞えさせ給へるも、ことわりに見えさせ給ふ。さて日頃坐せば、殿の御前、今宮を見奉らせ給ひて抱きもち、うつくしみ奉らせ給ふ。歩かせ給ふまで、見奉らせ給はざりけることと、誰も御子の悲しさは知らせ給へる事なれば、哀れに見奉らせ給ふ。上の御笛を取らせ給へば、いとゆゝしく美しう見奉らせ給ふ。よろづ心のどかに、宮に、泣きみ笑ひみ、唯御命を知らせ給はぬ由を、夜晝語らひ聞えさせ給へど、宮、例の御有樣に坐さず物心細けに哀れなる事どもをのみぞ申させ給ふ。「この度は、參るにつゝましう覺え侍れど、今一度見奉り、又今宮の御有樣後めたくて、かく思ひたち侍るなり。」など、まめやかに哀れに申させ給ふを、うへ「いなや、いかなれば、などかくは宣はするぞ。」など聞えさせ給へど「猶物の心細くのみ覺え侍る。」など、常なるまじき御事どもをのみ、「哀れ、うたてゆゝしく。」と仰せらるゝ。「身をば、ともかうも思ひ侍らず、唯稚き御有樣どもの後めたさに。」など、いみじう聞えさせ給ひけり。

かくて三月に、藤壺后に立たせ給ふべき宣旨下りぬ。中宮と聞えさす。この侍はせ給ふをば、皇后宮と聞えさす。やがて三月つごもりに、大饗せさせ給ひて、又いらせ給ふ。今年ぞ十三にならせ給ひける。哀れに若くめでたき后にも坐すかな。皇后宮、けふあす出

○人の慎むべき年　十三、二十五、三十七、四十九、六十一、七十三、八十五、九十七が厄年、定子は二十五歳。
○宿曜　二十八宿、九曜の行度で人の運命を考へる術。
○さあらむにつけても　懷妊したについても。
○あまたへ　幾重も
○いさや　扨どうであらうか。
○人がましき　相當の人物らしい。
○このわたり　伊周等。
○煩はしき事　道長に憎まれる事。
○果報にやあらむ　仕合はせと思ふかも知れないが。

でさせ給ひなむとするを、せちになほ〳〵と聞えさせ給ふ。二月に參らせ給へりしに、ついたち頃に、里にて御月の御事ありけるに、三月二十日餘りまで、さる事なかりければ、いと〳〵怪しくて、いとゞいかに〳〵と、心細く思さるべし。上も、いかなればにかと、覺束なけに宣はするにも、「それを嬉しと思ふべきにも侍らず、今年は人の慎むべき年にもあり、宿曜などに心細くのみいひて侍れば、猶いとこそ、さあらむにつけても、心細かるべけれ。」などぞうち語らひ聞えさせ給へる。三月つごもりに出でさせ給ふも、哀れに悲しき事どもを多く聞えさせ給ひて、御袖も一つならず、あまたへ濡れさせ給ふ。返す〳〵この、月の御事の、さもあらずならせ給ひぬるを、いでや、さも心憂かるべきかなと、哀れに物のみ心細う思し續けらるゝを、ゆゝしう、かく思はじと思し返せど、いとうたてのみ思さる。その後、つゆ物も聞召さで、唯夜晝涙にうきてのみ坐せば、帥殿も中納言殿も、いみじき大事に思し歎きたり。「唯御祈りの事をのみ急がせ給へど、いさや、世の中に少し人に知られ、人がましき名僧などは、このわたりに親しき樣なる事は、煩はしき事に思ひて召仕はせ給へど、萬にさはりをのみ申しつゝ、たはやすくも參らず。さりとて、むげに人に知られぬ程なるは果報にやあらむ、しるしなどもえ見ぬわざなれば、御祈り、思す樣にもせさせ給はせぬを、口惜しき樣に思し歎きたり。賀茂の祭、何やとのゝしるも、萬よそにのみ思さるゝも哀れなり。僧都の君、清昭阿闍梨などばかりぞ、夜居に常には侍

○宮たち　儲子、敦康。
○かつは　一方では
○いつまで　生きむやを補ふ。
○先づ知るもの　古今集雜部、讀人不知「世の中のうきも辛きも告げなくに先づ知るものは涙なりけり」。
○大床子　御物を載せる机。
○し丶狛犬　獅子狛犬共に御帳の動かざるやう鎮子として其の下に置く。
○火炬屋　衛士が火をたきて夜番する小屋。
○ありし折　入内の時。
○めやすけ　見苦しからず。

ひ給ふ。この宮たち、御あつかひせさせ給ひつゝも、かつは我いつまでとのみ先づ知るものに思さるゝも、いみじうぞ。中宮は、四月つごもりにぞ入らせ給ふ。その御有樣推し量るべし。御輿の有樣より初め、何事もあたらしき御有樣にて、御裳著させ給ひて、御髮あげて、御輿に奉る程など、猶さるべき御身にこそ坐しけれ。かく若く坐す程は、らうたげに美しげに坐さむこそ世の常なるべけれ、やんごとなき方さへ添はせ給へる、いみじうめでたし。この度は、藤壺の御しづらひ、大床子たて、御帳の前のし丶狛犬なども、常の事ながら、目とゞまりたり。若き人々、いとめでたしと見る。火炬屋、土御門殿の御前にありし、繪に書きたるやうなりしを、この御前にては、また今少し氣色ことなる心地するも、うちつけの目なるべし。この度は、女房の唐衣なども品々に分れて、けぢめけざやかなる程ぞいとほしげなる。押しなべて、ありし折は、目とゞまりても見えざりし織物の唐衣どもの、今見れば、文けざやかに浮きたるもめでたく見え、さしもあらず、人がらなどはわろからぬも、又心の限りしたる無文などは、いと口惜しうなむ。女官なども、ないがしろに思ひふるまひたるなど、なか〳〵めやすけなり。上渡らせ給ひて御覽じて、「さきざきは、心安き遊物に思ひ聞えさせしを、この度は、いとやんごとなき御有樣なれば、添ささへ添ひて、振舞ひにくくこそなりにたれ。さても見そめ奉りし頃とこの頃とは、こよなくこそおよずけさせ給ひにけれ。はかなきことあらば、勘當ありぬべき御氣色にこそ。」と宣はすれば、侍ふ人々も、いみじう忍びやかにいひつゝ笑ふべし。はかなく五月五日になりぬれば、人々、菖蒲楊などの唐衣、上著などもをかしう、折知りたるやうに見えて、菖蒲の三重がさねの御几帳ども、薄物にて、立て渡されたるに、かみを見れば、御簾の緣もいと青やかなるに、軒のあやめも隙なく葺かれて、心ことにめでたくをかしきに、御藥玉、菖蒲の御輿などもて參りたるも珍らしうて、若き人々見きようず。内には、承香殿を、人知れず覺束なく思ひ聞えさせ給ひて、わざとの御使には思召しかけず、參る人もなければ、もとよりこの御心よせの右近の内侍になむ、御文忍びやかに通はせ給ふといふこと、おのづから洩り聞ゆれば、殿はともかくも宣はせぬに、いとかしこき事にかしこまり申して、うちへも參らず。されば殿の御前、「右近の内侍がまゐらぬこそあやしけれ。おのれを見じとて、かうしたるなめり。」など宣はせけるしもぞ、なか〳〵なめう思しけりなど、人々思ひ申しける。皇后宮には、淺ましきまで、物のみ覺え給ひければ、御弟の四の御方をぞ、今宮の御後見、よく仕う奉らせ給ふべき樣に、うち泣きてぞ宣はせける。御匣殿も、ゆゝしき事をと聞えて、うち泣きつゝ過させ給ひける。月日もはかなく過ぎもていきて、内には、いとゞ皇后宮の御有樣を、床しく思ひ聞えさせ給ひつゝ、おぼつかなからぬ御消息常にあり。宮達の美しう坐すさま限りなし。かくて、七月すまひの節にもなりぬれば、わりなき暑さをばさるものにて、今年の相撲は、東宮も御覽ぜよと思しおきてさ

○菖蒲　表青裏紅梅
○楊　表薄色裏青。
○折知りたる　季節に合ひたる。
○薄物　薄き織物。紗紹の類。
○御藥玉　藥を錦袋に入れ絲で飾り造花を結び五色の絲を垂れ下げしもの。
○菖蒲の御輿　菖蒲を積んで禁中に奉った輿。
○見きようず　見興ず。
○人知れず云々　密に逢ひたく思つて。
○かしこまり申して　右近が恐れ慎みて
○なめう思しけり　内侍の無禮を道長が思はれたのである。
○四の御方　御匣殿

せ給ひて、その御用意ことなるべし。七月七日に、中宮より、院に聞えさせ給ふ。

暮をまつ雲ゐのほどもおぼつかなふみ見まほしきかさゝぎのはし

院より御返事、

かさゝぎの橋のたえまは雲ゐにてゆきあひの空を猶ぞうらやむ

七月十餘日の程になりぬれば、所々の相撲人ども參り集まりて、左右の大將などの御許には、こと事なく、唯この騒ぎの事をせさせ給ふ。春宮御覽ずべき年なれば、何事もいかでかなど、思し騒ぐもをかしくなむ。月日の過ぎ行くまゝに、皇后宮には、いとゞ物をのみ思し歎かるべし。

○院　東三條院。
○暮をまつの歌　續古今集秋部。雲ゐは空と宮中、ふみ見は文見と踏み見とに掛け、かさゝぎの橋は禁中の御階。
○かさゝぎの歌　同上、ゆきあひは出會ひ。
○左右の大將　公季と道綱。

鳥邊野

かくて、八月ばかりになれば、皇后宮には、いと物心細く思されて、明暮は、御涙にひぢて哀れにて過させ給ふ。荻の上風萩の下露も、いとゞ御耳にとまりて過させ給ふにも、いとゞ昔のみ戀しく思されて、ながめさせ給ふ。女院よりは、覺束なからず、御消息奉らせ給ふ。内よりは、たゞにもあらぬ御事を、心苦しう思しやらせ給ひて、内藏寮より、樣樣の物奉らせ給ふ。御つゝしみをも思すさまにもあらず、御修法二壇ばかり、さべき御讀經などぞあれど、僧などもまづさべき所のをば、闕かず勤め仕うまつらむと思ふ程に、この宮の御讀經などには、あやしのかはりばかりのものはかゝしからず、何ともなく寂をのみぬるにつけても、さもありぬべかりしをりに、かやうの御有樣もあらましかば、いかにかひ〳〵しからまし。なぞや、今は唯、念佛を隙なくきかばやと思しながら、又この僧たちの、もてなし有樣忙しげさなども、罪をのみこそはつくるべかめれなど思されて、たゞさるべき宮司などの掟に任せられて過させ給ふ。帥殿中納言殿などの參り給ふばかりに、萬思し慰むれど、唯御涙のみこそこぼれさせ給へば、うたてゆゝしう思されて、姫宮一の宮などの御有樣を、いかに〳〵とのみ思ほし見奉らせ給ふ。常の御夜居は、僧都の君

○荻の上風萩の下露　和漢朗詠集秋部藤原義孝「秋は猶夕まぐれこそたゞならねぬ荻の上風萩の下露。」
○あやしのかはり　卑しき代僧。
○さもありぬべかりしをり　世に時めいた時。
○かやうの御有樣　御懷妊。
○なぞや　何ことであ。
○罪をのみ云々　僧達の落ち著かぬ態度體も腹立たしく罪障を作る樣だから讀經をせぬ方が心易し。
○掟に任せ　するに任せ。

○君達　伊周、隆家隆圓。
○清少納言　清原元輔の女、枕草紙の著者。
○つれて　連立つて
○この月云々　臨月
○今　やがて。
○おまへひとり　定子一人。
○その儘の御精進　配所から歸つたまゝ精進潔齋。
○この事　御産の事
○我が御命ども云々　伊周隆家等の考へで自分達の命はわからんが定子だけは一の宮が即位し國母となる迄命あらせたい
○いみじきもの云々　此の宮達を大切に養育す。

侍ひ給へり。ましてこの君達おはせざらましかば、いかにいとゞ言はむ方なからましとのみ、思ほし知る事多かるべし。春宮には、宣耀殿のあまたの宮たち坐して、御なからひいと水漏るまじければ、淑景舍參り給ふ事かたし。内わたりには、五節臨時の祭などうちつゞき、今めかしければ、それにつけても、昔わすれぬ、さべき君達など參りつゝ、女房達ども物語しつゝ、五節の所々の有樣など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひを捨て難く覺えて、二三人づゝ、つれてぞ常に參る。宮はこの月にあたらせ給ふ。御心地も惱ましう思されて、清昭法橋つねに參りて、御願たて、戒など受けさせ給ひて、哀れなる事のみ多かり。又さべき白き御調度など、帥殿にいそがせ給ふにも、今内より持て參りなむなどあれど、こゝにも設けであるべきならねば、急がせ給ふ。女房にも衣ども賜はせて、急がせ給ふを、おまへひとりの御心には思ほし紛るゝ事なくて、はかなく御手習などにせさせ給ひつゝ、物哀れなる事どもをのみ書きつけさせ給ふ。帥殿、その儘の御精進なれば、法師に劣らぬ御有樣おこなひなるに、只今はこの事をのみ申させ給ふ。中納言殿も、里にいでさせ給はず、かくてのみ侍ひ給ふ。若宮も姫宮も、御有樣の世に美しう坐すに、何事も思ほし慰みて、我が御命どもをこそ知り給はね、宮の御有樣は、何によりてたゞにはあるべきぞと、思しとりたるにつけても、いみじきものに傳き聞えさせ給ふ。實に理かなと見えさせ給ふ。

○この殿原　伊周以下の兄弟。
○御子　媄子。
○後の御事　後産。
○持てことて　持ち來れとて。
○むけになき御氣色　只管死に入つた御樣。
○さるべきなれど　さうするのは尤もの事だが。
○さのみ言ひてやは　扇御の事ばかり言つても居られぬから
○若宮　媄子。
○かきふせ　皇后宮を臥せ。

かかる程に、十二月になりぬ。宮の御心地惱ましう思されて、今日やゝと待ち思さるに、今年は、いみじう慎ませ給ふべき御年にさへあれば、いかにゝと、日頃思し歎くべき祓、御讀經などひまなし。やんごとなきしるしある僧など召し集めて、のゝしり合ひたり。御もののけなどいとかしがましういふ程に、長保二年十二月十五日の夜になりぬ。内にも聞召してければ、いかにゝとある御使しきりなり。かかる程に御子生れ給へり。女に坐すを、口惜しけれど、さばれ無事に坐すを、まさる事なく思ひて、今は後の御事になりぬ。額を突きさわぎ、萬に御誦經とりいでさせ給ふに、御湯など參らするに、聞しめし入るゝやうにもあらねば、皆人あわて惑ふを、かしこき事にする程に、いと久しうなりぬれば、猶いとゝ覺束なし。大殿油近う持てことて、帥殿、御顏を見奉り給ふに、むけになき御氣色なり。淺ましくて、かい探り奉り給へば、やがて冷えさせ給ひにけり。あないみじと惑ふ程に、僧達さまよひ、猶御誦經頻りにて、内にも外にも、いとゞ額を突きのゝしれど、何のかひもなくてやませ給ひぬれば、帥殿は、抱き奉らせ給ひて、聲も惜しまず泣き給ふ。さるべきなれど、さのみ言ひてやはとて、若宮をば、抱き放ち聞えさせてかきふせ奉りつ。「日頃物をいと心細しと思ほしたりつる御氣色も、いかにと見奉りつれど、いとかくまでは思ひ聞えさせざりつる、命長きは憂き事にこそありけれ。」とて、「いか

○御供に參りなむ　彼の世に御供せん。
○姫宮若宮　儀子、敦康親王。
○この殿原の御をり　伊周等左遷の時。
○殘り多かる云々　今泣くを見れはを補ふ。
○あるべくもあらず　生きられさうもなく。
○つきせず　限りなく。
○取りはなち云々　我が方に移して養はん。
○過さむとてなむ　過してからと思つたが今皇后宮の方へ遣はす事になつたから
○あなかしこ　必ず
○こといみ　不吉の事を忌む事。涙を見せまいとする事。

で御供に參りなむ。」とのみ、中納言殿も帥殿もなき給ふ。姫宮若宮など、皆他方にわたし奉るにつけても、ゆゝしう心うし。この殿原の御をりに、宮の内の人の涙は盡きはてにしかど、殘り多かるものなりけりと見えたり。内にも聞召して、哀れ、いかに物を思しつらむ、實にあるべくもあらず思ほしたりし御有樣をと、哀れに悲しう思召さる。宮たちいと稚きさまにて、いかにと、つきせず思し歎かせ給ふ。女院にも、淺ましう心うき御事を思召すにかひなし。この度生れ給はむ御子は、男女わかず、取りはなち聞えさせ給はむと、かねてより思召しければ、中將の命婦とて侍ふを、奉らせたまふ。御乳母にも、里に出でて、宮を迎へ奉らむと思ふに、「正月のついたちの程をだに過さむとてなむ、あなかしこ、よく眞心につかうまつれ。」とて、御裝束の料などたまはせて、奉らせ給ひつ。宮に參りたれば、帥殿出であはせ給ひて、よろづに言ひ續けて泣き給ふ。若宮抱き出で奉りて、哀れにいみじうをかしげにて、何とも思したらぬ御けしきも、いと悲しく涙留まらねど、我は猶ことといみせまほしうて、忍ぶるもくるし。さて中將の命婦、萬にあつかひ聞えさする程も、いみじうあはれなり。上は、中宮の御方にも渡らせ給はず、のぼらせ給へとあれど、聞召しいれでなむすぐさせ給ひける。宮は、御手習をせさせ給ひて、御帳の紐に結ひつけさせ給へりけるを、今ぞ帥殿、御方々など取りて見たまふに、「この度は限りのたびぞ、その後すべきやう。」などかかせ給へり。いみじう哀れなる御手習どもの、内わたりの御覽じ

○宮　定子。
○今　定子崩御後只今。
○その後すべきやう　死後の葬法事等。
○夜もすがらの歌　後拾遺集哀傷部。涙の色は紅涙を指す。
○しる人の歌　後拾遺集哀傷部。初二句は死出の旅路。
○煙ともの歌　上二句は火葬を厭ふ意。
○この御こゝのやうにては　草葉の露とあるによれば。
○例の作法　火葬。
○靈屋　殯宮。
○所せき御よそほしさ　皇后宮といふ重重しいいかめしさ。
○その夜　御葬の夜
○それながら　御車のまゝ。

聞召すやうなどやと、思しけるにやとぞ見ゆる。

夜もすがら契りしことをわすれずば戀ひむ涙のいろぞゆかしき

また、

しる人もなきわかれ路に今はとてこゝろぼそくも急ぎたつかな

また、

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉のつゆをそれとながめよ

など、哀れなる事ども多く書かせ給へり。この御ことのやうにては、例の作法にてはあらでと、思召しけるなめりとて、帥殿急がせ給ふ。鳥部野の南の方に二丁許りさりて、靈屋といふものをつくりて、築牆などつきて、こゝに坐させむとせさせ給ふ。萬いと所せき御よそほしさに坐せば事どもも、おのづからなべてにあらず、思しおきてさせ給へり。かかる事をも、宮々の何とも思したらぬ御有樣どもも、いといみじう悲しう見奉る。宮は今年ぞ二十五にならせたまうける。その夜になりぬれば、黃金作の御絲毛の車にて坐させ給ふ。帥殿より初め、さるべき殿原、皆つかうまつらせ給へり。今宵しも、畏いみじうふりて、坐すべき屋も、皆降りうづみたり。坐し著きて、拂はせ給ひて、内の御しつらひ、あべき事どもせさせ給ふ。やがて御車を舁き下させ給ひて、それながら坐さす。今はまかで給ふとて、殿ばら、明順、道順などいふ人々も、いみじう泣き惑ふ。折しも、

○片時　暫くの間。
○誰も皆の歌　續古今集哀傷部。第四句は彼の世に行き隱るを雪に埋れ隱るに掛く。
○はか　墓と目あてとを掛く。
○御袖の氷　御袖の涙の氷れるも。
○所せく　充ち溢れる位に。
○世の常の云々　若し火葬ならば荼毘の煙に霞む野邊も眺むべきに。
○野邊の歌　後拾遺集哀傷部、みゆきは深雪と行幸とを兼ぬ
○宮　定子の御所卽ち平生昌の邸。
○坐し所　靈屋。
○かきたれふる　盛んに降る。

雪片時におはし所も見えずなりぬれば、帥殿、

誰も皆消えのこるべき身ならねどゆきかくれぬる君ぞかなしき

中納言、

白雪のふりつむ野邊は跡絶えていづくをはかと君をたづねむ

僧都君、

故里にゆきもかへらで君ともにおなじ野邊にてやがて消えなむ

など宣ふも、いみじう悲し。今宵の事繪にかかせて、人にも見せまほしう哀れなり。內には、今宵ぞかしと思召しやりて、終夜大殿ごもらず、思ほし明させ給ひて、御袖の氷も、所せく思召されて、世の常の御有樣ならば、かすまむ野邊もながめさせ給ふべきを、いかにせむとのみ思召されて、

野邊までも心ばかりは通へどもわがみゆきとも知らずやあるらむ

などぞ思しめし明しける。曉に皆人々かへり給ひて、宮には侍ふ人々待ち迎へたるけしき、いとことわりに見えたり。坐し所雪のかきたれふるに、打顧みつゝ、こなたざまにおはせし御心地ども、いと悲しく思されたり。かくて春の來る事も知られ給はず、哀れより外の事なくて過し給ふに、世の中には、馬車の音しげく、前追ひのゝしるけはひども、思ふことなげなるも羨ましく、同じ世とも思されず。御忌の程も過ぎぬれば、院には、今日明日今宮迎へ奉らむとて、三條院に出でさせたまふ。事どもはてなば、姫宮一の宮などは、內におはしなさせむと思したれど、帥殿などは、たはやすく見奉り給ふまじければ、それをぞ內にも、心苦しく思召されける。女院には、吉き日して、若宮迎へ奉らせ給ふ。帥殿中納言殿など、御送りにと思召せど、まだ忌の中なり。內にも、萬いまゝしう、慎しう思さるゝ程に、御迎へに、藤三位、さるべき女房など、院の殿上人數多して御迎へに參れば、渡らせ給ふ。これにつけても、宮の御方には、哀れ悲しき事盡きず思さるべし。率て奉り給へれば、院待ち迎へ見奉らせ給ふまゝに、生れさせ給ひて、三十餘日にならせ給へれど、いと美しうふくよかに坐して、かき抱き奉らせ給ふより、いと美しげに思ひ聞えさせ給へり。かかる事どもの思ひかけぬ御有樣を、哀れに淺ましともいふはおろかに悲し。宮には、御法事の事急がせ給ふにも、帥殿御涙ひまなし。一の宮姫宮さへ內に坐さば、いとゞ慰む方なからむことを思ひ給ふべし。かくて麗景殿の尙侍は、春宮へ參り給ふことありがたくて、式部卿の宮の源中將、忍びて通ひ給ふといふ事聞えて、宮もかきたえ給へりし程に、なくならせ給ひにしかば、宮さすがに哀れに聞召しけり。櫻の面白きをながめ給ひて、對の御方、

おなじごと匂ふぞつらきさくら花ことしの春は色かはれかし

などぞ宣ひける。かかる程に、大殿は、相方の君の家に坐すに、いみじう惱ませ給ふ。

○事ども　四十九日の法事。
○姫宮一の宮　脩子敦康。
○院　女院方。
○宮の御方　故皇后宮の御方。
○ふくよかに　肥えふとりて。
○麗景殿の尙侍　綏子。
○式部殿の宮の源中將　爲平親王の御子源賴定。
○宮　春宮三條院。
○なくならせ　綏子が亡くならせ。
○對の御方　榮家の側室、綏子の母。
○色かはれかし　墨染の色に咲けよ。
○相方の君　源重信の子。

○合はせ　トはせ。
○さらぬ人　病なき人。
○殿の上　倫子。
○中の御方　中君、雅信の女。
○さべき程　臨月。
○一條殿　中君の御住所。
○車宿　酒時車を寄せて牛馬を休ませる家の意。
○男子　彖經。
○大上　雅信の室。倫子中君の母瓊子。
○上の御兄弟　倫子
○これ　中君。
○兄弟　時通、時敍
○この大將殿の御事　道綱の北の方の中君御産の支度。
○殿上　道長、倫子。
○もろ心　同心。

只今の大事にこれを思へり。御もののけの、いみじきはさるものにて、わが御心地にも、まことに苦しう思さるれば、物狂ほしきまで、世にありとある事共をしつくさせ給ふ。中宮里に出でさせ給ひなどして、いといみじう物騒がし。女院にも、いみじう思し歎かせ給ふ。そこらの御願の驗にや、佛神の御しるしの顯はるべきにや、所かへさせ給はば、おこたらせ給ふべき由陰陽師ども申せば、さるべき所どもを合はせ問はせ給へば、尙侍の住み給ひし土御門をぞ、よき方と申せば、渡らせ給ふ。夏の事なれば、さらぬ人だにいと堪へ難き頃なれば、いかに〳〵と見奉り思す程に、いと久しう惱み給ひて、怠らせ給ひぬ。いといみじう淺ましう、思ひかけぬことに、誰も嬉しう思召す。世にめでたき御事なり。殿の上の御兄弟の中の御方に、道綱の大將こそは住み奉り給ふに、去年より、たゞにもあらずおはしければ、この頃さべき程にあたり給へりけるを、一條殿は惡しかるべし。外に渡らせ給ふべう、陰陽師の申しければ、善き方とて、中川に某阿闍梨といふ人の車宿に渡らせ給ひて、生れ給ひにたり。男子にてものし給へば、嬉しう思す程に、やがて後の御事なくてうせ給ひぬ。大上殘り少なき御よはひに、哀れに思し入りたり。殿も、哀れに心苦しき事に、思し歎かせ給ふ中にも、上の御兄弟の、男にて數多おはするも疎くのみぞおはする。これはひとつ御兄弟にて、萬をはぐゝみ聞えさせ給ふ。又この大將殿の御事をも、殿上もろ心に急がせ給ひしに、あへなく心憂き事に思し歎かせ給ふ。大將殿も、大方

○この北の方の御ゆかり　中君と倫子とは姉妹の緣によって
○この兒君　彖經。
○かの代り　中君の代り。
○御罪の御事　御産で死ぬは罪深い事。
○さかくなし　葬送等なし。
○故上　中君。
○これを御乳附　撰の君を乳母。
○豫言　約束。
○知りあつかひ　世話をなし。
○殿の上　倫子。
○八講　法華八講。法華經八卷を四日間に論議する法會。

の哀れはさるものにて、御なからひなどのいとめでたう、この北の方の御ゆかりに、世の覺えもこよなかりつるを、樣々に思ほし歎くもことわりに見えたり。大將殿は、この兒君をつと抱きて、かの代りと思しあつかふにも、やがてその御罪の御事思すにぞ、我が罪の深きなめる。かかる事どもに、いかで遁れて、ひたみちに阿彌陀佛を念じ奉らむと思ふものをと、思し惑ふ。さてとかくなし奉りて、御忌の程も哀れに思ほさる。この君の御あつかひにぞ、思し紛るゝ事ともあべかめる。御乳母、我も〳〵と望む人數多あれど、辨の君とて、賤しからぬ、故上などもやんごとなきものにて、いみじう思したりしかば、その御心の忘れ難きに、もし無事にてあらば、必ずこれを御乳附にもなど宣はせし、御豫言共いと忘れ難くて、やがてその君、萬に知りあつかひ聞ゆれば、殿の上思す樣に思されたり。

かくて今年は、女院の御四十の賀、おほやけざまにせさせ給ふべければ、春よりその御調度どもせさせ給ふに、春と思召ししかど、殿の御心地の例ならざりしかば、それにさはりて、七月にと思し定めさせ給ひけるに、院も又八講せさせ給はむとて、これを大事に、萬、思し急がせ給ふ。七月にと思召しけれど、世の中物騒がしう思されて、過させたまふに、例の九月も御石山詣なれば、萬さしあひ物騒がしく思されて、石山詣の後にや、先にやと定めがたし。若宮、日にそへて美しう坐して、這ひゐざらせ給ひて、御念誦のさまたけに坐すに、いとわりなきわざかなと、もてあつかひ聞えさせ給ふ程に、誠に美しう

○ならはせ　馴れ。
○渡らせ　帝が他所へ行かれ。
○心とまる事　浮世の執著される事よ。
○かたびら　帷子。
○法服　法衣。
○粟田口　山城國。
○關山　逢坂の關のある山。
○わざとならねど　殊更哀れを添へるのではなけれど。
○木がくれわたる　そこここ木の陰にかくれる。
○あまたたびの歌　千載集雜部。多年度度行きあひ越えた逢坂の關の清水に映る我が影もこれぞ限りと思へば悲し。
○千年の影云々　關といふ名の甲斐あつて女院の千年の御姿を止め給へかし。
○滅罪生善　後生菩提。
○護摩　火中に物を投げて法を修し一切の惡を燒滅する事。

いみじと思ひ聞えさせ給ひて、内に牽て奉らせ給へれば、内も、いと美しう哀れに思ひ聞えさせ給ひて、抱き奉らせ給ひつゝ、歩かせ給ふに、ならはせ給ひて、渡らせ給へば、慕ひ聞えさせ給ひて、泣かせ給ふ程も、いと美しう思へ聞えさせ給へり。院の、「今さらに、かかる人をあづけさせ給ひて、心とまる事。」と申させ給へば、「さて惡しうやはべる。つれづれに思召すに、かく紛れはべれば。」と申させ給ふまゝに、御涙の浮ばせ給ふを、院も、いと哀れに見奉らせ給ふ。かくてまかでさせ給ひて、九月は、石山詣とて、女房達あまた急ぎのゝしる。院の御前は、佛の御帳のかたびら、石山の僧に法服かづけものなど、急がせ給ふものから、怪しう心細うのみ思さるゝ事多かり。その御氣色を見奉りて、候ふ人々も、うたてゆゝしきまでに思ひ歎くべし。京出でさせ給ひて、粟田口關山の程、わざとならねど、木がくれわたる鹿の聲など、物心細う聞ゆ。よろづ哀れに思召されて、

あまたたびゆきあふ坂の關水に今はかぎりのかげぞかなしき

と宣はすれば、御車にさぶらふ宣旨の君、

年を經て行きあふ坂のしるしありて千年の影をせきもとめなむ

とぞ申し給ふ。さて參り著かせ給ひて、御堂に參らせ給ふより、萬哀れに悲しう思召されて、年頃參り馴れつる御前に、これは限りの度ぞかしと思されて、いみじう悲しう思召さる。例のやうに御祈り修法などにはあらで、滅罪生善の爲にとて、護摩をぞ行はせ給ふ。

○參りはてのたび　參詣の最後の度。
○宮仕へ　參詣の意
○僧供養　僧侶に供養する事。
○封　封戸。
○萬燈會　佛前に萬燈を點じて供養する法會。
○めでたう云々　巧みに讃歎した。
○殿　道長。
○八月十五夜云々　屏風の繪。
○あまの原の歌　此の宿は大空に近くないが其の内に男が通ひ住むと共に秋夜の月影もさし入りて澄む。
○神山の歌　上二句は序。神樂は神事にする樂故神山といひもてなす所は神樂の拍子で本方と末方。

萬に哀れなるたびの御祈りをせさせ給へば、御寺の僧どもも、あるまじき事に、いかに覺えさせ給ふにかと、怪しう怖ぢ申せど、「などてか、これこそ參りはてのたび、命の限りと思ひ志したる宮仕への限りなり。」とて、綾織物の御帳の帷子、白銀の鉢ども、僧どもに、別當よりはじめて、數を盡して、法服ども配らせ給ふ。同じく僧供養せさせ給ひて、御寺の封など加へさせ給ひて、御誦經など、心ことにせさせ給へり。又萬燈會などせさせ給ひて、罷出させ給ふとても、いみじう泣かせ給ふ。侍ふ人々も、いと悲しう見奉る。御寺の僧ども、御萬歳を祈り奉る。出でさせ給ひて、程なく御八講始めさせ給ふ。すべて年頃の御八講には、勝れたる程推し量るべし。講師たち、この世後の世の御事、めでたう仕う奉る。萬を思し急がせ給ふ、御儀式有樣、聞えさすればおろかなり。ゆゝしきまで、殿も、その氣色を見奉らせ給ひて、よろづの山々寺々の御祈りせさせ給ふ。かくて十月に御賀あり、土御門殿にてせさせ給ふ。行幸などあり。いといみじうめでたし。御屏風の歌ども、上手どもつかうまつれる多かれど、同じすぢの事なれば書かず。八月十五夜に、男女物語して、妻戸のもとに居たるに、辨の資忠、

あまの原やどし近くは見えねどもすみかよはせる秋の夜の月

神樂したる所に、兼澄、

神山にとる榊葉のもとすゑに羣れ居ていのる君がよろづ代

○家の子　道長一家の子弟。
○高松殿の御腹のいは君　明子の子頼宗
○納蘇利　高麗樂壹越調二人で舞ふ。
○殿の上の御腹のたづ君　倫子の子頼通
○陵王　蘭陵王。北齊の蘭陵王入陳の曲
○殿　土御門の御殿
○蘇枋　赤色。
○さいで　絹や布の裁ち端。
○口もきかねば　其の面白さ話されねば
○あゆはり　幄舍。
○涙どゞめず　感涙を流して。
○内へまゐらせ　女院内裏へ入御。

などぞありし。舞人家の子の君達なり。事どもやう〳〵はつる程に、殿の君達二所は、童にて舞ひ給ひ、高松殿の御腹のいは君は、納蘇利舞ひ給ひ、殿の上の御腹のたづ君は、陵王舞ひ給ふ。殿の有樣、目もはるかに面白し。山の紅葉數をつくし、中島の松にかゝれる蔦の色を見れば、紅、蘇枋の濃き薄き、青う黄なるなど、樣々の色のきらめきたる、さいでなどを、作りたるやうに見ゆるぞ世にめでたき。池の上に、同じ色々樣々の錦映りて、水のけざやかに見えて、いみじうめでたきに、色々の錦の中よりたち出でたる船の樂聞くに、すゞろさむく面白し。すべて口もきかねば、得書きもつゞけず。萬の事しつくさせ給へり。中宮西の對に坐して、院は寢殿に坐せば、上も東の南面に坐す。殿の上は、東の對に坐して、上達部などは、寢殿につき給へり。諸大夫殿上人などは、あげばりに著きたり。院の女房、寢殿の西南の渡殿に侍ふ。御簾の際など、いみじうめでたし。事どもはてて行幸かへらせ給ふ。御贈物、上達部の祿、殿上人のかづけ物など、皆しつくさせ給へり。神無月の日もはかなく暮れぬれば、皆事どもはてて、院は三條院に、又の日ぞ歸らせ給ふ。さきゞ〳〵の御賀などはいかゞありけむ、これはいとめでたし。入道殿の六十の賀、院の后の宮と聞えさせし時、せさせ給ひしも、いとかくはあらざりきとぞ思されける。この君達の御美しさを、誰も〳〵、涙とゞめず見奉る人々多かり。

霜月には、五節をばさるものにて、神事ども繁かべければ、やがてこの月に、内へまゐらせ給ふ。上いみじう嬉しと思されて、いつしかと渡らせ給へり。若宮は、いみじう美しう坐せば、ことゞ〳〵なく、これをもてあそばせ給へば、戯れ聞えさせ給ふ。御物語のついでに、「あやしく御心細く覺え侍れば、いかなるべきにかとのみ思ひ給ふる。今は命も惜しうも覺え侍らねども、御有樣の今少し床しう覺えさせ給ふこそ、飽かぬことに侍れ。」など聞えさせ給ひて、いみじう泣かせ給へば、上もせきあへ難く思されて、「さやうにも坐さば、世にはいかでか片時も侍らむとなむ思う給ふる。圓融院は、見奉りますなど侍りし中にも、まだ稚う侍りし程なりしかばこそ、かくて今までも侍れ、御前の御有樣を、しばしも見奉らでは。」と、ゆゝしう泣かせ給へば、「猶只今の事にはよも侍らじ、怪しう例ならず心細う侍るなり。」とばかり聞えさせ給ひて、若宮をもてあそばせ聞えさせ給ふ。上は御心地にいと物歎かしう思召さるれば、やがて中宮の御方に渡らせ給へれば、いらせ給ふより、心殊に物忘れせらるゝ御有樣を、かひありて思ほし召されて、心のどかに御物語などせさせ給ひて、「院の御方に參りたりければ、いと心細けに宣はせつるこそ、いと物思はしくなり侍りぬれ。」など、いと物哀れに宣はすれば、萬恥かしう愼しう思さるれど、院には殿の御前の、この宮の御事を昔より心ことに聞えつけ奉らせ給へれば、實にいかなればかと、心騷ぎして思さるべし。哀れなる事をもをかしき事をも、萬に聞えおかせ給ひて、「暮には疾くのぼらせ給へ、あすあさて物忌にはべり。御方には得參るまじ。」とて渡らせ給ひ

○ここゞ〳〵なく　他事なく。
○御有樣の云々　帝の榮ゆる御有樣を今少し見奉り度此の僥別れるのが不滿なり
○さやうにも云々　死別ともならば。
○見奉ります　見奉り申す。
○かくて今までも侍れ　父に別れても朕は今迄生きたれども
○いらせ給ふより　入らせ給ふや否や。
○院には云々　女院は父道長の事につけて此の中宮彰子の事を。
○いかなればか　女院は何故心細き事を思すか。
○御方　中宮の御方

○この程　帝と中宮との御物語の有樣。
○待りなむ　我も退出せむ。
○しぶ〳〵　いやいやながら。
○ねせさせ　發熱され。
○わが御心地　女院の御心地。
○思ししめり　思ひ沈み。
○くすし　醫師。
○すはく　婦人の腰の痛む病。
○まさるやう云々　効能がありさうだ。
○しるなどあえ　膿などが流れ出で。

ぬ。この程を見奉るに、忍ましうめでたき御なからひなり。つごもりになりて、院は出でさせ給ふ。上、常よりもいみじう惜しみ聞えさせ給ひて、夜更くるまで坐せば、「はや渡らせ給ひね、夜ふけ侍りぬ、いで侍りなむ。」と聞えさせ給へば、いとしぶ〳〵にて歸らせ給ひぬれば、出でさせ給ひぬ。

霜月になりぬれば、神事などしげき頃にて、世の中もいと騷がしうて過ぎもてゆく。十二月にもなりぬれば、公私わかぬ世の急ぎにて、所わかずいとなみたり。かかる程に、女院もののねせさせ給ひて、惱ましう思召したり。殿御心を惑はして思召し惑はせ給ふ。はかなく思召ししに、日ごろになりぬれば、わが御心地に、いかなればにかと心細う思さる。内にも、例ならぬ樣に思ほし宣はせしものを、いかゞ坐さむと思ほし召すより、やがておもものなども、御覽じいれさせ給はず、萬に思ししめりたるを、御乳母だちも、いかがと見奉る。中宮若き御心なれど、この御事を樣々にいみじう思さる。殿、「今はくすしに見せさせ給ふべきなり、いと怖ろしき事なり。」と、度々聞えさせ給へど、「くすしにみすばかりにては、生きてかひあるべきにあらず。」と、心強く宣はせて、見せさせ給はず。御有樣、くすしに語りきかすれば、すばくに坐すなりとて、その方の御療治どもを仕うまつれば、まさるやうにも坐さず。日頃になりぬればにや、しるなどあえさせ給へれば、誰も心のどかに思ほし見奉るに、唯御物怪どもの、いと〳〵おどろ〳〵しきに、御修法數を

○あかれて　別れて
○日ついで　日柄。
○かりうつし　寄人に憑霊をのりうつらし。
○すみの神　角振神
○その氣色云々　其の霊の怒る樣子が甚だ意地わるさうだ。
○恐ろしき山には　猛獣住むと補つて恐ろしい上に恐ろしい意味の諺か。
○御占にもあふ所　御占形に指せる所。
○この若宮　嬢子。
○まほらせ　見詰め
○御蔭に隱れ　女院の御惠みの下に。
○やすきそらなく　安き心なく。
○待ち　女院が待ち

つくし、大方世にある限りの事どもを、内がた殿がた院がたなど、三方にあかれて、萬に思ほし急ぎたり。内には、いかに〳〵と、日々に見奉らまほしう思ほしたれど、日ついでなどえらせたまひて、日頃は唯すぎに過ぎもていぬ。御もののけを四五人にかりうつしつつ、各僧どものゝしりあへるに、この三條院のすみの神の祟りといふ事さへ出で來て、その氣色いみじうあやにくげなり。恐ろしき山にはといふたとへのやうに、いとゞしきに、かかる事さへあれば、所をかへさせ給ふべきなめり、といふ事出できて、御占にもあふ所は、惟仲の帥の中納言の知る所に、渡らせ給ふべきに御定めあり。やがてその日行幸あるべし。かく苦しげに坐すに、この若宮は、いみじう騷がしうあわてさせ給ふも、御懷を離れさせ給はず、むつれ奉らせ給ふを、御乳母に、これ抱き奉れとも宣はず。つく〴〵とまほらせられ奉らせ給ふ程の御志、いみじう哀れに、けぢかき程に侍ふ僧なども、涙を流しつゝ侍ふ。年頃哀れにめでたう人々をはぐゝませ給へる御蔭に、隱れ仕うまつりたる人々、いかに坐さむずらむとより外の事なし。誰も大願を立てて、涙を拭ひて侍ふ。

かかる程に、つごもりも近くなりぬれば、世の中物騷がしいとなむ頃なるに、かうおこたらせ給はぬを、やすきそらなく、公私御歎きなり。かくて行幸あり。今日と聞召して、いつしかと待ち聞えさせ給ふ程に、午の時ばかりにぞ行幸ある。御輿よりおりさせ給ふほども、心もとなく思召されて、いつしかと見奉らせ給へば、さばかり苦しげに坐す

○あらぬ人　別人。詮子の御樣子。
○御涙のいでさせ給はぬ云々　泣けども涙の出でざるはこれは忌々しき事卽ち死相である。
○さきこゝに　樣子もかはりて。
○さかしう　しっかりと。
○しほとけげ　しほたれるやう。
○かしこ　移るべき御所。
○たゞ一所　唯御一人。
○上　一條帝。
○夜さりの御渡り　夜分の行幸では。
○この御有樣　女院の御有樣。
○いふかひなき人　卑しき者。
○かかるやうあらじ　見捨てて歸られじに、若宮御懷も離れず、出で入りせさせ給ふを、片時の程も、心苦しく見奉らせ給ひて、中將の乳母を召し出でて、「これ抱き聞えよ。」と宣はすれば、いなとて御懷に入らせたまひぬ。淺ましうあらぬ人にならせ給へる御かたち、御涙とまらず思ほし召して、今まで見奉らず侍りける事の、いみじき事とて、せむ方なく、いみじう悲しう思召したり。院も、ともかくも申させ給ふ事なくて、たゞつくゞくと見奉らせ給ひて、うち泣かせ給へど、御涙のいでさせ給はぬも、これはゆゝしきことにこそあなれと、見奉らせ給ふにも、いとゞせきもあへず泣かせ給ふ。年頃の行幸の作法に、さまことに、ゆゝしうのみ坐す。御有樣聞えさせむ方なし。そこらの女房涙に溺れたり。殿も、御心地はさかしう思召せど、萬に悲しき事を、御直衣の袖もしほとけげにて、出でいりあつかひ聞えさせ給ふ。やがて今宵外へ渡らせ給ふべければ、かしこの御裝束の事など、萬に宣はせても、たゞ一所うち泣きつゝ出で入りせさせ給ふ。行幸の御供の上達部、殿上人、そこらの人々、いみじう悲しう、いかに坐さむとのみ歎き給ふ。上は、更に御聲も惜しませ給はず、兒共などのやうに、さくりもよゝと泣かせ給ふ。日もはかなく暮れぬれば、殿、「はや歸らせ給ひなむ、夜さりの御渡り、夜更け侍りなむ。」と、いたうそゝのかし聞え給へば、御門、「哀れに罪深く、心憂きものは、かかる身にもありけるかな。この御有樣を見捨て奉ることのいみじき事、いふかひなき人だに、かかる折、かかるやうはあらじかし。心うかりける身なりや。猶わたらせ給はむ所まで。」と思し宣はすれど、さるべき事にも侍はずとて、猶疾く歸らせ給ふべく奏せさせ給へば、院、物は宣はせねど、飽かで歸らせ給はむ事を、悲しう思されたり。御手を執へ奉らせ給ひて、御顏のもとに、我が御顏をよせて、泣かせ給ふ御有樣、そこらの內外の人どよみたり。「あなゆゝし、いかでかからじ、物騷がし。」と、おとなしき上達部などは、制し給ひながら、又うちひそみ給ふ。かくて、「この若宮は、いづこへか。」と宣はすれば、中將の命婦、「それは、この宮達の坐す所へとなむ、殿は申させ給ふ。」と奏すれば、「實に、さてぞ善からむ。」など宣はする程に、夜に入りぬれば、御輿よせて度々奏すれば、我にもあらで出でさせ給ふ程の御心地、實に思ひやり聞えさすべし。限りなき御位なれど、親子の中の物悲しさを、思ほし知らぬやうにあらばこそあらめ、萬ことわりにいみじき程の御有樣ぞ悲しきや。御輿に乘らせ給ふ程の御氣色、ゆゝしきまで思しいらせ給へり。御袖を御顏に押しあてて坐す程、たゞつくゞくとながれ出でさせ給ふ。殿、この御送り仕うまつらせ給ふとて、御乳母たち女房たち、御前に候べき由仰せ置かせ給ひて、參らせたまふそらもなく、今のほどいかにくと、後めたう覺束なう思召す。上は、やがてその儘に物も宣はせで、夜の御座に入らせ給ひて、すべて何事も覺えさせ給はで、御使のみ頻りなり。さて殿の歸らせ給ひて後、若宮の御乳母、さるべき人々して、姫宮の坐す所に送り聞えさせ給ふ。院の渡らせ給ふをば、御車舁きおろして、御殿ごもりたるおまし

○どよみたり　聲をあげて泣き騷いだ。
○いかでかからじ　泣きなどするな。
○うちひそみ　顏をしかめて泣顏をす。
○この宮達　脩子、敦康。
○限りなき御位　帝王の位。
○親子の中の云々　親子間の慈愛を知らぬならば兎に角人情は同じなれば御母后の御惱みを悲しむも至極道理で。
○つくゞくとながれ　ぢつと涙が流れ。
○御前　女院。
○夜の御座　夜の御殿。
○姫宮　脩子。
○御車舁きおろし　御車から牛を放ち近く舁き寄せ。
○御殿ごもり云々　女院の御寢なれる御坐のまゝ道長や爲尊親王が載せ申し。

○内の御有様に云々　主上の次に慈しみ給へる女院の御芳志
○あるにもあらぬ御心地　滑える許りの御心。
○程　時節。
○暦の軸云々　昔は暦を巻物に作れる故年の日数の殘り少なくなつた事。
○坐す程の儀式　御葬送の儀式。
○あひそひたる程は云々　添へ加はつたのでおろそかならうか厳重であつた。

ながら、殿の御前、彈正宮など、かき載せ奉らせたまひて、やがて殿、御車には侍はせたまふ。かしこにても、御車かきおろして、同じ様にておろし奉らせ給ふ。帥宮、彈正宮など、夜晝あつかひ聞えさせ給へば、同じくやがて皆仕う奉らせ給へり。この宮たちは、御甥ばかりに坐せば、内の御有様にさしつぎて、あつかひ聞えさせ給へる御志の程を、思ほし知りて、仕うまつらせ給ひて、皆御涙に溺れさせ給へり。所などかへさせ給へれば、さりともなど、頼もしう思召す程に、渡らせ給ひて、二三日ありて、遂に空しくならせ給ひぬ。殿の御心地、譬へ聞えさせむ方なし。内にも聞召して、日頃も、あるにもあらぬ御心地を、すべていとゞ思しいらせ給ひて、つゆ御湯をだに聞召さで、いといみじうて坐す。ことわりの御有様なれば、聞えさせむ方なし。長保三年閏十二月二十二日の事なり。程などもいとゞ寒く、雪などもいと高く降りて、大方の月日さへに、殘りすくなく、暦の軸あらはになりたるも、哀れをましたる程の御事なり。かくて三日ばかりありて、鳥部野にぞ御葬送あるべき。雪のいみじきに、殿よりはじめ奉り、萬の上達部殿上人、いづれかは殘り仕うまつらはぬはあらむ。坐す程の儀式有様、言ふも愚かなり。殿の、御心に入れ、あつかひ聞えさせ給ふに、内の御志の限りなきあひそひたる程は、愚かなるべき事かは。さて夜もすがら、殿の萬にあつかひ聞えさせ給ひて、曉になれば、皆歸らせ給ひぬ。雪のいみじきに、常のみゆきにはかくやはありし、と思ひ出で聞えさするにも、袖の氷ひまなし。曉には、殿御骨かけさせ給ひて、木幡へわたらせ給ひて、日さし出でて歸らせ給へり。

○御骨かけさせ　御遺骨を奉じ。
○御衣の色かはりぬ　喪服を著した。
○事よろしき折　大方の時。
○御光　女院の御惠
○誰がための歌　拾遺集雜春。女院の御齡に准へて千年の松を引き覩ふべきに崩れ給へば誰が爲に引くべきか其の甲斐もない意。
○よみ給はずなりぬ　返歌すべき人もない。
○慈德寺　女院の御願寺。
○とまる　中止す。
○近衛司　祭の使。
○宣耀殿の女御　娍子。
○一の宮　小一條院

さて程もなく御衣の色かはりぬ。内にも、哀れに過させ給ふ。天下諒闇になりぬ。はかなくて年も暮れぬ。正月のついたち、ゆゝしなどいふも、事よろしき折の事にこそありけれ。いづくも、この御光にあたりつる限りは、皆くれ惑ひたり。御念佛は更なり。年頃の不斷の御讀經、すべてさるべき御事、御はてまでもおきてさせ給ふ。内には、やがて御手づから御經かかせ給ふ。正月七日子日にあたりたれど、船岡もかひなき春の氣色なるに、左衛門督公任の君、院の臺盤所にとぞありし。

誰がために松をもひかむ鶯のはつ音かひなき今日にもあるかな

とあれど、人々これを御覽じて、よみ給はずなりぬ。御忌の程も、いみじう哀れなる事ども多かり。かくて御法事の程にもなりぬれば、花山の慈德寺にてせさせ給ふ。二月十餘日にぞ御法事ありける。その程の事ども思ひやるべし。内の手づから書かせ給へる御經などそへて、供養せさせ給ふ。院源僧都、講師仕う奉りたる程、思ひやるべし。斯樣に哀れにて御忌の程過ぎぬ。その年の祭、いと物のはえなき事ども多かれど、例の公事なれば、とまるべきにもあらねば、近衛司などこそ見所もあれ、それも立たずなどして、いとさうざうしげなり。かくて五六月ばかりになりぬるに、宣耀殿の女御、一の宮を見奉らせ給は

で、いと久しうなりぬるに、その後限り〳〵と見ゆるまで、いみじう煩はせ給へば、東宮御心地を惑はして思したり。いみじう坐しつれど、昨日今日おこたらせ給へり。彈正宮うちはへ御夜歩行の怖ろしさを、世の人安からずあいなきことなりと、さかしらに聞えさせ給ひつるに、今年は、大方いと騒がしう、いつぞやの心地して、道大路のいみじきものどもを見過しつゝ、淺ましかりつる御夜歩行のしるしにや、いみじう煩はせ給ひて、うせ給ひぬ。

このほどは、新中納言、和泉式部などに思しつきて、淺ましきまで坐しつる御心ばへを、憂きものに思しつれど、上は、哀れに思し歎きて、四十九日の程、尼になり給ひぬ。もとよりいみじう道心おはして、二三千部の經をよみて過させ給へれば、世のはかなさも思し知られて、いとゞしき御行なり。かくて彈正宮うせさせ給ひぬといふ事、冷泉院ほの聞召して、「世にうせじ、よう索めばありなむものを。」とぞ宣はせける。哀れなる親の御有様になむ。東宮も、いみじう思し歎く。帥宮も、いみじう哀れに、口惜しき事に思し歎くべし。さるは今年ぞ、二十五にならせ給ひける。花山院ぞ、中にもとりわき、何事もあつかひ聞えさせ給ひける。哀れなる世に、いかゞしけむ、八月二十餘日に聞けば、淑景舍の女御うせたまひぬとのゝしる。「あないみじ、こはいかなる事にか、さる事も世にあらじ。日頃惱みたまふとも聞えざりつるものを。」など、覺束ながる人々多かるに、「まことなりけ

○限り〳〵　病氣危篤。
○うちはへ　際限もなく。
○さかしらに　かしこだてして。
○騒がしう　疫病流行の事。
○いつぞや　長德元年の事、見はてぬ夢の卷にあり。
○いみじきもの　死骸を指す。
○新中納言　不詳。
○和泉式部　大江雅致の女。
○上　一條伊尹の女九の御方。
○彈正宮　爲尊親王
○世にうせじ　死に失せしにあらじ。
○花山院　爲尊の兄
○淑景舍の女御　原子。
○宣耀殿云々　娍子の大病は輕快となり
○かく思ひかけぬ御有様　原子の急死。
○たゞにもあらずし奉らせ　鴆毒等をすすめ申し。
○御みづから　娍子
○少納言の乳母　娍子の御乳母か。
○さてもかくても　そは何れにしても。
○中納言殿　隆家。
○事ども叶ふ折もあらは云々　卽位して萬事意の儘にならば女御等にもなし。
○その中にも　原子の萬勝れた中でも。
○御對面云々　原子の兄弟伊周、隆家の左遷が原因である。
○なづらひ　比較。
劣らぬ程匹。

り。御鼻口より血あえさせ給ひて、唯俄にうせ給へるなり。」といふ。淺ましいみじとは世の常なり。世の中はかなしといふ中にも、珍らかに心憂き御有様なり。これを世の人も、くちやすからぬものなりければ、宣耀殿いみじかりつる御心地はおこたり給ひて、かく思ひかけぬ御有様をば、「宣耀殿、たゞにもあらずし奉らせ給へりければ、かくならせ給ひぬる。」とのみ、聞きにくきまで申せど、御みづからは、とかく思しよらせ給ふべきにもあらず。「少納言の乳母などや、いかゞありけむ。」など人々いふめれど、とてもかくても、いと若き御身の、かくなり給ひぬる事を、帥殿も、中納言殿も、よにいみじき事に思し歎くもおろかなり。春宮にも、わざと深き御志にもあらざりつれど、いつしか事ども叶ふ折もあらば、さやうにもあらせ奉り、物花やかにあらせ奉らむと思召しつるを、哀れに口惜しう戀しくぞ思ひ聞え給ひける。その中にも、「御衣のかさなり袖口などは、人見るごとに思ひ出でらるゝものを。」など、悲しう思し宣はせけり。御對面などこそは、たはやすからざりつれど、御志は、宣耀殿の御なずらひには、思ほされけるものをと、返す〳〵哀れに口惜しくこそとぞ。

○たづ君　頼通。
○ひきいれ　加冠役
○閑院内大臣　公季
○春日の使　春日神社へ祭日の前日に立つ勅使。
○殿の始めたる云々　道長が子息を祭の使に立たせるのは最初の事と思はれて。
○ふくらか　肥え太つた様。
○春日の御供　春日祭使の御供。
○おぼえ　名望。
○わか菜の歌　後拾遺集雑部。下句は心配する意。
○四條大納言　公任
○身をつみての歌　後拾遺集雑部。初句我が身に引比べての意。

はつ花

殿の若君たづ君、十二許りになり給ふ。今年の冬、枇杷殿にて御冠せさせ給ふ。ひきいれには、閑院内大臣ぞ坐しける。すべて残る人なく参りこみ給へりけり。御贈物引出物など思ひやるべし。さてその年暮れぬれば、又の年になりぬ。司召に少將にならせ給ひて、二月に春日の使に立ち給ふ。殿の始めたるうひごとに思されて、いといみじう急ぎたたせ給ふも理なり。萬にかひ〳〵しき御有様なり。何となくふくらかにて、美しうおはすれば、限りなきものにぞ見奉らせ給ふ。春日の御供には、世に少しおぼえある、四位五位六位、残りなく参らせ給ふ。殿は、内の御前にて見奉らせ給ひ、又道の程御車にても見奉らせ給ふ程、哀れに見えさせ給ふ。たたせ給ひぬる又の日、雪のいみじう降りたれば、殿の御前、

わか菜摘むかすがの野邊に雪ふれば心づかひをけふさへぞやる

御かへし、四條大納言、

身をつみておぼつかなきはゆきやまぬ春日の野邊の若菜なりけり

かの大納言も御子も、御供に参り給ひければなるべし。これを聞召して、花山院、

○我すらの歌　たづに頼通の幼名を含む
○さうけ　禦應。
○舎人　近侍の雑掌
○思ひ傳き云々　頼通を大切にし早くも長官と仰ぐも役向の方につけてをかし。
○一の宮　敦康親王
○この御方がちに　中宮にのみ渡りて。
○女一の宮二の宮　脩子媓子。
○故關白殿　道隆。
○故宮　定子。
○母代　母の代りに萬事後見する人。
○見奉り　御匣殿を
○峯の朝霧　古今集雑部讀人不知「鴈のくる嶺の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ。」
○宮達　敦康、脩子、媓子。
○さべき云々　さういふ時には帝も伊周も密語せしならん。

我すらにおもひこそやれ春日野の雪間をいかでたづのわくらむ

など聞えさせ給ふ。又の日は、いつしかと、殿の御まうけいと心ことなり。舎人どもの、思ひ傳き、いつしかと、取りえ奉りたる様に見ゆるも、その方につけてをかしう見ゆ。内には、宮々の數多坐すを、御門なむ、一の宮をば中宮の御子と聞えつけさせ給ひて、この御方がちに、もてなし聞えさせ給ふ。女一の宮、二の宮などのいと美しう坐すを、疎かならず見奉らせ給ひつゝ、昔を哀れに思ひ出で聞えさせ給はぬ時なし。故關白殿の四の御方は御匣殿とこそは聞ゆるを、この一の宮の御事を、故宮、萬に聞えつけさせまたひしかば、唯この宮の御母代に、萬後見聞えさせ給ふとて、上なども、しげう渡らせ給ふに、自らほの見奉りなどせさせ給ひける程に、その程をいかゞありけむ、睦しげに坐すなどいふ事、自ら漏れ聞えぬ。中宮は、萬まだ若う坐して、何事も思し入れぬ御有様なれど、かの御方には、この御事をいと煩はしう慎しげに思ひ沉むべかめり。帥殿も中納言殿も、哀れなりける御宿世かなと思して、人知れぬ御祈りなどせさせ給ふべし。上も、いとゞ哀れに思召したるべし。御匣殿も、よろづ峯の朝霧に、又かく思ほし歎かるべし。帥殿も中納言殿も、宮の、内に坐せば思ひの儘にえ参り給はず、夜忍びて参り給ひては、人にも知られ給はで、二三日などぞ、やがて侍ひたまひける。宮達の御有様の様々美しう坐すに、萬を思し慰めつゝぞ過し給ひける。このほどに、上渡らせ給ひたりなど、さべ

○大殿　道長。
○まつはし　附添ひ
○この君　隆家。
○尚侍の殿　妍子。
○御やうに　同じく
○などてか　なからむを補ふ。
○見え　妍子を姿らせ給ふ樣子も見え。
○殿の上　倫子。
○藏人の辨　源時通
○殿の御前　道長。
○めをこそ云々　目が見えぬ。考がない。
○あり渡る　月日を過す。
○世と共に　常々。
○上　一條帝。

きには、忍びて御物語など宣はせ奏し給ふべし。中納言は、大殿に常に參り給ひて、又見え給はぬをりは、度々呼びまつはし聞え給ひつゝ、にくからぬ者に思ひ聞えさせ給ひて、この君は、憎き心やはある。帥殿のかしこさの餘りの心にひかるゝにこそなど思ほし召しける。宣耀殿、春宮には、數多の宮たち、率て侍はせたまふにも、おほろけならぬ御宿世にやと見えたり。大殿の尚侍の殿必ず參らせ給ふべき樣に、世の人申すめり。されど、殿の御心おきての、さきぐの殿ばらの御やうに、人をなきになし給ふ御心のなければ、その折もなどてかとて、見えさせ給はず。中宮には、この頃、殿の上の御兄弟にて、藏人の辨といひし人の、女いと數多ありけるを、中の君、帥殿の北の方の御兄弟の、則理の君を壻に取り給へりしかども、いと思はずにて絶えにしかば、この頃、中宮に參り給へり。容貌有樣いと美しう誠にをかしげにものし給へば、殿の御前、御目とまりければ、物など宣はせける程に、御志ありて思されければ、實しう思し物せさせ給ひけるを、殿の上は、こと人ならねばと思しゆるしてなむ、過させ給ひける。見る人ごとに、則理の君は、淺ましう、めをこそ見ざりけれ、これをおろかに思ひけるよなどぞいひ思ひける。大納言の君とぞつけさせ給へりける。

かくてあり渡る程に、かの御匣殿はたゞにもあらずおはして、御心地なども惱ましう、世と共に思されければ、その御氣色を、上も、いみじう哀れに思されければ、御心の内に

○かくと聞えありて御妊娠の噂がたつたので。
○たゞならむよりは　普通よりは。
○宮々　一の宮女宮達。
○かいひそめ　重りかに沈める樣。
○たゞにもおはせでさへ　懷妊ながらにさへ失せ給へる事。
○うち〳〵　一族。
○よそのききみゝ　外聞。
○この殿　伊周。

も、いかに〳〵と思召しけるほどに、四五月ばかりになりぬれば、かくと聞えありて、奏せさせたまふ事こそなけれど、煩はしうてまかで出でさせ給ふ。上も、いみじう哀れと思し宣はせけるほどに、いたう惱ましげにおはするを、いかに〳〵と思召されけり。帥殿などは、たゞならむよりは、御子生れ給はむも、悪しかるべきことかはと思ほして、萬に祈らせ給ふ。里にて、宮々の御覺束なさ戀しさなどを思し亂るゝに、御心地も誠に苦しうせさせ給ひて、起臥惱ませ給ふ。帥殿、吾が御許に迎へ奉らせ給ひて、何事も萬につかうまつり給ひけれど、俄に御心地おもりて、五六日ありてうせ給ひぬ。御年十七八ばかりにや坐しつらむ。御かたち心ざま、いみじう美しうをかしげに坐して、故宮の御有樣にもおとらず、かいひそめをかしう坐しつるを、又かうたゞにもおはせでさへと、樣々、帥殿も中納言殿も、思し歎く事もおろかなりや、哀れに心うし。うち〳〵の悲しさよりも、よそのききみゝを、恥かしう憂き事に思ほし忍ぶれど、かく本意なき事に、この殿の御有樣を、まづ人は聞えさすめり。内には、人知れずうちしをれさせ給ひて、御志ありて思召されけりと見るにつけても、いと口惜しう心うし。はかなく後々の御事どもなどして、御忌などはててぞ、帥殿も中納言殿も、内に參り給ひつゝ、宮達の御有樣を、盡きせず思し見奉らせ給ふ。御匣殿のおはせぬことを、一の宮とりわき忍び戀ひ聞えさせ給ふもおろかならず、哀れに悲しうのみなむ。

○上の御腹の弟君　倫子の御腹の弟君、教通、能信。
○高松殿の御腹のいは君　明子の御腹の頼宗。
○兵衛佐　兵衛府の次官。
○檜皮葺　檜の皮で葺いた屋根。
○ゆすりて　揺りて騒ぎ。
○侍　親王大臣以下の家人。怪勤。
○馬副　馬に附き添ふ従者で中間位の者
○いづみ　和泉式部
○金漆　漆子地漆。扨かく立派に作られた物よ
○大童子　僧家で給仕に使ふ童子で上大中等の別がある。
○年ねび　年たけ。
○召次　院廳で雑事をする下官。
○もとの俗ども　俗體のまゝで。
○ひろめかし　閃かし。
○たゞの年　例年。

かくいふ程に、寛弘二年になりぬ。司召などいひて、殿の君達、上の御腹の弟君、高松殿の御腹のいは君など、皆御冠し給ひて、ほど〳〵の御官ども、少將兵衛佐など聞ゆるに、春日の使の少將は中將になり給ひて、今年の祭の使せさせ給ふ。殿は、一條に棧敷の屋、長々と造らせ給ひて、檜皮葺高欄など、いみじうをかしうせさせ給ひて、この年頃、御禊より初め、祭を、殿も、上も渡らせ給ひて、御覽ずるに、今年は使の君の御事を、世の中ゆすりて急がせ給ふ。その日になりぬれば、皆御棧敷に渡らせ給ひぬ。殿は、使の君の御出立の事、御覽じはててぞ、御棧敷へは坐す。多くの殿原、殿上人引き具して坐す。さしもあらぬだに、この使にいで立ち給ふ君だちは、これをいみじき事に、親達は急ぎ給ふわざなれば、まいて萬ことわりに見えさせ給ふ。御殿の侍、雜色、小舍人、御馬副まで、しつくさせ給ふ程、えぞまねばぬや。今年は、この使のひゞきにて、帥宮、花山院など、わざと御車したてて物を御覽じ、御棧敷の前、あまた度渡らせ給ふ。帥宮の御車のしりには、いづみを乘せさせ給へり。花山院の御車は、金漆などいふやうに塗らせ給へり。綱代の御車をすべて、えもいはず造らせ給へり。さはかうもすべかりけりと見えたり。御供に大童子の、大きやかに年ねびたる四十人、中童子二十人、召次どもは、もとの俗ども仕うまつれり。御車のしりに、殿上人引きつれて、いろ〳〵様々にて、赤き扇をひろめかしつかひて、御棧敷の前、數多度渡り歩かせ給ふ程、たゞの年ならば、かからでも

○氣色　面白き樣子
○我こそ云々　朕が見てもてはやさう。
○ゆくりか　不意。
○皆事どもなりて　儀式行列等が整つて
○めのわらはべ　女の童。少女。

○准大臣　大臣の祿を賜ひ、内大臣の下大納言の上に列す。
○猶さもありぬべくは　此の上燒けるなら。
○御嶽精進　大和金峯山に參詣するに先だつて行ふ精進。
○不用　都合惡しく

など、殿見奉らせ給ひつべけれど、使の君の御物のはえに思ほされて、上達部うちぼゝゑみ、殿の御前に猶氣色坐す院なりかしな。この男の使にたつ年、我こそ見はやさめと宣はすと聞きしもしるく、ゆくりかにも出で給へるかな。」と、皆興じ聞え給ふ。皆事どもなりて、使の君、何となう小さくふくらかに、美しうて渡り給ふ。殿の御前御涙たゞ溢れにこぼれさせ給へば、子の悲しさ知り給へる殿原、皆同じ樣に思し知るべし。世の中の宮殿原、家々のめのわらはべを、今の世の事としては、物狂ほしう幾重ともしらぬまできせたる、十二十人、二三十人押しこりて渡れば、いづくの人ぞと、必ず召しよせて、御覽じ問はせ給へば、その宮の、かの殿の、何の守の家など申すを、善きをば見興じ、又さしもなきをば笑ひなどせさせ給ふも、樣々いとをかしう、今めかしき有樣になむありける。

かかる程に、むげに、帥殿の、御位もなき定めにておはするを、いといとほしき事なりなど、殿思して、いとほしがりて、准大臣の御位にて、御封など得させ給ふ。中納言は、一年より中納言にて、兵部卿とぞ聞ゆめる。世の人いとめやすき事に喜び聞えたり。今年の十一月に、内燒けぬれば、五節もえ參るまじうなりぬ。かく内のしげう燒くるを、御門いみじきことに思し歎きて、いかで猶さもありぬべくは、疾くおりなむとのみ思し急ぎたり。寛弘三年になりぬ。今年は大殿御嶽精進せさせ給ふべき御年にて、正月より、御歩きなど心解けてもなけれど、次々の例の作法にて過ぎもてゆく。今年は不用にやなど思召さ

○三十講　法華經二十八品、無量義經普賢觀經の三十品を三十日間に講ずる儀。
○馬場屋　馬場に建てる屋舍。
○さはたゞならむよりは　然らば普通の競馬であるよりは。
○馬の心地云々　競馬を御覽じては如何
○その日になりて　當日には臨御せん。
○亂聲　笛や太鼓で奏するあやのない曲こゝは勝負亂聲。
○月毛　蒼毛の稍赤らんだ毛色。
○ひき出で奉らせ　御贈物にせられ。
○棄つれど棄てられぬわざ　一旦浮世を棄てたが猶離れられない事。
○御この宮達　花山院の御子達。
○一の御子　昭登。
○むすめ　平子。
○二の御子　清仁。
○おほろゆ　おぼろゆならず。
○さて物狂ほしき云云　狂氣じみた院であられるから子の愛情を御存知なくば兎に角然らざる故冷泉院の御子にするは差支なし必ず奏せん。
○故彈正宮　爲尊。
○親腹の御子　昭登
○女腹の御子　清仁
○物にあたらせ　喜びあわて。
○ものよかりけるまうと　幸福の客人。
○鷄合　鬪鷄。
○殊の外云々　案外愛せず。
○かたわきて　兩方に分れて。
○人の國云々　他國迄行つて强鷄を競爭的に求め騷ぐ。

れて、四五月にもなりぬ。五月には、例の三十講など、上の十五日勤め行はせ給ひて、下の十五日あまりには、競馬せさせむとて、土御門殿の馬場屋、埒などいみじうしたてさせ給ふ。行幸、行啓など思召しつれど、このごろ雨がちにて、事どもえしあふまじき樣なれば、さはたゞならむよりはとて、花山院をぞ、「忝くとも坐して、馬の心地など御覽ぜむに、いかゞ。」など申させ給へば、いといみじう物にはえある御心ざまにて、「むげにうもれたりつる心地、晴れ侍りぬべかめり。さばその日になりて。」と聞えさせたまへれば、院の坐すべき御用意どもあり。かの院の御供の僧ども、殿上人など祿とらせでは、いかでか、いと忝からむ。又御贈物には、何をがなと思しまうけて、その日になりぬれば、今日の事には、院の坐すを、めでたき事に思されて、いみじうもてはやし聞えさせ給ふ。院もいと興ありと思召したり。さて左右の亂聲などの勝負の程も、いと聞き苦しう、おどろおどろしきまであるもはしたなけなり。さてその事ども終てぬれば、院歸らせ給ふ。御贈物などある中にも、世に珍らしき月毛の御馬に、えもいはぬ御鞍など置かせても、又いみじき御車に牛そへて、ひき出で奉らせ給ふ。院、夜に入りて歸らせ給へば、殿の御方の藏人など、御送りに奉らせ給ふ程に、猶院の御有樣棄つれど、棄てられぬわざと、やんごとなく哀れに見えさせ給ふ。これをはじめて、殿いと御中心よけに坐す。院、御この宮達の忍び難く、悲しく覺えさせ給へば、中務が腹の一の御子、むすめの腹の二の御子ふた

宮を、殿に申させ給ひて、「これ冷泉院の御子の中に入れさせ給へ。」とある御消息度々あれば、殿、哀れおぼろげに思せばこそ、かくも宣はすらめ。さて物狂ほしき院にものし給はむからに、子の悲しさをしろしめすべからず、さばこそあらめ。それ苦しからぬ事なり。などかあらざらむ。」とて、「承りぬ、今さらば、事のよし奏し候ひて。」など申させ給ひつ。花山院は、冷泉院の一の御子、只今の春宮は二のみこ、故彈正宮は三の御子、今の帥宮は四の御子にぞ坐すかし。されば内に參らせ給ひて、事のよし奏せさせ給ひて、吉き日して、宣旨くださせ給ふ。親腹の御子をば五の宮、女腹の御子をば六の宮とて、各皆、なべての宮達の得給ふ程の御封ども賜はらせ給ふ。國々に御封ども分ち奉らせ給ひて、宣旨下りぬるよし、殿より院に奏せさせ給へれば、物にあたらせ給ひて、御使に何をも〳〵と、取りうづみかづけさせ給ふ。御使歸り參りたれば、殿坐いて、「ものよかりけるまうとかな、いみじう多く物を賜はりたる。」とぞ笑はせ給ひける。

かうやうなることどもありて過ぎもて行くに、月日もはかなく暮れぬるを、殿、口惜しう、御嶽精進を、今年は始めずなりぬる事と思召して、されど年だにかへりなばと思召されける。三月ばかり、花山院には、五六の宮をもてはやし聞えさせ給ふとて、鷄合せさせ給ひて見せ奉らせ給ふ。親腹の五の宮をば、いみじう愛し思し、女腹の六の宮をば、殊の外にぞ思されける。かかる程に世の中の京童部かたわきて、とり〴〵のゝしり、人の國ま

○かいひそめて云々　鬪鷄等は表だたぬのが宜しい。

○左　院の愛する昭登方で右は清仁方。

○さ　左樣に。

○ことなる云々　鬪鷄も格別の光彩もなくうまく行かない。

○女宮二所　當子、禔子。

○男宮四所　敦明、敦儀、敦平、師明。

○式部卿の宮の御むすめ　爲平の女恭子

○世の中心地おこり　疫病流行し。

で行きて、いさかひの、しりけり。かかる今めくことどもを、殿聞召して、「かいひそめて坐すこそよけれ、いでや。」と、思し聞き奉らせ給ふ程に、院の内の有樣、おきてさせ給ふ事ども、いとおどろ〳〵しういみじ。その日になりぬれば、左右の樂屋造りて、樣々の樂舞など、整へさせ給へり。殿の君達おはすべう御消息あれば、皆參り給ふ。さるべき殿原なども參り給うて、今は事どもなりぬるきはに、この鷄の、左の頻りに負け、右のみ勝つに、むげに物腹だたしう心やましう思されければ、唯むつかりにむつからせ給へば、見聞き給ふ人々も、心の中にをかしう思し見奉り給ひけり、さ萬に思しむつかりて、ことなる物のはえなくてそれにけり。いとこそをかしかりけれ。かくて内も燒けにしかば、御門は、一條院に坐し、春宮は、枇杷殿にぞ坐しける。かくて宣耀殿の女御、女宮二所、男宮四所にならせ給ひぬ。この頃の齋宮には、式部卿の宮の御むすめぞ、いと稚くて居させ給ひにしまゝに坐しける。世の中ともすればいと騷がしう、人死になどす。さるは、御門の御心も、いとうるはしく坐し、殿の御政も、惡しうも坐さねど、世の末になりぬればなめり。年毎には、世の中心地おこりて、人もなくなり、哀れなる事どものみ多かり。かくて冬にもなりぬれば、五節臨時の祭をこそ、冬の公事にすめるも、過ぎもて行きて、寛弘四年になりぬ。はかなう過ぐる月日につけても、哀れになむ。正月もついたちより、萬いそがしうて過ぎぬ。二月になりて、殿の御前、御嶽精進始めさせ給はむとする

○仰ぎの中納言　藤原國光の二男忠輔。

○族廣う　一族多く

○恐ろしう　京中人少なければ恐ろしく

○これ　御嶽參詣。

○うら〳〵とならむ　春とならむ。

○夜の程に　一夜の中に。

○京極殿　道長の邸

○土御門殿ともいふ。

○かんの殿　尙侍妍子。

○小姫君　威子。

○楊絲　柳の枝。

○かをり　匂へる趣

に、「四五月にぞ、さらば參らせ給ふべき。猶秋山なむ、よく侍る。」など人々申して、御精進延べさせ給ひて、萬愼ませ給ふ。仰ぎの中納言といふ人の家にぞ、出でさせ給ひける。殿かき籠らせ給へれば、世の中いみじうのどかなり。さて籠り坐せど、世の御政は、猶知らせ給ふ。八月にぞ參らせ給ひける。萬親しく思しこゝろざし、參らせ給ふ程も愚かならず、推し量りて知りぬべし。さべき僧ども、樣々の人々、いと多くきほひ仕うまつる。君達多う、族廣う坐せば、この程いかにと恐ろしう思しつれど、いと無事に參り著かせたまひぬ。年頃の御本意は、これより外の事なく思召さる。これを又、世の公事に思へり。十二月にもなりぬれば、何事も心の慌しげなる人の氣色を、いつしかうら〳〵となるむと、誰も待ち思ふ程も、あながちに生きたらむ身の程も知らぬ樣に哀れなり。

寛弘五年になりぬれば、夜の程に、峯の霞も立ちかはり、萬行末遙かに、のどけき空の氣色なるに、京極殿には、かんの殿と聞えさするは、中姫君に坐す。その御方の女房、小姫君の御方など、いと樣々に、今めかしげなる有樣にて侍ふ。殿の御前、かんの殿の御方に坐して見奉らせ給へば、十四五許りに坐して、いみじう美しげにしつらひする奉らせ給へり。いろ〳〵の御衣どもをぞ奉りて居させ給へる。御ぐしの、紅梅の織物の御衣の裾に懸らせ給へる程、隙なう楊絲かけたるやうにて、御長には、七八寸許りは餘らせ給へらむかしと見えさせ給ふ。御顏のかをりめでたく氣高く、愛敬つきて坐すものから、

○うたてゆゝしきまで　餘り忌々しい位
○若き人々　姫君達の侍女。
○萌黄の小袿　萌黄は青の黄みある色。小袿は唐衣、裳を著ない時表に著る服。
○御色合　御頭の色
○かりのこのはたち　鴨の子の羽立。鴨の巣立の如き美しさ
○美しう守り奉るにも　美しい姫と見守り奉るにつけても。
○いと姫君　稚き姫君嬉子。
○御藏餅　小兒の幸を祈る爲年始に其の頭上に戴かする餅。
○出でさせ給ふ儘に　御參内の出がけに
○いと若君　長家。
○君達　頼通、教通、能信、彰子、妍子、威子、嬉子。
○中宮　倫子の有様なれば殿の上とすへき所である。
○紫檀　東印度原産の常緑なる喬木。
○若君　嬉子。
○おもはしげに　好もしく思ふやうに。
○小姫君　威子。
○紛れ　紛れ歩くで心の儘に歩く。
○宮　彰子。
○上の御局　藤壺の上の御局。
○坐すけなめり　あられる爲であらう。
○さゝやがせ　小さくおはし。
○浮文の御衣　固文に對し浮織の綾の衣
○色聽されたる　禁色を著る事を許された者。
○平綾唐衣　普通の綾織の唐衣。
○無文　模様無き事
○やどりぎ　やすらひ　女の童の名。

花々と匂はせ給へり。うたてゆゝしきまで見奉り給ふ。御前には、若き人々七八人許り侍ひて、心地よげに、ほこりかなる氣色どもなり。又小姫君は、九つ十許りにて、いみじう美しう雛のやうにて、此方彼方紛れ歩かせ給ふ美しさ、紅梅の織物の御衣どもに、萌黄の小袿を奉りて、御色合などの、かりのこのはたちのやうにて、見えさせ給ふものから、それは唯白くのみこそあれ、これは匂ひさへ添はせ給へり。少納言の乳母、いと美しう守り奉るにも、よその人目に、あな羨ましと見えたり。いと姫君二つ三つ許りにて坐せば、殿の御前、御戴餅せさせ給はむとするに、「御裝束まだ奉らねば、しばし。」と宣はす。この御有様どもに御目移りて、とみにも出でさせ給はず。遅く内にも參らせ給ふとて、御使頻りなり。上達部、殿上人多く參りて、やがて御供に内へはと思したり。出でさせ給ふ儘に、麗しき御よそひにて、いと若君の御戴餅せさせ奉らせ給ふ。御乳母の小式部の君、いと若やかにて、搔き抱き奉りて、參り向ふ有様、なべてにはあらぬかたちなり。殿の上は、かう君達數多出で給へれど、只今の御有様、二十許りに見えさせ給ふ。さゝやかにをかしげにふくらかに、いみじう美しき御様すがたに坐して、御髪の筋こまやかに清らかにて、御袿の裾許りにて、末ぞほそらせ給へる。白き御衣どもを、數わかぬ程に奉りて、御脇息に押しかゝりて坐す程、いとめでたう見えさせ給ふ。中宮の御有様、とりぐに見えさせ給ふ。御前に侍ふ人々も、ゑましう見奉るに、紫檀の御數珠の小さやかなるを、

わざとならぬ御念誦に、御帶しどけなくかけて、御脇息に押しかゝりて坐す程、いはむ方なく見えさせたまへば、殿の御前、若君抱き奉りたる御乳母の君に、「見よ、かの御有様は、いかゞ見奉る。なかなか御むすめの君達の、御様には劣らぬ御有様にこそ若やぎ給へれ。なほ御髪の有様よ。」と、いとおもはしげに打笑み、見遣り聞えさせ給へるもをかしう思ふ。小姫君の、いたう紛れさせ給ふを、「あなあわたゞし。」と、制し申させ給ふ。かくて殿の御出でさせ給うて、「むげに日高うこそなりにけれ。」とて、急がせ給ひて、やがてこゝらの殿原の、御車引きつゞけて、内にまゐらせ給ふ。宮は上の御局に坐す。御手習ひなどせさせ給ふは、歌などにやとぞ。只今の御年二十許りにこそ坐せど、いと若うぞ坐す。もとよりいとさゝやかに坐すけなめり。更に猶いと心もとなきまで、さゝやがせ給へり。御髪同じやうなる事なれど、えもいはずこまやかにめでたくて、御たけに二尺許り餘らせ給へり。御色白く麗しう、酸漿などを吹きふくらめて、するたらむやうにぞ見えさせ給ふ。なべてならぬ紅の御衣どもの上に、白き浮文の御衣をぞ奉りたる。御手習ひに添ひふさせ給へり。御髪のこぼれかゝらせ給へる程ぞ、淺ましうめでたう見奉らせ給ふ。女房所々にうち羣れつゝ、七八人づゝおしこりて侍ふ。色聽されたるはさるものにて、平綾唐衣、無文の唐衣など、様々をかしう見えたり。いにしへの后は、童使はせ給はざりけれど、今の世は、御好みにて、様々つかはせ給ふ。やどりぎ、やすらひなどいふが、たけ

○汗衫　童の上衣の上に著る服。
○上の袴　表袴。
○御物語　道長と中宮と御物語。
○御方々　中姫君達
○御心地例にもあらず　御懷妊。
○ねぶたう　眠たく
○例の事　月經。
○おとゞや上　道長と倫子。
○いなや云々　御懷妊を御存知や否や。
○いみじきとのゐ人　安眠せざれは立派な宿直人と洒落れていふ。
○おぼろけならで云々　並大抵の事では目覺めぬ意。
○大輔命婦　左大臣雅家の女房。

小さくはあらぬが、髪長う、容體をかしげにて、汗衫ばかりをぞ著せさせ給へる。上の袴は著ず。その姿有樣、繪に書きたるやうにて、なまめかしうをかしげなり。さるべき御物語など、しばしうち申させ給ひて、殿上へ參らせ給ひぬ。例の作法の事どもありて、いと今めかしうをかし。上の御局の有樣につけても、京極殿の御方々、まづ思ひ出で聞えさせたまふ。中宮も、怪しう、御心地例にもあらずなど坐して、物も聞召さずなどあれど、おどろ〳〵しうもてなし騷がせ給はず。思しつゝみて、十二月も過させ給ひにけり。正月にも同じ事に思されて、いとねぶたうなどせさせ給へば、上坐して、「去年のしはすに、例の事もなかりし。この月も二十日許りにもなりぬるは、心地も例ならずと宣はすめりとあれば、知らず、只ならぬ事なめり。おとゞや、上などに聞えむ。」と宣はすれば、物狂ほしと恥ぢさせ給ふに、殿參らせ給へるをり、「いなや、物は知り給はぬか。」と申させたまへば、宮わりなく恥かしげに思召したり、「何事にか候らむ。」と奏せさせ給へば、「この宮は、御心地例にもあらずとは、知り給はぬか。例は更に寐なども寢給はず、いみじきとのゐ人と見え給へるに、この頃はおぼろけならでなむ、驚き給ふめる。」と宣はすれば、殿の、「怪しく面瘦せ給へりとは見奉り侍れど、かく承る事も候はざりつるに、さはげに、只ならぬ御心地にや。」とて、大輔命婦に、忍びて召し問はせ給へば、「十二月と霜月とのなかになむ、例の事は見えさせ給ひし。この月は、まだ二十日に候へば、今しばし試みてこそは、

○この御事云々　御懷妊が事實となつた
○やゝましげに　心なやましさうに。
○御かさの熱せさせ　御痘で發熱され。
○女腹親腹　中務及び中務の女の腹。
○忌の内に云々　中陰の間にあの世へ招き寄せる。
○をと姫宮　少姫宮
○そのはらからの兵部の命婦　中務の姉妹で手祐忠の女。
○おのれ　汝。
○さすがに云々　世評は色々あるものの風流であられた院を失ひて口惜しくも寂しい事だ。

御前にも聞えさせめ、とおもう給へてなむ。すべて物はしも、つゆ聞召さず。かう惱ましげに、例ならず坐す。殿に聞えさせむと啓し侍りつれば、『いとおどろ〳〵しうこそは思し騷がめ、しばしな聞えさせそ。實に苦しからむ折にこそ。』と仰せらるれば。」と聞えさすれば、殿の御前、何となく、御目に涙の浮ませ給ふにも、御心の中には、御嶽の御しるしにやと、哀れに嬉しう思さるべし。司召などいひて、この月も立ちぬれば、この御事まことになりはてさせ給ひぬ。殿の上も、その日かくと聞かせ給ふ儘に、參らせ給ひて、いとどしう痛はしう、やゝましげにあつかひ聞えさせ給ふ。

かかる程に、二月になりて、花山院いみじう煩はせ給ふ。いみじう、哀れいかにと聞き奉る程に、御かさの熱せさせ給ふなりけり。哀れに限りと見ゆる御心地を、醫師など頼み少なく聞えさす。この女腹親腹に、數多の御子達おはするに、各女宮二人づゝぞおはしける「我死ぬるものならば、まづこの女宮達をなむ、忌の内に、皆とりもてゆくべき。」といふ事をのみ宣はすれば、御匣殿も、女も、樣々に涙流し給ふ。親腹のをと姫宮をば、そのはらからの兵部の命婦にぞ、生れ給ひける儘に、「これはおのれが子にせよ、我は知らず。」と宣はせければ、やがて、しか思ひてぞ養ひ奉りける。かかる程に、院の御心地不覺になりて、二月八日に失せ給ひぬ。御年四十一にぞ坐しける。年頃馴れ仕う奉る僧俗、哀れに悲しう惜しみ奉る事限りなし。殿なども、「さすがにいたう坐しつる、院を、口惜しう

○恐ろしげなるもの　當色をいふ。
○さくら色　白に薄紅を帶ぶ。髮の色目は裏白裏は赤花、蒲萄染等諸說あり。
○藤のころも　喪服
○よき人　貴人。
○命婦のをば　命婦に預けた姫宮をば。
○御燈の御きよまはり　御燈の儀は三月三日天子が北斗星に御燈を奉る。きよまはりは潔齋。
○なべければ　なるべけれど。
○疑ひなげに　一の宮を超して立坊せん
○その程は定めなし　皇子皇女定め難し
○内の女二の宮　定子の御腹の姨子。

さう〳〵しきわざかな。」とぞ聞えさせ給ひける。御葬送の夜、恐ろしげなるものを著ると
て、命婦、

こぞの春さくら色にといそぎしを今年は藤のころもをぞきる

とぞよみける。哀れなる事どもおほかり。まことに御忌の程、この兵部の命婦のやしなひ宮を放ち奉りて、女宮たちは、片端より皆失せ給ひにければ、よき人の御心は、いと恐ろしきものにぞ思ひ聞えさせける。「兵部の命婦のをば、我は知らずと宣はせければ、思しはなちてけるなるべし。」とぞいひつゝ、泣き歎きける。かかる程に、三月にもなりぬれば、中宮の御氣色奏せさせ給ふべきを、ついたちには、御燈の御きよまはりなべければ、それ過して、奏せさせ給ふべきなりけり。殿の御心地、世にしらずめでたう、うれしう思召さるゝ事も愚かなり。今吉き日して、山々寺々に御祈りどもいみじ。里へ出でさせ給ふべきに、四月にと留め奉らせたまへば、その程など過させ給ふ。この御事、今は漏り聞えぬれば、帥殿の御胸潰れて思さるべし。世の人も、若し男に坐さば、疑ひなげにこそは申し思ひためれど、その程は定めなし。されど、殿の御幸福の程を見奉るに、まさに女に坐さむやとぞ、世の人申し騷ぎためる。かかる程に、内の女二の宮、いみじう煩はせたまへば、里に出でさせ給ひて、萬の御祈り、樣々の御修法、御讀經、内にも萬に捉てさせ給ふに、更にいといみじう坐す由のみ聞召すに、しづ心なく、いかに〳〵と思し亂れさせ給

○行末賴もしき　千年を榮ゆべき。
○岩倉　山城國
○文慶阿闍梨　藤原佐理の子。
○かきさまし　回復し。
○律師　僧官で僧正僧都、律師の順序
○さかりつる　疾くありつる、早くすんだ。
○五卷　提婆品の卷
○捧物　僧の布施料
○宮　彰子。
○川風　鴨の川風。
○事そがせ　簡單にし。
○事このましき人々　好事者連。
○ゆゑ〳〵しう　捧物をもの〳〵しく。
○六位衞府　衞門兵衞の尉等。
○薪こり云々　薪の行道をいふ。

ふ。かくて四月ついたちに、中宮出でさせ給ふ。その程の御有樣、いへば愚かなり。京極殿の、いとゞ行末賴もしき松の木立も、めでたう思し御覽ず。樣々の御祈り、かずを盡したり。御修法、今より三壇をぞ常の事にせさせ給へるに、又不斷の御讀經どもなど、いひやる方なし。殿の御前しづ心なう、安きいもおほとの籠らず、御嶽にも、今は無事にとのみ、御祈御願を立てさせ給ふ。かかる程に、女二の宮、むげに不覺に、限りにて坐しけるに、岩倉の文慶阿闍梨參りて、御修法つかまつりけるに、淺ましう坐しける御心地、かきさましおこたらせ給ひぬ。いはむ方なく嬉しき事に、内にも思召して、律師になさせ給へれば、佛の御しるしはかやうにこそと、羨ましう思ふたぐひども多かるべし。

かくて四月の祭、とかりつる年なれば、二十餘日の程より、例の三十講行はせ給ふ。五月五日にぞ、五卷の日に當りければ、ことさらめきをかしうて、捧物の用意、かねてより心ことなるべし。御堂に宮もわたりて坐せば、續きたる廊まで御簾いと青やかに掛け渡したるに、御几帳の裾ども、川風に涼しさまさりて、波のあやもけざやかに見えたるに、五卷のその折になりぬれば、さき〴〵の年などこそ、わざとせさせ給ひしか。今は常の事になりたれば、事そがせ給ひつれど、今日の御捧物は、をかしう覺えたれば、事このましき人々は、おのづからゆゑ〳〵しうしたり。それは制あるべき事ならねばにこそあらめ、きたなげなき六位衞府など、薪こり、水など持ちたるをかし。段原、僧俗、歩み續きたる

○苦空無我　苦空無常無我の異。
○讃歎の聲　行基菩薩「法華經をわが得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し。」の歌を唱へ行道する聲。
○そは〳〵　隅々。
○菖蒲云々　衣の襲の名。
○ことをり　他の時
○枝のけしき　捧物を取附ける打枝の樣
○權中納言　隆家。
○わけざら　別盤。物を取りわくる盤。
○よしある　趣ある
○諸大夫　五位の者
○上官　政官。辨。少納言。外記。史。
○なほ〳〵しき人　普通の家柄の人。
○時の花云々　時勢に從ひ華やかの風す
○心はへのもの云々　己の志す物を卑下せず高々と捧げ中宮女房に對して心構す
○濃き　紫濃き。

は、樣々をかしうめでたう、たふとくなむ見えける。苦空無我の聲にて、ありける讃歎の聲にて、遣水の音さへ流れあひて、萬に御法を說くと聞えなさる。法華經を說かれ給ひたるも、哀れに涙とゞめ難し。御簾のひま〳〵の、柱もと、そば〳〵などより、わざとならず出でたる袖口、こぼれ出でたる衣の裾など、菖蒲、棟の花、撫子、藤などぞ見えたる。上には隙なく葺かれたる菖蒲も、ことをりに似ず、をかしう氣高し。かねてより聞えし枝のけしきも、誠にをかしう見えたるに、權中納言、白銀の菖蒲に、藥玉つけ給へり。若き人々は、目とゞめたり。大方世の常のわけざらなどいふもの、よしある枝どもにつけたるもをかし。殿のうちの有樣、常のをかしさにも、さるべう物せさせ給ふ折は、猶外には似ずめでたし。かくて宮の御捧物は、殿上人どもぞとりたる。皆わけざらなるべし。諸大夫達、下れるきはの上官どもなどまで、なほ〳〵しき人のたとひにいふ、時の花をかざす心ばへにや、いろ〳〵の薄樣に押包みたる、心ばへのものをも、持てけたず、さゝげいらゝかしつゝ、御簾の内を用意したるこそをかしけれ。それまで目とまる人もなしかし。内の御使には、式部藏人定輔參りて、事はてて御返し給はる。祿は、菖蒲襲の織物のうちき、濃き袴なるべし。夜になりて、宮また御堂に坐す。尙侍の殿などと御物語なるべし。池の篝火に、みあかしの光ども、ゆきかひ、照りまさり御覽ぜらるゝに、菖蒲の香も今めかしう、をかしうかをりたり。曉に、御堂より、局々にまかづる女房たち、廊渡殿、西の

○人はおおねど　他人は何とも思はねど
○道はらはせ　通る人を追ひ拂はせ。
○猶物恥かしうて云云　今此所を遙々通り行くは矢張恥かしく。
○やめ　治し。
○故女院　詮子。
○一品宮　脩子。
○御前　伊周隆家等
○故院の云々　定子薨去の時詮子が二宮を取り奪つた事。鳥部野の卷にある。
○物深からぬ人　緣故の薄い人。
○御腹のけはひ　御懷妊の樣子。

對の簀子、寢殿など渡りて、上の御方の御讀經、宮の御方の不斷の御讀經などの、前渡りする程ぞ、私に物へ詣でて、若き人々數多して、人はおぢねど、我が心の限りは、人めかしうもてなして、道はらはせなどして、したり顏に、沓すり歩くも、猶物恥かしうて、はるばると渡りありく程こそ、哀れなるわざなめれと、思ひしるたぐひどもあめるかし。かくて過ぎもていきて、講もはてぬれば、心のどかに思召され、人々も思ふに、かくてかの女二の宮は、いと危く坐しを、石藏の律師、辛うじてやめ奉りて、佛の御しるし嬉しげなりしに、この頃、俄に御心地おこらせ給ひて、この度は、程もなく重らせ給ひて、失せさせ給ひにけり。今年は九つにぞ坐しける。あはれに悲しう思召す。大方の惜しさよりも、故女院の、いみじう思召されける。帥殿、中納言殿など、淺ましう涙多うおはしける身どもかなぞ、いみじう思召されける。一品宮、今は少し物思し知らせ給ふ程なれば、悲しき事を、返す〴〵思し知と見え給ふ。一品宮、今は少し物思し知らせ給ふ程なれば、悲しき事を、返す〴〵思し知りたり。なほ〳〵この御前たちの御ゆかり、殘りなうならせ給ふにつけても、いかなりける御事にかと、返す〴〵かたぶき思ふ人のみ多かるべし。淺ましといひてのみやはとて、さべき樣にをさめ奉らせ給ふにつけても、哀れに悲し。中將命婦、故院の、とり參らせさせ給ひし程など、思ひつゞけいひつゞけ泣く程、物深からぬ人も、涙留め難し。

かくいふ程に、はかなう七月にもなりぬ。中宮の御けはひも、今はわざと御腹のけはひ

○外よりは云々　他の女御よりも帝は元子に思召しがある。
○秋の氣色云々　以下敕行案式部日記の文と同じ。
○例のたえせぬ水の音なひ　聞き慣れた遣水の音。
○羊のあゆみ　歳月
○五大尊　不動、降三世、軍荼利夜叉、大威德、金剛夜叉の明王を本尊とす。
○なり　有樣。
○觀音院僧正　勝算
○馬場のおとゞ　馬場殿で馬場にある殿舍。
○文殿　書籍を納め置く所。
○唐橋　唐樣の橋。

なども、苦しげに坐し、たはやすからぬ樣に思されたるも、見奉る人、心苦しう思ひ聞えさす。内よりは、御使のみぞ頻りに參る。猶外よりは、承香殿に御志あるとぞ、おのづから聞ゆれど、すべていづれの御方も參らせ給ふ事いとかたし。一品宮、内に坐せば、たゞその御方に渡らせ給ひてぞ、御心も慰めさせ給ふ。この二の宮の御事をぞ、返す〳〵思召しける。秋の氣色に入り立つ儘に、土御門殿の有樣、いはむ方なくいとをかし。池のわたりの梢、遣水のほとりの叢、おの〳〵色づき渡り、大方の空の氣色のをかしきに、不斷の御讀經の聲々哀れまさり、やう〳〵涼しき風のけはひに、例のたえせぬ水の音なひ、夜もすがら聞き通はさる。一日までは、法興院の御八講とのゝしりし程に、七夕の日にもあひ別れにけりとぞ、幾十の羊のあゆみを過し來ぬらむとのみこそ覺えけれ。かくて宮の御事は、九月にこそあたらせ給へるを、八月にとある御祈りどもあれど、又「それさべきにもあらず、かかる御事は、月日限りあるわざなり。」など聞えたまふ人々もあれば、けにもと思召さる。程近うならせ給ふまゝに、御祈りども數をつくしたり。五大尊の御修法を行はせ給ふ。樣々その法に隨ひてのなり有樣ども、さはかうこそはと見えたり。觀音院僧正、二十人の伴僧、とり〴〵にて御加持參り給ふ。馬場のおとゞ、文殿などまで、皆樣々にしゐつゝ、それより參りちがひ集まる程、御前の唐橋などを、老いたる僧の顏みにくきが渡る程も、さすがに目たてらるゝものから、なほ尊し。ゆる〳〵しき唐橋どもを渡り、

○心譽　重輔の子。
○ゐやさひ　敬ひ。
○仁和寺の僧正　敦實親王の子雅慶。
○孔雀經　孔雀明王を本尊とす。
○胸はしる　どぎまぎする。
○そこはかとなき　何處と宿直の定まれる所のない。
○今樣歌　流行歌。
○宮の大夫　中宮大夫藤原齊信。
○左の宰相の中將　參議左中將源經房。
○左兵衞の督　懷平
○美濃の少將　濟政
○僧たち云々　僧が無心に本氣に聞き慣れて修法を忘れた樣子も心苦しい。
○薰物合　香合。
○火取　薰爐。

木の間を分けつゝ歸り入る程も、遙かに見遣らるゝ心地して哀れなり。心譽阿闍梨は、軍陁利の法なるべし、赤衣著たり。齊祇阿闍梨は、大威德をゐやまひて、腰をかゞめたり。仁和寺の僧正は、孔雀經の御修法を行ひ給ひ、疾く〳〵と參り替れば、夜も明けはてぬ。樣々耳かしがましう、けおそろしき事ぞ物にも似ざりける。心弱からむ人は、あやまりぬべき心地して胸はしる。かくいふ程に、八月二十餘日の程よりは、上達部殿上人、さるべきは、皆とのゐがちにて、階のうへ、對のすのこ、渡殿などにうたゝねをしつゝあかす。そこはかとなき若君達などは、讀經あらそひ、今樣歌ども、聲を合はせなどしつゝ、論じ給ふもをかしう聞ゆ。ある折は、宮の大夫、左の宰相の中將、左兵衞の督、美濃の少將などして遊び給ふ。それは誠にをかしうて、僧たちの何となきは、まめだちたるもさすがに心苦し。この頃薰物合せさせ給ひて、人々に配らせ給ふ。御前にて、御火取どもとりいでて、樣々のを試みさせ給ふ。

かかる程に九月にもなりぬ。九月の九日も昨日暮れて、千代をこめたる籬の菊ども、行末遙かに賴もしき氣色なるに、よべより御心地惱ましげに坐ししかば、夜中許りより、かしがましきまでのゝしる。十日ほのゞとするに、白き御帳にうつらせ給ひ、その御しつらひかばる。殿よりはじめ奉り、君達四位五位立騷ぎて、御几帳の帷子かけかへ、御疊などもて騷ぎ參る程、いと騷がし。日一日苦しげにて暮させ給ふ。御もののけども、樣々

○あづかり〳〵に　それ〴〵分擔して。
○つぼねっゝ　仕切りつつ。
○物の紛れに　物に紛らしては。
○つれなく　素知らぬ顔をする。
○廂　廂の間。
○年頃のおとなだち　永年御産になれた女房達。
○法華經云々　疑の卷にも法華經弘布は道長の力とある。
○耳振り立てぬ　聞耳しない。
○御誦經の使　公から誦經を寺々に仰する使。
○打ちそへて　御受戒に添へて。
○今ひとつの御事　後産。

かりうつし、あづかり〳〵に加持しのゝしる。月ごろ殿の内に、そこら侍ひつる僧は、更にもいはず、山々寺々の僧の、少しも驗あり、行ひすると聞召すをば、殘らずたづね召し集めたり。内にはいと〳〵おほつかなく、いかなればかと思召して、年頃かやうの事も、なれしりたる女房ども、一つ車にて參れり。御もののけおの〳〵屏風をつほねつゝ、驗者ども、あづかり〳〵に、加持しのゝしり叫び合ひたり。その程のかしがましさ、物騷がしさ推し量るべし。今宵もかくて過ぎぬ。いと怪しきことに恐ろしう思召して、いとゆゝしきまで、殿の御前、物思しつゞけさせ給ひて、物の紛れに、涙を打拭ひ〳〵、つれなくもてなさせ給ふ。少し物の心知りたるおとなだちは、皆泣き合へり。「同じ屋なれど、所かへさせ給ふやうあり。」など申し出でて、北の廂に移らせ給ふ。年頃のおとなだち、皆御前近く侍ふ。今はいかに〳〵と、ある限りの人、心を惑はして、え忍びあへぬたぐひ多かり。法性寺の院源僧都御願書よみ、法華經この世に弘まり給ひし事など、なく〳〵申し續けたり。哀れに悲しきものから、いみじう尊くて頼もし。陰陽師とて、世にある限り召し集めつゝ、八百萬の神も、耳振り立てぬはあらじと見え聞ゆ。御誦經の使ども、立騷ぎ暮し、その夜も明けぬ。さて御戒受けさせ給ふほどなどぞ、いとゆゝしく思し惑はるゝ。殿の、打ちそへて法華經念じ奉らせ給ふ、何事よりも、頼もしくめでたし。いたく騷ぎて、無事にせさせ給ひつ。そこら廣き殿のうちなる僧俗、上下、今ひとつの御事のまだしきに、額

○かきふせ　抱いて寢させ。
○御方　各の御居間
○御前　中宮の御前
○かかるすぢの人々　御産に慣れた人達
○罪うる　勝緒を切るは罪障となる。
○御幣使　毎年九月十一日遣はす奉幣使
○ひたゝけて　あらはに。一向にの意。
○女房の白裝束　御湯殿に役する女房也
○綠の衣　六位の衣
○當色　普通の袍の上に著る白袍で御産屋には總て白裝束。
○なかのぶ　源仲信
○御廚子　御廚子所の仕女。
○うめ　ぬるくし。
○缶　瓦器。
○ゆまき　湯卷。湯殿の動に上に著る服
○御湯殿　湯を浴み奉る者。
○御迎湯　産兒に産湯をつかはす相手。

つきたる程、はた思ひやるべし。無事にせさせ給ひて、かきふせ奉りて後、殿をはじめ奉りて、そこらの僧俗、哀れに嬉しくめでたきうちに、男にしさへ坐せば、その喜び斜なるべきにあらず、めでたしとも愚かなり。今は心安く、殿も上も、御方に渡らせ給ひて、御祈りの人々、陰陽師、僧などに、皆祿賜はせ、その程は、御前に、年ふり、かかるすぢの人々皆侍ひて、もの若き人々は、けどほくて、所々に休みふしたり。御湯殿の事など、儀式いみじう事とゝのへさせ給ふ。かくて御臍緒は、殿の上、これは罪うることと、かねて思召ししかど、只今の嬉しさに、何事も皆思召し忘れさせ給へり。御乳附には、有國の宰相の妻、御門の御乳母の橘三位參り給へり。御湯殿などにも、年頃むつまじう仕う奉りなれたる人をせさせ給へり。御湯殿の儀式、いへばおろかにめでたし。誠に内より御劍すなはち持て參りたり。御使には頼定の中將なり。祿など心ことなりつらむを、さるは伊勢の御幣使もまた歸らざりつれば、内の御使えひたゝけて參らず。女房の白裝束どもと見えて、包、袋、唐櫃などもてき騷ぐ。御湯殿、酉の時とぞある。その儀式有樣はえいひ續けず。火ともして、宮の下部ども、綠の衣の上に、白き當色著て御湯參る。萬の物に、白き覆どもしたり。宮の侍の長、なかのぶ舁きて、御簾のもとに參る。御廚子、二人麗はしくさうぞきて、とりいれつゝ、うめて御缶にいる。十六の御缶なり。女房皆白き裝束どもなり。御湯殿のゆまきなど皆同じ事なり。御湯殿は、讃岐の宰相の君、御迎湯は、大納言

○虎の頭　邪氣を掃ふ爲擬造の虎頭を煎る眞似した湯の中で産湯をつかはす。
○うちまき　魔除の爲に散米する事。
○おほゝれ　覆ひ。
○三重五重　三色五色の絲絲で模樣を織り出した綾物。
○さる方　それ相應
○よしばみ　容惡ぶり。
○心はへある本文　趣ある出典確の文句
○おきぐち　袖口に緣取り金銀等で飾る
○ふせぐみ　左縫の絲と右縫の絲を竝べふせてとぢ附く。
○宮司大夫　齊信。
○左衞門督　公任。
○御前のもの　中宮
御供膳の器具。
○沈の懸盤　食器を載せる沈香製の具。
○源中納言　俊賢。
○藤宰相　實成。
○折立　織物等の裏張せるを箱角に立つ
○入帷子　衣を宮に入れる時包む單の帛

の君なり。宮は、殿抱き奉らせ給ふ。御劒小宰相の君、虎の頭は、宮の内侍とりて御さきに參る。御弦打五位十人、六位十人、御書の博士には藏人辨廣業、高欄のもとに立ちて、史記の第一卷を讀む。護身には、淨土寺の僧都侍ひ給ふ。雅通の少將うちまきをしのゝしりて、僧都にうちかけておほゝれ給ふぞをかしき。白裝束どもの樣々なるは、唯すみ繪の心地して、いとなまめかし。日頃我も〳〵とのゝしりつる白裝束どもを見れば、色ゆるされたるも、織物の裳、唐衣、同じう白きなれば、何とも見えず、聽されぬ人も、少しおとなびたるは、三重五重の袿に、上著は織物の無紋など白う著たるも、さる方に見えたり。扇なども、わざとめきて輝かさねど、よしばみ隱して、心ばへある本文など書きたる、なかなかいとめやすし。若き人々は、縫物螺鈿など、袖口におきぐちをし、しろがねの左右の絲してふせぐみし、萬にし騷ぎあへり。雪深き山を、月の明きに見渡したるやうなり。まねびやるべき方なし。三日にならせ給ふ夜は、宮司大夫より始めて、御うぶやしなひ仕うまつる。左衞門督は、御前のもの、沉の懸盤、白銀の御皿どもなど、くはしくは見ず。源中納言、藤宰相、御衣、御襁褓、衣ばこの折立、入帷子、包、覆したる机など、同じ白さなれど、しざま、人の心々見えてしつくしにたり。五日の夜は、殿の御産養せさせ給ふ。十五夜の月曇りなく、秋深き露の光に、めでたき折なり。上達部、殿上人參りたり。東の對に西向に、北を上にて著き給へり。南の廂に北向に、殿上人の座は、西を上なり。

○見參の文　參賀者の姓名を列せる文書
○あたらしく云々　皇子誕生の悉さの事
○腰うち屈め　會釋
○心安き　親しき。
○壺うち　雙六をし
○紙　紙を賭にす。
○女房云々　公卿が女房に杯をさして歌よめといはゞ何と詠まうと一寸考へた。
○珍らしきの歌　後拾遺集賀部。珍らしい光の添へる月の如皇子は永へに望月に似てかけず榮えての意。
○紫　紫式部。
○四條大納言　公任
○歌より云々　女房は歌の善惡よりも歌ひ出す音聲。

白き綾の御屏風を、母屋の御簾に添へて立て渡したり。月のさやけきに、池の汀もちかう篝火どもともされたるに、勸學院の衆ども、歩みて參れり。見參の文ども啓す。祿どもたまはす。今宵の有樣、殊におどろ〳〵しう見ゆ。物の數にあらぬ上達部の御供の男ども、隨身宮の下部など、こゝかしこにむれ居つゝ、打笑み合へり。あるはそゝのかしげに急ぎわたるも、かれが身には、何ばかりの喜びかあらむ。されど、あたらしく出で給へる、光もさやけくて、御蔭にかくれ奉るべきなめりと思ふが、嬉しうめでたきなるべし。所々の篝火たちあかし、月の光もいと明きに、殿の内の人々は、何ばかりの數にもあらぬ五位なども、腰うち屈め、世にあひ顏に、そこはかとなく行きちがふも哀れに見ゆ。若うさべき心安き程の女房八人おものまゐる。同じ心に髪上げて、皆白き元結したり。白き御盤ども取りつゞきてまゐる。今宵の御まかなひ、宮の内侍、もの〳〵しう、やんごとなきけはひしたり。女房、若き人々の、きたなげなきどもなれば、見るかひありてをかしうなむ。上達部ども、殿を始め奉りて、攤うち給ふに、紙の程の論、聞き憎くらうがはし。歌などあり。されど物騷がしさに紛れたる、尋ぬれど、しどけなう事しげければ、えぞ書きつゞけはべらぬ。女房さかづきなどある程に、いかゞはと思ひやすらはる。

珍らしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代をめぐらめ

とぞ、紫さゞめき思ふに、四條大納言、簀のもとに居給へれば、歌よりも、いひ出でむ程

○宰相中將　經房。
○殿の少將　敦通。
○物のかず云々　御膳祿物等書いた目錄
○柳宮　柳の細枝を採めて編んだ宮。
○出納　藏人所下司
○一夜の事　三夜五夜の儀。
○藏人　女藏人。
○左右の頭　頭定と道方。

のこわづかひ、恥かしさをぞ思ふべかめる。かくて事どもはてて、上達部には、女の裝束に大袿など添へたり。殿上の四位には、袷一襲、袴、五位には袿一襲、六位には袴一具なり。例の有樣どもなるべし。夜更くるまで、内にも外にも樣々めでたうて明けぬ。十六日には、又明日はいかにと、よべのなりども仕替ふべき用意どもありけり。その夜は物のどやかにて、女房たち船に乘りて遊び、左の宰相中將、殿の少將の君など、乘り交りて歩き給ふ。樣々をかしう、心ゆく樣の事ども多かり。又七日の夜は、公の御産養なり。藏人少將道雅を御使にて參り給へり。松君なりけり。物のかずかきたる文、柳宮に入れて參れり。やがて啓し給ふ。具し給へる出納、小舍人に至るまで、祿ども賜はせてぞ歸り給ひける。勸學院の衆ども、歩みて參れり。見參の文また啓し、祿ども賜ふべし。今宵の有樣、一夜の事にまさりて、おどろ〳〵しう氣色ことなり。内の女房だちみな參る。藤三位を初め、さるべき命婦、藏人、二車にてぞ參りたる。船の人々も、皆おびえて入りぬ。内の女房たちに、殿出であはせ給ひて、萬思ふ事なげなる御けしきの、笑の眉を開けさせ給へれば、見奉る人々、げに〳〵と哀れに見奉る。贈物ども、しな〳〵に賜ふ、又の日の御有樣、今日はいと心ことに見えさせ給ふ。御帳の内に、いとさゝやかに、うち面痩せて臥させ給へるも、いとゞ常よりもあえかに見えさせ給ふ。大方の事どもは、一夜の同じ事なり。上達部の祿は、御簾の内より出させたまへば、左右の頭二人取次ぎて奉る。例の女の

○腰差　卷組。
○細長　小袿の上に著て大領おほくびなき故丈が細長い。
○春宮權大夫云々　類通襲祿を儲く。
○一よろひ　一具。
○海賦　月宴の卷にあり。
○蓬萊　蓬萊山の蒔繪模樣。
○取りはなち云々　一々語り得ぬ程細工がうまい。
○宮　若宮後一條院
○しと　尿。
○法華經の云々　法華經の尊さを見る如く。
○おいさかり　晩年になつて榮え。
○内に　一條帝は。

裝束に、宮の御衣をぞそへたべき。殿上人は、常の如く、公方のは、大袿、衾、腰差など、例のおほやけざまなるべし。御乳附の三位には、女の裝束に織物の細長添へて、白銀の衣箱にて、包なども、やがて白きに、又包ませ給へるものなど添へさせ給ふ。八日、人人色々にさうぞきかへたり。九日の夜は、春宮權大夫仕うまつり給ふ。さまことに又し給へり。今宵は、上達部御簾の際に居給へり。白き御厨子一よろひ參りするゑたり。儀式いとさまことにいまめかし。しろがねの御衣箱、海賦をうちて、蓬萊なども例のことなれど、こまやかにをかしきを取りはなちては、まねび盡すべき方もおぼえぬこそわろけれ。今宵は、御几帳みな例の樣にて、人々濃き袿をぞ著たる。珍らしくなまめきて、透きたる唐衣ども、つや〳〵とおし渡して見えたり。

かくて日頃ふれど、猶いとつゝましげに思召されて、神無月の十日あまりまでは、御帳より出でさせ給はず。殿夜晝わかず、こなたにわたらせ給ひつゝ、宮を、御乳母の懷よりかき抱き給ひて、えもいはず思したるもげに〳〵と見え給ふ。御しとなどにぬれても、嬉しげにぞ思されける。かくいふ程に、行幸も近うなりぬれば、殿の内を、萬に繕ひみがかせ給ふ。見所あり。見るに怪しう、法華經のおはすらむやうに、おいさかり命延ぶらむと覺ゆる、殿の有樣になむ。かくて、若宮を、おほつかなう床しう、内に思ひ聞えさせ給ふによりての行幸なれば、先々のよりも、殿の御前、いみじう急ぎ立ち、いつしかとのみ思

○けさうじ　化粧し
○東の對の人々　女房達。
○この御方　中宮の女房。
○髪あげ　垂髪を結び上げ櫛等をさす。
○地摺の裳　白地に縹色等の模様を摺りつけた裳。
○おし渡して　色許された女房全部。
○蘇枋の織物　蘇枋の織色は經緯共に紫
○打物　砧で打って光澤を出した布帛類
○例の青う黄なる袿、單衣の類。
○平絹　平織にした絹。
○大海の摺裳　海賦
○宮にかけたるは　中宮奉仕資任の者は

し急がせ給ふに、安きいもおほとのごもらず、この御事をのみ御心にしみ思さるゝぞ、實にもありぬべき御事の有樣なるや。神無月の晦日のことなむ。かくてこたみの料とて、造らせ給へる船ども、寄せて御覽ず。龍頭鷁首の生けるかたち、思ひ遣られてあざやかに麗はし。行幸は寅の時とあれば、夜より、安くもあらずけさうじ騷ぐ。上達部の御座は、西の對なれば、この度は、東の對の人々、少し心のどかに思ふべし。かんの殿の御方の女房は、この御方よりも、樣々に急ぐと聞ゆ。寢殿の御しつらひなど、さまかへしつらひなさせ給ひて、御帳の西の方に、御椅子立てさせ給へり。それより東の方に當れる際に、北南のつまに、御簾かけ渡して、女房居たる南の柱のもとに簾あり。少し引上げて內侍二人出づ。髪あげ、麗はしき姿ども、たゞ唐繪か、若しは天人の天降りたるかと見えたり。辨の內侍、左衞門の內侍などぞ參れる。とりぐ樣々なるかたちなり。衣の匂ひ、いづれも、すべてあり難う美しく見えたり。近衞の司、いとつきぐしき姿して、事どもおこなふ。頭中將賴定の君、御劒とりて、內侍に傳へなどす。御簾の內を見渡せば、例の色聽されたるは、青色赤色の唐衣に、地摺の裳、上著は、おし渡して、蘇枋の織物なり。打物ども、濃き薄き、紅葉をこきまぜたるやうなり。また例の青う黄なるなど交りたり。色ゆるされぬは、無紋平絹など樣々なり。下著皆同じ樣なり。大海の摺裳、水の色あざやかになどして、これもいとをかしう見ゆ。內の女房も、宮にかけたるは、四五人參りつどひたり。內

○まかなひ　給仕。
○菊　表白裏蘇枋又は青。
○青ほ　眞正面。
○殿の上　倫子。
○上　一條帝。
○一の御子　敦康。
○すぢなし　詮なし
○行末云々　後見ある若宮に世を讓らうと思ひ續けて。
○萬歲樂　隋樂平調
○太平樂　唐樂大食調。
○賀殿　唐樂壹越調
○右大臣　顯光。
○右衞門督　齊信。
○萬歲千秋　和漢朗詠集雜部。謝偃「嘉辰令月歡無レ極、萬歲千秋樂未レ央。」を合唱す。

侍二人、命婦二人、御まかなひの人一人、おもの參るとて、皆髪上げて、內侍の出でつる御簾際より、出で入り參る。御まかなひ藤三位、赤色の唐衣に、黃なる唐の綾の衣、菊の袿、上著なり。筑前、左京なども、樣々皆したり。柱隱れにて、まほにも見えず。殿、若宮抱き奉らせ給ひて、御前に率て奉らせ給ふ。御聲いと若し。辨の宰相の君、御劒とりて參り給ふ。母屋の中の戶の西に、殿の上の坐す方にぞ、若宮は坐させ給ふ。上の見奉らせ給ふ御心地、思ひやり聞えさすべし。これにつけても、一の御子の生れ給へりし折、とみにも見ず聞かざりしはや、なほすぢなし。かかるすぢには、唯賴もしう思ふ人のあらむこそ、かひ〳〵しうあるべかめれ。いみじき國王の御位なりとも、後見もてはやす人なからむは、わりなかるべきわざかなと思さるゝよりも、行末までの御有樣どもの、思し續けられて、まづ人知れず、哀れに思召されけり。宮と御物語など萬心のどかに聞えさせ給ふ程に、むげに夜に入りぬれば、萬歲樂、太平樂、賀殿など舞ひ、樣々に、樂の聲をかしきに、笛の音も鼓のおとも面白きに、松風吹きすまして、池の浪も聲をとなへたり。萬歲樂の聲にあひて、若宮の御聲を聞きて右大臣もてはやし聞え給ふ。左衞門督、右衞門督、萬歲千秋など諸聲に誦じ給ふ。あるじの大殿「先々の行幸を、などてめでたしと思ひ侍りけむ、かかる事もありけるものを。」と、打ちひそみ給ふを、さらなる事なりと、殿原、同じ心に御目のごひ給ふ。かくて殿は入らせ給ひぬ。上は出でさせ給ひて、右大臣を御前に

○家司　家令以下書吏以下の者。
○頭辨　辨官で藏人ノ頭を兼任せる道方。
○あたらしき云々　若宮親王宣下の御慶
○權大夫　俊賢。
○權亮侍從　實成。
○おもと人　侍者。
○別當　藏人所長官
○職事　藏人。
○日頃の云々　御產行幸等の爲御殿の裝飾の亂りがはしく。
○物合　歌合根合等物を合はせ優劣を爭ふ。
○かたわき　雙方に分れ勝負を爭ふ事。
○おまし　中宮御座
○おもの　御饗饌。
○折敷　賓蓋に似て食器を載せる具。
○御箸の臺の洲濱　箸を載せ置く臺上の洲濱の飾り。

召して、筆とりて書き給ふ。宮司、殿の家司、さるべき限り加階す。頭辨して案内奏せさせ給ふめり。あたらしき御子の御悅びに、氏の上達部、ひきつれて拜し奉り給ふ。藤氏ながら、門分れたるは、列にも立ち給はず。次に別當になり給へる、宮大夫右衞門督、權大夫中納言、權亮侍從宰相など加階し給ひて、皆舞蹈す。宮の御方に入らせ給ひて、程なきに、夜いたう更けぬ。御輿寄すとのゝしれば殿も出でさせ給ひぬ。又の朝に、内の御使、朝霧も晴れぬに參れり。若宮の御戀しさにこそはあらめと、推し量らる。その日ぞ、若宮の御髮始めてそぎ奉らせ給ふ。殊更に、行幸の後とて、あるなりけり。やがてその日、若宮の家司、おもと人、別當、職事など定めさせ給ふ。日頃の御しつらひのらうがはしく、さまことなりつるを、押しかへし麗はしうかゞやかし給ふ。殿の上、年頃心もとなう思されける御事の成り給へるを、思す樣に嬉しうて、明暮見奉らせ給ふも、あらまほしき御けしきどもなり。

かくいふ程に、御五十日、霜月のついたちの日になりにければ、例の女房、樣々心々にしたて參り集ひたる樣、さべき物合のかたわきにこそ似ためれ。御帳の東の方のおましのきはに、北より南の柱まで、隙もなう御几帳を立て渡して、南面には、御前のもの參りすゑたり。西によりては、大宮のおもの、例の沉の折敷に、なにくれどもならむかし、若宮の御前の小さき御臺六つ、御皿より始め、萬美しき御箸の臺の洲濱など、いとをかし。大

○釵子　髮上げに用ふる金屬製の細長き兩脚の具。
○唐　唐織物。
○右の大臣　顯光。
○内の大臣　公季。
○折櫃物　檜の薄板を折り曲げ作れる宮に入れた饗祿物。
○まうち君　公卿。
○たちあかし云々　燈火が暗いから。
○四位の少將　雅通
○脂燭　座敷等でともす燈火。
○臺盤所　清涼殿にあつて女房の詰所。
○聞召す　中宮が御承知になる。
○あたりて　向ひて
○綻び引きたち　縫目を引斷ち。
○三輪の山本　古今集雜部讀人不知「我が庵は三輪の山本戀しくは訪らひ來ませ杉立てる門。」

宮の御まかなひ、辨の宰相君、女房、皆髮上げて、釵子さしたり。若宮の御まかなひ、大納言の君なり。東の御簾少し上げて、辨内侍、中務命婦、大輔命婦、中將君など、さるべき限り取續きまゐらせ給ふ。讃岐守大江きよみちが女、左衞門佐源爲善が女、日頃參りたりつる、今宵ぞ色ゆるされける。殿の上、御帳の内より、御子抱き奉りてゐざり出でさせ給へり。赤色の唐の御衣に、地摺の御裳、麗はしくさうぞきて坐すも、哀れに忝し。大宮は、蒲萄染の五重の御衣、蘇方の御小袿などをぞ奉りたる。殿餅まゐらせ給ひ、上達部簀子に參り給へり。御座は例の東の對なりつれど、近う參りて醉ひ亂れたり。右の大臣、内の大臣も皆參り給へり。大殿の御方より、折櫃物など、さべきまうち君たちとり續き參る、高欄につゞけすゑわたしたり。たちあかしの心もとなければ、四位の少將や、さべき人々など、脂燭さして御覽じて、内の臺盤所にもて參るべきに、明日よりは御物忌とて、今宵皆持て參りぬ。宮の大夫、御簾のもとに參りて、上達部御前に召さむと啓し給ふ。聞召すとあれば、殿よりはじめ奉りて、皆參り給ひて、柱の東の間を上にて、東の妻戸の前まで居給へり。女房おしこりて、數知らず居たり。その座にあたりて、大納言の君、宰相の君、宮の内侍と居給へるに、右の大臣寄りて、御几帳の綻び引きたち、みだれ給ふを、きしもざれ給はでもありぬべけれど、それしもぞをかしうおはする。扇をとり、戲言のはしたなき多かり。大夫かはらけとりて、此方に出で給へり。三輪の山本うたひて、御遊

○右大將　實資。
○ことなしびに　知らぬふりして。
○三位のすけ侍從宰相　中宮權亮實成。
○土器取れ　右大臣顯光の詞。
○内大臣　父公季。
○内なる人　女房達
○世のけはひ　醉へる人々の樣子。
○宰相の中將　經房
○いかにの歌　續古今集賀部。
○あしたづの歌　續拾遺集賀部。あしたづのは鶴の如くの意
○よき男云々　倫子も已よき夫を持てり
○上　倫子。
○かたへ　一部分。
○そゝぎたちて　うは〳〵急ぎ立ちて。
○車きしろひ　車爭び樣かはりたれど、いと面白し。その次の間の東の柱もとに、右大將寄りて、衣の褄袖口かぞへ給へる氣色など、人よりことなり。杯のめぐりくるを、右大將は、おぢ給へど、例のことなしびに、千年萬代にて過ぎぬ。三位のすけに、土器取れなどあるに、侍從宰相、内大臣のおはすれば下より出で給へるを見て、大臣ゑひなきし給ふ。内なる人さへ哀れに見えけり。氣恐ろしかるべき世のけはひなめりと見て、事はつるまゝに、藤式部君、宰相君といひ合はせて、隱れなむとするに、東面に、殿の君達、宰相の中將など入りて騷がしければ、二人御几帳の後に居隱れたるを、取りはらはせ給ひて、二人ながら執へさせ給へり。「歌ひとつ仕うまつれ、さらば許さむ。」と宣はするに、いとわびしう恐ろしければ、式部、

いかにいかゞ數へやるべき八千年のあまり久しき君が御代をば

「あはれ仕うまつれるかな。」と、二度ばかり誦ぜさせ給ひて、いと疾く宣はせける。

あしたづのよはひしあらば君が代は千歳の數もかぞへとりてむ

さばかり醉はせ給へれど、思す事のすぢなれば、かく續けさせ給へりと見えたり。かくて例の作法の祿どもなどありて、いとしどけなげにてよろぼひ罷でさせ給ひぬ。殿の御前、「宮を女にてもち奉りたる、まろ恥ならず、まろを父にてもち給へる宮惡からず、また母もいとさいはひあり、よき男も給へり。」など戯れ宣はするを、上は、いと傍いたしと思

○例の事　事の次第は定制あり。
○けちつ　滑ちつ。
○御輿　中宮の御輿
○一具が内の事ども　一對の内容。
○拾遺　公任の撰なる拾遺和歌集。
○延幹　源兼房の子で能書家。
○かけご　懸子。宮の身の中に納れて重ねる筥。
○元輔　清原深養父の孫、清少納言の父
○能宣　大中臣頼基の子。
○右宰相中將　兼隆
○かづら　日陰蔓。
○心葉　箱等に物を納れて紐を結んだ所に作り花の小枝を附く。茲は梅の枝。
○立蒂、目隱塀の類
○その道云々　避けられぬ通り道なれば
○業遠朝臣　高階敏忠の子、春宮亮。
○傳　舞姫附の女房して、あなたに渡らせ給ひぬ。かくて十七日には、うちへ入らせ給ふべければ、その事ども、女房おし返し急ぎたちたり。その夜になりぬれば、例の里のも皆參り集ひたり。かたへは髪上げなどして麗はしき姿なり。四十餘人ぞ候ひける。いたう更けぬれば、そゝぎたちて入らせ給ひぬ。女房の車きしろひもありけれど、「例の事なり。聞き入れぬものなり。」と宣はせて、殿は聞召しけちつ。御輿には、宣旨の君乘りたまふ。絲毛の御車には、殿の上、少將の乳母、若宮抱き奉りて乘る。次々のことどもあれど、うるさければ書かずなりぬ。よべの御贈物、今朝ぞ心のどかに御覽ずれば、御櫛の箱一具が内の事ども、見盡しやらむ方なし。御手箱一具、片つ方には白き色紙つくりたる草紙ども、古今、後撰、拾遺など五帖につくりつゝ、侍從中納言行成と、延幹と、各草紙一つに、四卷をあてつゝ書かせ給へり。かけごの下には、元輔、能宣やうの、いにしへの歌よみの家々の集ども書きて入れさせ給へり。かやうにて日頃も經ぬる程に、五節二十日參る。侍從宰相とあるは、内大臣の子實成宰相なるべし。舞姫の裝束遣はす。右宰相中將の五節に、御かづら申されたるついでに、箱一よろひに薫物入れて遣はす。心葉梅の枝なり。今年の五節いみじう挑みかはすなど聞えあり。東の御前に向ひたる立蒂に、ひまもなく打渡しつゝ、ともしたる火の光に、つれなう歩み參る樣どももはしたなけれど、その道にえさらぬすぢどもなればこそと見えたり。業遠朝臣の傳に、錦の唐衣著せたりとのゝしるも、實に樣ことに、さもあ

○ひすまし　樋洗。糞器を洗ふ下司女。
○孫廂　母屋の周圍の廂の外の又廂。
○尾張守　中清。
○童下仕の御覽　五節終りて舞姫傅の彼等を御覽ある儀。
○青き白櫟　青白の櫟色。
○赤色、青色　赤白櫟、青白櫟。
○五節の局　五節所
○弘徽殿の女御　義子。
○昔ならしけむ百敷　昔見馴れた内裏。
○かいつくろひ云々　傅の左京は何處ぞ
○源少將　濟政。
○日かげ云々　日陰蔓を輪になして置き

りぬべかりけりと聞ゆ。あまり衣厚く著せて、たをやかならぬ樣なりといふもどきはあれど、それ今の世の事にはわろからず。右宰相中將もあるべき限りしたり。ひすまし二人とのへたる姿ぞ、さとびたりと、人ほゝゑみたりし。内大臣の藤宰相の、はた今すこし今めかしきかたはまさりて見ゆ。傅十人、孫廂の御簾下してこぼれ出でたる衣の裾ども、したり顔に思へる樣どもよりは、見所まさりて、火影にをかしう見えたり。又春宮亮の五節に、宮よりたきもの遣はす。大きやかなる白銀の筥に納れさせ給へり。尾張守も出したれば、殿の上ぞ、それは遣はしける。その夜は、御前の試みなども過ぎて、童下仕の御覽いかゞと床しきに、例の時の程になれば、皆歩み續き參り出づる程、内にも外にも、目をつけ騷ぎたり。上渡らせ給ひて御覽ず。若宮坐せば、撒米しのゝしるけはひす。業遠の童に、青き白櫟の汗衫を著せたり。をかしと思ひたるに、藤宰相の童には、赤色の汗衫をきせ、下仕の唐衣に、青色を著せたる程、おしかへしねたげなり。宰相中將のも五重の汗衫、尾張は蒲萄染を三重にてぞ著せたる。柏皆濃き淡き、心々なり。侍從宰相の五節の局、宮の御前、たゞ見渡すばかりなり。立蔀の上より、簾のはしも見ゆ。人の物いふ聲もほのかに聞ゆ。かの弘徽殿の女御の御方の女房なむ、傅にてあるといふ事をほのききて、「哀れ昔ならしけむ、百敷を、物のそばに居隱れて、見るらむ程も哀れに、いざいと知らぬ顔なるは惡し。言ひとつ言ひ遣らむ。」など定めて、「今宵かいつくろひいづかたなりしぞ。」「それ。」など宰相中將宣ふ。源少將も同じ事かたり給ふ。「猶清げなりかし。」などあれば、御前に扇多く候中に、蓬萊つくりたるを、箱の蓋に廣げて、日かげをめぐりてまろめおきて、その中に螺鈿したる櫛どもを入れて、しろいものなどさべい樣に入れなして、おほやけざまに顔しらぬ人して、「中納言の君の御局より、左京の君の御前に。」といはせて、さし置かせつれば、「かれ取入れよ。」などいふは、かの我が女御殿より賜へるなりと思ふなりけり。又さ思はせむとたばかりたる事なれば、案にははかられにけり。薰物を立文にして、紙に書きたり。

○しろいもの　日陰
○おほやけざま云々　宮中で餘り親の知れてない人。
○女御殿　義子。
○案には　推量通り
○薰物を立文にして　捻文に薰物を卷き籠め。
○多かりしの歌　後拾遺集雜部。豐明節會に仕へた多くの宮人中特別日陰蔓を飾りし左京がめでたい
○かの局　左京の局
○をみの夜　豐明節會に小忌衣を著る夜
○青摺　山素摺。
○齋院　選子。
○神代の歌　後拾遺集雜部。すれる衣は青摺の衣。
○權中將　敎通。
○殿　道長。

多かりし豐の宮人さしわけてしるき日かげをあはれとぞ見し

かの局には、いみじうはぢけり。宰相も、たゞなるよりは心苦しう思しけり。をみの夜は宰相の五節に、童の汗衫、おとなの傅に、みな青摺をして赤紐をなむしたりけるといふことを、後に齋院に聞召して、をかしうも思召して、召したりければ、御覽じて、げにいと今めかしう思召して、青き紙の端に書きて、袂に結びつけて返させ給へり。

神代よりすれる衣といひながらまた重ねてもめづらしきかな

かくて臨時の祭になりぬ。使には、この殿の權中將出で給ふ。その日は、内の御物忌なれば、殿も上達部も、舞人の君達も、皆夜居に籠り給ひて、内わたり今めかしげなる所々なり。殿の上も坐せば、御乳母の命婦も、をかしき御遊びに目もつかで、使の君をひとへ

○この君　敦通。
○ありし箱の蓋　左京に贈つた箱の蓋。
○泥　金銀の粉末を膠の液で溶かした物
○葦手　文字を葦の生えた様に書く事。
○日かげ草の歌　後拾遺集賀部。其の夜は日除蔓を挿した人人の鬘かしく過つて我が億に物を賜ひしが今宵は内の使に奉る故眞澄鏡の如く明らかだから受納されたし。
○あらまし事　敦康親王を立坊する事。
○ことなる事なき人　敦康親王を指す。
○いふ　夢占にいふ
○あいなだのみ　あてにならぬ頼み。

にまほり奉りたり。かくてこの臨時の祭の日、藤宰相の御隨身、ありし箱の蓋を、この君の隨身にさしとらせていにけり。ありし箱の蓋に、白銀の草子箱をするたり。鏡入れて、沉の櫛、白銀の笄を入れて、使の君の鬢かき給ふべき具とおほしくてしたり。この箱の内に、泥にて葦手を書きたるはありし返しなるべし。

日かげ草かゞやくほどやまがひけむますみの鏡くもらぬものを

しはすにもなりぬれば、月日の數も殘りすくなき哀れなり。花蝶といひつる程に、年もくれぬ。かくて若宮の、いと物あざやかにめでたう、山の端よりさし出でたる望月などのやうに坐すを、帥殿の渡りには、胸つぶれいみじう覺え給ひて、人知れぬ年頃の御心の中のあらまし事どもも、むげに違ひぬるさまに思されて、「猶この世には、人わらはれにて止みぬべき身こそあめれ。淺ましうもあるかな。珍らかなる夢など見てし後は、さりとも頼もしう、ことなる事なき人の例のはて見では、などこそはいふなれば、さりともとのみ、その儘に精進齋忌をしつゝあり過し、ひたみちに佛神をたのみ奉りてこそありつれ。今はかうにこそあめれ。」と、御心の中の物なげきに思されて、「あいなだのみにてのみ世を過さむは、いとをこがましき事など出で來て、いとゞ生けるかひなきありさまにこそあべかめれ。如何すべき。」など、御叔父の明順、道順などにうち語らひ給へば、「げに世の有樣は、さのみこそ坐すめれ。さりとて、又如何はせさせ給はむとする。たゞ御命だに無事にて

○攀緣し　俗事に引かれ。
○中納言、僧都の君　隆家、隆圓。
○あさはかに　考へが淺薄で。
○この殿　伊周。
○宮　彰子。
○内に昔云々　昔は皇子皇女五六歲までも御對面なき事は上文に見ゆ。
○この一の宮云々　敦康親王に御對面の遲かつた事も上文にある。

坐さば、とこそは頼み聞えさすれ。」など、哀れなることどもを、打泣きつゝ聞えさすれば、殿も、「かくて、つくづくと罪をのみつくり積むも、いとあぢきなくこそあべけれ。物の因果知らぬ身にもあらぬものから、何事を待つにかあらむと思ふに、いとはかなしや。猶今は出家して、しばし行ひて、後の世の頼みをだにやと思ふに、ひたみちに起したる道心にもあらずなどして、山林にゐて、經を讀み行をすとも、この世の事どもを思ひ忘るべきやうもなし。さて萬に攀緣しつゝせむ念誦讀經は、かひあらむとすらむやはと思ふに、また得思ひたたぬなり。」などいひ續けさせ給ふ。いみじう哀れなる事なりかし。中納言、僧都の君なども、世を同じう思しながら、あさはかになか〳〵心安げに見え給ふ。この殿ぞ、萬に世と共に思し亂れたる。世のうさなめれば、いとゞ心苦しうなむ。

かかる程に年かへりぬ。寛弘六年になりぬ。世の有樣常のやうなり。若宮いみじう美しう生ひ出でさせ給ふを、上、宮の御中に、ゐて遊ばせ奉らせ給ひては、御門の宣はする、「猶おもへど、内に昔稚き子どもをあらせずして、宮たちのかく美しうなどあらむを、五つ七つなどにて、御對面とてのゝしりけむこそ、今の世に、萬の事の中に、いと堪へ難かりける事にありけれ。かう見ても〳〵あかぬものを思ひやりつゝ、明け暮さむは戀しかべい事なりや。この一の宮をこそ、いと久しう見ざりしか。有樣を人づてに聞きて、けしからぬまで床しかりしこと。」など、打語らひ聞えさせ給ふも、いとめでたし。かかる程に正

○その儘に云々　御産後其の儘幾日も經水がなかつたのに

○事の坐す　御懐妊の事。

○さこそはあれ　必ず然らん。

○あり〳〵て　結局

○氣色だち　様子に現はれて。

○さやうの御氣色　御懐妊事實の様子。

○たゞなるよりは　御懐妊を聞いた後は

○同じ筋云々　同じ藤氏で女御を奉りしに彰子のみ寵幸あるは恥かしい前世の因縁。

○殿の三位殿　賴通

○中宮の御祈り　中宮御産の祈り。

○尚侍の殿　妍子。

月もくれぬ。宮その儘に、この月頃せさせ給ふ事なかりしに、十二月二十日の程にぞ、唯しるしばかり御覽じたりける儘に、今年かう今までせさせ給はねば、猶かの折の御名殘にやと思しもよらぬに、去年のこの頃の御心地ぞせさせ給ひける。いかなりけるにかと思召す程に、侍ふ人々も、「又事の坐すべきにこそ。」とさゝめき聞えさすれば、かたへは、「いつの程にかさ坐さむ。」といふものあり。又あるは、「さやうのものぞ、又さし續き、同じ様にて出で給へる事は、さこそはあれ。あり〳〵て、いかにめでたからむ。」など申し思へり。殿も上も、皆聞召して、氣色だち思召したり。かくいふ程に、三月にもなりぬれば、誠にさやうの御氣色になりはてさせ給ひぬ。殿の御有様、えもいはぬ様なり。かくいふほどに、自ら世にも漏り聞えぬ。年ごろの女御たち、たゞなるよりは物恥かしう思し知るべし。右の大臣、内の大臣、「こはかかるべき事かは。われらも同じ筋にはあらずや。かう殊の外なる恥かしき宿世なり。」と思さるべし。三月つごもりに出でさせ給ひなむとあれど、御門、いとあるまじき御事に聞えさせ給へば、しばしは過させ給ふ。かかる程に、殿の三位殿、左衞門督にならせ給ひにけり。中宮の御祈りは、猶里にてと思し急がせ給ひて、四月十餘日の程に出でさせ給ふ。内には、いかにおぼつかなう、此の度は、若宮の御戀しさへ添ひて、いぶせく思し亂れさせ給ふ。さて京極殿に出でさせ給へれば、尚侍の殿、若宮を、いつしかと待ち迎へ見奉らせ給ふ。その後御乳母たちは、たゞ御乳參る程許りに

○何れのふしかは云云　前年にはどんな新禊修法もし殘すべきかはと思ひ出しては色々されたから。

○その儘に　前年通りに。

○男女の御有様云々　皇子皇女何れでもよく、強ひて皇子を望まないが。

○さしならはせ云々　又皇子であられる心強さは此の上ない

○四の御方　爲光女

○かれをもがな　四の君をも得たい。

○殿の上ぞ云々　倫子が四の君を懇にしたので道長も恥かしと思ひつゝも宿世で斷念し難かつた。

○けしきだち云々　壻取りせんと氣色ばむ。

○中務の宮　具平親王。

○麗景殿女御　莊子

○北の方　具平の。

○母上　中姫君の母

○故源帥　高明。

○その姫宮　隆姫。

○かたほ　不足。

て、唯かんの殿抱きうつくしみ奉らせ給へば、御乳母たちも、いと嬉しき事に思ひ聞えさせたり。中宮の御祈りどもさきの如し。萬しのこさせ給ふ事なし。何れのふしかはと思し出づる御有様なりしかば、さき〳〵の僧ども、同じ様の御祈りにおきてさせ給へば、その儘に違はぬ事どもを仕うまつる。こたみは、男女の御有様、あながちなるまじけれど、猶さしならばせ給はむ程のたけさは、こよなかるべければ、同じさまを思し志すべし。かの花山院の四の御方は、院失せさせ給ひにしかば、鷹司殿に渡りたまひにければ、殿聞召して、かれをもがなとは思召しけれど、思しもたたぬ程に、殿の上ぞ常におとなひ聞えさせ給ひけれども、いかなるべい事にか思し絶ち難かりけり。かかる程に、殿の左衞門督を、さべき人々いみじうけしきだち聞え給ふところ〳〵あれども、まだともかうも思召し定めぬ程に、六條の中務の宮と聞えさするは、故村上の先帝の御七宮に坐す。麗景殿の女御の御腹の宮なり。北の方は、やがて村上の四の宮、爲平の式部卿の宮の御中姫君なり。母上は故源帥の大臣の御女の腹なり。かかる御中より出で給へる女宮三所、男宮二所ぞ坐す。その姫宮、えならず傅き聞えさせ給ふ。聊かかたほなる事もなく物清き御なからひなり。中務の宮の御心もちゐなど、世の常になべてに坐さず。いみじう御才賢うおはする餘りに、陰陽道も、醫師の方も、萬に淺ましきまでたらはせ給へり。作文和歌などの方、世に勝れめでたう坐す。心憎く恥かしき事かぎりなく坐す。その宮、この左衞門督殿

○男は妻がらなり　男は妻の素性によりて人品の善惡分る。
○内など云々　入内さして女御后にもと思つたが。
○薫衣香　懸香で甲香丁子香等十種を煉り合はせて作る。
○御所あらはし　結婚披露。露顯。
○殿の御前　道長。
○御しな云々　妻柄によつてめでたく見える許りでもない。
○宮　具平親王。
○六條　具平の邸。
○夜行の夜　陰陽道でいふ百鬼夜行の夜
○ありあふ　出會ふ
○上つ方云々　北方の京極殿近くに然るべき堺の邸を作らん
○本意　出家の事。

を志し聞えさせ給へば、大殿聞召して、「いとかたじけなき事なり。」と、畏まり聞えさせ給ひて、「男は妻がらなり、いとやんごとなきあたりに參りぬべきなめり。」と聞え給ふ程に、内々に思し設けたりければ、今日明日になりぬ。さるは、内などに思し志し給へる御事なれど、御宿世にや思し立ちて、壻とり奉らせ給ふ。御有樣いと今めかし。女房二十人、童下仕四人づゝ、萬いといみじう、奥深く心憎き御有樣なり。今の世に見え聞ゆる香にはあらで、實にこれをやいにしへの薫衣香などいひて、世にめでたきものにいひけむは、このかをりにやとまで、おしかへし珍らしう思さる。姫宮、御年十五六許りの程にて、御髪などかんの殿の御有樣に、いとよう似させ給へる心地せさせ給ふに、めでたき御容貌と推し量り聞えさせ給ふべし。中務の宮、いみじう御氣色愚かならず、哀れに見えさせ給ふ。かくて日頃ありて、御所あらはしなれば、御供に參るべき人々、皆殿の御前擇り定めさせ給へり。その夜の有樣、聊か、心もとなき事なく、しつくさせ給へり。男君の御志の程、有樣のめでたさ、御しなほどによるわざにもあらずのみこそはあめれ。されど、この御なからひいとめでたし。宮、いとかひありて思し見奉らせ給ふ。六條にあけくれの御歩きも、路の程などに、夜行の夜なども、おのづからありあふらむ、いと後めたき事なりとおぼして、上つ方に、さべき御樣にとおきて聞えさせ給ふ。中務の宮、今は心安くなりぬるを、今だにいかで本意遂げなむと思しならせ給ふ。事に觸れてやんごとなき御有樣をだに、さ

○宣耀殿　娍子。
○あべいこと　妍子が三條院に參るは當然の事。
○宮　三條院。
○いとおろか云々　愚かにも春宮を慕へどそれが妍子入内の故障となるべきでないから假令卑しき人でも此の場合とやかくいふべきでない。
○若宮を云々　後一條院呪詛の事。
○さべうて生まれ給へらば　因緣あつて生まれ給へば。
○四天王　持國、廣目、增長、多聞。

べきをりふし、珍らしき節會などには、いと出し奉らまほしうのみ、おほやけに思召さる事、こたびのみにあらねど、すべてさやうに思しかけさせ給はず、世に口惜しき事になむ。かくてかんの殿、春宮に參らせ給はむ事もいと近うなりて、急ぎ立たせ給ひにたり。かく參り給ふべしとある事を、宣耀殿には、あべいことの、今までかかる事を思召せば、ともかくも思し宣はせぬに、「いと怪しうも思し入れぬかな。」と、侍ふ人々聞えさすれど、「今はたゞ、宮達の御あつかひをし、その隙には、行ひをとこそ思へ。宮の御ために、いとほしき事にこそあれ。さやうならむ事こそ善かべかめれ。」など、「いとおろかに、猶思ひ忍び給へど、それにさはらせ給ふべき事にもあらぬものから、唯怪しき人だに如何は物はいふ。」と、ありがたう見えさせ給ふ。

かくて中宮の御事のかく坐せば、しづ心なく、殿の御前思召すほどに、はかなく秋にもなりぬ。二月より、さ坐せば、十一月にはと思召したれば、いと物騒がしうて、かんの殿の御參り、冬になりぬべう思召しけり。かかる程に、帥殿のわたりより、若宮をうたて申し思ひ給へる樣の事、この頃出できて、いと聞き憎き事多かるべし。まことにしもあらざらめど、それにつけても、怪しからぬ事ども出で來て、帥殿、いとゞ世の中すゞろはしう思し歎きけり。「明順がしる事なり。」など、大殿にも召して仰せられて、「かくあるまじき心なもたりそ。かく稚う坐すとも、さべうて生まれ給へらば、四天王守り奉り給ふら

○おぼろけ云々　若宮は格別の幸福なれば呪詛等には負けず
○まうと達　卿等。
○我ともかくも云々　自ら天罰を受けん
○をり心うくなりぬる　をり悪い時にある。
○御だい　御食物。
○物を忙しう参り　心あわたゞしく食事をせられ。
○まうけ　書寫し。
○人よりけに　他人に勝りて。
○なりみちたり　殿ゞ聲殿中に鳴り満つ
○その方　物怪。
○御子　後朱雀院。
○堅紋　浮紋の反對で織物の紋を絲を浮かさず沈めて固く織つた物。

む。たゞの童だに、人のあしうするには、もはら死なぬわざなり。況んや、おぼろけの御果報にてこそ、人の言ひ思はむ事によらせ給はめ。まうと達は、かくては天の責めを蒙りなむ。我ともかくもいふべき事ならず。」と許り、御前に召して宣はせけるに、いといみじう恐ろしう辱しと、畏まりて、ともかくも得述べ申さで罷り出でにけり。その後やがて心地悪しうなりて、五六日許りありて死にけり。これにつけても、帥殿、世を慎ましきものに思しまさる。同じ死といへども、明順も、をり心うくなりぬる事を、世の人口安からずといひ思ひけるに、帥殿、いかにか世をあり憎く、憂きものになむ思し亂れければにや、御心地例にもあらずのみ思されて、御だいなども参らぬにはあらで、なか〳〵常よりも、物を忙しう参りなどせさせ給ひけるに、例ならぬ御有樣を、上も殿も、恐ろしき事に思し歎きけり。この年頃御歩きなかりつる程に、古今、後撰、拾遺などをぞ、皆まうけ給へりける。それにつけても、猶人よりけに、殊に御才の限りなければなりけり。かかる程に、中宮の御事、御修法、御讀經、萬の御祈り、はかなき事ども、先の例を思しおきてさせ給ふに、十一月二十五日の程に、御氣色ありて、惱ましけに思召したり。例の聞き憎きまでなりみちたり。されど御もののけなどおとなし。その方の心のどかに坐すも、限りなき御祈りのしるしなるべし。いみじく無事に、程なく御子生れ給ひぬ。萬よりも、又後の御事との、しらせたまふも、程なくてものせさせ給ひつ。いとめでたき事と思召し喜びたる

○唐綾　綾を浮織にせる綸子の類。
○白妙の鶴の毛衣　眞白い鶴の毛で作つた衣。女房の白裝束に喩ふ。
○同じ人　中原致時
藤原廣業、大江擧周
○ましやらむ方なし　言ひ盡し難し。
○まさざま　勝りたる樣。
○事なれぬ云々　萬事慣れたる事故省略せず。
○水勝に　水を澤山召上り。
○うちはへ云々　打續き得意の時代は。
○松君の少將　道雅
○あらぬ世　替つた世の中。
○若宮、今宮　後一條、後朱雀。
○今内裏　假り皇居

に、さきに劣らぬ男御子さへ生まれ給へるものか。殿の御前をはじめ奉り、いとかかる事には、餘り淺ましう、空言かとまでぞ思召されける。内にも聞召して、いつしかと、御劔はあり。すべて何事も、唯初めの例を、一つ違へずひかせ給ふ。女房のしろ絹など、この度は冬にて、浮紋、堅紋、織物、唐綾など、すべて言はむ方なし。この度は、袴をさへ白うしたれば、かくもありぬべかりけりと、白妙の鶴の毛衣めでたう、千年の程推し量られたり。御湯殿の有樣など、初めのにて知りぬべければ、書きつゞけず。御書の博士も、同じ人参りたり。すべて世にいみじうめでたき御有樣に、ましやらむ方なし。三日五日七日夜などの御作法、中々まさざまにこそ見ゆれ。この度は事なれぬと、事そがせ給ふ事なし。帥殿は、日頃水勝に、御だいなども、如何なる事にかとまで聞召せど、怪しう、ありし人にもあらず細り給ひにけり。御心地もいと苦しう惱ましう思さる。うちはへ御ときにて過させ給ひし時は、いみじうこそ太り給へりしか。今は例の人の有樣にて過させ給へど、かかる御事を、いかなる事にかと、心細しと思さるゝ儘に、松君の少將、何事にも、人より勝りて思さるゝも、いかゞはならむとすらむと、哀れに心苦しう思し歎くも、ことわりにいみじう、あらぬ世を、哀れにのみ思さるゝも、げにとのみ見え聞ゆ。内には、若宮の御戀しさも、今宮の御床しさも、猶疾く入らせ給へとのみ聞えさせたまふ。内も燒けにしかば御門は、今内裏に坐す。東宮は、枇杷殿に坐す。

○淺ましう　儀式の仰山なるをいふ。
○人のめこ　人の妻又は子。
○ほの　ほのかに。
○この御前たち　妍子、彰子、威子の姉妹達。
○この御前　妍子。
○内わたり　批杷殿
○この御參り　妍子の御參りの有樣。
○その折　中宮入内の時。
○またなきもの　此の上もなきもの。
○こよなき云々　妍子の餘り若き御年。
○御具　妍子の調度
○我も〳〵云々　競爭的に作つた道具故
○宣耀殿に　宣耀殿にはの意で寮繪云々に續く。

十二月になりぬれば、かんの殿の御參りなり。日頃思し志しつる事なれば、おほろけならで參らせ給ふ。いと淺ましうなりぬる世にこそあめれ。年頃の人のめこなども、皆參り集まりて、おとな四十人、童六人、下仕四人、かんの殿の御有樣聞え續くるも、例の事めきて同じ事なれども、又いかゞは、少しにてもほの聞えさせぬ樣はあらむな。御年十六にぞ坐しける。この御前たち、いづれも御髮めでたく坐す中にも、この御前すぐれ、いとこちたきまで坐すめり。東宮、いとかひありて、いみじうもてなし聞えさせ給へり。内わたり、いとゞ今めかしさ添ひぬべし。はかなき御具どもも、中宮の參らせ給ひし折こそ、耀く藤壺と世の人申しけれ。この御參りまねぶべき方なし。その折よりこなた、十年許りになりぬれば、いくその事どもかはりたる、その程推し量るべし。かくて參らせ給へれば、春宮、むげにねびはてさせ給へれば、いと恥かしうもやんごとなくも、樣々御心遣ひ疎かならず。年頃宣耀殿を、またなきものに思し見奉らせ給ひつるに、淺ましうこよなき程の御齡なれば、たゞ若御姫宮たちを、傳きする奉らせ給へらむやうにぞ思されける。日頃にならせ給ふ儘に、やう〳〵馴れ坐す御氣色も、いとゞえもいはず美しう思ひ聞えさせ給ふ。夜ごとの御宿直、はた更にもいはず。今は唯この御方にのみ坐す。御具どもを、片端よりあけひろげて、御目とゞめて御覽じわたすに、これは〳〵と、見所ありめでたう御覽ぜらる。御櫛の箱の内のしつらひ、小箱どものいれものどもは更なり。殿の上、

○昔の宣耀殿の女御芳子。
○今の宣耀殿の女御　娍子。
○これ　妍子の櫛宮
○御口筆して云々　御口づからも仰せられ又筆で樣樣を書いて命ぜられて。
○時世　世態。
○めうつり　見て心の迷ふ事。
○殿　道長。
○爲氏、經則　二人共天暦頃の繪の名人
○色紙形　色紙の形を屏風障子に畫いて彩色しそれに詩歌を書くもの。
○そのかみ云々　古い物だが只今書いた樣に腰にもまみれず
○侍從中納言　行成
○その御用意云々　春宮の御目に觸れる事は格別用意す。

君たちなどの、我も〳〵と挑みしたまへるどもなれば、いみじう興ありて御覽ず。中宮の御參りも、かやうにこそは、思しおきてさせ給ふめりしか。宣耀殿に、故村上の先帝の、かの昔の宣耀殿の女御にし奉らせ給へりけるには、卷繪の御櫛の箱一具は傳はりて、今の宣耀殿の女御の御方にぞ候を、その内を、いみじう御覽じ興ぜさせ給ひしを、これに御覽じ合はするに、かれは殊の外に古代なりけり。さるは村上の先帝の、樣々の御心おきて、この世の御門の御心よりも勝れさせ給へりけるも、わが御口筆して仰せ給ひて、造物所のものども御覽じては、直しせさせ給へるを、これは猶いとこよなう御覽ぜらるゝに、時世に從ふめうつりにやと、御心ながら思召せど、猶これはいとめでたければ、殿の御心ざま淺ましきまで、何事にも、いかでかくとぞ思召しける。その御具どもの屏風どもは、爲氏經則などが書きて、道風こそは色紙形は書きたれ。いみじうめでたしかし。そのかみのもなれど、只今のやうにちりばまず、あざやかに用ゐさせ給へりしに、これは弘高が書きたる屏風どもに、侍從中納言の書き給へるにこそはあめれ。いづこかは、これに劣り勝りのあるべきなど、御心の中に思召し餘りては、殿や左衞門督などの參り給へると宣ひ定めさせ給へるにつけても、御年などねびさせ給ひにたれば、何事も見しり、物のはえ坐すにこそ、いと恥かしう、いとゞ何事につけても、その御用意心ことなり。そこらの女房、えもいはぬ形裝束にて、えならぬ織物の唐衣を、おどろ〳〵しき大海の摺裳ども、引掛け

○この御方　妍子。
○心懸想　心づくろひ。
○御衣の匂ひかをり　東宮の衣の色合の美しさやたきしめた香。
○この御前　三條院
○らう〳〵しう　物に巧者で。
○よそ人も近きも　他人も近侍者も。
○宮　春宮。
○おぼつかなからず　わたり　心安き樣に彼是と歩き。
○御封なども云々　伊周は准大臣封戸を給はりしかど。
○國々の守も云々　國守達も確に滯りなく御封のあがり物を奉るならはよけれど然らざる故

渡して、扇どもをさし隱し、打羣れ〳〵居ては、何事にかあらむ、うち言ひつゝさゞめき笑ふも、恥かしきまで思ほされて、この御方に渡らせ給ふ折は、心懸想せさせ給ひけり。はかなう奉りたる御衣の匂ひかをりなども、宣耀殿より、めでたうしたてて奉らせたまひけり。御門春宮と申すは、若くいわけなく坐すだに、心ことにいみじきものに、人おもひ聞えさするに、まいてこの御前は、御年もおとなびさせ給ひ、御有樣などもなべてならず、いとをかしうらう〳〵しう坐せば、いと恥かしげなる事なむ多く坐すに、かんの殿も、こと御方々よりも、はかなく奉りたる御衣の袖口かさなりなどの、いみじくめでたう坐せば、殿の御前も、いとゞめでたうのみ、重ね聞えさせ給ふめり。宣耀殿には、よそ人も近きも、「いかに思召すらむ、やすくは大殿籠るらむや。」など聞ゆれば、「年頃かかるべい事の、かからざりつれば、宮の御ために、いと心苦しく見奉れば、今なむ心安く見奉る。」など宣はせて、御裝束を、明暮めでたうしたてさせ給ひ、御薫物など、常に合はせつつ奉らせ給ひける。宮は、唯母后などのやうに思ひ聞えさせ給へるも、げにとのみ見えさせ給ふ。殿の上は、中宮とこの女御殿とを、おぼつかなからずわたり參らせ給ふ程も、いとあらまほしうなむ。

年もかへりぬ。寛弘七年とぞいふめる。萬例の有樣にて過ぎもていくに、帥殿は、今年となりては、いとゞ御心地重りて、今日や〳〵と見えさせ給ふ。何事も、月頃しつくさせ

○嬉宮二所　大姫君は頼宗の室、次は上東門院に仕へ帥殿の御方。
○藏人の少將　道雅
○なめすゑ　並べ置き。
○北の方　重光の女
○今の世の事　當世の習ひとして。
○それはたゞ他事ならず　我は宮仕も男持つ事も好まずそは別事にあらず。
○こともよう云々　甘言を以ていひより迎へられ授參りては
○故殿の云々　伊周殿の然々あつたから斯樣であるといふ樣
○母　我が北の方。
○おのがある折云々　我が存命中此の君達を先に死なしめよ
○具　配偶。

給へれば、今はいかゞすべきと思し歎き、さるは昨年よりは、御封なども、例の大臣の定に得させ給へど、國々の守もはかゞ〳〵しく、すがやかに奉らばこそあらめ、いといとほしげなり。御心地いみじうならせ給へば、この姫君二所、藏人の少將とをなめすゑて、北の方に聞え給ふ。「おのれなくなりなば、いかなる御擧動どもをかし給はむずらむ。世の中に侍りつる限りは、とありともかかりとも、女御后と見奉らぬやうはあるべきにあらずと、思ひとりて傅き奉りつるに、命堪へずなりぬれば、いかゞし給はむとする。今の世の事として、いみじき御門の御むすめや、太政大臣のむすめといへど、皆宮仕に出で立ちぬめり。この君たちを、いかにをかしと思ふ人多からむとすらむな。それはたゞ他事ならず、おのがための末の世の恥ならむと思ひて、男にまれ、何の宮かの御方よりとて、こともよう語らひよせては、故殿の何とありしかば、かかるぞかしと、心をつかひしかばなどこそは、世にもいひ思はめ。母とておはする人はた、この君だちの有樣を、はか〳〵しう後見もてなし給ふべきにあらず。などて世にありつる折、佛神にも、おのがある折、先にたて給へと、祈り請はざりつらむと思ふが、くやしき事、さりとて尼になし奉らむとすれば、人きき物狂ほしきものから、あやしき法師の具どもになり給はむずかし。哀れに悲しきわざかな。まろが死なむ後、人笑はれに、人の思ふ許りのふるまひ有樣おきて給はば、必ず恨み聞えむとす。ゆめ〳〵まろがなからむ世の面伏、まろを人にいひ笑はせ給ふなよ。」など、

○とりわきいみじき　云々　格別愛したが
○魂　心。
○みじかし　卑し。
○物覺えぬ追從　思ひもよらぬへつらひ
○ありめぐらせじ　存在を許さじ。
○その定ならば　左様の事であらば。
○君　中納言隆家。
○人　隆家を指す。
○一品宮、一の宮　脩子、敦康。
○色あひ　顏色。
○濃き袴　濃紫の袴
○宿德　沈著で重々しい事。
○もの〳〵しう　物體らしく。

泣く〳〵申し給へば、大姫君小姫君、涙を流し給ふも愚かなり。唯呆れておはす。北の方も、いらへ給はむ方もなく、たゞよゝと泣き給ふ。松君の少將などを、とりわきいみじきものにいひ思ひしかど、位もかばかりなるを、見置きて死ぬる事、「我に後れては、如何せむとする。魂あれば、さりともとは思へども、いかにせむとすらむな。いでや、世にあり煩ひ、官位人よりはみじかし、人と齊しくならむなど思ひて、世に從ひ、物覺えぬ追從をなし、名簿うちしなどせば、世に片時ありめぐらせじとす。その定ならば、唯出家して、山林に入りぬべきぞ。」など、泣く〳〵言ひ續け給ふを、いみじう悲しとおもひ惑ひ給ふ。げにことわりに、悲しとも愚かなり。中納言殿、哀れに聞き惑ひ給ひて、「何か、かくは思し續くる。實に皆さる事どもには侍れど、などてか、いと殊の外には誰も思はせむ。」などいみじう泣き給へば、「君をこそは、年頃子のやうに思ひ聞え侍りつれど、かく我も人も、はか〴〵しからでやみぬる事の、あはれに口惜しき事、道雅を、猶能く言ひをしへ給へ。」など、萬に言ひ續け泣き給ふ。一品宮、一の宮も、この御心地を、如何に〳〵と思し歎く程に、正月二十日餘りになれば、世には司召とて、馬車の音もしげく、殿ばらの内に參り給ふなども聞ゆれば、哀れにいみじ。

大姫君は、只今十七八許りにて、御髮濃やかにいみじう美しげにて、長に四五寸許り餘り給へり。御容貌有樣、愛敬づき、氣近うらうたけに、色あひなど、いみじう美しうて、

○なよゝか　なよなよと袿えた樣子。
○ついたちの御裝束　元日家の禮儀に著る裝束。
○母北の方　重光女
○おほどか　大やう
○あべきかぎり　理想的で。
○香　香色。薄赤く黃ばんだ色。
○狩襖　狩衣。表香色裏青き羅を重ねた狩衣の意。
○內衣　袙。
○ふさりこちたう　仰山に太り。
○引入れ　被りて。
○しびら　裙。上裳で男は袴の上女は唐裳の上に著る。
○かごとばかり　僅か許り。
○しめり　しをれ。

白き御衣どもの上に、紅梅の堅紋の織物を著給ひて、濃き袴を著給へる、哀れにいみじう美しげなり。中姫君、十五六許りにて、大姫君よりは、少しおほきやかにて、いと宿德にものゝしう、あな清げの人やと見え給ひて、御髮は、長に三寸許り足らぬ程にて、いみじうふさやかに、賴もしげに見えたり。色々の御衣のなよゝかに皆重なりたる、ついたちの御裝束どもの、なえたる程と見えたり。いみじう哀れに美しげなる御容貌どもに、母北の方、さゝやかにおほどかなる樣にて、只今三十餘りばかりにぞ見え給ふ。それも又いと清げにておはす。藏人の少將、いと色あひ美しう、顏つき清げに、あべきかぎり、繪に書きたる男のさまして、香に羅の青き襲ねたる狩襖に、濃紫の堅紋の指貫著て、紅の內衣などぞ著たまへる。色あひ何となく匂ひ給へるに、ましていたう泣き給へれば、面赤み給へり。帥殿も、容貌身の才、世の上達部に餘り給へりとまで言はれ給ひつるが、年頃の御物思ひに、ふとりこちたう坐しつるを、この月頃惱み給ひて、やゝうち細り給へるが、色あひなどの、更にかはり給はぬをぞ、人々恐ろしき事に聞ゆる。この姫君たちのおはすれば、忝がりて、御烏帽子引入れて臥し給へり。若やかなる女房四五人ばかり、薄色のしびらども、かごとばかりひき結ひつけたり。何事もしめり哀れにをかし。遂に正月二十九日に失せ給ひぬ。御年三十七にぞおはしける。この姫君たち、少將など、さりともと思しけるに、淺ましう物も覺え給はず、唯後れじ〳〵と泣き惑ひ給へど、かひある事ならば

○程　年齢。
○御頼み　一の宮の事を御頼みありて。
○かうにこそ　萬事休す。
○この殿　伊周。
○いふかひなくては　腑甲斐なくて失せ給ひけりの意。
○自らの事云々　只自分一身の事だけになつたので。
○遠資　兼資の初めの名。
○小一條　濟時。
○殿も上も　濟時夫妻。
○女御殿　御姉宣耀殿の女御娍子。
○帥宮に聞えつけ　敦道に語らひつけ。
○南院　六條北、烏丸の西にあり。

こそあらめ。いといみじう、哀れとも愚かなり。只今いとかくしも坐すまじき程に、かくはかなき樣になり給ひぬれば、年頃さりともの御頼みに、萬心長閑に思し渡りけるを、中宮の若宮、今宮、さし續きて、月日の如くにて光りいで給へるに、すべてすぢなう、今はかうにこそと思しつるに、御病もつき、御命も縮めてけるにや。この殿の君達はさらなり、中納言や、頼親の内藏頭、周頼の中務大輔などいふは、この御兄弟ども、哀れに思ひ歎き給へり。一品宮、一の宮などの御氣色も、疎かなるべきにもあらず、思ひやるべし。哀れにいみじき世の中なり。「いとゞいふかひなくては。」などぞ、人も聞えける。中納言いとゞ世の中を憂きものに思したるにつけても、僧都の君とうち語らひ給ひつゝ、猶世を捨てまほしうのみ思し語らひ聞え給ふ。うき世の中に、今はたゞ、自らの事になりぬる心地のみすれば、いかにせましと思すに、遠資が女の腹の、女君達の哀れさに、萬をえすて給はぬ、哀れなり。小一條の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、ともかうもなさで失せ給ひにしかば、いかで女御殿に劣らぬ樣の事をなど、思しかまへて、春宮の御弟の、帥宮に聞えつけ給へりしかば、南院に迎へ給へりしかど、年月にそへて、御志淺うなりもていきて、和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をば、殊の外に思したりしかば、居わづらひて、小一條の祖母北の方の御許に、かへり給ひにしぞかし。されば春宮も、宣耀殿も、この事を、我が口入れたらましかば、いかに聞き憎からまし。知らぬ事なれば、

○和泉守道貞が妻　和泉式部。
○祖母北の方　師尹の北の方、濟時の母
○故彈正宮　爲尊。
○うけばり　押張り
○故關白殿　道隆。
○心えぬ　あやしき
○六條宮　具平。
○一條殿　爲光。
○御具　御列の意。
○殿　道長。
○あるべかしうて　あらまほしくて。
○院の御時云々　四君花山院に居た時は御姉妹の事を道長も世話しなかつたが。
○齋院　選子。
○光りいづるの歌　後拾遺集雜部。あふひは祭の裝とあふ日とを掛け日影と續く

心安しとぞ思し宣はせける。御幸福同じ御はらからと見え給はず。和泉をば、故彈正宮もいみじきものに思したりしかば、かく帥殿もうけばり思すなりけり。故關白殿の三の君、帥宮の上も、一條わたりに、心えぬ御樣にてぞおはする。又小一條の中君も、いかゞとぞ人推し量り聞ゆめる。かかる程に、六條宮も失せたまひにしかば、左衛門督殿ぞ、萬、思しあつかひ聞え給ふも本意あり。哀れなる御事なり。まこと花山院かくれさせ給ひにしかば、一條殿の四の君は、鷹司殿に渡り給ひにしを、殿の上の御消息度々ありて、迎へ奉り給ひて、姫君の御具になし聞え給ひにしかば、殿萬におきて聞え給ひし程に、御志いとまめやかに思ひ聞え給ふ。家司なども皆さだめ、眞しうもてなし聞えたまへば、いとあべい樣にあるべかしうて、過させ給ふめれば、院の御時こそ、御はらからたちも知り聞え給はざりしが、この度は、いとめでたくもてなし聞え給へりけり。中宮の若宮、いみじういと美しうて走り歩かせ給ふ。今年は三つにならせ給ふ。四月には、殿一條の御棧敷にて、若宮の物御覽ぜさせ給ふ。いみじうふくらかに、しろう愛敬づき、美しう坐すを、齋院の渡らせ給ふをり、大殿、「これはいかゞ。」とて、若宮を抱き奉り給ひて、御簾をかゝげさせ給へれば、齋院の、御輿の帷子より、御扇をさし出でさせ給へるは、見奉らせ給ふなるべし。かくて暮れぬれば、又の日、齋院より、

光りいづるあふひのかげを見てしかば年經にけるもうれしかりけり

○もろかづらの歌　幼き若宮ながら齋院たる君に逢へるは神の導きならむ。もろかづらは二葉といふ料葵と逢ふ日と掛く
○おほろげの御功德　格別の御善業。
○一の宮　敦明親王
○廣幡の中納言　顯光。
○承香殿女御　元子
○中姫君　延子。
○殿も云々　顯光も若い時から格別世の覺えはなかつたが。
○閑院の大將　朝光
○さばかりにや　延子を世間並に。
○女御　元子。
○父大臣　顯光。
○この宮の上　敦明の室延子。
○たはれ　亂りがはしく。
○高松殿　明子。
○三位中將　頼宗。

御返し、殿の御前、

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらむ

とぞ聞えさせ給ひける。若宮、今宮、うちつゞき走り歩かせ給ふも、おほろげの御功德の御身と見えさせ給ふ。中宮を、殿は、いみじうやんごとなきものに思ひ聞えさせたまへるも、理にこそ。かくて東宮の一の宮をぞ、式部卿宮とぞ聞えさするを、廣幡の中納言は今は右の大臣ぞかし。承香殿の女御の御弟の中姫君に、この宮、壻取り奉り給へり。「いでや古代にこそ。」など思ひ聞えさせ給ふにハ、それさしもあらず、いとめやすき程の御有樣なり。殿も、殊に若くより覺えこそおはせざりしかど、めでたうのゝしり給ひし閑院の大將は、大納言にてこそは亡せたまひにしか。この殿は、かく命長くて、大臣までなり給へれば、いとめでたし。式部卿宮、さばかりにやと思ひ聞え給ひしかども、いと思ひの外に、女君も清げにようおはし、御心樣なども、あらまほしう、何事もめやすく坐しければ、御なからひの志、いとかひある樣なれば、只今は、女御をまたなきものに思ひ聞えさせ給ひし父大臣、この宮の上を、いみじきものに思ひ聞え給へり。宮もいみじう御心の本性たはれたまひけれど、この女君を、只今はいみじう思ひ聞え給へれば、いと思はずなる事にぞ、人々聞えける。かの帥殿の大姫君には、只今の大殿の高松殿腹の三位中將、通ひ聞え給ふとぞいふと、世に聞えたり。あしからぬ事なれど、殿の思しおきてしには違ひたり。

○この御あたり　大姫君。
○おちる　落著き。
○女君　大姫君。
○母北の方　重光女伊周の未亡人。
○この御爲には　中將は母北の方及び中姫君の爲には。
○めやすき程云々　他の女房の如く見苦しくない振舞で宮仕するなら致しもせん
○ぬるが中の夢　古今集哀傷部王生忠季「寢るが中に見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず。」
○二の宮　敦儀親王
○あきたる　闕員。
○御志のある儘に　帝が敦康を愛し給へるによりて。
○次第の儘に　長幼の順序により敦康を儲君にしよう。

中將、いみじう色めかしうて萬の人たゞに過し給はずなどして、御方々の女房に、物宣ひ子をさへうませ給ひけるに、この御あたりにおはしそめて後は、こよなき御心おちるなれど、猶、折々の物の紛れぞ、いと心づきなうおはしける。哀れに志のある儘に、萬にあつかひ聞え給へば、仕うまつる人もうちなき、女君も恥かしきまで思しけり。母北の方、もとより中の君をぞ、いみじく思ひ聞え給へりければ、萬にこの御爲には、疎かなる樣に見え給ひける。中の君をば、中宮よりぞ、度々御消息きこえ給へど、昔の御遺言の片端より破れむいみじさに、只今思しもかけざめれど、めやすき程の御ふるまひならば、さやうにやと、心苦しうぞ見え給ひける。哀れなる世の中は、ぬるが中の夢に劣らぬ樣なり。淺ましきことは、帥宮の、思ひもかけざりつる程に、はかなう煩はせたまひて、失せたまひにしこそ、猶々哀れにいみじけれ。内の一宮、御元服せさせたまひて、式部卿にと思せど、それは東宮の一の宮、さて坐す。中務にても二の宮おはすれば、只今あきたる儘に、今上の一の宮をば、帥の宮とぞ聞えける。御才深う心深く坐すにつけても、上は哀れに、人知れぬ私物に思ひ聞えさせたまひて、萬に飽かず「哀れなるわざかな、かくやはおもひし。」とのみぞ、うちまもり聞えさせたまへる。御志のある儘にとて、一品にぞなし奉らせ給ひける。萬を次第の儘に思召しながら、はかゞしき御後見もなければ、その方にもむけに思したえはてぬるにつけても、返すゞ口をしき御宿世にもありけるかなとのみぞ、

悲しう思召しける。中宮は、御氣色を見奉らせ給ひて、ともかくも世に坐さむ折は、猶いかでこの宮の御事を、さもあらせ奉らばやとのみぞ、心苦しう思召しける。この頃となりては、いかで〳〵疾くおりなばやと思し宣はすれば、中宮、ものを心細う思ほしたり。されど、美しくさしつゞかせ給へる御有様をぞ、頼もしうめでたき事に世の人申しける。

○いかでともかくも　何卒讓位せん。
○さらぬ人　病なき人。
○春宮に御對面云々　御讓位の際は春宮に御對面あるのが習ひである。
○上坐して　一條帝は中宮の方に渡られ
○東宮　三條院。
○床しう　見聞かまほしく。
○若宮云々　敦成親王は彰子から輝かしく生まれた故我が方は厭はしく若宮こそ儲君に立ち給はんの意。
○いでや　いやもう一の宮こそ立坊せん

いはかげ

かくて御門、いかでおりさせ給ひなむとのみ思し宣はすれど、殿の御前ゆるし聞えさせ給はぬほどに、例ならず惱ましう坐して、如何なることにかと思して御慎みあり。中宮もしづ心なく歎かせ給ふほどに、まめやかに苦しう思召さるれば、これより重らせ給ふやうもこそあれと、何事も思しわかざるほどに、いかでともかくもと思召さる。御物怪など様々しげきさまなり。この頃一條院にぞ坐す。夏のことなれば、さらぬ人だに安くもあらぬに、いみじう苦しげに坐すも、見奉り仕うまつる人、安くもあらず歎く。六月七八九日のほどなり。「今はかくておりゐなむと思すを、さるべきさまにおきて給へ。」と仰せらるれば、殿うけたまはらせ給ひて、「春宮に御對面こそは例の事なれ。」とて、思しおきてさせ給ふ程に、春宮には一の宮をとこそ思召すらめと、中宮の御心の中にも思しおきてさせ給へるに、上坐して、東宮の御對面急がせ給ふに、世の人いかなるべい事にかと、床しう申し思ふに、一の宮の御方様の人々、「若宮かくて頼もしういみじき御中より、光りいでさせ給へる、いと煩はしうさやうにこそは。」と思ひ聞えさせたり。又あるひは、「いでや。」など推し量り聞えさせたり。東宮行啓あり、十一日に渡らせ給ふ程、いみじうめでたし。

○一條院云々　一條院では帝の御歎きで將來を心配せるに引きかへて。
○待らねばなむ　理を枉げて二の宮を立てむを補ふ。
○みだり心地云々　朕は快癒しても出家の本望を遂げん。
○さらぬにても云々　出家せずとも世にあり果つべき心地もしない。
○例の人　普通の人
○かの宮　一の宮。
○ひゞき　評判。
○さりともと　次第の儘にと。
○さらでありにしがな　一の宮を立て若宮を次にするやうあれかし。
○かの御心　一の宮の御心。
○泣く〳〵といふばかりに　泣く許りに

一條院にはいかに坐さむとすらむ、とより外の歎きなきに、春宮方の殿上人など、思ふ事なげなるも常の事ながら、世の哀れなる事、唯時の間にぞかはりける。さて渡らせ給へれば、御簾越に御對面ありて、あるべき事ども申させ給ふ。世にはおどろ〳〵しう聞えさせつれど、いと爽かに萬の事聞えさせ給へば、世の人の虚言をもしけるかなと、宮は思さるべし。一位も讓り聞えさせ侍りぬれば、東宮には若宮をなむものすべう侍る。道理の儘ならば帥宮をこそはと思ひ侍れど、はか〴〵しき後見ども侍らねばなむ、大かたの御政にも年頃親しくなど侍りつる男どもに、御用意あるべきものなり。みだり心地おこたるまでも本意遂げ侍りなむとし侍り、またさらぬにてもあるべき心地もし侍らず。」など、樣々哀れに申させ給ふ。春宮も御目拭はせ給ふべし。さて歸らせ給ひぬ。中宮は若宮の御事定まりぬるを、例の人に坐さば、是非なく嬉しうこそは思召すべきを、「上は道理の儘にとこそは思しつらめ、かの宮も、さりともさやうにこそはあらめと思しつらむに、かく世のひゞきより、引違へ思しおきつるにこそあらめ、さりともと、御心の中の歎かしう安からぬこととは、これをこそ思召すらめと、いみじう心苦しういとほし。若宮はまだいと稚く坐せば、おのづから御宿世に任せてありなむものを。」など思しめいて、殿の御前にも、「猶この事いかでさらでありにしがなとなむ思ひ侍る。かの御心の中には、年頃思召しつらむこととの違ふをなむ、いと心苦しうわりなき。」など、泣く〳〵といふばかりに申させ給へば、

○有り難き御事　そなたの言は忝い御事
○さるべき事　道理ある事。
○あべい事云々　將來の事を詳しく仰す
○いな猶云々　次第にこそまでは帝に對する道長の内意。
○さやうならむ御有樣　若宮の立坊。
○一品宮　脩子で一宮と御同腹。
○宮　中宮彰子。
○殿方々云々　道長竊り三條後一條一條の方々に暇もなく參りて世話す。

殿の御前、「實にいと有り難き御事にも坐すかな。又さるべき事なれば、實にと思ひ給べてなむおきて仕うまつるべきを、上坐して、あべい事どもつぶ〳〵と仰せらるゝに、いな猶惡しう思せらるゝ事なり、次第にこそと奏し返すべき事にも侍らず、世の中いとはかなう侍れば、かくて世に侍る折、さやうならむ御有樣も見奉り侍りなば、後の世も思ひなく心安くてこそ侍らめとなむ、思ひ給ふる。」と申させ給へば、又これもことわりの御事なれば、返し聞えさせ給はず。上は御心地の苦しう覺えさせ給ふ儘にも、宮の御前をまつはし聞えさせ給へば、片時立ち去り聞え給はず、いと苦しけに坐す。御讓位六月十三日なり。十四日より御心地重らせ給ふ。若宮春宮に立たせ給ひぬ。世の人驚くべくもあらず、あべい事と皆思ひたりつれど、御惱の程、一の宮の御前立ち去らず、あつかひ聞えさせ給ふも、御心の中推し量られ、心苦しうて、中宮もあいなう御面赤む心地せさせ給ふ。一品宮も萬思し亂れたる御心の中にも一の宮の御事のかかるを、そへ嘆かせ給ふべし。春宮の御事など、すべて宮は何とも覺えさせ給はねば、唯殿方々に御いとまなく、内、春宮、院などに參り定めさせ給ふ程、えもいはず淺ましきまで見えさせ給ひ、御幸福かなとめでたく見えさせ給ふ。

かくて院の御惱いと重らせければ、御髮おろさせ給はむとて、法性寺の座主院源僧都召して、仰せらるゝことども、いみじう悲しとも愚かなり。中宮、我にもあらず涙に沉みて

坐す。一の宮、一品宮など、いみじう思召したり。春宮の御乳母達の思ひたるけしき、今はしもいとめでたし。かくて御髪六月十九日辰の時におろしはてさせ給ひて、あらぬ樣にて坐す。中宮えせきあへさせ給はず、思ひやり聞えさすべし。さてだに無事に坐さば、いとめでたき御有樣なるべき、いみじき一院にこそ坐すべきを、すべて坐すべうも見えさせ給はぬこそいみじけれ。この修法など、今は留めさせ給ひて、一念佛などを聞かばや。」と宣はすれど、只今は同じやうに無事に坐すべき御祈りのみぞある。さりともいとかばかりの御有樣を背かせ給ひぬれば、さりともと賴もしうのみ誰も思召したるに、五つにて春宮に立たせ給ひ、七つにて御位に卽かせ給ひて後、二十五年にぞならせ給ひにければ、今の世の御門の、かばかりのどかに保たせ給ふやうなし。村上の御事こそは世にめでたきたとへにて、二十一年坐しけれ。圓融院の上、世にめでたき御心おきて、類なき聖の御門とさへ申しけるに、十五年ぞ坐しけるに、かう久しう坐しつれば、いみじき事に世の人申し思へれど、御心地の猶いみじく重らせ給ひて、寛弘八年六月二十二日の晝つ方、淺ましうならせたまひぬ。そこらの殿上人、上達部、殿原、宮の御前、一の宮、一品宮、すべて聞えむ方なし。殿の御前えもいはず、いみじき御心地せさせ給ふとも愚かなり。そこらの御修法の壇共毀ち、僧共の物運びのゝしる程、いと物騷がしう、樣々に哀れなる事多かり。內がたはめでたき事を、日のさし出でたる心地したり。この院には、萬只

○あらぬ樣　法體。
○一院　第一の上皇
○坐すべう　生くべく。
○さりとも云々　院は然かあきらめ給へど斯くめでたい有樣を背いて出家したのだから。
○今の世の云々　近代の帝で一條院程長い御在位はない。
○聞えむ方なし　其の歎き申し樣もない
○內がたは云々　三條帝の方はめでたい御踐祚で朝日の昇る樣である。

今はかきくもり、いみじき御有樣共なるに、春宮のいと若う行末遙かなる御程、思ひ參らするにいとめでたし。今年は四つにならせ給ふ。三の宮は三つに坐す。何ともなう紛れさせ給ふもいみじう哀れなり。いみじき御有樣の又限りなきと聞えさすれど、路異にならせたまひぬれば、暫しこそあれ、さてのみはやとて、中宮も御方も渡らせ給ひぬ。御しつらひ樣異にしなして、大燈油近う參りて、さべき人々は遠くのきて侍ふ程などこそは、世に類なくゆゝしきわざなりけれ。中宮物の哀れもいつかはしらせ給はむ、これこそはじめに思召すらめ。參らせ給ひしほど、いみじう若く坐ししに、かくての後十二三年にならせ給ひぬるに、又ならび聞えさする人なくて、明暮萬になれ聞えさせたまひけるに、俄なるやうなる御有樣を、いかでかは愚かには思召されむ。萬にことわりと見えさせたまふ。一品宮は、十四五許りにぞ坐せば、萬に今は思し知りはてて、哀れに思召しなげく。帥の宮は、まだいと若う坐せど、大方のどやかに心恥かしう、萬におぼし知りたる御有樣なれば、いたう沉み思し歎く樣、ことわりなりと見えたり。一方のみならず、おのづから思し結ぼほるゝ事なきにしもあらじかしと、樣々心苦しうなむ。かくて日頃の御讀經の聲、哀れにて過ざせ給ふ程に、御葬送は七月八日と定めさせ給へり。いみじう暑き程に、心より外に程經させ給ふを、中宮いみじう思召したり。かくて坐す事こそはめでたきことながら、おのづから限りあるわざなれば、哀れにのみなむ。七月七日明日は御葬送とて、按

○三の宮　後朱雀。
○いみじき御有樣云云　先帝と中宮との關柄はめでたかつたが幽冥相隔つれば暫くは御亡骸の側に添ひ奉れど何時までも居るべきでないから
○ならび聞えさする　比肩する者。
○俄なるやうなる御有樣　俄の崩御。
○心恥かしう　こちらが恥かしと思ふ程
○一方のみならず云云　崩御の歎きの上立坊問題も加はつて御不快であらうと。
○かくて坐す事云々　此の儘御亡骸を置かれゝは結構だが。
○按察大納言　實資

○七夕の歌　故院に再び逢ふよしなきを歎じた意。
○わびつゝもの歌　悲しみつゝ御亡骸を守り來しに今宵一夜の七夕の如く明日の別れを思へば悲し。
○岩陰　山城國衣笠村火葬所。
○際　最後。
○空もなし　張合なし。
○高松の中將　道長の子頼宗。
○いづこにかの歌　新千載集哀傷部。下句は此處を何處とも知らぬ位茫然たりの意。
○公信の内藏頭　爲光の六男。
○似たるけぶり云々　荼毘の煙に似に煙が立つかも知れぬと同じ山を尋ね見よう
○さてのみ　其の儘

察大納言殿より、

七夕をすぎにし君と思ひせば今日はうれしき秋にぞあらまし

右京命婦、返し、

わびつゝもありつるものを七夕のたゞ思ひやれ明日いかにせむ

かくて八日の夕べ、岩陰といふ所へ坐す。儀式有樣珍らかなるまでよそほしきに、さはこれこそは際の御有樣なりけれと見ゆるが、悲しきものに人思へり。殿の御前を初め奉りて、何れの上達部殿上人かは殘り仕うまつらぬはあらむ。坐しつきては、いみじき御有樣と申しつれど、はかなき雲霧とならせたまひぬるは、いかゞ哀れならぬ。永き夜といへど、はかなう明けぬれば、曉方には御骨など、帥宮、殿などとらせたまひて、事はてぬれば、大藏卿正光朝臣、負ひ奉りて還らせ給ふ程など、いみじう悲し。かへらせ給ふ道の空もなし。皆一條院に夜深く入らせ給ひぬ。高松の中將、

いづこにか君をばおきて歸りけむそこはかとだにおもほえぬかな

公信の内藏頭、

かへりてもおなじ山路を尋ねつゝ似たるけぶりや立つとこそみめ

哀れにつきせぬ御事どもなり。日頃はさても坐す御方の儀式有樣、はかなき御調度より初め、例ざまにもてなし聞えさせ給へれば、さてのみありつるを、今日よりは坐しし所

○なれ姿　常の姿。
○御硯瓶　御水入。
○見るまゝにの歌　後拾遺集哀傷部。露は涙、なでしこのこは春宮を指す。
○坐しし所　故院の御座所。
○雲の上　禁中。
○玉の臺　禁中。故院の御魂のゐますうてなの意を含む。
○ありし世の歌　續古今集哀傷部。第四句は院の世の跡方もない事と涙の止まらぬ事とを云ひ掛く。
○別納　母屋の外に別に建てた家。
○資業　有國の子。
○いはかげの歌　玉葉集雜部。岩陰の人煙を霧と見分け難く御荼毘の夕暮の景色を思ひ出した。

を、御念佛の所にしつらひて、佛坐させ、僧などのなれ姿も、いみじう忝う萬にかなし。念佛の聲の日の暮るゝ程、後夜などのいみじう哀れに、樣々悲しき事多くて過させ給ふに、御前のなでしこを、人の折りてもて參りたるを、宮の御前の御硯瓶にささせ給へるを、春宮取り散らさせ給へば、宮の御前、

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし心もしらぬなでしこの花

月のいみじう明きに、坐しし所のけざやかに見ゆれば、宮の御前、

かげだにもとまらざりける雲の上を玉の臺とたれかいひけむ

はかなう御忌も過ぎて、御法事一條院にてせさせ給ふ。その程の御有樣、さらなる事なれば、書き續けず。宮々の御有樣いみじう哀れなり。御忌はてて、宮は枇杷殿へ渡らせ給ひたり。藤式部、

ありし世は夢に見なして涙さへとまらぬ宿ぞかなしかりける

一品宮は三條院に渡らせ給ひぬ。一の宮は別納に坐す。中宮より宮々に、おぼつかなからず音づれ聞えさせ給ふ。九月許りに、辨の資業一品宮に參りて、山寺に一日籠りたりしに、岩陰の坐し所見參らせしかば、哀れに思ひ給へられて、

いはかげの煙を霧にわきかねてその夕ぐれのこゝちせしかな

一條院の御念佛御讀經、御はてまであるべし。御忌のほど同じ事候はせたまひしに、故關

○飯室　飯室の僧正尋圓。
○やどもる　留守番をする。
○よその袂云々　宿に離れてしのぶ我は涙の絶間がない。
○春宮のはた更なり　御一條の御後見も亦勿論道長である。
○猶珍らかなる云々　道長が一條院、三條院、後一條院の御後見たる世にも稀な御有樣を同じ事いふ樣ではあるが。
○三所　敦明、敦儀、敦平の三親王。
○四の宮　師明親王
○女一の宮　當子。
○二位中將　頼宗。

白殿の僧都の君は罷で給ひて、飯室はやがてそのまゝに候ひ給へば、僧都の君の御許にやりし。

くりかへし悲しきことは君まさぬ宿のやどもる身にこそありけれ

僧都の君の御返し、

君まさぬ宿にすむらむ人よりもよその袂はかわくまもなし

春宮は今は内に坐せば、中宮の萬に思し亂れさせ給ふに、春宮の御有樣のおぼつかなさへ添ひて、いぶせく思召さるゝ事多かり。内にはまだ誰もゝ〳〵候はせ給はず、かんの殿をぞ參らせ給へとある、御消息度々になりぬれど、殿の御前すがゝ〳〵しうも思し立たせたまはず、内の御後見も、殿つかうまつらせ給ふ。春宮のはた更なり。猶珍らかなる御有樣を、同じ事の樣なれど、つきせず世人申し思へり。内の宣耀殿の宮たちは、三所は御冠せさせ給へり。四の宮ぞまだ童にて坐す。女一の宮齋宮にゐさせ給ふべき御定めになりぬ。御即位、御禊、大嘗會など樣々にのゝしる。女御代には、かんの殿出で給ふべきやうにぞ、世人申しける。されどそれはまだ定めもなし。かくいふ程に、故帥殿の姫君には、高松殿の二位中將住み給ひければ、この頃ぞ御子產み奉り給へれば、いみじう美しき女君におはすれば、殿は后がねと抱き持ちて、うつくしみ奉り給ふ。七日が程の御有樣限りなく、御方々よりも御訪らひどもあり。殿の御前はた更なり、萬に知りあつかひ聞えさせ給

○これ惡き云々　頼宗の妻たるは惡き事にあらざれど。
○齋宮　當子。
○めでたながら　めでたけれど。
○宣耀殿の云々　始終離れぬ御母城子と俄に離れたのも。
○日ついで　御禊の日柄。
○事しも又一定なれば　御忌の期間は一定した事だから。
○御袖の時雨云々　涙の隙もなく物思ひつゝ過す。
○兒宮　後朱雀。
○そこらの御中云々　數多の御子の中に姫君が一人でも交らば如何に嬉しい養育の種にならうに姫君のないのが殘念と思すは餘り慾深き心。

ふ。哀れ帥殿のいみじきものに傳き給ひしを、思しいづるにも、これ惡きふるまひにはあらねど、世に限りなき御有樣に思しおきてしものをと、まづ思ひ出で聞ゆる人々多かり。委しき御事も、世の騷がしきいとなみなれば、え書き盡さずなりぬ。推し量るべし。この君生まれ給ひて後は、殿、内などに參り給ふも、暇惜しう思されてなむ。かんの殿内に參らせ給ふ。この度はいと心ことなり。御門の御心、いとをかしう今めかしう、らう〳〵しう坐す。何事も物のはえある樣に坐せば、萬もてはやし思し召したり。御禊などいみじかべういひのゝしるめる。この頃は齋宮も野宮に坐すほど、いとめでたながら、宣耀殿の明暮の御なからひの、俄にひきはなれさせ給ふも、御涙こぼれさせ給へど、いま〳〵しければ忍びさせ給ふべし。殿は御服疾う脫がせ給ひて、御禊など事ども執り行はせたまふ。東宮の宮づかさなどまだ定まらず、御忌の程などは、いとゆゝしく思され給ふ。又日ついでなど擇らせ給ふ程に、事しも又一定なれば、この頃ぞぬがせ給ふ。

はかなくて十月にもなりぬれば、中宮の御袖の時雨も、ながめがちにぞ過させ給ふ。御行ひのみぞひまなき。庭も紅深く御覽じ遣られて哀れなり。兒宮のいみじうあねてさせたまふ程の美しきにも、東宮のいといみじうおよすけさせ給ふ程を、人傳に聞召しても、飽かぬさまに思召さる。大方の御有樣こそのどかにも思召せど、なほ行末つきすまじき御賴もしさを、そこらの御中に、女宮のまじらせたまへられしかば、いかにめでたき御傳きぐ

○承香殿、弘徽殿　元子、義子。
○いづこにも　中宮一品宮帥宮等にも。
○隔て多かる　世に疎んぜられる。
○三の宮　敦良（後朱雀）
○あかれ　わかれ。
○故院の御心おきて云々　三條帝は故院の御心定の如くめでたからじとて誰も其の縁を求めて春宮其の他に參つたのだらう。
○御門　故院。
○くらべや　尊子。
○御かたみの衣云々　御喪服は誰彼の區別なく皆著た。
○御處分　遺財を分配する事。
○その程の御心云々　其の分與に就いて道長の苦心一通りでなかつた。

さならましと、坐さぬを口惜しきことに見奉り思召すも、あまりなるまである御心なりかし。承香殿、弘徽殿などの、女宮達に持ち奉らせ給はましかば哀れなり。世の中には御禊など、今めかしきことども樣々ゆすれど、中宮は唯哀れ盡きせず思召されて、さるべきをりをりは、一品宮に御消息聞えさせ給ひ、何事も志し聞えさせ給ふ。一品宮も月日のすぐるを、哀れに悲しき事に思召しては、帥宮だに一所に坐さぬことをぞ、口惜しく思召す。いづこにも唯御行ひをぞ撓ませ給はぬ。一條院には、御讀經御念佛など絶えずして、僧共の哀れに心細く、廣き所に人ずくなに覺ゆる儘に、世はかうこそはありけれと、坐しし世の御有樣を語りつゝも、思ひ出で聞えさせぬ折なし。帥宮は故院の一條院に坐し折にこそ、別納の御住居もつき〳〵しかりしか。今は何事も隔て多かる御心地せさせ給へば、いかにと思し亂るゝに、殿坐して、南の院を奉らせ給ひて、別納をば三の宮の御領にと思召したり。惡しかるまじき事なれば、さやうに思召したれど、猶御はてまではかうてやとぞ思召しける。年頃の女房たち、内に參るは少うて、春宮、中宮、一品宮、帥宮にぞ、みなあかれ〳〵まゐりける。故院の御心おきてのやうには、誰も〳〵、坐さじとて、たゞその御筋を尋ねまゐるなるべし。哀れに盡きせずめでたう坐しつる御門と、をしみ申さぬ人なし。かのくらべや、弘徽殿、承香殿は、皆御服あるべし。いかでかはさあらざらむ。哀れなる御かたみの衣は所わかずなむ。そが中に承香殿はまめやかに思ひ聞え

○哀れなる御心むけ云々　方々は道長の分配に滿足し世の中はかういふものといひながら故院いまさばと愈悲しんだの惑
○露のみの歌　はかなき身の現世に中宮を殘して出家した事の悲しい。
○北の方　隆姫。
○内のおほいどのの女御　内大臣公季の女、弘徽殿の女御。
○みちしば　道芝と身とを掛く。
○おきふし　起き臥しに露の置きと竹の節とを掛く。
○あけくれ竹　旦暮と呉竹とを掛く。
○まつ山　松山と待つとを掛く。
○たちゐつゝ　立居と裁ちとを掛く。

給へりしものを、いかでか思し知らぬやうはと見えたり。一條院の御處分なくて失せさせ給ひにしかば、後に殿の御前ぞせさせ給ひける。かの弘徽殿、承香殿など、皆この内にて分ち奉らせ給へり。その程の御心、萬なべてならずなむ。哀れなる御心むけを、何れも、世はかうこそはと申すながらも、あたらしうめでたき御有樣を、いとゞしうのみなむ。一條院御髪おろさせ給はむとて、宮に聞えさせ給ひける。

露のみのかりのやどりに君を置きて家をいでぬることぞかなしき

とこそは聞えしか。御返し何事も思しわかざりける程にてとぞ。左衞門督の北の方、内のおほいどのの女御に、

數ならぬ　みちしばとのみ　歎きつゝ　はかなく露の
おきふしに　あけくれ竹の　おひゆかむ　この世の末に
なりてだに　嬉しきふしや　見ゆるとて　いつしかとこそ
まつ山の　高きこずゑに　すごもれる　まだ木ぐたはぬ
鶯　を　梅の匂ひに　さそはせて　こち風はやく
吹きぬれは　谷の氷も　うち解けて　かすみの衣
たちゐつゝ　しづえまでにも　うちなびき　岸のふぢなみ
淺からぬ　匂ひに通ふ　紫の　雲のたなびく

○まつ　松と待つ。
○何の心を思ふとも　何事を思ふとも。
○いひやらぬまの云云　いひ盡さない程にといふ事に沼を掛けあやめ草と續け其根は長き故下に掛る
○やづま　軒端。
○かゝる　掛ると斯かるとを掛く。
○かき流し云々　被物を流しやる河瀬。
○かたへ　片方。
○いろ〳〵の花のたもと　秋の千草の花
○よをながら月　世を長と夜を長月との意
○きく　聞くと菊。
○雨のしたふる　雨の下に天下、降るに經るを掛く。
○かしらのしも云々　頭髪の白くなると霜の置くとを掛く。
○ありへむ　世にあつて月日を過さう。
○玉の光云々　一條院の崩御を意味す。

朝夕に　すぐすまに　さよ深く　思ふとも　ひきなして　うち拂ひ　はかなさも　祈りてぞ　風の音に　床しさを　霧絶えず　きくの花　かひやあると　思ふまに　ありへむと　はぐくみて

今もみどりの　夏きぬべしと　語らひ渡る　いひやらぬまの　やづまにかゝる　玉のうてなと　忘れはてては　かき流しやる　驚かれても　秋深くのみ　よをながら月と　匂ひをそむる　はかなくすぐす　かしらのしもの　思ひ空しく　ちりもするじと

まつにのみ　聞ゆなる　聲きけば　あやめぐさ　ものとのみ　思ひつゝ　千とせ經む　かはせゞも　いろ〳〵の　たのまれて　いひおける　しぐれにも　月日にも　おけるをも　なさじとぞ　みがきつる

心をかけて　山ほとゝぎす　何の心を　長きためしに　よもぎの宿を　うつせみの世の　君がみそぎを　かたへ涼しき　花のたもとの　もみぢの錦　久しき事を　雨のしたふる　心もとなく　うち拂ひつゝ　衣のすそに　玉の光の

○なみだ　無しと涙
○袖のしがらみ　河水を堰き止める柵の如く袖で涙を止む。
○たきの聲　瀧の聲とたぎり落つ涙の音
○いき　生きと往き
○やましろ　やまずと山城とを掛く。
○とは　鳥羽と永久
○すみのえの云々　住江の松と我許りのみ住みて先づ行くべき方もなしと續く。
○忘れ草　住江の名物。
○さゝがにの　枕詞句を隔てゝとに掛る
○いと　絲と甚だ。
○空しき空　虚空。
○常世　床を掛く。
○枕のしたにいけらじ　寢てひぢく泣く
○なげく　歎くと投げとを掛く。
○うはげ　上毛。

思はずに　まどはれて　ながれつゝ　せきかねて　たづぬれど　方もなし　かぞふとて　歎くなる　もり過ぎて　波かくる　思ふにも　便りだに　盡きもせぬ　跡見れば　いけらじと　夜もすがら

消えにしよりは　あくべきかたも　戀しきかけも　たきの聲だに　しでの山なる　哀れわすれぬ　なき渡るめる　聲許りにて　我許りのみ　岸のまに〳〵　軒にかゝれる　結ばざりけむ　空しき空を　ひとり常世に　うき身をなげく　うはげの霜を

かき暮す　なみだのみ　とゞまらず　惜しまれず　別れ路は　名殘には　よぶこ鳥　やましろの　すみのえの　忘れ草　さゝがにの　いとよわみ　思ひ侘び　起きふしも　をしどりの　拂ひ侘び

心のやみに　つき世ぬものと　袖のしがらみ　惑ひ入りては　いきて見るべき　日數許りを　ほのかに君が　とはにいはせの　まつゆきがたも　生ひや繁らむと　みながら絶えぬ　心細さぞ　鴈の羣れるし　枕のしたに　つがひ離れて　凍るつらゝに

○きし　來しと岸。
○消えかへりぬる　死ぬ程辛い。
○こがれ　あこがれと漕がれとを掛く。
○かひなきかた　甲斐なき方と貝なき潟
○みるめなぎさ　海松渚と見る事なき。
○津の國の　ながらへばとなにはに掛る
○ながらへば　長柄と生きながらへば。
○なにはのこと　難波と萬事とを掛く。
○かきつむ　掻集む
○しほのたれ　潮の垂れと誰とを掛く。
○たきもののこのかたみ　薫物の伏籠と此の形見とを掛く。
○うちはぶき　羽搏きする。
○つのぐむ　芽ぐむ

とぢられて
驚き　て
こがれつゝ
年　月　も
求むとも
消えなむと
ながらへば
もしほ草
たきものの
うちはぶき
賴むめるかな

きし方しらず
消えかへりぬる
つりに年ふる
かひなきかたは
みるめなぎさに
思ひの外に
なにはのことも
しほのたれをか
このかたみなる
衣のすそに

なく聲は
魂　は
あま人も
まさるとも
うつ浪の
津の國の
今はたゞ
賴むべき
思ひあらば
はぐくめと

夢かとのみぞ
行方も知らず
舟流したる
刈藻かきやり
あとだに見えず
しばし許りも
數多かきつむ
けぶり絶えせぬ
ひとり殘さず
身の程知らず

水ぐきに思ふ心を何事もえも書きあへぬ涙なりけり

内大臣殿の女御殿の御返し、

水ぐきの跡を見るにもいとゞしくながるゝものは涙なりけり

いにしへを
ふたばにて

思ひいづれば
おひいでむ事ぞ

雪消えぬ
かたかりし

かきねの草は
つのぐむあしの

○ふたりのはね云々　兩院の詩に羨はる事。
○雲の中云々　入内した事。
○ひろさはのいける　山城國廣澤池と廣く生けるとを掛く
○たちゐ　立つ事と起居とに掛く。
○誰も我が世云々　君も我も年若ければ
○小松云々　やがて產む子の成長せば。
○いくしほ云々　幾人も深く思ひ染め。
○衣手　衣。
○おのがよゝ　夫婦別々に世を渡る事と竹の節とを掛く。
○かれ　枯れと離れ
○あしたの露云々　一條院崩御の意。
○こと　事と琴。
○むら鳥の　羣れの枕詞。

寂しくて
とりのこの
飛び別れ
鳴きわびし
ひろさはの
つけつゝも
わかければ
枝もあらば
深みどり
衣　手　の
おのがよゝ
かれせむと
玉と見て
風の音に
むら鳥の

はかなくて
枯れ渡りたる
ふたりのはねの
雲の中にぞ
夜はふるすに
あまたの聲と
いけるかひなき
かたみにこそは
行末とほき
そのかけにこそ
いくしほとだに
色もかはらで
嬉しきふしを
思ひけるこそ
みがきし程に
悲しきことを
羣れたる中に

水ぎはに
下にだに
たゞよひし
歸へりつゝ
聞くばかり
身なれども
賴みしか
小松ばら
かくれめと
思ほえず
年ふれば
見る毎に
はかなけれ
消えにけり
しらべつゝ
唯ひとり

つがはぬをしは
せばくつどひし
晝はおの〳〵
つばさを戀ひて
悲しき事は
浪のたちゐに
誰も我が世の
こだかくならむ
思ふ心は
思ひそめてし
生ひいづる竹の
いかなる世にか
あしたの露を
夕のまつの
音をのみぞなく
いかなる方に

○とまる　世に殘る

○このしたやみ云々　木の下闇に迷ふとは故院いませぬ光ない世に心迷ふ意。

○歎きのもり云々　歎きの森は大隅、多き歎きは拂ふ方なし

○見る人　逢ふ人。

○人　隆姫。

○君もさはの歌　上の句は君も然らは故院の形見と我を思つて吳れるやうに希望するの意。

飛び行きて　知る人もなく　惑ふらむ　とまるたぐひは
多くして　戀し悲しと　思へども　今は空しき
おほぞらの　雲許りをぞ　かたみには　あけくれに見る
月影の　このしたやみに　惑ふめる　歎きのもりの
しけさをば　拂はむ方も　思ほえぬ　見る人毎に
ことわりの　涙の川を　流すかな　ましてやそこの
渡りには　いかばかりかは　たゝふらむ　ふちせも知らず
歎くなる　心の程を　思ひやる　人の上さへ
歎かるゝかな

とて、又かくなむ、

君もさば昔の人と思はなむ我もかたみに賴むべきかな

○こと限りありければ　臣としての限りあれば。

○御有樣などは云々　三條帝の御有樣は何れの帝にも見奉る如く立派であるが。

○口惜しう　道長たる者の歩行は口惜し

○まめやかには　誠に。

○十善の王　前世に十善を保つた御報で生れたといふ天皇。

○常の御有樣云々　物怪の爲御大病の樣なれど猶大した事はあらじと油斷せしが

○はなちあげて　聲を張りあげて。

○見知り　道長を見知り。

日かげのかつら

寛弘八年六月十三日御讓位、十月十六日御卽位なり。さき〴〵は見ねば知らず、此度はいみじうめでたし。御門もいみじうねびとゝのほり、をゝしうめでたく坐す。大殿などをなべてならず、いみじう坐すと見奉り思ふに、こと限りありければ、御輿のしりに歩ませ給ひたるこそ、味氣なき事となりけれ。さるは御有樣などは、なぞの御門にか、かばかりめでたき御有樣にこそと見奉り思ふに、口惜しうこそ。まめやかには、そこらの上達部殿上人、御送り仕うまつり給ひて、御輿の捧げられ給へる程こそ、猶限りなき十善の王に坐すめれ。かくて今は御禊大嘗會など、公私のおほきなる事に思し騷ぐに、折しもあれ、この頃冷泉院惱ませ給ふといふ事こそ出で來たれば、世にいみじき事なり。常の御有樣なれば、さりともけしうは坐さじなど思したゆめど、猶おぼつかなしとて、殿の御前まゐらせ給ひて、見奉らせ給へば、いみじう苦しげなる御氣色に坐すを、いかにいかにと見奉らせ給ふ程に、歌をぞはなちあげてうたはせ給ひける。珍らしき事ならねど、あないみじのわざやと見えさせ給へば、猶御氣色なども例の御有樣には變らせ給ふと、ことに見えさせ給へば、いとうたて覺えさせ給ふに、流石に見知り奉らせ給へるも、恐ろし

○坐しつる事　冷泉院の御有樣。
○それゆに侍ふべき事　それは尤もな事なれど。
○御心地の例に云々　普通の御心狀態でないから斷念し給へ
○いみじうおはせぬ宮達　御運も開けなかつた宮達。
○年頃もこそ云々　冷泉院は永年御物怪に惱まされ。
○怠る　延引す。
○かぎり　限りの誤りか院分の事かの說
○怪しき國　下國。
○院分　院給。上皇女院に賜はる年給。
○よきを云々　上國を院分に奉らん。
○この大事　御禊大嘗會。
○我が御かはり　三條帝の御代理。

うて急ぎ出でさせ給ひぬ。うちに參らせ給ひて、坐しつる事どもを申させ給ひて、「猶いかゞとこそ見奉り侍りつれ、折しもいみじかるべき事かな。天下の大事にこそ侍らめ。」と申させ給へば、「とまれかうまれ、參りて見奉らであべきにもあらず、よき日して、今日明日の程に行幸あるべき。」由を仰せらるれば、大殿、「それゆに侍ふべき事なれど、すべて行幸は思しかけ給ふべきにあらず、御物怪いと〳〵恐ろしう見奉らせ給ふとも、御心地の例に坐さばこそあらめ。」など申させ給ふにつけても、哀れに思召されて、打泣かせたまふも、いみじきことわりの御有樣なり。かかりとて御禊の事ども思したゆまず、急がせたまふ。御禊の女御代には、宣耀殿の出でさせ給ふべき御定めありて、急がせ給ふ。

かかる程に、十月二十四日、冷泉院失せさせ給ひぬ。哀れに悲しなど聞えさするも愚かなり。內にいみじう思し歎かせ給ふ。さべき宮達も皆亡せはてさせ給ひて、たゞこの御門のみこそは坐すそ。いみじうおはせぬ宮達をば何にかはせむ。年頃もこそ坐しつれ、かく御位に卽かせ給ひて後しも、かう坐せば、御禊大嘗會の急る方こそあれ、失せさせ給ひぬる院の御かざりもいみじう、當代の御爲にもいと樣々哀れに見えさせ給ふ。さるは年頃はつかさめしに、まづ怪しき國をも院分と、撰り奉らせ給へれば、我が御代にだに、いかでよきをとこそ思ひつれ、口惜しく哀れに思召さる。この大事ども明年にこそはあらめ。まづ御葬送の事など、萬に大殿のみぞおきて仕う奉らせ給ふ。內には我が御かはりと思召して、宮々に御おくりせさせ給ふべうおきて申させたまふも、いみじう哀れにめでたし。後々の御事どもも、哀れにめでたくせさせ給ふべし。世の中皆諒闇になりぬ。殿上人のつるばみの袍の有樣なども、烏などのやうに見えて哀れなり。萬もののはえなく口惜しとも愚かなり。一天下のもの歎きにしたり。萬をしつくして今はになるきはに、かかることの出で來たるを、いといみじき世間の大事なり。はかなくて月日も過ぎて、年號變りて、あくる年、長和元年といふ。元三日の有樣、たゞならましかば、いかにめでたからまし。たれこめて殿上にも出でさせ給はずなどして、いと口をし。かんの殿は、上の御局に坐せど、書はいま〳〵しく思召されて渡らせ給はず、宮達も參らせたまへる御有樣、いといとめでたし。こうへの女房達、樣々の世のためしにひきいで聞えさせて、「中頃となりては、かやうに宮達坐すやうもなし。村上の先帝こそ、宮達多く坐しなどして、をかしう女房も明暮用意したりけれ。寬平御時なども、なほをかしき事どもありけり。まづは陽成院の御子だち、いみじうすきをかしう坐さいて、かく、

くや〳〵とまつ夕暮と今はとてかへるあしたといづれまされる

といふ歌を知り通ひ給ひける所々に遣はしたりければ、本院の侍從といふ人、かくぞ聞えたりける。

夕暮はたのむ心になぐさめつかへるあしたはけぬべきものを

○つるばみの袍　鈍色の喪服。
○今はになるきはに　大嘗會近くなりて
○上の御局　弘徽殿
藤壺何れかの上曹司
○中頃　中世。
○用意し　宮達を世話し。
○寬平　宇多帝年號
○すき　好色に。
○坐さいて　坐して
○くや〳〵の歌　後撰集戀部。今來るかと待つ夕暮の淋しさと逢つた曉に歸る佗しさと何れが勝るか
○本院の侍從　在原棟梁の女。
○夕暮の歌　新後拾遺集戀部。第五句は消え入りさうである

○式部卿宮　敦明。
○中務宮　敦儀。
○兵部卿宮　敦平。
○人めしゆき　上の御局住ひなれはなり
○春霞の歌　新千載集戀部。上句は嫄子の立后に喩へ下句は妍子の爲に其の立后も覺束なきに擬す。
○かすむめるの歌　共に春を迎へながら何の譯か我のみには昔の御寵愛がない。
○君まさぬの歌　新千載集哀傷部。すむに澄むと住むとを掛く。
○侍從中納言　行成
○こぞの歌　新千載集哀傷部。

とか、これぞあるが中にをかしく思されける。」など、昔事をいひ出でつゝ、宮々の御有樣を聞えあへり。「猶この御中に、式部卿宮は、心ことに坐すかし。」など聞ゆれば、「さて中務宮はわろくや坐す、兵部卿宮は美しう坐す。」など、おの〳〵思ひ〳〵に聞えさするもをかし。かんの殿の女房、常よりも人めしげき心地して、例のやうにも聞えさせずぞあめる。さて世の中には、今日明日、后立たせ給ふべしとのみいふは、かんの殿にや、又宣耀殿にやとも申すめり。かかる程に、宣耀殿に、内より、

春霞野邊にたつらむと思へどもおぼつかなさをへだてつるかな

と聞えさせ給へれば、御返し、

かすむめる空の氣色はそれながら我が身ひとつのあらずもあるかな

と聞えさせ給へれば、哀れと思召さる。中宮には年さへへだたりぬるを、盡きせず哀れに思召されて、たゞ御おこなひにて過させたまふ。正月十五日、一條院の御念佛に、殿原皆參らせ給へり。月のいみじう澄み上りて、めでたきに、事はてて出でさせ給ふとて、殿の御前、

君まさぬやどには月ぞひとりすむふるき宮人たちもとまらで

と宣はすれば、侍從中納言、

こぞのけふ今宵の月を見しをりにかからむものと思ひかけきや

○雲の上の歌　禁中を禁中外から思ひやるに其の樣はかはれど月光のみは變らず
○あふことの歌　新古今集哀傷部。一條院に逢ひ奉る事はもうない故泣き〳〵眠る夜の夢の中以外には又逢ふ時はない。
○この世を云々　朕の在位を汝は氣に入らないのである。
○ゑじ　怨じ。
○それにさはり云々　立后の爲公事差支あるも之を延期すべき世の有樣ならねば
○なりつるほど　裝へる程。
○ねたがり　容貌の惡きを妬しく思ふ人
○刻　を刻。
○なづましげ　華美でない有樣。

はかなくて司召の程にもなりぬれば、世には司召とのゝしるにも、中宮世の中を思し出づる御氣色なれば、藤式部、

雲の上を雲のよそにて思ひやる月はかはらずあめのしたにて

哀れに盡きせぬ御事どもなりや。宮の御前返すゞ〳〵思し歎かせ給ひて、大殿籠りたる曉がたの夢に、院のほのかに見えさせ給ひければ、

あふことを今はなきねの夢ならでいつかは君をまたは見るべき

とて、いとゞ御涙せきあへさせ給はず。内には、かんの殿の后に居させ給ふべき御事を、殿に度々聞えさせ給へれど、「年頃にもならせ給ひぬ、宮達も數多坐す、宣耀殿こそ、まづさやうには坐さめ。尚侍の御事は、自ら心のどかに。」など奏せさせ給へば、「いと興なき御心なり、この世をふさはしからず思ひ給へるなり。」など、ゑじ宣はすれば、「さばよき日してこそは宣旨も下させたまふべかなれ。」と奏して、出でさせたまひて、俄にこの御事どもの御用意あり。何事もそれにさはり、日などのべさせ給ふべき御世の有樣ならねば、二月十四日に后に居させ給ひて、中宮と聞えさす。急ぎ立たせ給ひぬ。その日になりぬれば、常の事ながらも、いみじくやんごとなくめでたし。年頃の女房達、上中下の程などの、わきがたう思ひ〳〵なりつるほど、ねたがりつる人々など、今日の刻に、恥かしげなる事ども多かり。何事も心苦しげに、うち〳〵なづましげなりつる人も、事限りありけ

○いひつけ　名づけ
○およびを云々　人人指さして嘲れど。
○けぎやかに　晴々しく。
○葡萄染の織物　經紅綠薄紫。
○何くれの人も　誰にも。
○おほやけと云々　后位に僅はりては職制もある故斯く定まるも格別の事である
○はぢなき程　恥しくない程美しい女房
○おもやう　顏つき
○さるべう坐す　中宮たる品位あり。
○大宮　皇太后彰子
○この御前　妍子。
○なさせ　任じ。

れば、織物の唐衣を著、年頃めでたうしたり顏なりつる人も、俄に平絹などにて、いと心やましげに思ひたるもをかしきに、さはいへど、大宰相の君などいふ人をば、大臣などいひつけ給ひ、およびをさしいひつれど、いとけざやかに、えもいはぬ葡萄染の織物の唐衣などを著て侍ふに、何くれの人も心憎く思はれ、我はと思ひたりつるも、さしもあらずなど、品々わき給へる程など、けにおほやけとならせ給ひぬるは、ことなるわざなりけり。心には誰も安からずいひ思へど、ともかくもえ啓せで、心の中にのみむせび渡る程も苦しげなり。又さべき五位の女などのはぢなき程なりつるを、藏人などにておもの參らする、まかなひとりつぎなどして、うたてゆゝしき事どもをいひ思へど、つれなくもてなしたるもいとほしげなり。宮の御前白き御よそひにて、大床子に御ぐしあげて坐し、御帳の側の獅子狛犬の顏つきも、恐ろしげなり。御前の御ぐしあげさせ給へる程は、いとこそめでたう坐しけれ。もとより御おもやうのふくらかに、をかしげに坐すものから、世にめでたくぞ坐しける。猶さるべう坐すなりけりとこそは見奉りけれ。御年十九許りにぞ坐しける。參らせ給ひて、三四年許りにぞならせ給ひぬらむかしとぞ、推し量り申す人人あり。大宮は十二にて參らせ給ひて、十三にてこそ后に居させ給ひけれ。されどこの御前は、少しおとなびさせ給ひにけり。御前に火焚屋する、陣屋つくり、吉上のことゞくしげにいひ思ひたる顏氣色より、事起りて侍の長どもなさせ給ひ、樣々ことゞくしげに見えたりゝ。やがて大饗いと疾うせさせ給ふべし。大夫には、大殿の御兄弟の、萬の兄君の大納言なりたまふ。大かた宮司など皆選りなさせ給ふ。かくていとめでたう、二所さし續きて坐すを、世の例に珍らかなる事に聞えさす。內には今は、宣耀殿の女御の御事を、いかでかと思召せど、すがやかに殿には申させ給はぬ程に、宣耀殿には何とも思召したらぬ程に、大方の女房のえん〳〵につきて、里人の思ひの儘に物をいひ思ふは「いかに〳〵御前に思し坐すらむ、淺ましき世の中に侍りや。これはさべき事かは。」など、いとさかし顏に訪らひ參らする人々などあるを、「この文をも又かうなむ、それかれは申しつる。」など語り申す人を、女御殿は、「などかかうむづかしういふらむ。たとひいふ人ありとも語らでもあれかし。こゝには萬思ひ絶えて今は唯、後の世の有樣のみこそわりなけれ。」など、物まめやかに、仰せらるれば、「さこそあれ、御心のひがませ給へれば、物の哀れ有樣をも知らせ給はぬ。」と、さかしうぞ聞えさせける。かかる程に、大殿の御心何事も淺ましきまで、人の心の中をくませ給ふにより、內にしば〳〵參らせ給ひて、「こゝらの宮達の坐すに、宣耀殿のかくて坐す、いと不便なる事に侍り、早うこの御事をこそさせ給はめ。」と奏せさせ給へば、上、「こゝにもさは思ふを、この殿上の男どもの、昔物語など、おの〳〵いふを聞けば、內舍人などの女も昔は后に居けり、今も中頃も、納言の女の后に居たるなむなき、などいふをば、如何はすべからむとこそ聞け。」と宣はすれば、「それはひがことに候な

○萬の兄君の大納言　長兄の大納言道綱
○二所　彰子、妍子
○すがやか　速か。
○えん〳〵　緣々。親戚達。
○里人　里方の人。
○御前に　妍子は。
○この文云々　立后不平に就き誰々は此の文中に云々いへり
○こゝには　自分は
○わりなけれ　格別である。
○さこそあれ　左樣ではあるが。
○くませ　察し。
○不便　不都合。
○この御事　立后宣旨。
○內舍人　中務省に屬し宿衞雜役に從ひ行幸の警護もなす。

○いかでか　さる事あらむを補ふ
○故大將を　濟時に
○官　太政官。
○はなちて　避けて
○修理大夫　通任。
○かの君　通任。
○よき御子も給ひて　絨子を持ち給ひて
○さかゆき　榮え行き。
○かの御妹の宣耀殿の女御　濟時の妹芳子。
○男宮一人　永平。
○小一條の大臣　濟時の父師尹。
○この宮　絨子。
○故關白殿の出雲の中納言　道隆の子隆家。
○本　手本。

り。いかでか、さらば故大將をこそは贈大臣の宣旨を下させ給はめ。」と奏せさせ給へば、「さらばさべきやうに行ひ給ふべし。」と宣はすれば、承らせ給ひて、官に仰せ事賜はす。「さべき神事あらむ日をはなちて、よろしき日して、小一條の大將某の朝臣、贈太政大臣になして、かの墓に宣命讀むべし。」と宣はすれば、辨うけ給ひぬ。

四月にさべき所々の祭はてて、よき日して、かの大將の御墓に敕使下りて、やがて修理大夫そひてものすべくあれば、かの君も出でたち參りたまふ。よき御子も給ひて、故大將のかくさかゆき給ふをぞ、よその人めでたき事に申しける。かの御妹の宣耀殿の女御、村上の先帝の、いみじきものに思ひ聞えさせ給ひけれど、女御にてやみ給ひにき。男宮一人うみ給へりしかども、その宮かしこき御中より出で給へるとも見え給はず、いみじきしれものにてやませ給ひにけり。その小一條の大臣の御孫にて、この宮のかう坐す事、世にめでたき事に申し思へり。さて四月二十八日后に居させ給ひぬ。皇后宮と聞えさす。大夫などには望む人も殊になきにや、さやうの氣色や聞召じけむ、故關白殿の出雲の中納言なり給ひぬ。宮司などきほひ望む人なく、物はなやかになどこそなけれ、萬唯同じ事なり。これにつけても、「あなめでたや、女の御幸福のためしには、この宮をこそし奉らめ。」など、聞き憎きまで世には申す。まづは大殿も、「誠にいみじかりける人の御有樣なり。女の御幸福の本には、この宮をなむし奉るべき。親などにも後れ給ひて、我が御身一つにて、

○びんなき事云々　不都合をしでかさないのは數多の宮達中に痴者の交らぬ事で定める事が出來る。
○八の宮　永平。
○それに　然るに。
○しれかたくなしきが　愚頭な者が。
○うちはへての歌　打續き不安さを一生涯覺束なく思ふ我が身となりさうだ。
○あはれを知らむ人　物の哀れを知つて賴みにすべき人。
○姫宮　當子內親王
○ものけざやかに　何となく爽やかには つきりと。
○立たむ月　來月十一月。

年頃になり給ひぬるに、又けしからずびんなき事しいで給はず、まづはこゝら多くおはする宮達の御中に、しれもののまじらぬにてきはめつかし。いみじき村上の先帝と申ししかど、かの大將の妹の宣耀殿の女御の產み給へりし八の宮こそは、世のしれもののいみじきためしよ。それにこの宮達五六人おはするに、すべてしれかたくなしきがなきなり。」などこそは、申させ給ふに、まいて世の人は聞きにくきまでぞ申しける。今は小一條、いかで造り立てむと思召す。御門も今ぞ御本意とげたる御心地せさせ給ふらむかし。かく萬にめでたき御有樣なれども、皇后宮には、唯おほつかなさをのみこそは、盡きせぬことに思召すらめ。同じ御心にや思召しけむ、內より、

うちはへておほつかなさを世と共におほめく身ともなりぬべきかな

とある御返しに、

露ばかりあはれを知らむ人もがなおほつかなさをさてもいかにと

萬の中にも、姫宮の御床しさをぞ思召しける。大宮には院の御服などもはてにたれば、盡きせずのみおほし歎かせ給ふ。春宮の美しうおよすげさせ給ふを、あけくれ見奉らせ給はぬも、哀れに口惜しう思さるゝに、三の宮のいみじう美しう、紛れ歩かせ給ふにぞ、少し思し慰めける。はかなく秋は過ぎて冬にもなりぬれば、內わたりは中宮の御方の更衣などの有樣も、ものけざやかに、月日のゆきかふ程も知られてめでたかりける。立たむ月の大

○この宮々　大宮と中宮。
○しざま　作り立て
○やかた　牛車の車箱の屋根。屋形。
○のり人の云々　乘手の袖からして總て車にあふ樣に作つた
○袖　車の口の左右
○置口　緣を取る事
○山をたゝみ云々　車の立板に山海の樣を畫く。
○すぢをやり　象眼等の如く金銀の筋を脊めこみ。
○胡籙　背負ふ矢壺
○悠紀　東の祭場。
○祭主　伊勢大神宮の神職の長。
○主基　西の祭場。
○公忠の辨の筋　公忠辨孫譜岐介信孝男なれば なり。

嘗會御禊など、いみじう世に急ぎたちにたり。内にも御服たちぬる月にぬがせ給ひて、冷泉院の御はてもせさせ給ひて、今はこの事をいみじき事にのゝしらせ給ふ。女御代には、大殿の内侍の殿出でさせ給ふ。女御代の御車二十輛ぞあるを、まづ大宮より三つ、中宮より三つ、車より始めて、いといみじうのゝしらせ給ふ。「こたみの物見には、この宮々の御車なむ、あべき。」とのゝしれば、いつしかと人待ち思へるに、今はその日になりて、女御代の御車のしざまより始め、淺ましきまでせさせたまへり。その車の有樣いへば愚かなり。あるはやかたを造りて、檜皮をふき、あるはもろこしの船の形を造りて、のり人の袖より始めて、それにやがてあはせたり。袖には置口にて蒔繪をしたり。山をたゝみ海をたへすぢをやり、凡て大方ひき渡していく程、目もかゞやきてえも見わかずなりにしが、車に乘る人の衣の數、凡て十五ぞ著たる。あるは唐錦などをぞ著せさせ給へる。この世界の事とも見えず、照りみちて渡る程の有樣推し量るべし。殿原君達の馬車、弓胡籙までの有樣こそ、世に珍らかに又見聞えぬ事どもなりけれ。過ぎにし方はいはじ、今行末もいかでかかる事はと見えたり。冬の日もはかなく暮れて、大嘗會の急ぎせさせ給ふ。されどその日は、唯麗はしうぞある。悠紀の方は、大中臣能宣が子の祭主輔親仕うまつる。主基の方は、前加賀守源兼澄なり。この人々、輔親は能宣が子なればと思召したり、兼澄は公忠の辨の筋なりとぞ思召して、歌の方にさもあるべき人どもを、あてさせ給へるなるべし。

○參入音聲　節會等の日伶人奏樂しつゝ參入して著席する事或は其の音樂。
○高御座山　不詳。
○ときはかきは　常磐堅磐。永久不變。
○破　樂曲の一體で次第に節拍の細碎なる義。
○しき地　近江の地名。以下地名近江。
○しきち　敷地の意。
○やへのくみがき　幾層にも組み合はせる垣。
○急　樂曲の一體で急聲ともいふ。
○かずにおひます　數多生ひて增加す。
○とみ草　稻。
○まかで音聲　節會等の時樂終つて伶人退廊する時奏樂しつつ退出する事。
○よし水の　よきといはん爲に用ふ。

悠紀の方の稻つき歌、坂田の郡、輔親、

山のごと坂田の稻をぬき積みて君がちとせの初穗にぞ春く

御神樂の歌、おなじ人、

大八洲國しろしめすはじめより八百萬代の神ぞまもれる

參入音聲、高御座山、

よろづ代は高御座山うごきなきときはかきはにあふぐべきかな

樂の破の歌、しき地、

大宮のしきちぞいとゞさかえぬるやへのくみがき造りかさねて

樂の急の歌、金山、

金山にかたくねざせるときは木のかずにおひます國のとみ草

まかで音聲、やすがは、

すべらぎの御代をまち出で水すめる安の河波のどけかるらし

又次の日の參入音聲、ながらの山、

あめつちのともに久しき名によりてながらの山の長き御代かな

樂の破の歌、よしみづ、

よし水のよきことおほくつめるかなおほくら山のほどはるかにて

○豐のあかり　豐明の節會。
○あふみ　合ふと近江とを掛く。
○おほくら山　丹波國。以下皆同じ。
○ながむら山　長きを掛く。
○君が御代の歌　續後拾遺集賀部。やそうぢ人は數多の氏人
○辰の日　二十三日
○年つくりの歌　夫木和歌集に在り。年は稻。

樂の急の歌、
　ゆふしでの日かげのかつらよりかけて豐のあかりのおもしろきかな
まかで音聲、やすらの里、
　もろ人のねがふ心のあふみなるやすらの里のやすらけくして
主基の方いなつき歌、おほくら山、兼澄、
　ふた葉より大倉山にはこぶ稻年はつむともつくる世もあらじ
御神樂歌、ながむら山、
　君が御代ながむら山のさかき葉をやそうぢ人のかざしにはせむ
辰の日の樂の破の歌、玉松山、
　天つ空あしたにはるゝはじめにはたままつ山のかげさへぞ添ふ
同じ日の樂の急の歌、いなぶさ山、
　年つくり樂しかるべき御代なればいなぶさ山のゆたかなりけり
同じ日參入音聲、さゞれ石山、
　數しらぬさゞれ石山ことしよりいはほとならむほどはいくよぞ
同じ日のまかで音聲、ちとせ山、
　動きなき千歳の山にいとゞしくよろづ世そふるこゑのするかな

○巳の日　二十四日
○とみつぎ山のつぎつぎにいひ掛く。
○よろづ代の歌　夫木和歌集にあり。
○あめのした　雨を兼ね天下の富む事。
○うるはざる　水田の潤ひ豐熟する意。
○すめる　豐の明の緣語。
○麗景殿　綏子。
○淑景舍　原子。
○たちぬる月　先月
○何か物聞召さず云云　何等心配ない、何も召上らずともそは御懷妊の徵故斯くあるのが當然の御心持だ。

巳の日の樂の破、とみつぎ山、
　君が代はとみつぎ山のつぎ〳〵に榮えぞまさむよろづ代までに
同じ日の樂の急の歌、ながむら山、
　よろづ代をながむら山のながらへてつきず運ばむみつぎものかな
同じ日のまゐり音聲、とみの小川、
　あめのした富の小川のすゑなればいづれの秋かうるはざるべき
同じ日のまかで音聲、ちゞかは、
　にごりなく見えわたるかなちゞかはのはじめてすめる豐の明に
この同じ折の屏風の歌などあれど、同じすぢの事なれば、書かず。去年よりして、いみじくのゝしりつる事どもはてて、內には心のどかに思召さるゝにも、麗景殿淑景舍などの、おはせましかばと思し出でさせ給ふ。かくて中宮いかなるにか例ならず惱ましう思されけり。殿の御前思し歎かせたまふに、例せさせたまふこと、たちぬる月この月、さもあらで過ぎぬ。いかなるにかと、人々おぼつかなくのみ聞えさするに、物などつゆ聞召さぬは、たゞならぬ御心地にやと思召すに、御乳母（おんめのと）の典侍（ないしのすけ）、「あやしうたちぬる月、覺束なくてやませたまひにし、たゞならぬ御事などの坐（おはしま）すにや。」と申し給ふに、誠にたゞならぬ御氣色に坐（おはしま）す。殿の御前にも、內にもいと嬉しきことに思召して、殿の御前、「何か物聞召さ

○佛名經　十二卷。北魏の菩提流支譯。佛名會の本據也。
○降る白雪云々　拾遺集冬部紀貫之「年の内に積れる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなむ。」
○後取　宮中で新年の御齒固に奉侍して天盃の餘瀝を飲む者
○まさなうこちたきけはひ　醉ってよからずうるさい樣子。
○常の行啓云々　平常の行啓もめでたいが今度程ではない。
○あやにくなるまで　斯くまでとは思ふまで。
○始めより　行啓以前より。
○長日　長い時日。
○殿の高松殿の二郎君　道長の次妻明子の產んだ頼信。

ずとも、坐しぬべき御心地なり。」とて、よき日して、さまざまの御祈りども始めさせ給ふ。十二月にもありぬ。世の中あわたゞしう、内より始め宮々の御佛名にも、例の佛名經など誦ずる聲もをかしきに、降る白雪と共に消えなむなども哀れなり。はかなく暮れぬれば、ついたちには元日の朝拜より始め、樣々にめでたし。殿上の方には、後取といひて、いとまさなうこちたきけはひども聞えたり。ついたちより始め、事共いみじうしけければ樣々祝事どもにて暮れぬべし。正月にぞ宮の御前出でさせたまふべき。その日女房のなりなど、鮮やかにせさせ給ふ。さてその夜になりぬれば、儀式有樣など思ひやるべし。常の行啓せさせ給ふ、めでたしとありつれど、かうやは見えさせ給へる。御輿のかたびらより始めて、萬いみじうさやかにめでたし。京極殿は、方ふたがればえ坐さで、東三條院にいでさせ給ひぬれば、内にも御志いとあやにくなるまで、おほつかなくぞ思ひ聞えさせ給ふに、宮には殿坐して、よき日して、大般若、觀音經、藥師經、壽命經などの御讀經、各不斷に始めさせ給ふ。法華經は始めよりせさせ給へばなりけり。年頃山に籠りて、里へも出でぬ僧ども尋ね召し出でて、この御讀經に侍はせ給ふ。おほやけよりは、長日の御修法始めさせ給ふ。樣々の御祈りどもいみじ。かかる程に、殿の高松殿の二郎君、右馬頭にておはしつる、十七八許りにやとぞ、いかにおはしけるにか、夜半許りに、横川の聖の許におはして、「われ法師になし給へ、年頃の本意なり。」と宣ひければ、聖、「大殿のいと貴き

○かばかりの身云々　斯くいみじき聖にして何か苦しく覺えん聖の心は宜しからず。
○綿の御衣　綿入。
○山に無動寺　叡山東塔に屬す。
○怪しき　卑しき。
○この大德　怪しき法師。大德は僧の意。
○あるまじき事　けしからぬ事。
○こゝらの中　數多の親兄弟。
○高松殿の上　明子
○殿坐せば云々　道長は頼信の所に上りたれば數多の人々は追ひ上つた。
○例の僧達云々　普通の僧等は額の剃りぎはの分れ目が見えないが。

ものにせさせ給ふに、必ず勘當侍りなむ。」と申して聞かざりければ、「いと心きたなき聖の心なりけり、殿便なしと宣はせむにも、かばかりの身にては苦しうや覺えむ、惡くもありけるかな、こゝになさずとも、かばかり思ひ立ちてとまるべきならず。」と宣はせければ、ことわりなりと打泣きて、なし奉りにけり。聖の衣とり著させたまひて、直衣指貫さるべき御衣など、皆聖に脫ぎ賜はせて、綿の御衣一つばかり奉りて、山に無動寺といふ所に、夜の中におはしにけり。横川の聖、怪しき法師一人をぞそへ奉りける。それを御供にて登り給ひぬ。この大德などやいひちらしけむ、日の出づる程に、この殿失せ給へりとて、大殿より多くの人をあかちて、覓め奉らせ給ふに、横川の聖のもとにて出家し給へりといふ事を聞召して、哀れに悲しういみじと思召して、横川の聖を召しに遣はしたるに、畏まりて、とみにも參らず、「いとあるまじき事なり、參れ〳〵。」と度々召されて、參りたれば、殿の御前泣く〳〵有樣問はせ給へば、聖申ししやう、「宣はせし樣、かう〳〵、いと不便なる事をつかまつりて、畏まり申し侍る。」と申せば、「などてか兎も角も思はむ、聖なさずとも、さばかり思ひ立ちてはとまるべき事ならず、いと若き心地に、こゝらの中を捨てて、人知れず思ひたちける、哀れなりける事なりや。我が心にもまさりてありけるかな。」とて山へ急ぎ登らせ給ふ。高松殿の上は、すべて物も覺え給はず。殿坐せば、いくその人々かきおひ登り給ふ。いつしか坐しつきて、見奉らせ給へば、例の僧達は、ひたひの程け

○つかさかうぶり　官位。
○こと〳〵は知らず　他事は知らねども
○いかでと　どうぞ出家したいと。
○思召し　父君が。
○かうまでしなさせ云々　斯程私を愛されるから心ならずも密に出家した。
○なか〳〵云々　却つて出家した方が皆様への孝養とならう
○宮々　彰子、妍子
○殿ばら　頼通、教通、頼宗。
○天台の僧　延暦寺の僧。
○布をこそ　布衣を著よう。
○御具　僧房の具。
○御すけ　御出家。

ぢめ見えでこそあれ、これはさもなくて、哀れに美しうたふとげにて坐す。猶見奉らせ給ふに、御涙止めさせ給はず。そこらの殿ばら、いみじう哀れに見奉らせ給ふ。殿の御前、「さてもいかに思ひ立ちし事ぞ、何事のうかりしぞ、我をつらしと思ふことやありし。つかさかうぶりの心もとなく覺えしか、又いかでかと思ひかけたりし女の事やありし。ことごとは知らず、世にあらむ限りは、何事をか見捨ててはあらむと思ふに、心うく、かく母をも我をも思はで、かかること。」と宣ひ續けて泣かせ給へば、いと心あわたゞしげに思して、我も打泣き給ひて、「更に何事をか思う給へむ。唯稚く侍りし折より、いかでと思ひ侍りしに、左樣にも思召しかけぬ事を、かくと申さむもいと恥かしう侍りし程に、かうまでしなさせ給ひにしかば、我にもあらで歩き侍りしなり。誰にも〳〵なか〳〵かくてこそ、仕う奉る志も侍らめ。」と申し給ふ。さてやがてそこに坐すべき御心おきて、あるべき事ども宣はす。宮々の御使など、すべていと物騒がし。殿の御前、泣く〳〵おりさせたまひぬ。御裝束急ぎして奉らせ、樣々のものども奉らせ給ひ、高松殿の上、泣く〳〵御衣の事急がせ給ふ。殿ばら宮々の奉らせ給ひつるは、清らなりとて、皆天台の僧どもにくばらせ給ふ。高松殿より奉らせ給へる御衣をぞ、御料にはせさせ給ひける。いでや今は布をこそとまでぞ思召しける。殿よりも宮よりも、皆御具おきて奉らせ給ふ。哀れにいみじう有り難き御すけになむ。

○御心の程　中宮の父道長の御心中。
○一所　帝御一人。
○一夜の御まかで　中宮御退出の時。
○姫宮　禔子。
○大納言　源重光。
○三所　敦明、敦平師明（四の宮）。
○腦　ひかゞみ。
○坐しぬれば　皇后參内し給へば。
○上の御前　三條帝
○みづから云々　朕の計らひでは斯くするは難いと思ひしに道長が朕の思ひ通りにせるは嬉し。
○姫宮　當子。
○左衛門督　教通。
○四條大納言　公任
○四條宮　遵子。

かかる程に、皇后宮參らせ給へとあれば、いかゞと思しつゝませ給ふに、御心の程をや推し量り聞えさせ給ひけむ、殿の御前、「など、皇后宮は參らせ給はぬにか。諸共に侍はせ給はむこそ、よき事なるべければ、一所坐さむは、悪しき事なり。」と奏せさせ給へば、それにつけて、「猶疾く思したて、大臣もかやうに。」など、常に聞えさせ給へば、思召したちて參らせ給ふ。御輿など新しくせさせ給ひて、いとあるべき限り麗はしくしたてて參り給ふ程も、一夜の御まかでにこそ似ねど、儀式有樣は同じ事なり。姫宮は絲毛の御車にぞ奉りける。御輿には致仕の大納言の御女大納言の君仕う奉り給へり。女房もとより侍ひしに、また參りて、いとめやすく心憎き御有樣なり。男宮達三所ひきつれさせ給ひつるに、四の宮は、御ぐしは腦すぎて脛許りなり。御顏つきなど、かばかりの童もがなと見えさせ給ふ。それも御直衣奉りたる御有樣など、さはいへどなみ〳〵の世の常なる人々の君達には似させ給はず。坐しぬれば、年頃珍らしき御物語ども推し量るべし。御前に火焚屋かきすゑて、大床子などの程のけはひ、上の御前に御覽ずるも、「かうてこそは見奉らむと思ひしか、みづからよりはかうては、思ふごとしたるこそ嬉しけれ。」など、哀れに語らひ聞えさせ給ふ。姫宮の十二三許りにて、いと美しう坐すを、あけくれ見奉らぬ事を、口惜しう思召したり。かかる程に大殿の左衛門督を、女おはする殿ばら氣色だち給へど、思し定めぬ程に、四條大納言の御女二所を、中姫君は、四條宮に生まれ給ひけるより、取り放

○おほい君　大姫君
○九の宮　昭平親王
○粟田殿　道兼。
○とり奉りて　養女とせられて。
○やまめ　やもめ。
○ほか心　あだ心。

○はた　斯く坐せばを補ふ。
○内、春宮云々　御門春宮を除いてはさてどうすればよいか
○この殿の云々　それに次いで道長の君達を世人は崇ぶ樣なればと思ひ敎通を增取りせるは充もだ。
○宮の御前云々　遵子が四條の御殿に御到著されたから。
○すそ　髮毛の末端

ち聞え給ひて、姫宮とて傅き聞え給ふ。おほい君をぞ、大納言世になきものと傅き聞え給ふ。母上は、村上の先帝の九の宮、まちをさ君といふ入道少將高光の御女の腹に坐する、女宮のいみじうめでたしといはれ給ひしを、粟田殿とり奉りて御子にして、この大納言を壻とりたまへりしなり。かかれば、母上さばかり物淸く坐す。されど年頃尼にて坐せば、大納言殿はやまめのやうにておはすれど、ほか心もおはせねば、たゞこの姫君をいみじきものに思ひ聞えさせ給へるに、この左衞門督の君をと思ひ聞えさせ給ひて、ほのめかし聞え給ひけるに、快げなる御氣色なれば、思し立ちて急がせ給ふ。内、東宮などにこそは、かかる人の御傅き女は參り給ふ、例の事なれど、内には皇后宮、年頃宮々の御母にて坐す。又中宮はた、兎も角も人の申すべきにあらねばすぢなし。東宮はた、三四許りに坐して、御遊びをのみしつゝ、歩かせ給ふ。内、春宮はなちては、さはいかゞ、この殿の君達の事のみこそは、人のいみじき事には思ひためれと思したつ、實にと見えたり。あべい事どもしたてさせ給ひて、四條宮の西の對にて、壻とり奉らせたまふ。寢殿にてと思せど、宮の御前など坐しつきたれば、今更になど思召すなるべし。宮もろともにし奉らせ給ひて、壻取り奉り給ひつ。姫君十三四許りにて、御ぐしいとふさやかにて、御たけに足らぬ程にて、すそなどいとめでたし。御顏つきなど、いみじう美しげにおはすれば、男君思ふ樣にいと嬉しう思さる。萬の事奥深く、心憎き御あたりの有樣なれば、思ひやるべし。さて日頃ありて、御ところあらはしなど、心もとなからずせさせ給へり。宮もとよりいみじう物淸らかに坐すに、この頃の有樣、する事どもを聞召し合はせて、殿も宮も聞え合はせ給ひつゝせさせ給へる事ども、いとなべてにあらず、大殿も「いとめやすき事なめり。かの大納言は、いと恥かしう物し給ふ人なり。思ひの儘にふるまひては、いとほしからむ」など、常に諫め聞えさせ給ふべし。日頃ありて、御乳母のくらの命婦のもとに、はかなき御衣のおろしなどに、萬あたらしき事どもなどそへさせ給へり。四條宮は、いかでわがある時、この姫君の事をともかうもとぞ思されける。月日過ぎもていきて、東三條殿には、中宮の御事誠になりはてて、御心地なども苦しう思されて、内の御使日に二度など參り、はかなう明け暮るゝにつけても、いつしかとのみ、いみじう愚かならぬ御祈りどもなり。

○心もとなからず　十分に。
○この頃の有樣する事ども　壻取りの事
○めやすき事云々　壻取りの儀は立派であつた。以下敎通への訓戒。
○御乳母　姫の乳母
○おろし　おさがり
○四條宮　遵子。
○わがある時　我が存命中。
○この姫君　中姫君
○御事　御懷妊。

○承香殿の女御　顯光の女元子。
○故式部卿宮　爲平
○右の大臣　顯光。
○殿の内　顯光に仕へる人々。
○四の宮　爲平親王
○源帥殿　源高明。
○生憎に　意地わるく。
○この殿　顯光。
○くらべやの女御　道兼の女尊子。
○麟三位　繁子。
○今の宣耀殿　城子
○修理のかみ　通任

つぼみ花

一條院失せさせ給ひて後、女御更衣の御有樣ども、樣々に聞ゆるに、承香殿の女御に故式部卿宮の源宰相頼定の君、忍びつゝ通ひ聞え給ふ程に、右の大臣聞き給ひて、まことそらごとあらはし聞えむと思しける程に、御目にまことなりけりと見給ひてければ、いみじうむつからせ給ひて、さばかり美しき御ぐしを、手づから尼になし奉り給ふに、憂き事數知らず見えたり。淺ましう怪しき事に、世の人も殿の内にもいひ騷ぐ程に、その後も猶忍びつゝ通ひ給ひければ、この度は「いづちもいづちもおはしね。」とあれば、女御の御乳母子の許とあるは、實誓僧都といふ人のくるまやどりなり。その家に渡り給ひぬ。宰相もさるべきにこそと思ひつゝ、疎かならず通ひ給ふ程に、自ら御ぐしなどもめやすくなりもていく。怪しうひが〳〵しき事に、世の人も思ひ聞えたり。同じき若君達といへども、これは村上の四の宮源帥殿の御女の腹なれば、いともの淸くものし給ふを、生憎にこの殿宣ふをぞ、かへす〳〵怪しきことに人聞ゆめる。又くらべやの女御と聞えしには、母の藤三位、今の宣耀殿の御兄弟の修理のかみをぞあはせ聞えためる。かくて中宮もたゞに坐さねば、出でさせ給ひて、齊信大納言の大炊御門の家に坐いて、月頃にならせ給ひぬれ

○わたらせ給ひぬべければ　中宮の行啓がある事故。
○家あるじの殿云々　大炊御門邸の主人公齊信は御禊居の贈物に何を致さんと思ひ急ぐ。
○東三條院云々　最初東三條院に行幸ありしが同所が燒けたので大炊に移れり。
○中々なりて　なまなかの物を贈るよりはとて。
○詞　繪の詞書。
○延轉の君　上總介兼房の子。
○御手本　御墨帖、
○檜破子　檜製の食器。
○大宮の折の云々　彰子の御產の時と同樣の祈りをされた。
○かの大納言云々　齊信の家司に然るべき位を賜はり齊信も位が昇進した。

ば、そこにて御子生まれ給ふべきにやなど思ふ程に、その頃土御門殿にわたらせ給ひぬべければ、家あるじの殿なにわざをと思し急がせ給ふ。それも東三條院に出でさせ給へりしを、そこの燒けにしかば、こちに渡らせ給へるなりけり。さて土御門殿に渡らせ給ふに、宮の御おくりものに、何わざをして參らせむと思しけるに、何事も珍らしげなき世の有樣となりにためれば、中々なりとて、村上の御時の日記を、大きなる草紙四つに繪に書かせ給ひて、詞は佐理の兵部卿の女の君と、延轉の君とに書かせ給ひて、麗はしき箱一具に入れさせ給ひて、さべき御手本など具して奉り給ひければ、宮は萬のものに優りて、嬉しく思召されけり。女房の中には、おほいなる檜破子をして、しろい物たき物などをぞ入れて出し給へりける。かくて渡らせ給ひて、そこにて御祈禱どもを、大宮の折の事どもを皆せさせ給ふ。いとわりなきほどの有樣にて、いと恐ろしくいかに〳〵と思し騷がせ給ふ。ことや、かの大納言の御許にさるべき家司なり、殿位などまさらせ給ひけり。いと面目ある御樣なり。

かくていかに〳〵と御心を盡し、念じ聞えさせ給ふほどに、長和二年七月六日の夕方より、御氣色ある樣に坐せば、御祈禱の僧ども、聲を合はせてのゝしり加持まゐり、うちまきし騷ぐ。内にも聞召して、御使しきりに參る。御祓の程いみじくなりあひたり。月頃いみじかりつる御祈禱のしるしにや、戌の時許りにいと無事に御子生まれ給ひぬ。今ひと

○僧など云々　僧達が餘り骨折らない内に御子が生まれた。
○なにか　男か女か
○これを始め云々　これが初の孫でもない今後自ら男宮も生まれるだらう。
○御使の祿　敦使頭中將朝經への祿。
○殿の上　倫子。
○大宮の内侍　彰子に仕へた内侍。
○さて日頃候ふべきに　岡田眞澄の説に此の句は下文春宮まだ御乳聞召す程なれば云々の上に置く。
○同じくはと　同じ事なら男子ならばと
○この御事　此の姫君の生まれた事。
○案内申す　申入る
○宮　妍子。

しきりのどよみの程、淺ましきまでおどろ〳〵しきに、僧などいと苦しからぬ程に事ならせ給ひぬ。世になくめでたき事なるに、唯御子なにかといふ事聞え給はぬは、女にて坐すにやと見えたり。殿の御前いと口惜しく思召せど、さばれこれを始めたる御事ならばこそあらめ、又も自らと思召すに、これも惡からず思召されて、今宵のうちに御湯殿あるべくのゝしりたり。内にはけざやかに奏せさせたまはねど、自ら聞召しつ。御はかしいつしかともて參れり。例は女に坐すには御はかしはなきを、何事も今の世の有樣は、樣樣の例をひかせ給ふべきにあらねば、これを始めたるためしになりぬべし。御使の祿夜目にもけざやかに見ゆる、鶴のけごろもの程も心ことなり。御乳附には、東宮の御乳母の近江の内侍を召したり。それは御乳母達數多侍ふ中にも、これは殿の上の御乳母子の數多の中のその一人なる、大宮の内侍なりけり。さて日頃候ふべきに、宮の御湯殿の儀式有樣思ひやり聞ゆべし。五位六位御弦打に二十人召したり。五位は藏人五位を擇ばせ給へり。女に坐せば、内にも今少し心ことにおきて聞えさせ給ふ。唯同じくはと誰も思さるべし。されど春宮の生まれ給へりしを、殿の御前の御初孫にて、榮花のはつ花と聞えたるに、この御事をば莟花とぞ聞えさすべかめる。それは只今こそ心もとなけれど、時至りて開けさせ給はむほどめでたし。しろい御調度など、大宮の御例なり、御乳母に人々いみじく參らまほしう案内申すべし。宮の内の女房達、さるべき君達の子生みたるなど、あがものに賴み申したりけれど、いかにも〳〵たゞよそ人のあたらしからむをなどぞ、宮の御前思し志しためる。女房の白き衣ども、さばかり暑き程なれど、萬をしつくし、いかで珍らしき樣にせむと思ひたる樣ども、心々にをかしうなむ。御産養三日の夜は殿せさせ給ふ。五日の夜は宮つかさ、七日はおほやけより、九日は大宮よりぞせさせ給へるめる。この頃殿ばら殿上人の參る有樣、三位より初めて六位まで、唯大宮の御時の有樣なるべし。春宮まだ御乳聞召すほどなれば、内侍疾う參るべき御消息しきりなり。御乳母に參らむなど申す人人數多あるを、心もなく思召す程に、故關白殿の御子といはるゝ、中務大輔周賴の君の妻の弟、俊遠が妻なり。御乳母は伊勢の守の女ぞ參りたるは、やがて夜の中に御乳聞召させて、内侍は内へ參りぬ。さべきおくり物など、いとおどろ〳〵しう思しおきてさせたまひて、御乳附にしもあらず、やがて御乳母のうちに入れさせ給ひつ。若宮の御ぐし淺ましく長く、振分におひさせたまへり。やがてかくておほし聞えさせむと定めあり。何事もいとめでたし。いみじう美しげに坐すを、内にも聞召して、いつしかと床しく思ひ聞えさせ給へり。この頃は少し心のどかけにて、殿の御前よる夜中わかず、若宮の御あつかひに渡らせ給ふに、誰も侘しく暑きほどに、打ちとけたるいね姿どもいと傍いたし。今まゐりたる御乳母もいとゞもの恥かしげなり。内にもいと床しげに思ひ聞えさせ給へれば、九月許りに行幸あらせむと、殿の御前思しこゝろざしたり。宮の御前、その後惱ましげにのみ

○あがものに　自分を最適任者として。
○思召す程に　の下に内侍はを補ふ。
○御乳附にしも云々　御乳附からすぐに禎子の御乳母の中に加へられた。
○かくておほし　振分髪のまゝ生す。
○のどかけ　長閑の樣子。
○宮　妍子。

○内殿上大盤所云々　禁中殿上の間臺盤所の調度や皇太后宮の調度まで土御門殿に持つて參る。
○籠物　籠に入れた菓物で木の枝等につけて獻上物や儀式の時に用ふ。
○女房のなり　女房の裝束。
○さかり少將　藤原貞孝の女。
○宮の御簡　中宮御所の女房の簡。形は殿上日給の簡と同じ
○かんの殿　咸子。
○船の樂　舞人樂人が龍頭一首の船に乘つて舞樂を奏する事
○殿　土御門の御殿
○笑ましう云々　ほほ笑まれて何となく寒氣がする位である
○御目も及ばず　正視も出來ぬ程。
○こゝの事　現世の事。

坐せば、とみにも參らせ給ふまじ。行幸の事を、この頃は殿の内急ぎみがき、萬つくろはせ給ふ。御五十日を御門は内にてなど思し宣はすれど、宮のえ參らせたまはねば、里にて聞召す。殿より萬にし盡させ給ひて、内殿上大盤所など、萬に大宮までもて參り騷ぐ。樣々のをりびつ物籠物など、數を盡してせさせ給へり。又内よりいかでか思しおきてさせ給ひけむと見ゆるまで、萬細かにめでたくせさせ給へり。八月二十餘日の程なれば、女房のなりもいみじうしたるに、又たたむ月の行幸の事を急ぎ立たせ給ふ。御産屋のをりも、御五十日にも、内の女房のさるべき限り皆參りたり。御門の御乳母の紀の三位の女源典侍を始め、さかり少將などや、さるべき人々は、皆宮の御簡につきたるども、覺束なからず參りまかづめり。

九月にもなりぬれば、行幸の事今日明日の程に急がせ給ふ事いみじ。宮の女房のなりいみじきに、かんの殿の御方、殿の上の御方、我も〳〵とのゝしる事いみじ。船の樂などいみじく調へさせ給へり。行幸の有樣、皆例の作法なれば書き續くまじ。大宮の東宮の生まれさせ給へりし後の行幸、唯その儘の有樣なり。殿の有樣いみじく面白し。中島の松の蔦の紅葉など、常の年はいとかうしもあらねど、世の氣色にしたがふにや、いみじく盛にいろいろめでたく見ゆるに、笑ましうそゞろ寒し。上の御覽ずるに、御目も及ばずめでたう思召さるゝに、船の樂共の舞ひ出でたるなど、大方こゝの事とは思召されず、いみじく御覽させらる。松の風琴をしらぶるに聞え、萬面白く吹き合はせたり。御簾ぎはの女房のなり、いへばえならぬ匂ひどもなり。入らせ給ひていつしかと、若宮を、「いづらは。」と申させたまへば、殿の御前抱き奉らせ給ひて、候はせ給へれば、抱き取り奉らせ給ひて、見奉らせ給へば、ふくよかに美しう坐して、御髮振分に坐すを、御覽じ驚かせ給ひて、「いかに。」など聞えさせ給へば、御物語を聲高にせさせ給ひて、うち笑み〳〵せさせ給へば、「あな美し、知り給へるこそあめれ、又かかる人をこそ見ざりつれ。うたて餘り床しき御髮かな、今年過ぎば居丈にもなりぬべかめり。」など仰せられて、いみじく美しけに聞えさせ給ふ。宮の御前も見奉らせたまへば、唐の綾を白菊に押重ねて奉りたり。されば白き御よそひと見えてめでたきに、いかに暑き程の御事は、御髮のためこそいみじけれとて、見奉らせ給へば、御裾にたまりたる程、こよなく處せけに見えさせ給へば、「怪しく見苦しきこもちの御ぐしかな、ふるこもちなどは、髮の裾細う、色青びれなどしたればこそ心苦しけれ、いと物狂ほしき御有樣かな。このちご宮も、母の御有樣に似たるにこそあめれ。」などぎ聞え給ひて、「いづら乳母は。」と問はせ給へば、殿の御前、「御乳母はいたくさとび、ものはぢをしてえ參り侍らざめり。」とて、又抱き率て奉らせ給ひぬ。御帳の中に入らせ給ひて月頃の御物語など御のどかに聞え給ふ。「かく美しき人を今まで見ざりつる事、猶めでたき事なれど、この身の有樣こそ苦しけれ。いみじく思ふ人の兎も角もおはせむを、とみにも

○いへばえならぬ匂ひ　いふにいはれぬ美しさ。
○いづらは　何處に居られるか。
○御物語　所謂幼兒のお話をいふ。
○居丈　坐つた長さ
○白菊　表白裏蘇芳
○暑き程の云々　暑中の御産は御髮の長い爲格別惱ましい。
○御裾にたまり云々　髮長くて御衣の裾にたまつた樣は特別窮屈らしく見える。
○ふるこもち　年取つた産婦。中宮の事
○色青びれ云々　顏色が青ざめなどせは氣の毒だが中宮は。
○この身の云々　側に置いて姫宮を見られない朕は心苦しい
○いみじく思ふ人云云　愛する中宮が如何におはすかを。

○この宮達　斌子腹の皇女達。
○入るまじ　不用也
○もののね　管弦。
○すゆなくて　つまらなささうに。
○入らせ給へ　參内し給へ。中宮への詞
○左大將　頼通。
○この家の子の君達　道長の子息。
○舞蹈し給ふ　任官の御禮のために。
○あえもの　あやかりもの。
○これを勝地云々　土御門殿を名勝の土地といふのである。
○しもを限れる品ども　最下等の者。

見ぬ事いみじく口惜しかし。」など、萬に聞えさせ給ひて、「いざ兒迎へて中にふせて見む。いみじく美しき者かな。この宮達のちごなりしをこそ、美しう見しかど、なほそれは例の有樣なり。これは殊の外にをかしく見ゆるは、髮の長ければなめり。猶々疾く〳〵入らせたまへ。内にては乳母入るまじ、まろ乳母にて侍らむ。」など聞えさせ給へば、物狂ほしとて、少し忍びやかに笑はせ給ふ。かかる程に日も暮れぬれば、上達部の御遊びになりぬるが、いみじくなつかしく面白きに、中島のもののねなど、もの遙かに聞ゆるに、波の聲松の風なども樣々にいみじや。頓に出でさせ給ふまじき御氣色なれば、殿入らせ給ひて、「夜に入り侍りぬ、かばり面白き遊びども御覽ぜむ。」と申さたま給へば、「いと面白しと聞き侍り。樂の聲は聞くこそ面白けれ、見るはをかしうやはある。樣々の舞どもは皆見侍りぬ。」といとのどかに宣はすれば、すゆなくて出でさせ給ひぬ。むげに夜に入りぬれば、そゝのかし申させ給へば、しぶ〳〵に起きさせ給ふとて、「猶疾く入らせ給へ、今日明日の程に。」と、返す〴〵聞えさせ給ひぬ。かくて左大將召して、この家の子の君達の位まし、殿の家司共の加階せさせ、又この若宮の御乳母のかうぶり得べき事など、書き出させ給ひて、宮の御前に啓せさせ給ふ。殿は軈て御前にて舞蹈し給ふ。若宮の御乳母かうぶり賜はり、近江の内侍は加階をぞさせ給へる。かくて御贈物、上達部殿上人などの贈物、例の事こと共思ひやるべし。萬淺ましくめでたき殿の有樣なり。この土御門殿に幾そ度行幸ありて數多

○笑み榮え　喜び笑みて顏色晴々し。
○例ならずのみ云々　中宮は御心地あしく思はれて。
○かさね　重衣。
○御里居云々　御里住なれど五節祭の爲若女房は格別當世風らしくする。
○法住寺の大臣　師輔の子爲光。
○御方の腹の君　の下この君も參り給ふを補ふ。
○麗景殿の尚侍　兼家の女綏子。
○御中の君ばら　御中宮の腹の女、光子。
○めこ　女子。
○おぼろゆのきず云云　格別の缺點ある者か不具者であらう

の后出で入らせ給ひぬらむと、世のあえものに聞えつべき殿なり。これを勝地といふなりけり。これを榮花とはいふにこそあめれと、怪しの者どもの、しもを限れる品どもも、喜び笑み榮えたり。げにこそよき事を見聞くは、我が身の事ならねども嬉しうめでたし。惡しき事を見聞くは、せむ方なくいとほしきわざなれば、この殿ばら宮々の御有樣を、何れの民もめで喜び聞えたり。御門還らせ給ひて後は、若宮を御心につき、戀しう思ひ聞えさせ給ひて、「唯疾く〳〵。」とのみ御使頻りに參れども、猶例ならずのみ思されて、のどかげなる御氣色なり。されど内より聞き憎きまで申させ給へば、十一月十日の程にぞ參らせ給ふべき。五節臨時祭などうちしきれば、女房のなりなど、數多かさねの御用意あるべし。月頃久しくなりにける御里居、若き人々猶心ことに今めくめり。若宮の御乳母今二人參り添ひたり。一人は阿波の守雅時の朝臣の女、辨の乳母といふ。今一人は伊勢前司隆方の朝臣の女、中務の乳母といふ。月頃樣々參り集まりたる女房の數など多かるべし。こたみは法住寺の大臣の五の君、やがて五の御方とて侍ひたまふ。故關白殿の御女對の御方の腹の君、この御門の東宮に坐しし時の御くしげ殿にて候ひしは、麗景殿の尚侍の御はらからなるべし。又正光の大藏卿の女、源帥の御中の君ばらも參り給へり、それも御くしげ殿になさせ給へり。この外のさべき人の女など、數いと多う參り給へり。すべて此の頃の事にはさべき人のめこ、皆宮仕に出ではてぬ。籠り居たるは、おぼろげのきず、かたはづき

○上の御前　三條帝
○何事をし殘さむ　あらゆる物を調へよう。
○百千鳥　澤山の鳥
○紐をとき　蕾開き
○荻のやけ原云々　後撰集春部兼盛王、「今日よりは荻の燒原かきわけて若菜摘みにと誰を誘はむ。」
○春日野云々　古今集春部讀人不知「春日野の飛火の野守出でて見よ今いくかありて若菜摘みてむ。」飛火の野守は烽火を擧ゆる野の番人。
○もたひの云々　和漢朗詠集夏部白樂天「甕頭竹葉經レ春熟、階底薔薇入レ夏開。」
○常だにあるに　常時さへ美しきに。

たらむとぞいふめる、さても淺ましき世なりや。太政大臣の御女もかく出で交らひ給ふ、いみじき事なり。今暫しあらば、何の院などの御後も、出で給ひぬべかめりなどぞ人申すめる。かくて參らせ給ひぬれば、若宮を上の御前、御乳母の煩ひなく、明暮抱きもてあつかはせ給ふ。餘り傍いたし。今よりはかなき御具ども、何事をし殘さむと思召したり。

はかなく年も返りて、長和三年になりぬ。正月一日より始めて、新しく珍らしき御有樣なり。新玉の年立ち返りぬれば、雲の上も晴々しう見えて、空を仰がれ、夜のほどに立返りたる春の霞も、紫に薄く濃くたなびき、日の氣色うらゝかに光さやけく見え、百千鳥も囀りまさり、萬皆心ある樣に見え、枝になかりつる花もいつしかと紐をとき、垣根の草も青み渡り、朝の原も荻のやけ原かき拂ひ、春日野の飛火の野守も萬世の春の初めの若菜を摘み、氷解く風も緩く吹きて枝をならさず、谷の鶯も行末遙かなる聲に聞えて耳とまり、船岡の子の日の松も、いつしかと君にひかれて萬代を經むと思ひて、常磐堅磐の綠の色深く見え、もたひのほとりの竹葉も末の世遙かに見え、階のもとのさうびも夏を待ち顏になどして、樣々めでたきに、朝拜より初めて萬にをかしきに、宮の御方の女房のなりども、常だにあるに、まいてもの鮮やかに、香り深きもことわりと見えたり。殿上人は後取といひて、こちたく醉ひのゝしりて、うたてくらうがはしき事どもさしまじるべし。さるべきおほやけの御政をも思し分れず、上、中宮の御方に渡らせ給へり。えもいはずめでたき御

○御政　朝拜以下の儀式。
○端隱れ　少し隱れ
○かたそば　片端。
○かるびれ　枯らびて光澤なく。
○すがりて　ひたとついて亂れず。
○え念ぜず　堪へられず。
○うづゑほがひ　卯杖を奉る時奏する壽詞。
○花を折りて　美々しく飾りて。

直衣に、なべてならず輝く許りなる御衣共重ねさせ給へり。御容貌有樣をかしう、らうらうしう、恥かしげに坐す。宮の御前は萌黃の御几帳に、端隱れて坐す。紅梅の御衣をぞ、八重にもすぎて、幾つともなく奉りたる。上に浮紋の色濃やかなるを奉りたるに、同じ色の御扇のかたそばの方に、大きなる山書きたるを、わざとならずさし隱させ給へる御有樣、なべてならず恥かしげに氣高う坐す。御髮の淺ましう長く、處せげに坐す程、いかでかくと見奉らせ給ふ。織物に髮亂るゝと云ふ事は、髮のかるびれ少なき時の事なりけり。軈て麗はしくすがりて、ひまもなくめでたく坐す。上「いづらは若宮は。」と問はせ給へば、命婦の乳母抱き奉りて參る。御はかし、辨の乳母もて參る。御ぐしをそがせ給へれば、押返し「今こそちごなりけれ。」とて、それにつけてもあな美しと見奉らせ給ひて、抱き取り奉らせ給ひて、もちひかゞみ見せ給ふとて、聞き憎きまで祈り祝ひ續けさせ給ふ事どもを、御前に侍ふ人々はえ念ぜず、自らうちさゝめき「うづゑほがひなどいふ心地こそすれ。」とて、忍びやかに笑ふを「いかに〳〵。」と仰せらるゝ程も、すゞろにめでたく覺えさせ給ふ。御乳母たち我も〳〵と花を折りて仕う奉る程もあらまほしげなり。宮と御物語せさせ給ひて、打笑はせ給ふなども聞ゆ。若き人々おしこりたる御几帳のきはなど、繪に書かまほし。大納言殿參らせ給へれば、暫し御物語などありて、やがて御供に仕う奉らせ給ひぬ。四の宮の御ぐし長うて、御直衣姿、女を造り立てたらむ樣に見えさせ

○とゞこほり　滯ること氷るこを掛く。
○千代ふべきの歌　氷は解け易けれど千年の松の齡にあやかつて春來れど解けず
○四條大納言の御姫君　公任女敦通の室
○尼上　公任の室。
○男君　敦通。
○童げ　子供らし。
○松本　太政官中にあつて圓融院の仙居
○南殿　紫宸殿。
○木工のかみ　木工寮の長官。
○こと殿　紫宸殿清涼殿以外の殿舍。
○官の使部　太政官の使部。
○みあれの日　陰曆四月申日の加茂祭。
○手斧　工事の意。

給ふ。事どもやう〳〵はてて、心のどかになりもて行きて、上より松に雪の氷りたるを、

春くれどすぎにしかたの氷こそ松に久しくとゞこほりけれ

とあれば、宮の御返し、

千代ふべき松の氷は春くれどうちとけがたきものにぞありける

つごもりになりぬれば、つかさめしとて嬉しきもさらぬもあり。かの四條大納言の御姫君は、去年よりたゞならぬ御氣色なりければ、大納言も、尼上もいみじう思して、樣々の御祈りどもいみじ。男君はいみじう思ひ聞え給へれど、猶いと心づきなく、ともすれば御隱れ遊びの程も童げたる心地して、それをあかぬ事にぞ思されたる。かくて内渡りめでたくて過させ給ふ程に、火出できて燒けぬ。御門も宮も、松本といふ處に渡らせ給ひぬ。何れの御時もかかることはあれど、心のどかにしも思召されぬに、かかる事をいと〳〵口惜しく思さるべし。三日ありて、やがて内裏造るべき事思しおきてさせ給ふ。その折の修理のかみには、皇后宮の御兄の通任の君、南殿造るべく仰せらる。木工のかみには、この宮の御乳母の男中務大輔周頼とありし君を、このつかさめしになさせ給へりしかば、清涼殿をばそれつくる。こと殿をばたゞ受領各皆仕う奉るべき宣旨下りて、官の使部ばら國々にあかれぬ。この四月みあれの日より手斧始めて、來年の四月以前に造りいたさざらむをば、つかさをとり國を召し返しなどせさせ給ひ、その程に造りをへたらむあらば、任をのべ位

○あざみ思ふ　驚嘆す。
○りうじの祭　臨時の祭。
○なんでん　土御門殿の南面の御殿。
○風の心慌し　騷がしく風が吹く。
○もろともの歌　續古今集春部。
○殿　道長。
○一條院殿の尼上　一條雅信の室穆子卽ち倫子の母。
○殿の上の御前　倫子。
○かう〳〵云々　斯樣で姫宮が近頃土御門殿に坐すが好機會故姫宮を具し參らむ
○こと女房云々　他の女房は車一輛に乘り管通の人も一輛に乘り。
○心懸想　心づくろひ。

をまさせたまふべき由の宣旨下りぬ。かく嚴しく仰せられしかば、まづ近き國々、南殿清涼殿などは、皆四月棟あげむとす。公事はことなるものなりけり〳〵と、あざみ思ふべし。かかる程に三月二十餘日に、石清水のりうじの祭に、若宮の御乳母内にぇ候まじき事やありけむ、俄に出し奉らせ給ふ。殿の上そひてゐて奉らせ給ふ。なんでんにぞ坐す。御乳母達さるべき女房五六人ぞ仕う奉れる。出でさせ給ひて又の日、内より中宮の御方より聞えさせ給へる、風の心慌しかりければなるべし。

もろともにながむるをりの花ならば散らす風をも怨みざらまし

これを御覽じて、殿の御返し、

心してしばしな吹きそ春風はともに見るべき花もちらさで

とぞ。かかる程に一條院殿の尼上、「大宮の宮達見たてまつりしに、我が命はこよなうのびにたり。今は中宮の姫宮をだに見奉らでは。」となむ宣はすればとて、殿の上の御前さるべきひまを思召しければ、「かう〳〵、この宮なむ、この頃こゝに出でさせ給へる、好き折なり、率て奉らむ。」と、一條殿に聞えさせ給へれば、いと嬉しき事なりとて、俄に御まうけし急がせ給ふ。姫宮の御乳母どもには上の御前見えさせ給はねば、上の御車に宮をば乘せ奉らせ給ひて、御乳母達こと女房、車一輛して、只の人々、大かたの車三つばかりにて渡らせ給ふ。尼上いみじうしつらひて、我もいみじく心懸想せさせ給ひて、待ち聞えさせ給

○かゝりにかゝらせ　どん〳〵寄りかゝり。
○いかで云々　何卒道長の御女達が宮々を生むを見奉つてから死にたいと思ふけれどどうであらうか
○勞らせ　ねぎらはせ。
○かうごの箱　薫物を入れ置く箱。
○その折　當時。
○道風が本　小野道風の書いた手本。
○出で坐すとて云々　此の一條殿においでになるかと思つて祕藏して置いた。
○あかずと云々　目のあたり見飽かず歸る後も如何に戀しく思はんと申し給ふ。
○あいなき事云々　分別もなき事を思ひ出して美しいのは少將かこの姫宮か一番可愛いのは姫宮だと思ひ給ふも馬鹿らしい。

ふ程に渡らせ給へり。上の御前、抱き奉らせ給へり。見奉らせ給へれば、いみじう美しけにて、たゞ笑はせ給ふを、「あな美し、これを抱き奉らばやと思へども、泣きやせさせ給はむと、煩はしくて。」と宣はすれば、「などてか、よも泣かせ給はじ。」とて、「坐せ。」と申させ給へば、唯かゝりにかゝらせ給へば、「あな嬉しや。」とて抱き奉らせ給ひて、いみじうう つくしみ奉らせ給ふ。「猶命は長く侍るべきにこそあめれ。この宮の抱かれ給ふ。兒の抱かれぬは忌むとこそ聞き侍れ。いかでこの御方々のかゝるわざし給はむを、見奉りてとこそは思ひ給ふれば。」と宣はするを、上いと哀れと見奉らせ給ふ。さて御乳母達いみじく勞らせ給ふ。上の御前も心のどかに御物語聞えさせたまひて、「又の日ぞ歸らせたまふ。御贈物に、この年頃誰にも知らせ給はで、もたせ給へりける、かうごの箱一具に、古のえもいはぬ香どもの、今は名をだにも聞えぬや、その折の薫物などの、いみじきどもの數を盡させたまへり。又道風が本などいみじきものどもの、白金黄金の筥に入れたるなどをぞ奉らせたまへる。「かかる女宮もや出で坐すとて、おきて侍りつるなり。」とて、探し奉らせ給ふ。御乳母達には皆さるべき樣の裝束ども、又衣など添へて賜はせ給ふ。たゞの女房達にも、樣々いみじくせさせ給へり。あかずと、いかに戀しくと聞えさせ給ふ。かくて歸らせ給ひぬれは、獨笑みして、戀しう覺えさせ給ふまゝには、あいなき事、少將や、こなたにやと、いとゞ美しうは思召しますも、をこがましうぞ見えさせ給ひけるとぞ侍りし。

○御文始め　御讀書始めの儀。
○學士　春宮坊の職員で經を執り講說す
○大殿　道長。
○堀河のをば　堀河の大殿(顯光)をば。
○閑院のをば　閑院の大殿(公季)をば。
○太郎　頼通。
○二郎　敎通。
○高松殿　頼宗。
○四條の宮にて云々　皇太后遵子の御在所なればなり。
○殿人　公任の仕人
○宮　遵子。
○三日の夜は云々　三日の產褥は四條邸で行つた。
○かんの殿　威子。
○ひなづるの歌　新千載集賀部。一二句は兒の白色の產衣。

玉の村菊

今年春宮七つにならせ給ふ。長和三年とぞいふ。御文始めの事あり。學士には大江匡衡が子の、一條院の御時の藏人仕う奉りし擧周をぞなさせ給へる。その頃大殿は左大臣にて坐す。堀河のをば右大臣、閑院のをば内大臣と聞ゆ。殿の君達、太郎は大納言にて坐す。二郎は左衞門督にて、撿非違使別當、高松殿のを二位中將など聞ゆべし。世の上達部樣々多かれどしるさず。かやうにて過ぎもて行くに、左衞門督殿の上、月頃たゞならずものせさせ給ひける、七月に當らせ給へりければ、四條宮にて惡しかるべしとて、殿人の三條に家もたるが許にぞ渡らせ給ひける。さて八月十餘日に、いと無事にいみじう美しき女君生まれ給へり。大殿よりも宮よりも、萬の御消息、餘りなるまで頻りに聞えさせ給ふ。大納言殿、尼上などの御氣色思ひやるべし。御產屋の有樣更なれば書き續けず。三日の夜は本家にせさせ給ふ。五日の夜は大殿より、七日の夜は大宮よりとぞ。中宮、かんの殿よりはちごの御衣などぞありける。中宮より御衣にそへて、

ひなづるのしろたへ衣けふよりは千年の秋にたちやかさねむ

などぞほの聞き侍りし。かくて日頃あるべき限りの御有樣にて、四條の宮に歸らせ給ふ。登

○登任　三條の家主
○かく平らかにせさせ云々　斯く安産されたので。
○始めたる事にこそ　これぞ家の幸ひの第一歩である。
○かたき　相手。
○じそ　辭書。辭表
○これや　自分が。
○唐人は云々　支那人は眼病療治が上手であるから太宰府に赴任して治し給へ。
○さはなり給へれど　左樣に太宰帥になられたが。
○それより　宇治殿から。
○見れどの歌　續後撰集秋部。
○あさく　ふかきと　共に紅葉の色をいふ

任に樣々の物被けさせ給ふをばさるものにて、大殿、かく平らかにせさせ給へる事とて、加階をせさせ給ふ。かくて四條の宮に渡らせたまひて、いつしかやがてよき日とて見奉らせ給ふに、えもいはず美しう坐せば「始めたる事にこそ。」とて、年頃のさるべきものどもの中に、昔の手本どもなどを御贈物にせさせ給ふ。只今は殿限りなう、傳き聞えさせ給ふもことわりなり。大納言殿には、羨ましく聞召すべし。はかなう月日も過ぎもて行くに、この隆家の中納言は、月頃目をいみじう煩ひ給ひて、萬、治し盡させ給へど、猶いと見苦しうて、今はことに御交らひなどもし給はず、淺ましうて籠り居給ひぬ。さるは大殿なども、明暮の御棊雙六かたきに思し、憎からぬ樣にもてなし聞えさせ給ふに、いといとほしき事に思されけり。かかる程に、大貳のじそといふもの、おほやけに奉りたりければ、我も我もと望み詈しりけるに、この中納言、さばれこれや申してなりなましと思し立ちて、さるべき人々に云ひ合はせなどしたまひけるに、「唐人はいみじう目をなむ繕ひ侍るなる。さて坐して繕はせ給へ。」など、さるべき人々聞えさせければ、内にも奏せさせ給ひ、中宮にも申させ給ひければ、いと心苦しき事に御門も思されけるに、大殿も、「誠にだに申さば、こと人にとあべき事ならず。」とてなり給ひぬ。霜月の事なれば、さはなり給へれど、今年などは思し立つべきにあらず、いみじう哀れなる事に世の人聞ゆ。この九月に、殿の上宇治殿に坐したりけるに、それよりいみじき紅葉につけて、聞えさせ給へりし。

○正二月　正月二月
○姫宮　禎子。
○急ぎたり　御支度を急いた。
○帥の中納言　隆家
○僧都の君　隆圓。
○この君　隆圓。
○一品宮帥宮　脩子
敦康親王。
○殿の御有樣をぞ　道隆一族の御有樣を氣の毒に思へり。
○殿方は世に云々　道隆の一族には今は然るべき人なし貴子の一族は如何等といへどそれも駄目だ。
○山井の大納言　道頼。
○それはさは云々　其の腹々の君達は然らば如何に坐すかといふに實に捗々しからぬ有樣である。
○かく御末など云々　斯く捗々しい御子孫のなからうとも。

見れどなほあかぬ紅葉のちらぬまはこの里人になりぬべきかな

と聞えさせ給へりければ、中宮より御返し、

こゝにだにあさくは見えぬもみぢ葉のふかき山邊を思ひこそやれ

とこそ聞えさせ給へりけれ。月日も過ぎて年も返りぬ。正二月例の世の有樣にて過ぎもて行く。今年は姫宮の御年三つにならせ給へば、四月に御袴著の事あるべし。今より作物所などに、小さき御具どもいみじうせさせ給ふ。御門枇杷殿に坐せば、軈てその殿にてあるべし。内などにてあらぬを口惜しく思召されど、御乳母より始め、宮の女房達いみじう急ぎたり。かく云ふ程に哀れに淺ましき事は、帥の中納言の御兄弟の僧都の君こそ、はかなく煩ひて失せ給ひぬといふめれ。今はこの中納言と、この君とこそ殘り給へりつれ。心憂くゆゝしきことを世の人も聞ゆ。一品宮帥宮なども、いみじう思し歎くべし。淺ましう心憂かりける殿の御有樣をぞ。「いでや殿方は世にさしも坐さじ。母北の方の御方やいかに。」などあれど。さて山井の大納言、賴親の内藏頭などは、皆はら〳〵の君達ぞかし。それはさはいかなるぞとあるに、實にと聞えたり。さるは故關白殿の御心ばへなど、いとあてにおほどかにて、かく御末などなからむとも見えさせたまはざりしものをと心うし。帥中納言、僧都の君の御事に、世の中いと心憂く思されて、又いかにせむと思し亂れけれど、又辭せむも物狂ほしければ、萬に思し亂れけり。さてのみやはとて下り給ふ。賀茂祭

○三日の程　儀式の三日間。
○御心地あやまりがちに　御病氣勝に。
○内を　内裏造營を
○御馬のはなむけ　御餞別。
○すゞしさの歌　新古今集離別部。生の松原の涼しさは勝るとも涼しさを添へる此の扇の風を忘るな
○かちより　陸路で
○源中納言　經房。
○さき〳〵云々　但馬に流された時より此の上なくめでたい
○一の宮　當子。
○女二の宮　禔子。
○大將　頼通。

の又の日と思して、いみじう急がせ給ふ。内には、四月一日姫宮の御袴著なり。大殿もいみじう御心に入れさせ給ふに、内はた何事をもと思召して、えも云はずめでたくて奉る。三日のほど萬いとめでたし。上は、ともすれば、御心地あやまりがちに、御物怪しげう起らせ給へば、しづ心なく思召されて、内を夜を晝に急がせ給ふは、おり居させ給はむの御心にて、内を作りいでざらむが、いと口惜しき事に思召すなるべし。かくて帥中納言、祭の又の日下り給ふべければ、さるべき處々より、御馬のはなむけの御裝束どもある中に、中宮もとより御心よせ思ひ聞えさせ給へりければ、さべき御裝束せさせ給ひて、御扇に、

すゞしさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

かくて我はかちより、北の方は船にて下らせ給ふ。一品宮を世に心苦しう思ひ聞えさせ給ひながら、かう遙かに思し立ちぬれば、宮もいみじう哀れに心細く思さるべし。源中納言に、萬、宮の御事聞えつけて下り給ひぬ。淺ましう哀れなる世の有樣なりかし。おはする程など、さき〳〵よりはこよなしなど、人ほめ聞ゆるさへ哀れなり。殿の大納言をば、今は左大將と聞ゆ。御門の御物怪、ともすれば起らせ給ふも、いと恐ろしく思すに、皇后宮の御女、一の宮は齋宮にて坐しにき。女二の宮を兒より、とりわきかなしくし奉らせ給ふに、我が身だに心のどかに坐さば、いかにも〳〵あるべき御有樣なれど、ともすれば今日か明日とのみ、心細く思召したれば、いかでかこの御爲にさるべき樣にと思召すに、

○御妻は云々　頼通の妻は具平親王の女隆姫なれどそは何程の事もない此の二の宮に勝る事はない。
○え疎かならじ　頼通も宮を疎かにされまい。
○とも角も云々　異議を申す迄もない。
○上　當妻隆姫。
○しれの樣や　馬鹿ゆた事よ。
○このわたり云々　姫宮は子を產み給ふ御樣子である。
○えしもやまさらせ云々　尊き點は姫宮が隆姫より勝る事は出來まい。
○ありつる事　姫宮降嫁の事。
○御心の鬼　良心の呵責。

只今思しかくべき事なければ、この大殿の大將などにや、これをあづけ奉りてまし。御妻は中務宮の女ぞかし。それはいかばかりかあらむ。さりともこの宮にぇ勝らざらむ。又我かくてあれば、ぇ疎かならじと思しとりて、大殿の參らせ給へるに、上この事を氣色だち聞えさせ給へば、殿「とも角も奏すべきにも候はず。」と、いみじう畏まり申させ給ひて、まかでさせ給ひて、大將殿を呼び奉らせ給ひて「かう〳〵の事をこそ仰せられつれば、ともかうも申さで畏まりまかでぬ。はやうさるべき用意して、その程と仰せごとあらむをり參る許りぞかし。」と宣はすれば、大將殿ともかくも宣はでたゞ御目に涙ぞ浮きたるは、いみじう上を思ひ聞えさせ給へるに、この事はのがるべきにもあらぬが、いみじう思さるゝなるべし。殿その御氣色を御覽じて、「男は妻は一人のみやはもたる。しれの樣や。今まで子もなかめれば、とてもかくてもたゞ子をまうけむとこそ思はめ。このわたりはさやうに坐しなむ。」と宣はすれば、畏まりて立たせ給ひぬ。大將殿我が御殿に歸らせ給ひて、上を見奉らせたまへば、いみじうめでたくしつらひたる御帳の前に、短き几帳をひきよせて坐す。御衣の裾に御髪のたまりたる、御几帳の側より見ゆる程、たゞ繪に書きたる樣なり。二の宮の御髪の有樣は知らず、實に恥かしげにやんごとなからむ方は、えしもやまさらせ給はざらむと、御心の中に思されて、常よりも心よう御物語聞え給ふに、打解けたらぬ御氣色を、例の事ながら、ありつる事ほの聞えたるにやと、御心の鬼に苦しう思さるゝ

○ます宮　源師房の童名、隆姫の弟。
○殿　頼通。
○上　隆姫。
○俊遠　橘俊遠。
○くね〳〵しき事　ひねくれた事。
○出で入らせ　道長の家に出入せられ。
○御湯ゆでさせ　御湯治遊ばされ。
○ほゝ　重皮。厚朴の樹皮から製した風薬。
○明尊阿闍梨　小野道風の孫。
○みつよし　加茂光榮。陰陽博士保憲子
○よしひら　阿倍吉平。晴明の子。
○かしこき神のけ　尊き神の祟り。
○任せ　捨てて置き

に、人知れず御胸騒がせ給ふも、怪しうをゝしからぬ御心なりや。それも御志の限りなきなるべし。何事も世の御物語哀れにもをかしうも聞え給ふに、ます宮の御直衣姿もをかしうて、出で入り紛れ給ふを、殿唯我が御子のやうに美しう見奉らせ給ふ。内には人しれず御用意どもありて、作物所に御調度の事、心ことに仰せらる。皇后宮にもうち〳〵には、いみじう思召し急がせ給ふを、この事いかで漏り聞えけむ、上、聞かせ給ひて、唯ともかくも思し宣はせで、唯御心の中にこそは思すらめ。上の御乳母は俊遠が妻なり。これを聞きていと淺ましう思ふ。例の人よりは心様はか〳〵しく心賢き人にて、え忍びあへず、時時くね〳〵しき事などいふを、上いと傍いたき事に思す。「さばれかういはであれかし。」など、制し宣はする程も、なべてならぬ御心なりかし。さて皇后宮と内とより、しきりに御消息かよひ、宮達など急がしう出で入らせ給ふ。

かかる程に、いかゞしけむ。大將殿日頃心惱ましく思さる。御風などにやとて御湯ゆでさせたまひ、ほゝ聞召し、御讀經の僧ども、番かかず仕う奉るべく宣はせ、明尊阿闍梨、夜ごとに夜居仕う奉りなどするに、更に御心地おこたらせ給ふ樣ならず、いとゞ重らせ給ふ。みつよし、よしひらなど召して、物問はせ給ふに、御物怪や、又かしこき神のけや、人の呪詛など樣々に申せば、神のけとあらば、御修法などあるべきにあらず。又御物怪とあるも、任せたらむもいと恐ろしなど、かた〳〵思し亂るゝに、唯御祭祓しきりなり。大

○歩かせ　頼通邸へ
○おのがある云々　自分が來て居る上は汝の來るも同じ故只今は來らずともよし
○大殿にも云々　以前道長病の時現はれたと同じ物怪である
○物怪はさぞいふ　けれど物怪は左樣に名のる。
○なりかゝりて　どなりかけて。
○かり移したるけは　ひ　物怪の正體をあらはして物語さす爲に病人からかり出して他の者にかゝらしたその有樣。
○貴船　山城國に祭る貴船の神。
○かの内わたり云々　降嫁の事。
○此の上　隆姫。

殿しづ心なく急がしう歩かせ給ふ。上の御前も安きそらなく思されて、渡らせ給はむとのみあれど、殿の御前に「おのがある、同じ事なれば、只今は。」と聞えさせ給ふ程に、猶この殿は、小さくより風重く坐すとて、風の治どもをせさせ給ふ。日頃過ぐるに、更に怠らせ給はねば、今はすぢなしとて御修法五壇始めさせ給ふ。五日許りに、その驗けざやかならず、御物怪ども出で來てのゝしる。大殿にもさき〳〵出でくる御物怪どもとぞいふ。「などてか、それかうしも惱まし奉るべき。物怪はさぞいふ。」など申して、例の驗ある心響僧都、叡效律師などいふ人々、さばかりまめに加持し奉るに、更に此の御物怪まことと覺ゆる事なし。かくて一七日過ぎぬ、今七日のべさせ給へり。此の度ぞいと氣恐ろしき聲々したる物怪出で來たる。これぞこの日頃惱まし奉りつるものなめるとて、なりかゝりて加持しのゝしりて、かり移したるけはひいとうたてあり。いかに〳〵と思す程に、はや貴船のあらはれ給へるなりけり。「こはなどかかるべき。この殿あだなるわざせさせ給ふ事もなかりけり。更に覺えぬ事なり。」と、能く尋ぬれば、かの内わたりより聞ゆる事により、此の上の御乳母などの、それを申させたる程に、自ら神の御心は、かく煩はしく聞え給ふなりけり。上いと聞き苦しく思召さるれど、いかゞはせさせ給はむ。大殿、いと味氣なき事かなと思し聞かせ給ふ程に、大將殿唯消えに消え入らせ給ひて、いとゆゝしく見えさせ給へり。そこらの御讀經御修法、何くれの御祈禱の僧ども、集まりて加持參り、誦經しのゝ

○殿の上　倫子。
○この世界云々　法華經を天下に弘めたのは多く我が力なり
○壽量品　法華經卷六の如來壽量品十六
○打ちみじろぎ　身を動かし。
○よみ入りて　專心に讀みて。
○かかる事　移る事
○しめりて　ひつそりして。
○おのれは云々　己は存命中人に輕蔑された事はない。
○あは〳〵しく云々　斯く輕々しく現世に現はれて話するは恥知らずなれど子の愛情は道長も知るからだ。
○志ありて云々　何卒壻にしようと思つたが死後斯く我が女を娶つたのだから。

しれど、淺ましくておはすれば、殿の上ものも覺えさせ給はず、急ぎ渡らせ給へり。唯御顏をあてて、涙を流して坐すに、殿のおまへ、「こゝらの年頃仕う奉りつる法華經助けさせ給へ。この世界もみちひろごらせ給ふ事、多くはなにがし仕う奉れる事なり、此の折だに驗を見奉らず恩を被らでは、いつをか待たむずる。」といひ續けさせ給ひて、泣く〳〵壽量品を讀ませ給ふに、大將殿打ちみじろぎ給ひて、打ちあざ笑はせ給ふ。殿いよ〳〵涙留め難くてよみ入りて坐す。御物怪、御前近く候ふ女房の、日頃かかる事もなかりつるに移りぬ。御物怪、いと氣高くやんごとなきけはひにていみじうなむ。僧達皆しめりて候ふに、大將殿には御湯など參らせ給ひて、上の御前唯兒のやうに抱き奉らせ給ひて、いみじう思召したる事限りなし。御物怪、殿の御前を、「近くよらせ給へ。」と申せば、寄らせ給へれば、「おのれは世に侍りしに、いとしれたりなどは人覺えずなむ侍りし。又あは〳〵しく人中に出で來て聞ゆるに、いとおめ〳〵しくある事なれど、子のかなしさは大臣も知り給へればなむ。この大將を己が世に侍りしをり、志ありていかでなど思ひ給へしかど、命絶えてかくて侍るにこそあれと、天がけりてもこの渡りを片時も去り侍らず。いと罪深からぬ身に侍れば、何事も皆見聞きてなむ侍るを、この大將をやんごとなきあたりに召し入れられぬべく思し構ふめるを、日頃安からぬ事と思ひ侍れど、さばれ唯まかせ聞えて見むと思ひ侍るに、いと安からぬ事に覺えて、自ら聞えむとばかり思ひしに、いとほしく、此の

○故中務宮　具平。
○この男のおこたり　賴通の過失。
○自ら侍ること　自然の出來事。
○せめて　切に。
○この事云々　それは壻嫁を長く斷念せよといふ爲であらう
○さりぬべき法文　然るべき佛經の文句
○がうけ　豪家、勢ひあるもの。
○かきさまし　其の他の物怪は打消し。
○かねて　壻嫁以前
○誰が御ため云々　誰の爲にも不都合なり。
○內のえ出でくまじきこと　內裏造營の竣功しない事。
○たゞならましより　は　壻嫁を耳にしない時より。
○男の御心憎きなるべし　男心は變り易く憎いからであらう

君のかくおどろ〳〵しくものしたまへば、いと心苦しくてなむかくも聞ゆる。」と宣はするは、故中務宮の御けはひなりけりと、心得させ給ひつ。殿畏まり申させ給ひて、「すべて返す〴〵理に侍れば、畏まり申し侍る。されどこれはこの男のおこたりにも侍らず、又自らすることにも侍らず、自ら侍ることなり。」と申させ給へば、「いかにさは、子は悲しく思すや。」と、せめて度々申させ給ふ。この事長く思し絶えねとなるべし。殿の御前、「よし御らんぜよ、げにさる事侍らば。」と、ことわりの由度々申させ給へば、「さは今は心安く罷り歸りなむ。さりとも空言は大臣し給はじとなむ思ひ侍る。もしさらば怨み申す許り。」とて、さりぬべき法文の哀れなる處うち誦じなどし給ふ。誠に違ふ所なくて、暫しうち寢て覺めぬ。名殘りもなく、御心地さわやかにならせ給ひぬれば、殿の御前上などいみじう喜ばしと思したり。この御物怪をがうけにて、樣々あるにこそありけれ。これ去りぬれば、かきさまし音もせず。御愼み樣々猶いみじうせさせ給ふ。「さても淺ましかりける御心地にもあるかな。かねてかかる事のあるは、いと嬉しき事なり。さて後にかやうの事あらましかば、誰が御ためにもびなからまし。」と宣はするものから、口惜しうなむ思されける。

かくて御門は猶御心苦しう、久しうも保つまじきなめりと思召すに、內のえ出でくまじきことを、世に口惜しき事に思召し歎かせ給ふ。かの大將殿はさても如何なりしことどもにかと、怪しう思されて、たゞならましよりは、口惜しう思さるべし。それも男の御心憎

○上　降嫁。
○なごかさもあらざらむ　降嫁が實現されたに違ひない。
○さて後には云々　降嫁後は乳母が貴船に祈つて騒いでも其の甲斐はない。
○山井の四の君　道頼の第四女。
○さだにもあらば　左様にさへあらば。
○その程に云々　臨月に里に下り居て。
○母　道頼の妻。
○ます事　勝る事。
○女二の宮の戀し云云　嫡子は縁子を戀しく思ふ故人内せり
○御湯殿仕う奉り　御入浴し給ひ。

きなるべし。上はいと物恥かしう思さる。御乳母なくばなどかさもあらざらむと、憎からず、猶心賢からむ御乳母は人の御爲に、たいせちのものにぞありける。さて後にはいみじき事ありとも、かひあらましやは。又大宮に山井の四の君といふ人參りたりしを、この大將殿物など時々宣はせけるを、只ならぬさまになりにければ、いかにも〳〵さだにもあらば、いかに嬉しからむと思されけるに、その程になりて出で居ていみじう祈禱などし、殿も物など遣はして、よき事に思召しおきてさせ給ふに、その氣色ありて、萬に騒ぎける程に、ちごは生れ給ひて、母は失せ給ひぬとのゝしる。哀れなる事を思し宣はする程に、君は男にておはしければ、嬉しうもなど聞召しける程に、二三日ばかりありて、それも失せにけり。母いみじう老いて、子孫多く失ふ中にも、この度の事を、いみじうます事なく思ひけり。大將殿の御有樣かやうにて、御子の坐すまじきにやとぞ人々聞えさすめる。かくて内つくり出でて、十月に渡らせ給ふ。その程の有樣例の如し。中宮ちご宮、入らせ給へとあれど、頓に入らせ給はぬ程に、皇后宮ぞ入らせ給ふ。女二の宮の戀しう坐せば、床しく聞えさせ給ふなるべし。さて入らせ給ひて、日頃坐す程に、内の御物忌なりける日、皇后宮の御湯殿仕う奉りけるに、いかゞしけむ、火出で來てうち燒けぬ。かかる事はさても夜などこそあれ、晝なればいと傍いたく、心慌しき事多かり。東宮も入らせ給へりしかば、それはやがて一條院に渡らせ給ひぬ。夜書きびしく仰せられて、急ぎ造りみがき入らせ給ひて、一月にだにならぬに、かかる事はあるものか。これにつけても御門、世の中を心細く思召さるゝこと限りなし。皇后宮もあり〳〵て參らせ給へるに、かかる事のあるを、いみじう思し歎かせ給ふべし。上はおりさせ給はむとて、かく夜を晝に急がせ給ひしかども、すべて心憂く、かかる事のあるをぞ。内の燒くることは度々になりぬ。一條院の御時など、度々なりしかど、この度のやうにあへなきやうなし。殿の御前などもいみじう思し歎かせ給ふ。御門は枇杷殿へ渡らせ給ひぬ。さても中宮の入らせ給はずなりにしを、返す〳〵めでたき事に世の人も申し思ひけり。中宮は京極殿に坐す。返す〳〵珍らかなる事を、上は萬の事の中に、いみじく思召さるべし。おりさせ給はむことも、内などよく造りて出でられば、例の作法にてと思召しつるに、返す〳〵口惜しく、さりとて又造り出でむを待たせ給ふべきにあらず、末の世の例にもなりぬべき事を思召すもことわりになむ。かかるほどに、御心地例ならずのみ坐す。内にも、もののさとしなどもうたてあるやうなれば、御物忌がちなり。御物怪もなべてならぬわたりにし坐せば、宮の御前も、物恐ろしうなど思されて、心よからぬ御有樣にのみ坐せば、殿の御前も上も、これをえさらず歎かせ給ふ。かかる程に、年はいくばくもあらねば心慌しきやうなれど、いと惱ましくのみ思召さるゝにぞ、いかにせましと思しやすらはせ給ふ。十二月の十餘日、月のいみじうあかきに、上の御局にて、宮の御前に申させ給ふ。

○かかる事のあるをぞ　の下歎き給ひけるを補ふ。
○あへなき　甲斐なき。
○珍らかなる事　内裏燒亡の珍事。
○内にもものの云々　帝も物の御告げ等怪しい樣子であるので御謹慎勝である。
○なべてならぬ云々　並々でないものであられるから。
○えさらず　遁れ難く。
○年はいくばく云々　御即位後幾年にもならねば御讓位も慌しい樣なれど。
○思しやすらはせ　御躊躇遊ばされ。

○心にもの歌　後拾遺集雜部。讓位後も思ひの外に此の世に生きたらは今宵の明き月を如何に悲しく思ひ出すであらう。
○御門　後一條帝。
○東宮　小一條。
○こよなき程の云々　甚しい御年上なり
○中宮　岡田眞澄の說に中宮は東宮の誤り。
○さて坐す　其の儘其所に坐す。
○女御の御許に云々　延子の邸堀河院に
○我がすませ云々　嬉子の住みし經任の邸の東の對に敦明を移す。
○宮　東宮。
○帥宮　敦康親王。
○此の度もや　今度或は東宮に立たん。
○びづら　角髮。
○大將殿　濟時。

心にもあらでうき世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな

長和五年正月御讓位、春宮には式部卿宮立たせ給ひぬ。二月九日御卽位なり。御門は九つにならせ給ひ東宮は二十三にぞ坐しける。こよなき程の御おとすけなり。おりゐの御門をば三條院と聞えさす。おりさせ給へれど、內の燒けにしかば、猶枇杷殿におはしつれば、其の儘に坐す。中宮は一條院に坐しつれば、さて坐す、式部卿宮は、かく東宮にたたせ給ふべしといふ事ありければ、一年頃女御の御許に、堀河の院に坐しつるを、皇后宮坐して、我がすませ給ひしもとの宮の東の對に、俄に渡し奉らせ給ひてしかば、堀河の大臣も女御も、いかなるべき事にかと思して、なか〳〵嬉しき事にもといふらむ樣に、事の初めにむつかしく思し亂るべし。かやうの事を宮には聞召して、もの心づきなう思召す。式部卿宮とは、一條院の帥宮をぞ今は聞えさすめる。もし此の度もやなど思しけむ事音なくてやませたまひぬ。東宮をことわりに世人は申し思ひたれど、この宮には淺ましう殊の外にもありけるかなと、打返し〳〵、我が御身一つを怨みさせたまへど、かひなげなり。御卽位に大極殿に渡らせ給へるに、御びづらゆはせ給へる程、いみじう美しうめでたく坐す。春宮の御有樣の、やんごとなくめでたく坐すにつけても、皇后宮は、哀れ大將殿坐さましかば、いかにめでたき御後見ならましとのみ御心の中に思し續けさせ給ふもいみじければ、忍ばせ給ふ。大殿は、世は變らせ給へど、我が御身はいとゞ榮えまさらせ給ふやうにて、河そひ柳風吹けば動くと見れど根はつよしといふ歌のやうに、動きなく坐すも、えもいはずめでたき御有樣なるに、なほ又此の度は今一入の色ことに見えさせ給ふぞ、いとゞいみじう坐すめる。院、春宮の御事をさへ申しつけさせ給へれば、御暇も坐さねど、萬あつかひ聞えさせ給ふ。堀河の院には、音に聞く御有樣を本意なく思し歎かるれど、承香殿の、今は宰相のかくものし給ふを、口惜しく見奉らせ給へど、今はこの女御の御有樣にぞ、萬思し慰めける。宰相の御子など出で來給へれば、かの水の折思し出でられて心うし。式部卿宮も、同じき宮達と聞えさすれど、御心も御容貌もいみじう淸らに、御才なども深くやんごとなくめでたう坐せば、御宿世の惡く坐しけるを、世に口惜しきものに申し思へり。大殿の大將殿、この宮の御事をいとふさはしきものに思ひ聞えさせ給ひて、常に參り通はせ給ふと見し程に、大將殿の上の御弟の中の宮に、この宮を壻どり奉りてむと、思し志したるなりけり。さて壻取り奉らせ給ふ。おとな二十人、童四人、下仕同じ數なり。我が御女のやうに、萬を急ぎたたせ給ひて、騷がせ給ふ程、上一所を思ひ聞えさせ給ふ故にこそと見えさせ給ふ。あるがなかのおと宮は、三條の入道一品宮の御子にし奉らせ給ひし、まだ十許りにや坐すらむ、こたみの齋宮にゐさせ給ひぬ。その御あつかひも、唯この大將殿萬にせさせ給ふ。式部卿宮いとかひありて、もてなし聞えさせたまひけり。一品にて坐ししかば、御有樣などいとめでたきに、今はいとゞ大將

○河そひ柳云々　日本紀顯宗帝「稻むしろ河ぞひ柳水ゆけば靡き起き立ちその根はうせず。」
○此の度は今一入の色　我が女彰子腹の後一條帝の卽位の事
○院、春宮の云々　三條院は道長に春宮の御事を御依賴せし故。
○堀河の院云々　顯光は立坊の儀を見奉らぬを不本意に歎く
○承香殿の云々　賴定が元子に通ぜしを
○この女御　延子。
○かの水の折　浦々の別の卷參照。
○この宮　敦康親王
○ふさはしきもの　氣に入つた者。
○おとな　女房。
○上一所　隆姬一人
○あるがなかのおと宮　最末の姬宮嬉子
○一品宮　資子。
○かひありて　中の宮を得た甲斐ありて

○院などの云々　親王の父一條院御在世の折にも斯程の事はせさせ給ふまじ。
○たゞならず云々　親王の北の方御懷妊
○ともかくも云々　崩御なき樣にと。
○宗像　宗像明神。枇杷殿の近隣にあり
○姫宮　禎子。
○そこ深くの歌　新千載集慶賀部。此の菖蒲の根は土深く引けど絶えもせず千年の松の根にも比べられるとて皇女の將來を祝ふ意。
○ひきかへて　菖蒲の縁語引きと打ちかはりての意とを兼ぬ
○大事　御禊大嘗會
○壺胡簶　つぼまつた矢筒。

殿御後見せさせ給へば、御封など何れの國のつかさかは愚かに思ひ申さむと見えて、いとどしき御有樣なるに、大宮よりも常に何事につけても聞えさせ給ふ。大將殿の御志、院などの坐さましにも、かばかりの事をこそはせさせ給はましかとのみ見えさせ給ふ。程なくたゞならずならせ給ひにけり。いとあはれになむ。東宮には、堀河の女御參らせ給へ參らせ給へとのみあれど、さきく〳〵のやうに思ひの儘にては、いかでかと思しやすらふめるに、大殿の御壻にならせ給ふべしとある事の世に聞ゆるにも、堀河の院には、かやうの事により、おし返しものを思すべし。院には猶御心地いと惱ましう思されて、物心細く思召さる。今年は御禊大嘗會などあるべき年なれば、今年ともかくも坐さずもがなとのみ思召しけり。殿の御前公事の樣々繁きにも思し紛れず、院の御事を思しあつかはせ給ふ。枇杷殿に坐せば、宗像の御たゝりもむつかしければ、三條院を夜を晝になして急ぎ造らせたまふとあるは、入道一品宮の坐しし所なりけり。はかなう五月五日にもなりにければ、大宮より姫宮にとて、藥玉奉らせ給へり。それに、

そこ深くひけどたえせぬあやめ草千年をまつのねにやくらべむ

御返し、中宮より、

年ごとのあやめのねにもひきかへてこはたぐひなの長きためしや

今年は、大事どもあるべき年なれば、今より若君たち、はかなき壺胡簶のかざり、のり馬

○尼上　禎子。
○あからさまに　一寸。
○小少將　道綱の子
○丹波中將　雅通。
○御志のいみじき　尼上が兩人を愛する事甚しい。
○懺法　六根の罪障を懺悔する爲の法。
○大原の入道の君　穆子の子時叙。
○こたみさへ云々　今度だけは母の大病故いかで行かざらん
○傅殿　皇太子傅殿の道綱。

の鞍のことを思し急ぎけるもをかし。かくて六月もたちぬ。七月ついたちには、法興院の御八講など急がせ給ふ。かかる程に一條殿の尼上、日頃御心地の例ならず思さるれば、殿の上渡らせ給ひて見奉らせ給ふに、この御事例の御惱みには似させ給はず、もの心細き樣に、はかなき事も宣はせ思したるも、ことわりの御事なれば、いと哀れにしづ心なく思し歎きて、樣々の御祈禱ども數知らずせさせ給ふ。殿もあからさまに坐して、「猶今年無事にて過させ給ふべき御祈禱を、よく〳〵せさせ給ふべし。いみじき大事あべき年なれば、いとこそ恐ろしけれ。」など、樣々聞えさせ給ふをばさるものにて、かう心細く賴み少なき御氣色を、悲しく思召して、壽命經の不斷の御讀經などせさせたまふ。讀經御修法數をつくしたり。小少將、丹波中將、御所去らず、聊かも立離るれば、いづら〳〵と、もとめさせ給ふ。御志のいみじきと、上はいと心苦しう思し知らせ給ふ。念佛懺法など聞かまほしうせさせ給へば、さるべき僧どもして、聲絶えず行はせ給ふ。いみじう尊し。さらぬだにかかる事は尊きを、まして年老い、賴もしげなき御有樣なるに、哀れに尊き事どもに、上の御前いとゞ涙を流させ給ふ。法性寺の座主、日々に御戒授け奉らせ給ふ。その程の說經いみじう尊く悲し。大原の入道の君も、年頃里に出でさせ給はざりしを、こたみさへはいかでかと聞き過し難く思されて參り給ふ。唯御枕上にて、念佛をし聞かせ奉り給ふ。傅殿も常に參り給ひて、明暮侍はぬ事をぞ歎かせ給ふ。遂に空しくならせ給ひぬれば、あつか

○土にたたせ　礎を忌み屋内に入らず庭に立たせ。
○一家　我が一家。
○そが中に云々　死は何時でも同じ事だが其の中にも我が死後尼上が逝かれたらば甚だ殘念である。
○をりふし便なし　死期が都合悪い。
○かの大事の云々　大營會等に關係を及ぼすべきものでない
○只本意なき事云々　只不本意なるは多忙の爲御忌に籠らない事だがそれもよそながら然るべく取定めるから忌に籠ること同じ事である。
○坐すと云々　御存命と思へばこそ其の儀過して來たが。

ひ聞えさせ給へるかひなく、悲しと思し惑はせたまふ。大殿聞召して、急ぎ坐して、「上の御前たち出でさせ給へ。」と聞えさせ給へど、物も覺えさせ給はぬ樣なれば、聞え煩はせ給ひぬ。とかく聞えてたち出でさせ給へれば、殿は土にたたせ給ひて、「一家にとりては、實に哀れに悲しき御事なり。されど世間を見思ふに、これかならずあべいことなり。そが中にいつも同じ事とはいひながら、おのが侍らざらむ世などには、いと口惜しからまし。かく無事に誰もおはしある時に、かくなり給ひぬる、いとめでたき事なり。唯をりふし便なしなどいふ事は、餘りの御事なり。かの大事の程などに、かかるべきにもあらず。只本意なき事にはこの御いみにこもらずなどあるこそあれ。それもよそ〳〵にてさるべくおきて聞えむ、同じ事なり。いかにぞ、この中將、少將の事は。」と聞えさせ給へば、「ひまなく求め惑はし給ひつるは、猶御志のいみじきなりと見つるになむ哀れなる。年頃も哀れに見奉り、そひ奉らざりつれど、坐すと思ひつればこそありつれ、これこそは限りのたびと見奉るが、いみじう悲しき事。」とて、せきもあへず泣かせ給へば、殿の御前も、「哀れに古代なりつる御心こそ戀しかるべけれ、夏冬の衣がへの折の、志の程、時につけてまづ思ひ出でられむとすらむ。」と、打歎かせたまふ。それは昔より今に、御衣更の折の夜晝の御裝束ふたくだりを、必ずして奉らせ給ふ事のありつれば、更に〳〵今はかかる事留めさせ給へと聞えさせ給ひつるを、さは何をか志とは見え奉るべきとて、せさせ給ひつるなりけり。

○ふたくだり　二領
○それも同じ事云々　道綱も尼上の壻なればとて御裝束を奉る。
○おきてさせけること　遺言。
○御事始め　御即位始め。
○さしすぎ　引續き
○かかる御思ひ　尼上の御忌。
○この殿　土御門殿
○殊更にすとも　わざわざ燒いても。
○御ぐ　御道具。

傳殿今は賴光が家に坐せど、それも同じ事とて奉らせ給ひける。かくてかの尼上のおきてさせけることは、「わが御門の御事始めにかくなりなむ事の、をりふしも口惜しき事なれば、暫しはさるべき樣にて、山寺などにをさめておかせ給へ。雲煙とも、この世の大事の後に、心安くせさせ給へ。」と聞えおかせ給へれば、實に哀れによくも思し宣はせけるかなとて、さやうにぞ思しおきてさせ給ひける。九月許りにぞさやうに坐すべかりける。その程は入棺といふことしてぞ坐させ給ひける。明暮の御もの參り御てうづなど、昔の樣の事どもするも、いみじう悲しく思召さるゝ程に、七月二十餘日に火出できて、土御門殿燒けぬ。大方そのあたりの人の家、殘りなく四五町がほど燒けぬれば、さしすぎ法興院も燒けぬ。上の御前はかかる御思ひにて一條殿に坐し、大宮も殿の御前も、内に坐しけるる夜しも燒けぬれば、つゆとり出でさせ給ふものなく、年頃の御つたはりの寶物ども、數も知らず、塗籠まで燒けぬ。猶さるべきなりけりと思し歎かせ給ふに、この殿の山、中島などの大木ども、蔦かゝりつる松など、大かた一木殘らずなりぬ。淺ましう、殊更にすとも、いとかく燒くるやうはありがたけなり。いみじき家といふとも、造り出でてむ。白金黄金の寶物どもは、自ら出で來まうけさせ給ひてむ。この木どもの有樣、大さなどを深う口惜しき事に思し歎かせたまふ。大宮の御領の宮なれば、その御ぐともさるべきものも、唯この殿にのみこそはおかせ給へりつれ。すべて珍らかなりとも愚かなり。殿は小一

○屋一つづゝあたりて　一棟宛割りあてられて。
○嚴しきやうに忌ませ　大嘗會擧行の前なれば嚴重に佛事を忌ませ。
○え忌みあへぬやうに　忌みおほせない樣に。
○こたびの事なれど　今度は葬儀を密にされたれど自ら仰山になりしは尼上の大幸福である。
○山の僧どもの云々　比叡山の僧の山籠りして修行した者に
○尊勝の護摩云々　尊勝王や阿彌陀を本尊として修する護摩
○一條殿　倫子。
○嵐ふくの歌　玉葉集雜部。下句今日は心も落ち著かず涙を催す。
○御急ぎ　大嘗會。

條殿に渡らせ給ふ。この殿はやがて八月より手斧始めさせ給ひて、來年の四月以前に造り出づべき由仰せ給ひて、國々の守屋一つづゝあたりて、夜を晝にて急ぎのゝしる。かくて九月に、尼上觀音寺といふ所に坐させ給ふ。上の御前も御送りに坐す。さてそこに、さるべき樣にて、納め奉らせ給ふ。御はてまで御念佛仕う奉るべく、そこらの僧どもに萬をおきてさせ給ふ。いみじう嚴しきやうに忌ませ給へど、上の御前の坐せば、大將殿を始めさるべき殿原皆仕う奉らせ給へば、すべてえ忌みあへぬやうに、おどろ〳〵しき御よそひの程、唯推し量るべし。こたびの事なれど、いみじかりける上の御幸福かなと申し思はぬ人なし。後々の御事など推し量りて知りぬべし。御はてまでは山の僧どもの山籠りしたるして、尊勝の護摩、阿彌陀護摩など仕う奉らせ給ふ。丹波中將をばさるものにて、傅殿の小少將いみじう思ひ給へれば、上の御前、萬にはぐゝみ宣はす。觀音寺より、又の日かへらせ給ふそらなし。哀れに悲しく涙を流させ給へり。かしこに坐しつる程、都の御使、さるべき御使ども數知らず、しきり參りつるもめでたく、さて歸らせ給ひぬ。又の日中宮に聞えさせ給へり。一條殿より、

嵐ふくみやまのさとに君をおきて心もそらに今日はしぐれぬ

御衣の色もゆゝしければ、猶かの御急ぎまではとて、小一條殿に渡らせ給はず。殿の御前覺束なからず、一條殿に渡らせ給ひつゝぞ萬聞えさせ給ひける。怪しう、今年なほ世の中

○さるべく物のいはする　流言の如く或霊物がいはせる。
○大將殿　藉通。
○院宮云々　三條院と妍子との御考へ。
○おぼろけの位　帝位。
○枇杷殿の燒け云々　殿燒亡の時命婦の乳母(兼澄女)は里にあつたが今も其の儘で里から。
○いにしへの歌　中宮が諸所へ遷るを聞くにつけても三條院御在位の昔が戀し。
○耕の乳母　順時女
○入道一品宮　資子
○昔ここそは云々　一品宮も失せ給へば今では其の事も昔となつたけれど。

に、火驟がしくて、又所々燒けぬ。人の口やすからぬ世にて、一條殿と枇杷殿と燒くべしといひのゝしれば、うたてゆゝしうおぼされて、御慎みなどありけれど、十月二日枇杷殿燒くるものか。淺ましくいみじとも愚かなり。さるべく物のいはするなりけりとも、今ぞ見ゆる。宮の御前も、院も、この枇杷殿いと近き所の、春宮の亮業遠といひし人の家、大將殿に奉りたりしにぞ、まづ渡らせ給ひぬる。院、宮いと淺ましき事なりや。萬今はかかるべき事かは。おぼろけの位をも去り離れたるに、更にかかるべきにもあらず。人の思ふらむ事も恥かしと思召しけり。三條院も今は出で來ぬれば、麗はしき儀式もなくて、夜を晝に急ぎ渡らせ給ひぬ。宮はその院いと近きほどに、讃岐守齊政の朝臣の家に渡らせ給ひぬ。枇杷殿の燒けし折の儘に、命婦の乳母里より菊にさして參らせたる、

いにしへぞいとゞ戀しきよそ〳〵にうつろふ色をきくにつけても

とあれば、辨の乳母返し、

菊の花おもひのほかにうつろへばいとゞむかしの秋ぞこひしき

さて、程もなく宮の御前も三條院に渡らせ給ひぬ。院の樣、わざと池遣水なけれど、大きなる木ども多くて、木立をかしく氣高う、なべてならぬ樣したり。こたみはいと心ことに造らせ給へり。入道一品宮の年頃住ませ給ひし所なれば、ことわりにぞ。昔とこそは今はいはめ。かの宮の坐ししし時、四條大納言公任の權中將など聞えしをり、日夜に參り給ひ

○松が浦島來て見れは　後撰集雜部素性法師「音に聞く松が浦島けふぞ見るむべも心あるあまのすみけり。」
○これはなにはの事　何くれの事。
○高松殿　明子。
○こだいなり　こゝは思かなり程の意。
○度々年頃の御けしき　永年度々かかる大儀に會はれた御樣子。
○太郎　賴通。
○きびは　幼弱。
○ふりがたう　ふり捨て難う。
○こと籠りて　其の中に捨て難き趣ありて。
○昔の事云々　昔の有樣を變えて居るから感心したのだ。

て、誰ともなくて人を呼び寄せ給ひて、「女房の御中にかく聞えさせよ、松が浦島來て見れば。」といひかけて、おはしにける程など、思ひ出でられてをかし。かくて御禊になりぬれば、いみじう常にも似ず、これは、なにはの事も改めさせ給へり。殿ばら君達の御馬鞍、弓胡籙のかざりまでいみじ。女御代には高松殿の姫君出でさせ給へり。その車の袖口、數も知らず多く重なり耀けり。御門童に坐せば、大宮御輿に奉りたれば、その程まねびやらむ方なくめでたし。大殿の御有樣など聞えさせむにもこだいなり。度々年頃の御けしきに、こよなう立優らせたまへり。思ひなしにやとまでなむ。只今の左大將には、殿の太郎君こそはおはすれ、右大將には、小野宮の實資殿おはす。左大將の御若さ、いときびはにをかしきに、小野宮のねび給へれば、それはいみじうなべてならぬかほつきに、打ちほゝゑみ給へる口つきこそ、猶ふりがたうこと籠りて見え給へ。物心憎き樣し給ひたり。昔の事などうち覺えてぞ。左衞門督右衞門督にては、皆殿の君達坐す。御衞府姿共のはなやかに、折にあひたる御有樣ども、時の花の心地して、いとめでたし。宮の女房の車、内方のなど、女御代の御供のなど、えもいはぬ車四五十輛引續きておしこりたり。左大臣にては大殿坐す。右大臣にては堀河の大臣、内大臣にては閑院の大臣坐す。何れの殿ばらも皆馬にて仕う奉らせ給へれど、大殿は萬はてて、渡らせ給ひぬるきはに、又更に御前などえりすぐりて、きずなくきらゝかなる限りをえらせ給ひて、三四十人許り仕う奉りたる

○左衞門督右衞門督　敎通賴宗。
○閑院の大臣　公季
○御前　前驅。
○みさき　先拂ひ。
○善滋の爲政　賀茂保明の子。
○年えたる　豐に實れる。
○大内記　詔敕宣命位記を書く役の首位
○義忠　爲文の子。
○いはこまの橋　石隈の橋。
○ちや野　千屋野。
○秋風の歌　上三句は穂にといふ爲で、穂にいでては著しく現はれての意。
○玉のむらぎくといふ所　玉村こいふ所の菊。
○うちはへて　限りもなく。

に、御隨身十二人、内舍人の御隨身など馬に乘りて、みさきえもいはず參りのゝしりて、我は唐の御車にて坐す程、すべてまねび聞えさすべきやうもなし。又さばかりめでたき事やありつる。いみじき見物も過ぎぬ。霜月になりぬれば、大嘗會とて又人々ひゞきのゝしる。五節も今年は今めかしさまさりてをかし。悠紀主基の歌ども、例のすぢ同じ事なれど、片端をだにとて記せり。悠紀のかたの歌、備中國稻つきうた、内の藏人善滋の爲政、玉田の郡、

年えたるたまだの稻をかりつみて千代のためしにつきぞはじむる

主基の方、大内記藤原義忠の朝臣、

いはこまの橋ふみならし運ぶなりそともの道のみつぎゆたかに

悠紀主基のうたども、同じ樣にかやうなり。御屏風の歌、爲政、ちや野といふ所を、

秋風になびくちや野の花すゝき穂にいでて見ゆる君がよろづ代

玉のむらぎくといふ所を、これを御屏風、義忠、

うちはへて庭おもしろき初霜におなじころなる玉のむらぎく

新田の池、爲政、御屏風、

底きよきにひだの池の水のおもはくもりなき世のかゞみとぞ見る

かやうに同じ心なれば皆とゞめつ。豐明の夜、あれたる宿に月のもりたりければ、里人

○めづらしきの歌　君の御光の洽くて萬民其の恩に浴する意
○年中行事の御障子　年中公事の名目を兩面に書いた衝立障子。
○前齋宮　當子。
○知らせ給ふ所　皇后媞子の御領所。
○外に　皇后御領所
○帥殿　伊周。
○かの宮　媞子。
○長く罷でさせ給ひつ　長の御暇を乳母に下さつた。
○宮　當子。
○いとゞしき御心地に　豫て御病氣甚しきに。
○めざましう　淺ましく。

たれと知らず、

めづらしきとよのあかりの光にはあれたる宿のうちさへぞてる

この御時の御即位、大嘗會、御禊などの程の事ども、すべて珍らしくやんごとなき事數知らず。年中行事の御障子にも書き添へられたることども、いと多くなむあなる。かかる程に、前齋宮のほらせ給ひて、皇后宮に坐す。宮はせばしとて、又知らせ給ふ所にぞ坐させ給ひけり。年頃にいとおとなびさせ給へる御有樣も、いみじう疎かならず見奉らせ給へれど、外にしばしとて坐させ給ひける程に、帥殿の松君の三位中將道雅の君いかゞしけむ、參り通ふといふ事、世に聞えて、さゝめき騷げば、皇后宮いみじう思ひ歎かせ給ふ程に、院にも聞召してけり。ことゝくならず齋宮の御乳母、やがてかの宮の内侍にて侍ふ中將の乳母のしわざなるべしとて、院いみじうむつからせ給ひて、やがて長く罷でさせ給ひつ。宮は皇后宮迎へ奉らせ給ひて、院にはいとゞしき御心地に、これを聞召ししより、いとゞまさるやうに思されて、宮達を隙なく御使にて、皇后宮と内との程の御消息いみじう御文頻りなり。齋宮我にもあらず、いみじう思召さる。中將の内侍はやがて仰せ給ひける儘に、かの道雅の君迎へとりて、我が御もとにいみじういたはりておきたりと聞召す。皇后宮にはめざましう思召されて、人知れずいみじう思し歎かせ給ひけり。まことそらごと知り難き御有樣なれど、世にかくもり聞えたるに、院の御氣色のいといみじきなり。か

○在五中將　在原業平。
○心のやみ云々　古今集戀部。初句はかきくらす。
○きはたけく　嚴しく。
○直物　除目の時式部兵部二省に賜はつた召名に誤りあるものを直し改める儀。
○我坐せは云々　我あれは萬事後見せん
○殿も上も　道長も倫子も。
○更にも聞えさせぬに　勿論なるに。
○四條の皇太后　遵子。

の在五中將の、心のやみに惑ひにき夢うつゝとは世人さだめよなどよみたりしも、かやうの事ぞかし。それは又まことの齋宮にておはせし折の事なり。されどこれは前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべき事にもあらねど、院のいときはたけく思し宣はするが、いと傍いたきをなむ、皇后宮いといみじう思し亂れたるに、宮々の御氣色どもいといみじきに、東宮も、わりなう心やましげに思し亂るべし。する事なき年だにはかなく明け暮るゝに、まいていみじき大事どものありつれば、年も返りぬ。今年をば寛仁元年丁酉の年とぞいふめり。正二月は例の有樣にて過ぎもて行くに、三月には例の直物などいふことあればにや、三月四日つかさめしあり。大殿左大臣を辭せさせ給へれば、堀河の右大臣、左大臣になり給ひぬ。閑院内大臣、右大臣になり給ひぬ。内大臣には殿の大將ならせ給ひぬ。かやうに事共かはりぬると見る程に、同じ月の十七日に、大殿、攝政を内大臣殿に讓り聞えさせ給ふ。内大臣殿御年、今年二十六に坐しけり。いと若う坐すにと恐ろしう思召しながら、我坐せば、何事も自らと思召すなるべし。我は只今は御つかさもなき定にて坐すやうなれど、御位は殿も上も准三宮に坐せば、世にめでたき御有樣共なり。殿の御前の御幸福は更にも聞えさせぬに、上の御前のかく后とひとしく、萬のつかさかうぶりをえさせ給ひなどして、年頃の女房は、皆かうぶりをえ、あるは三位四位になるもあり。樣々いとめでたく坐す。かくて四條の皇太后宮惱ませ給ひて、祭などはてて

後に、失せさせ給ひぬといふ。わかるゝ方なく、萬に四條大納言殿あつかひ聞えさせ給ふを、いと哀れなる世の中と聞き思ふ。三條院御惱、猶おどろ〳〵しう坐す。殿も上も、いみじう思し歎かせ給ふとぞ。

○わかるゝ方なく　差別なく。
○四條大納言　遵子の弟公任。

木綿四手

かくて前齋宮いと若き御心地に、この事いと聞き憎く思さるれば、いかにせむと人しれず思し歎かれて、御覽ぜし伊勢の海の、千尋の底のうつせがひのみ戀しく思されて、しほたれ渡らせ給ふ。わりなき御ぬれぎぬも心苦しきに、三位中將は跡たえて、わりなくのみ思ひ亂れて、風につけたりけるにや、かくて參らせたり。

榊葉のゆふしでかけしそのかみにおしかへしても似たるころかな

人知れぬ事ども多かりけれど、世に聞えねばまねび難し。又高欄にむすびつけたりける。

陸奥の緒絶の橋やこれならむふみみふまずみこゝろまどはす

宮はふるの社のなども思されて、哀れなる夕ぐれに、御手づから尼にならせ給ひぬ。又哀れに昔物語に似たる御事ども なり。皇后宮は、聞き憎かりつれど、いみじう悲しう思さる る事も愚かなり。院は聞召して、をゝしき御心はあへなむ、めざましかりつるよりは、と思されけり。御惱み重らせ給ひて、院源僧都召して、御ぐしおろさせ給ふ程、中宮を初め奉りて、宮々いみじう世に歎かしき事に思召して、涙にしづませ給へり。皇后宮は、よそに聞かせ給ふ覺束なさをそへて、いみじう思し惑はせたまふ。殿のおまへもいみじう歎か

○うつせがひのみ戀しく　肉のない介殼のみ戀しとは生ける甲斐なくの意。
○榊葉の歌　後拾遺集戀部。上句は當子の齋宮當時の意。斯く相別れてはあの近寄れざりし齋宮當時に立返つた樣である
○陸奥の歌　後拾遺集戀部。下句は踏みミ文とを掛け、文を見たり見ずして我が心を迷はす意。
○ふるの社　新古今集雜部叡子女王「皆人のそむきはてぬる世の中にふるの社の身を如何にせむ。」
○をゝしき御心云々　齋宮の雄々しく尼になりしは堪へ忍ぼう密通事件より勝れり。
○よそに　小一條殿に離れて。

○一院とて云々　一院としていますに十分な佛心であるのに御出家された事を。
○麗はしく　端正。
○姫宮などの云々　禎子御成長後の事迄然るべく定めし御心のめでたかりしを。
○かうても　御出家ありても。
○御命の方は云々　御命は別狀あらじ。
○うちつけにや云々　俄に少し御快くなれば皆心ゆるんで。
○床しき御有樣　三條院の御出家。
○橘三位　德子。
○おろかならずなむ　竝々ならず悲しむ
○おとなの云々　大人が泣き騷ぐので一方姫宮も泣くのだらう。

せ給ふ。一院とて坐さむに堪へたる御心おきてを、口をしう心細く思召せどかひなし。おなじ院と申しながら、御心麗はしく、物のはえ坐しつるものを、姫宮などのおとなびさせ給へらむ程の御おきてもゆゝしかりつるを、返す〳〵思し續けさせ給ふ。さはかうても無事にだに坐さばなどぞ、見奉らせ給ふ。御物怪どもいと心慌しきけはひなれば、御命の方はさりともと思さる。うちつけにや少しかろませ給ひければ、打ちたゆみて、誰も心のどかに思さるゝもことわりに見ゆるを、宮々いかにと哀れに、夜晝まどはれ仕うまつらせ給ふぞ、いとめでたき。東宮には、いと床しき御有樣を、音に聞かせ給ふにつけても、いみじう御胸塞りて、かなしう思召さる。かくて日頃心のどかなるに、たゆませ給へりつるに、寛仁元年五月九日の晝つかた、淺ましくならせ給ひぬ。院の中どよみてのゝしるとも愚かなりや。宮々聲を惜しませ給はぬに、中宮は御衣を引被ぎて、物も覺えさせ給はず。橘三位もいひ續けて、なく〳〵消え入りて臥し給へるも、いみじう珍らかなる悲しさなり。年頃の女房たち、殿上人いへば愚かに惑ひたり。姫宮の御まへ五つにぞならせ給ふ。御ぐしは居丈許りにぞ坐す。世をいと心慌しげに思召して、物の隱れによりて御涙を押しのごひて坐すを、見奉る人々御乳母など、やらむかたなく悲し。たゞの人などは何とも知らぬ程を、いかに思し分たせ給ふにかと、おろかならずなむ。おとなの泣き騷ぐに、かたへは心慌しう思さるゝなるべし。殿の御前、いみじう思し歎かせ給ひて、御

○萬をしらせ云々　萬事を指圖し給へば忌に籠るも同じ事也
○むつかし　鬱陶し
○宮達の三所　敦儀敦平、師明。
○心うきは云々　身は皇后なれど御葬送に加はらざる事を悲しく思召す。
○限りなき云々　太上天皇が諸人と同じく一片の煙とならせ
○日のもとの歌　上二句を晝の意に取り下の夜半にいひ掛く
○土殿　喪中の倚廬
○淺ましき物　藤衣
○道命阿闍梨　道綱の子。
○あしびきの歌　新拾遺集哀傷部。山に鳴く子規は此の頃反對に我が泣音を聞き渡らん。

忌にも籠り仕う奉らせ給はぬ事を思召す。攝政にて世をまつりごたせ給へば、いかでかは、萬の大事どものさしあひたれば、いとほいなく思召せど、よそながらに萬をしらせ給ふも同じことなり。十一日に御葬送せさせ給ふ。一條院の坐しし石陰にぞ坐しける。五月雨もいみじき頃にてむつかしけれど、實にそれにさはるべき事ならねばせさせ給ふ。宮達の三所歩み續かせ給へるぞ、いみじう哀れに悲しき。東宮は萬もの覺えさせ給はず。皇后宮もこゝらの年頃の御なからひなれば、聞えさするも愚かなり。猶心うきは、やんごとなければ、よそ〳〵に坐す御身どもになむ。限りなき御身なれど、同じ煙とならせ給ふもいみじう悲し。ある人思ひやり聞えさせて、ひとりごちけれど、その人知らず。

日のもとを照らしし君がいはかげの夜半の煙となるぞ悲しき

かくて事はてて歸らせ給ひぬ。この後は御念佛などに、僧のさるべき限り侍ひ坐しつる所取り拂ひて、佛かけ奉り、さるべき僧などのなれ侍ふもいと忝し。さるべき所々の板どもはなちて、宮々土殿に坐し、中宮もさやうにて坐す。御衣の色など皆濃く奉り渡したるに、淺ましき物などを、宮々の奉りて、七日々々の御齋をせさせ給ふも、いみじう哀れに悲し。さるべき殿上人殿原、歌などよみたれど書きもとゞめず。道命阿闍梨のばかりぞ人かたりける。

あしびきの山ほとゝぎすこの頃はわが泣くねをや聞きわたるらむ

○大人道殿　兼家。
○いみじう又なきもの　非常に大切の者
○知らせ給ひし程の事　御領知の所。
○姫宮をいかでと　禎子を然るべくさせようと。
○中宮の姫宮　妍子の子の禎子。
○姫宮　禎子。
○かの坐しし折　三條院御在世の折。
○大人道殿より云々　兼家より奉れる御領所を別物とせず他の御領と同じく配つ
○その折　御存世中
○四の宮　師明親王
○かかる折にや　父崩御の現時出家の御本意を遂ゆ給ふにや

とぞありける。この院も御所分もなくて失せさせ給ひにけり。冷泉院の御領の所々多く侍りしも、この院にえりすぐりて知らせ給ひけり。又大入道殿の御孫の宮達の御中に、この院をいみじう又なきものに思ひ聞えさせ給へりければ、昔もなほ知らせ給ひし程の事も、すぐれたる所々をば、たゞこの院に奉らせ給へれば、さきぐ〳〵の院よりも、この院にはやんごとなき所々多くぞさぶらひける。さればこの頃ぞ、殿のおまへ御そう分せさせ給ひける。坐しし折も、姫宮をいかでと思ひ聞えさせ給ひて、かくいとをさなく坐すを一品になし奉らせ給ひしも、いと哀れに思ひいで聞えさせ給ひて、この中宮の姫宮、春宮、皇后宮、今三所の宮、齋宮、姫宮など、よくかぞへたてて、様々に分ち奉らせ給ふ。御用意の有難く坐すと、人聞えさす。かの坐しし折の御思ひの程を思し知りつゝぞ、わかち奉らせ給ひける。その中にも、大入道殿よりわたりし所々をぞ、外ざまにはせさせ給はざりける。それもさるべき事に人申しけり。この三條院をば、一品の宮の御領にぞ、その折宣はせければ、せさせ給へれど、そこには坐すまじ。寢殿は寺になさせ給ひければ、御忌のほどすぎなば、こぼたせ給ふべしとぞ思召しける。中宮は、御忌はつるまではと思召しながら、この院の御物怪なども、いと恐ろしければあいなし。いづこにても疎かなるべき事かはとて、しばしありて一條殿にわたし奉らせ給ひてけり。御法事やがてこの院にて、六月二十五日にせさせたまふ。その程のことどもいといかめし。四の宮まだわらはにて坐して、かかる折にやなど思召す事もありけれど、大方いとのどかにおとなしき御心にて、この折ならずとも、自ら心慌しきやうなりなど思しのどむるを、坐さましかば、かうだに思ひかけじやと、人知れず思さるべし。

○この折ならず云々　今出家せずとも横會はあらう、今出家せば何となく慌しい様だと思ひ靜む。
○たゞの絹　平絹。
○薄色などにて　薄色に染めて。
○かけ　心に掛け。
○みゝずがき　蚯蚓書。拙き文字の書方
○あての御許　高貴の御方卽ち故院。
○郭公にや云々　古今集哀傷部讀人不知「なき人の宿に通はば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ。」
○御前　妍子。
○殿　道長。

中宮は一條殿にて、明暮の御行ひにて過ぐさせ給ふ。月日の過ぐるにつけても、姫宮のあわて歩かせ給ふに、綾薄物なども奉らで、たゞの絹を袙にて、薄色などにて歩かせ給ふ。御ぐし長くて、ちひさきわらはべなどの様にて坐すも、哀れにいみじきものに思ひ聞えさせ給へりしものをと、御乳母たちかけ奉らぬ折なう戀ひ泣き奉る。姫宮みゝずがきにせさせ給へる、「これいかであての御許に奉らむ。」と宣はするにつけても、郭公にやつけましなど、哀れに御覽ぜられけり。「あてはまろをば戀しとは思さぬか、などかいと久しく渡らせ給はぬ。」など、書きつけさせ給ふも、涙とゞめがたう、御前にも思召し、侍ふ人々も思へり。宮たちなども、覺束なからず渡り見奉らせたまひけり。東宮よりもはかなき御遊物など、まづ奉らせ給ふ。殿のおまへ、一條殿の御つれ〴〵に坐すらむとて、我も常に御とのゐせさせ給ふ。その殿ばらも、常に參らせ給ふべう申させ給ふ。院の坐さぬ許りこそ、ありしにかはらせ給へれども、大かたの御有様は、殿の坐せば同じ事になむ。その折の殿上人、心よせの殿ばらなどは、常に參り給ふ。かかる程に、東宮何の御心にか坐すらむ、かくて限りなき御身をなにとも思されず、昔の御忍び歩きのみ戀しく

○いかでさやう云々　どうぞさういふ風であつて欲しい。
○さるべきにや侍るらむ　宿緣ならむ。
○申しあくがらす　そゝのかして思ひ浮からせる。
○かうやうに　斯樣である。
○まねび申させ　語り申させ。
○いみじかりし世の御物怪　三條院の御物怪の强かつた事。
○かく麗はしき有樣云々　此の春宮たる事が甚だ已にはうるさい。
○おり侍りて　退位して。
○えさらぬ事　已むを得ぬ事。
○內にも當代　今上後一條帝も。

思されて、時々につけての花紅葉も、御心に任せて御覽ぜしのみ戀しく、いかでさやうにてもありにしがなとのみ、思召さるゝ御心、夜晝急に思さるゝもわりなく、皇后宮に、「一生はいくばくに侍らぬに、猶かくて侍るこそいといぶせく侍れ。さるべきにや侍るらむ。古の有樣に、心安くてこそあらまほしく侍れ。」など、折々に聞えさせ給へれば、宮は、「いと心うき御心なり。御物怪の思はせ奉るならむ。故院のあべきさまにする奉らせ給ひし御事をも、いかに思召して、やがて御跡をもつがず、世のためしにもならむと思召すぞいと心うき事なり。」など、常にはいさめ申させ給ひて、「御物怪のかうは思はせ奉るぞ。」とて、所々に御祈りをせさせ給ふ。思しあまりては、「若やかなる殿上人の、申しあくがらすならむ。」とて、召し仰せなどせさせ給ふ。されど殿のおまへにさるべき人して、「かうやうに。」などまねび申させたまふ。殿のおまへ、「いとあるまじき御事なり。さは故院の御嗣はなくてやませ給ふべきか。いみじかりし世の御物怪なれば、それがさ思はせ奉るならむ。」と宣はせて、聞きいれさせたまはぬを、「いかで對面せむ。」と度々聞えさせ給へば、殿參らせ給へり。覺束なき世の御物語など聞えさせ給ひて、つぎに、「なほ身の宿世の惡きにや侍るらむ、かく麗はしき有樣こそいとむつかしけれ。いかでおり侍りて一院といはれて侍らむ。」と聞えさせ給へば、「更にいとあるまじき御心おきて坐す。故院の萬に御後見仕うまつるべきよし仰せられしかば、皆さ思う給へながら、えさらぬ事の多く侍れば、內にも當代い

○中につきて　次に
○たゞこれは云々　斯くあるまじき事を思召すは他事ならず
○なでふ　なんで。
○えあるまじう云々　已の考へをいけないと思ふなら、本來の希望もある事故出家せん。
○うけひき　承知し
○攝政殿も坐す　賴通も其所に參つた。
○人のこれを云々　他人が兎や角云つて春宮を退位せしめるならば格別、御自身昔の御心に長閑でありたいのであるから
○三の宮　敦良親王
○さて坐さむ　東宮になられる事は。
○故院のせさせ云々　一條院が今上を東宮にされた故其の儘で終つた。
○かの宮の居させ給はむは　一の宮敦康が東宮に坐る事は。

とをさなく坐せば、萬暇なう侍ひてなむ。中につきて、この一品宮の御爲を思ひ給ふれば、御心のどかに世をも思したもたせ給ひて、坐さむこそ賴もしく嬉しく侍ふべけれ。たゞこれはこと〳〵ならじ、御物怪の思さするなめり。」と申させ給へば、「なでふ物怪にかあらむ。たゞもとより遊びの心のみありならひにければ、かくてあるがいとむつかしく覺えて、心に任せてあらむと思ひ侍るなり。それになほえあるまじう思されば、もとの本意もあり、さるべき樣にてあらむとなむ思ふ。」と申させ給へば、「不便なる事なり。出家とまで思召されば、いとことの外に侍り。さらばさるべき樣に仕う奉るべきにこそ侍るなれ。一院にて坐さむも、御身はいとめでたきものは、太上天皇にこそ坐すめれ。」など、能く御心のどかに聞えさせ給ひて、罷で給ひぬ。その儘に、やがて大宮に參らせ給ひて、「かう〳〵の事をなむ、春宮たび〳〵宣はすれど、さらにうけひき申さぬに、召して仰せられつる樣など、細やかに申させ給ふに、攝政殿も坐す。人のこれをとかく思ひ聞えさする事ならばこそあらめ、わがたはやすくならはせ給へる御心なれば、一院とて御心に任せてあらむと思召したるも、いとあらまほしき事なり。さても春宮には、三の宮こそは居させ給はめ。」と申させ給へば、大宮、「げにそれはさる事に侍れど、式部卿の宮のさて坐さむこそよく侍らめ。それこそみかどにもする奉らまほしかりしかど、故院のせさせ給ひしことなれば、さてやみにき。この度はかの宮の居させ給はむは、

○若宮　三の宮。
○かやうの御有樣　立坊の事。
○帥中納言云々　唯一の後見人伊周すら在京しないのが殘念
○やさしく　恥かしく。
○さるべうびゝしきなどは　然るべき立派な隨身共は。
○御心をやり　御心を晴らし。
○さは　然らば。
○つひの御事　結局さうなる御事。
○中納言　賴宗。
○法住寺の大殿　爲光。
○閑院の右の大殿　公季。

故院の御心のうちに思しけむ本意もあり、宮の御ためにもよくなむあるべき。若宮は御宿世に任せてもあらばやとなむ、思ひ侍る。」と聞えさせ給へば、大殿、「げにいと有り難う、哀れに仰せらるゝ事に侍れど、故院もこと事ならず、たゞ御後見なきにより、思し絶えにし事なり。かしこうおはすれど、かやうの御有樣は、たゞ御後見がらなり、帥中納言だに京になきこそ。」など、猶あるまじき事に思し定めつ。

かくて八月九日、三の宮東宮にたたせ給ひぬ。初めの東宮をば、小一條院と聞えさす。院いと思召すさまに、やさしく思召されて、二十人の御隨身えりとゝのへさせ給ひ、乘るべき馬鞍までできよらをせさせ給ふ。故院の御隨身共の、世の中をいとあへなく思ひたりつるに、さるべうびゝしきなどは、皆參り集まりぬ。殿上人のさるべくつかひつけさせ給へる人々など、いみじう興ありと思へり。皇后宮いと飽かぬ事に口惜しう思せど、又一院とて、年官年爵えさせたまふ。藏人判官代、何くれの定めあるにつけても、あしくは坐さず、今めかしう御心をやり、あらまほしげなる方は、月ごろの御有樣にまさらせ給へり。

さば故院の御つぎは、かくてやませ給ひぬるにやと、思召す程ぞいと悲しかりける。東宮の御乳母たち、つひの御事ながら、たちまちの事とは思ひかけざりつるに、淺ましく嬉しきにせむかたなし。東宮大夫には、大殿の高松殿の腹の中納言なり給ひぬ。權大夫には法住寺の大殿の兵衛督公信の君なり給ひぬ。東宮傅には、閑院の右の大殿なり給ひぬ。宮司

○大殿　道長。
○この方には云々　儲貳に就いては一向斷念されたが小一條院の御退位のこの時には必ず立坊すべかりしに然らざるは云云。
○世と共に　一生涯
○手にする云々　一旦手に入れた物を取落した樣な事。
○東宮のを　春宮の帶刀を。
○姫君の御事　寬子に小一條院を增取る事。
○八幡　石清水八幡
○これは云々　返歌なきは脫せしならん
○小少將　兼經。

帶刀などは、我も〳〵とのぞみ申せど、大殿擇びたなさせ給ひつ。萬あなめでたと見えさせ給ふ。帶刀ども、いと物淸き人の子どもをなさせ給ひつ。猶大宮の御さいはひは、世にいみじく坐す。式部卿の宮、この方にはむげに思召したえにしかど、この度のひまには、必ず立出でさせ給ひぬべかりつるを、御宿世をばしらせ給はずとも、猶怪しうとはいかでか思召さざらむ。世と共に晴々しからぬ御氣色も、心苦しうなむ。前の春宮の帶刀ども、手にするたる鷹をそらしたるなどいふやうに思ふべし。今の東宮のをのぞみ申すたぐひどもあべかめれど、ことの外の事にて聞召しいれず。それもことわりにはいま〳〵しく思されぬべき事なり。前の春宮は、御年二十四にならせ給ひにけり。今の東宮は九つにぞ坐しける。御門も春宮も御行末遙かに坐す御有樣につけてもいとめでたし。かくて高松殿の姫君の御事あるべしとぞ、世にはいふめる。さてその頃殿の上、八幡に詣でさせ給へりければ、中宮より聞えさせ給ふ。

いろ〳〵の紅葉にこゝろうつるとも都のほかにながゐすな君

御返しありけむかし、これはおちたるべし。かくて十月許りに、雅通の中將、日頃わづらひて失せ給ひぬとのゝしる。殿の上哀れに聞召す。故上のいみじう思したりしものをと、思召すなりけり。今は小少將をこそは、とりわき思ふべかめれとぞ宣はせける。世の中のはかなき樣も哀れにのみなむ。皇后宮には、前齋宮いとをかしげなる尼にて行はせたまへ